

シン・アスカの異世界渡航記『完結』

サルスベリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼の名前を多くの者が知っていた。『シン・アスカ』、オーブの戦災孤児、悲劇の主人公、活躍の場を持っていかれた可哀そうなキャラ。あるいはガキ、相手の立場を理解しない馬鹿。

この物語は、彼であって彼ではない存在の話。

彼の名前を多くの者が、畏怖と敬意をもって語る。その身を震わせるように。『おまえが話しているのは、あの『シン・アスカ』のことか？』と。番外編、掲載していきます。完結しました。

目次

人物一覧	1
国家・組織一覧	18
機体・艦艇一覧	24
技術系統一覧	27
第一章 願いと共に	
彼はそこにあり、そして運命が翼を広げる	34
君が考える時間をつくるよ	40
常識は人それぞれ、国や世界でそれぞれ	49
貴方の想いを語りなさい	61
シンはテイスのなの、触れたら……	75
初めての感情、初めての出会い	84
幕間1 蒼穹の空の元で。	96
拳や肉体言語は会話ではありません	108
事態は当人がいない場所でこそ転がる	120
信頼と信用は、時に人には重荷になる	127
不死鳥、襲来	138
魔弾の射手	148
番外編 ジョーカー銀河帝国におけるクリスマス	161
正月秘話、ジョーカー銀河帝国の場合	171
君の涙に報いるために	179
背負うべきもの	192
おまえは軍人じゃない	206
断章・愛情は時に殺意にも似て	220

力の意味

願いのために・1

願いのために・2

願いのために・3

願いのために・4

願いのために・5

願いのために・6

願いのために・7

願いのために・8

いつか、辿り着く場所で

あとがきのようなもの、になればいいな

第二章 蛇足・幕間・こぼれ話・喜劇で踊ろうぜ！

銀河帝国の中のシャルロット

テロと馬鹿と、気苦労する人たち

継承権

ジョーカー銀河帝国における最重要施設

シン・アスカのとても長い長い一日・1

シン・アスカのとても長い長い一日・2

『神帝』を鍛えた者

午後にはカフェテラスでお茶でもいかが？

実は甘味が好物です。

常勝不敗とか、最強無敗とかって

運命を決めた日

それぞれの矜持

シンとテラのダンジョン暮らし（生活とはいっていない）

228

239

251

263

277

288

302

317

328

341

347

350

361

370

380

391

403

414

425

435

447

457

471

484

キラ・ヤマトの反乱

497

テイスの淑女（物理的攻撃能力あり）化計画

509

馬鹿らしい皇帝陛下の原点

523

終わりとこれから

532

人物一覧

シン・アスカ

『ガンダムSEED DESTINY』より。

本編主人公。『凍焰の鬼神』の異名を持つ騎士。テラの一番弟子にして、彼の一番の被害者。

ジョーカー銀河帝国においては、政庁直属即応鎮圧抹消部隊『ヴェルティラス』所属。

戦闘は近接一辺倒。射撃戦が壊滅的に苦手だったが、色々な人の助言に助けられて取得。

性格は真っ直ぐ。他人に対しては優しく、困難に対しては立ち向かっていく。まがったことが嫌いだが、それなりの理由があれば許せる寛容さも持つ。

『罪を憎んで人を憎まず』という風に行ければなあ。

設定の最初に考えたのは、チートでバグの塊の『テラを殺せる騎士』であること。

テラが大切な者のために世界さえ滅ぼせる存在ならば、何も失わずにすべてを護り抜くのがシン・アスカ。

一応、帝国軍と共同作戦もありえるので、帝国軍ないでは『准将』として扱われる。

ティス

シン・アスカのパートナー。彼の愛機『デステイニー・レイザー』の自意識が人の形をとったもの。

まだまだ幼いので出来ることが多くないが、シンのために日夜努力を惜しまない良妻タイプ。

時々、やり過ぎて周り中に迷惑をかけるのは、幼さ故にご愛敬。

通常は八歳くらい、けれど二十歳前後の姿もとれる。基本的にシン以外に姿を見せないが、見せようとすれば姿を見せることも可能。

テラ・エーテル

オリジナルキャラ。ジョーカー銀河帝国皇帝、『神帝』の字を持つチートでバグ。奥様が十三人もいるのに、もつと増やそうとするハーレム馬鹿。

初代が最愛の人を世界を護るためといわれて殺されたため、その悔しさを晴らすために一族に呪いをかけたという、あまりに物騒な一族の最高傑作。

両親のすべての能力をそのまま子供に受け渡す呪いのために、生まれながらにして人外。父親がそんな一族だけでも危ないのに、母親は天魔の一族の最後の純潔の姫。

彼自身も小さい頃から無茶やって、今では他の世界の創造神を殺して『世界』を手に入れて能力の増強中。

色々とバグでは済まないレベルの能力を使う。

シン・アスカの師匠でもあり、彼を人外にした最大の原因。

他者の危機に対しての解決手段を引き寄せる効果を持つスキルを所持しているが、このスキルは所持者に対しての危機にはまったく反応しない。

それどころか、解決する危機に反比例した上で三乗するほど所持者を危機に陥れるマイナス作用を持つ。

という、バグなチートの馬鹿。

マユ・アスカ

『ガンダムSEED DESTINY』より

シン・アスカの妹であり、中央四軍の内の一つ、二軍にてエースを張る少女。『戦華』の異名を持つ戦い方をする。

好奇心旺盛、向上心あり過ぎ。

家において熟睡しているシンの寝込みを襲って、殺す気の一撃を叩き

こむくらしいはやる過激な一面もあり。

シンの危機に対しての反応速度の向上は、大半が妹の責任。

アイリス・クロームクラウン・エーテル。

『公爵令嬢の嗜み』より

銀河帝国宰相。テラの妻の一人。帝国を彼女一人で回せるだけの才覚を持つ。個人戦闘でも優秀であり、剣と槍の変則二刀流では無双できる女性。

温和で穏やかで優しい反面で、妹分や知り合いには甘いところもある。

唯一、夫であるテラには怒鳴りつけて物を投げつけるくらい短気。

アセイラム・クリシユタリア・エーテル。

『アルドノア・ゼロ』より

銀河帝国皇帝代理。テラの妻の一人で、実質的な帝国のトップ。皇帝が毎日のように帝国にいないので、彼女とアイリスで帝国を取り仕切る日々。

穏やかで優しい淑女。

ホシノ・ルリ

『機動戦艦ナデシコ』より

テラ・エーテルの巫女にして、一族が『あれ、あいつって大丈夫かな』でついたりミッターの一人。一族が保管していた天女と妖精の遺伝子を掛け合わせ、電子戦特化で生み出されたマシン・コンクエスター。

しかし、生まれた当初からテラと同じく『狂乱と恐怖と狂気』といっ

た生き方をしたため、『サイレント騎士団』は他にも色々な『人工生命体』が存在することになった。

一応、テラのもつ兵力の九割に命令が出せる『団長』。

キラ・ヤマト

『ガンダムSEED DESTINY』より

技術局所属。プログラミングの天才であり、新型技術の開発に最も貢献する天才。真面目な時は『任せて』と一言だけ告げて、あらゆる問題を解決するため、とても頼りになる。

ダメな時は徹底的にダメ人間。特に酒が好きなのに酒が弱いといった面を持ち、奥様に怒られてはシンのところに泣きつきに来る。

なんだかんだで、シンも『仕方ないか』と溜息交じりに対応するので、年齢差のある悪友的存在。

ハイネ・ヴェステンフルス

『ガンダムSEED DESTINY』より

ヴィルティラス所属。シンがヴィルティラスに入った時に、色々と教えてくれた先輩。頼りになる兄貴的存在であり、面倒見がいいので多くの人が慕っている。

実際、帝国軍にはハイネが声をかけただけで、無条件で動く人間が百万や千万はいる。

実はヴィルティラス結成時からの初期メンバーの一人。

エイルン・バザット

『エイルン・ラストコード』より

ヴィルティラス二代目部隊長。真面目で実直な軍人。先代が『俺の後釜はこいつがいい』と選んだため、『明日から部隊長をお願い』と言われて、唾然としたまま就任式を終えた、苦勞人。

はつちやければ楽なのに、生真面目な性格からそれができずに、何時も大騒動になるヴィルティラスをまとめている。

エルファイナ

『エイルン・ラストコード』より

エイルンの愛機。マテリアルの中では珍しい形態変化を行う機体。淑女のように振舞うのに、エイルンのためならば世界中のシステムをハッキングして支配下に置くくらいやる、過激な一面を持つ。

ティスが夫のためにがんばる幼な妻ならば、夫を支えながらも導く年上の妻といったタイプ。

ティーラ・ザイン・エルメス

『女神候補生』より

ヴィルティラス所属。百人いれば百人は振り返る美女。性格は氷のように冷たい武人。

けれど、羞恥心や自尊心は人一倍。他人に何かを強要しない代わりに、自分が何かを強要されるのは嫌いなタイプ。

一部からは、『エメラルドの宝玉』と呼ばれているが、本人に言うところには確実に殺される。

剎那・F・セイエイ

『ガンダムOO』より

ヴィルティラス所属。真面目というより生真面目。冗談を口にするらしいが、それが冗談に聞こえないところもある。他人や自分に対して厳しく、忠告が説教に聞こえることもある。

基本的にいい人なのだが、人づきあいはちよつと苦手という人。

ヴィルティラスにおいては、スザクと共に『二枚看板』を誇る。

接近戦においては無類の強さを誇り、中距離であっても『接近戦の、俺の距離だ』で斬りこめる存在。

枢木・スザク

『コードギアス』より

ヴィルティラス所属さわやか系正義漢。オリジナルとは違って両親健在のため、やんちゃなところもある。好青年であり、面倒見もそれなりにいい。ただ上司というよりは優しい友人というタイプなので、部隊を率いることは少ない。

というより、部下に対して命令できないので基本的に刹那と組ませるの frontline 突撃。

近接・遊撃・中距離・遠距離。すべてそれなりに行えるため、突破作戦では真つ先に名前が挙がる。

ハイテンションになると、周りが見えなくなることあり。

獅子王・ガイ

『勇者王ガオガイガー』より

ヴィルティラス所属。人を奮い立たせることに関しては、誰にも負けない熱血王。

『大丈夫だ』と彼に言われると、何故か『どうにかなる』と思えてしまう妙な説得力を持つているため、説得とか敗戦時の立て直しなんてものには、真つ先に投入される。

ちなみにだが、刹那、スザク、ガイ、ゼンガーの四人が同じ作戦に投入されると、周り一面が焼け野原ではなく更地になるらしい。

学者としてもやっていけるほど知識があるのだが、彼の性格のためか『脳筋』にされてしまう人。

ゼンガー・ゾンボルト

『スパロボOG』より

ヴィルティラス所属。初期メンバーの一人。無言で背後にいと、その存在感で誰もが『やれる』と熱血がかかる人。

通称は『親分』。その圧倒的な存在感により、どんなどん底の試合も挽回させてしまうので、色々なところに任務で飛ばされること多数。彼自身が寡黙で多くを語らないので、あのアイリスさえも『え、大丈夫、本当に行ってくれるの?』と思わず聞き返すほど。

実は、サーシエスの前に部隊長に推薦されていたが、『自分では部隊を率いる器ではない』と辞退。

その後、二代目の時も彼を押す声はあったが、『若い世代を』と否定した。

アリー・アル・サーシエス

『ガンダムOO』より

元ヴィルティラス部隊長。現保育士という、見事なほどへんてこな職歴を持つ。昔は鮮血の魔王やら、赤い死神とか色々と言われている。た。

実は転生者。自分がサーシエスだったことに落胆していたところ、まったく違う歴史をたどったので『ラツキー』と頑張った結果、テラに見つかるといふ落ちになった。

前世が保育士を目指していたので、部隊が軌道にのつたところで退職。惜しまれつつも去って行ったあと、保育士になったことに知り合い全員が『あ、やっぱり』と納得していた。

ちなみに、同僚の一人が彼の『マテリアル』なのは秘密。

アルミューレ

オリジナル。ティーラの専用機『エーン・ラティエス』の自意識。

藤色の髪を真ん中で分けて、さらに首の後ろで結ぶといった平安京に出てきそうな髪型の女性。

物静かでお淑やか。常にティーラの一步後ろに控える性格。ただ、一度でもプツツンすると周囲一帯を薙ぎ払う過激派。

ラクス・クライン

『ガンダムSEED』より

銀河帝国軍中央四軍の内の一つ、第一軍所属。

『ローレライ』と呼ばれる、開幕ブツパ至上主義。専用機も砲撃・射撃特化でいながら、その射撃を薙ぎ払うように行うので、接近してきた敵機を切り裂いたこともあり。

テンションが上がっていくと歌うので、その姿が人を惑わせ誘って破滅させる『ローレライ』のようだったから、名付けられた。

何事も全力、常に全開。どっかの白い魔王よりも砲撃・射撃を行って、模擬戦なのに損耗率七割を叩きだす、砲撃馬鹿歌姫。

ちなみに、帝国の機体すべての緊急脱出用の転移システムが搭載されたのは、彼女がそんなことをやらかしたため。

シャルル・ブリタニア

『コードギアス』より

皇族ではないので、『ヴィ』とか『ウ』とか入らない。

銀河最硬の武闘家の『ブリタニア家』の当主。鋼の肉体を持ち、鋼鉄の精神を宿す武人。

普段はスーツをピシッと着こみ、丁寧な口調で話すので『いい大人の見本』のように思っている人は多い。

しかし、いざ戦闘となるとスーツを突き破り鋼の肉体が現れ、あらゆる攻撃をはじき返し、その拳や蹴りで相手を沈黙させる。

シャルルによる『ブラックホール握りつぶし』は有名。

ちなみに、子供達も武人の道を突き進んでいるが、二名ほど頭脳労働専門なので、毎日を家族の武勇伝を聞きながら過ごし、胃潰瘍に悩

んでいるとか。

バナージ・リンクス

『ガンダムUC』より

RX-0 一号機『ユニコーン』の専属パイロット。元学生ではなく、きちんとした帝国軍士官学校を在学中に、テストパイロットに抜擢された。

精神感応系の能力値が高く、特定条件下であればサイコ・フレームを通してナノマシンやナノマテリアルを制御可能。

現在、中央四軍の内の四軍より、『強くなりたい』と言って精鋭三四軍の内の第六軍へ出向中。

リディ・マーセナス

『ガンダムUC』より

RX-0 二号機『バンシイ』の専属パイロット。可変機に対しての高い親和性を持ち、純粋な操縦スキルで言えば帝国軍の中でもトップ30に入るほどの凄腕。

面倒見の良さを買われ、色々と厄介事になりそうなRX-0の開発計画に参加させられる。

憎まれ役から相談役まで幅広くこなす苦勞人。ちなみに、マーセナス家は地方議会の議長を代々にわたり、『選出される』家系。

彼の気質は一族独特のものであり、彼もいずれば周りから『議長へ』といわれる運命にあるらしい。

本人は断固として断りたいらしいが。

リタ・ベルナル

『ガンダムNT』より

RX-10 三号機『フェネクス』の専属パイロット。精神感應系の能力に置いて、感応波の数値が『常人ではない』ほどの数値を叩きだした人物。

計測した時に技術局の変態どもの腰を抜かした逸話を持つ。

転生者であり、前世の一件から人見知りがとても激しい。両親は不在、というよりアイリスの故郷で捨てられていたところを拾われ、以後は彼女が姉代わりを務めている。

中央四軍のうちの四軍所属。四軍の御姫様と影で言われているのは、彼女に何かしたら四軍が総員そろって出てくるため。

スベロア・ジンネマン

『ガンダムUC』より

ジョーカー銀河帝国中央四軍の内の一つ、四軍の総司令官。オリジナルとは違い、家族は全員が生存。

元ジオン軍人、連邦との戦争中にジオン側の暴走発覚、連邦軍の追撃部隊から仲間や家族と逃亡中に、テラと遭遇。保護してもらって住処を用意してもらった恩を感じていたところ、テラが帝国を作ると聞いて参加。

厳つくて怖くて、でも優しいところはある。

通称、『オヤジ』。誰もが父と慕う人物。

イオナ

『蒼き鋼のアルペジオ』より

『サイレント騎士団』総旗艦『アルカディア』直属の遊撃艦隊の旗艦『絶戦艦級一番艦』。

メンタルモデルはオリジナルと同じ。服装は白いドレスが多い。

絶戦艦級と言われているが、船体は『超超超弩級戦艦土佐』のもの。

七百メートルの戦艦の左右に同じ大きさの空母をつけた形をしており、その総合火力は圧倒的の一言。

性格は大人しくて静かで。けれど、テラに害意を持って近づくなればミサイルや砲弾の雨を降らせる容赦ない一面も持つ。

アリア

『蒼き鋼のアルペジオ』より

外見は超戦艦『ムサシ』のもの。絶戦艦級二番艦。服装は姉のイオナと同じものを好む。

姉と違って好奇心が前に来るため、静かというよりはやんちゃなイメージがある。常に姉を立てているため、イオナと一緒に時はそういった面は見せない。

しかし、イオナ以上に苛烈な一面があるため、もし『アルカディア』を責めるならば、イオナのほうからのほうが生存率が高い。

バビロン

オリジナル。

外見はスパイラルホーンを生やした少年。元々、惑星管理コンピュータとして製造されたのだが、途中から『アルカディア』のメインコンピュータとして移植された。

というより、テラとルリが『アレ』なので危険を感じた一族が急ぎよ搭載したといったほうが正しい。

けれど、『朱に交われれば赤くなる』のとおり、かなり危ない考えや行動をすることが多い。

普段は静かで大人しい少年。

オラクル

『ツイン・シグナル』より

テラ達の一族の知識すべてを収めた『知識の図書館』の管理者。性格は穏やかで物静か。滅多に怒らないことで有名。

情報総省の管理者でもあるため、テラやルリは主に情報関係だと帝国の情報局ではなく、オラクルに調べさせることが多い。

ロックオン・ストラトス

『ガンダム00』より

狙撃の名手の兄と射撃の天才の弟の二人が名乗っているコード・ネーム。戦闘もそれなりにこなせて、ほぼ射撃戦では負けなしといった具合なのだが、所属は軍ではなかったりする。

二人とも、所属は情報局。一般市民の生活や各地の情報の取得、困ったことはないですかという、便利屋的なポジションにいる。

12

次元・大介

『ルパン三世』より

テラの昔からの知り合い、というより頭の上がない人の一人。父親の知り合いであり、小さい頃は色々と迷惑をかけた人物。

早撃ちの名人。テラが敵対することを無意識に避けるため、戦ったことはない。

次元からすれば、『昔から知っている息子みたいな存在』がテラ。

野比・のび太

『ドラえもん』より

テラの幼馴染の一人。

ジョーカー銀河帝国特別相談役なので、宰相と皇帝代理以外で帝国のすべてに命令権を持つ人物。

シン・アスカがテラへの防壁ならば、ストッパーなのが彼。

実際、テラなのび太への信頼度は高く、ルリでさえ持っていない近衛騎士への命令権も彼は持っていたりする。

『射撃の神様』あるいは『魔弾の射手』と呼ばれている。

フレイ・アルスター・ヤマト

『ガンダムSEED』より

キラ・ヤマトの奥様。医師としての才能に溢れ、医師だけじゃなく医療関係全般に手を伸ばしてすべて取得。医療事務までできるものだから、『一人病院』なんて言われたりする。

その努力は上を目指して、あのブラック・ジャックに弟子入りして技術を向上させたほど。

『医療界のフレイヤ』とか呼ばれている。

ブラック・ジャック

『ブラック・ジャック』より

テラの父親の主治医だった人。テラが頭が上がらない人でも有る。『お前たち一族は死にたがりばかりか?』と、父子そろって正坐させられるほどの人物。

ジョーカー銀河国内とはかわりを持つてはいないが、『頼み事』をしてくることはあり。当然、テラが断ることはない。

シエリル・ノーム

『マクロスF』より

銀河の妖精、銀河中と飛び回ってライブを行う。だけではなく、ドラマで女優並の演技を見せる多才さを見せつけることもある。

ある時期からシンに好意を向けている、と思われる。実は二人は幼い頃に会っているのだが、シンは忘れていたので。

というよりは、テラの修行があまりに厳しくて小さい頃の記憶が飛んでいる部分が多すぎることが原因。

鬼灯

『鬼灯の冷徹』より

閻魔大王の第一秘書官。というより、実際に仕切っているのは彼みたいなどころがある人。鬼人。シンが修業時代に、師匠のテラ以外で最も世話になった人。

具体的には死んだ後に『お疲れ様ですね』と呆れながら、見送られるくらいには世話になった。

閻魔大王

ご存じ、地獄の大王様。罪人にはとても厳しいが、そうでない人には優しい。基本的に優しい人。

シンの『苦労を理解してくれる』人の筆頭。

時々、お茶会に呼ばれるくらいに仲良くしてもらっている。

ユインシエル・アスレート・エーテル

『レガリア』より

テラの奥様の一人。見た目女子高生ながら、立派に成人している

人。テラの奥様の中での『ロリ系統三人組』の一人でも有る。

穏やかな性格で、常に敬語で話すのだが、『大人なら敬語』と思つて頑張つて直している最中なので、咄嗟の時などは素が出る。

奥様達の騎士団の中で最大数の戦力を持ち、彼女自身は肉弾戦を得意とする超近接格闘タイプ。

雪菜・エゼルカイン・エーテル

『ストライク・ザ・ブラッド』より

テラの奥様の一人。見た目が完全に中学生に見られてしまい、身分証明書を提示しても偽造といわれること多数の、『ロリ系統三人組』の一人。

槍を持たせたら最強無双であり、テラでさえ迂闊に接近すると一撃で落とされることもある。

ヤン・ウエンリー

『銀河英雄伝説』より

ジョーカー銀河帝国軍の中でもトップに君臨する元帥の一人。テラの父親とは幼馴染であり、テラが『帝国創った、軍を作る』と言つた時に、『あいつ一人で大丈夫だろうか』と嫌な予感がしたため、当時は軍人から退役して暇をしていたヤンが捕まって、土下座と手土産で元帥となった。

のんびりするのが好きなため、滅多に軍会議には出席しない。けれど、有事の際には真っ先に現場に遭遇する不運な人。

ブライト・ノア

『ガンダム』より

ジョーカー銀河帝国軍周回十二軍の内の一軍の総司令官。元地球連邦軍の軍人だったが、内部腐敗に嫌気がさして退役。レストランでも開こうかなと考えている時にテラに遭遇。

『軍人なら手伝って』と妙な誘いに乗って、何時の間にか総司令官の一人になっていた。

現在、奥様と二人の子供とは離れて暮らしているが、会いたいと申請を出せばテレポートで連れて行ってもらえる環境にはいる。

アムロ・レイ

『ガンダム』より

ブライト総司令官の懐刀。パイロットとして優秀、部隊指揮官としてもそれなりの才覚を発揮する人物。

将来、何処かの総司令官に押されそうな気配がするため、本人としてはパイロットと部隊長で十分なので自体する理由を探している。

サイコ・フレームについての知識は高いが、RX-0シリーズの開発には関わらず、代わりにバナージ達を推薦した。

自分はテストパイロットより、現場のほうが性に合っているかららしい。

シャア・アズナブル

『ガンダム』より

どっかの遺児らしいが、詳細を彼は語らずにいる。

精鋭三十四軍の一つ、三十四軍総司令官。虎視眈々と色々なことを狙っている、ようなことはまったくない。

テラが馬鹿をやるたびに帝都に怒鳴りこむことはないが、私的なメールで『いい加減、君も大人になるべきだ』とは苦言を行う。

思ったよりも帝国の空気が気に入った、とは彼の親しい人と飲んだ時にこぼした本音。

『逆襲するのか?』とは、テラが彼からメールを貰う度に返す言葉。それを見るたびに、彼は『この馬鹿皇帝が』と小さく笑っている。

ジエレミア・ゴツドバルド

最年少で元帥の地位についた、若き俊英。

テラが馬鹿げた理由で動こうとした矢先に、『貴方が今、動けば腹を切ります』と見事に止めた功績を称えた結果、元帥へ一気に昇格となった。

本人、この異例の事態に際して、『さすが、ジョーカー銀河帝国。常識が通じない』と冷や汗をかいたという。

国家・組織一覧

ジョーカー銀河帝国。

初代皇帝テラ・エーテルが、幼馴染の涙のために当時にあった帝国を崩壊・消滅させた後に、また同じことがあった場合、自分が自由にできる国があったほうがいいと考えて設立。

現在、五つの太陽系を支配下に置く強国。周辺国家や連邦が迂闊に攻め込めない圧倒的な軍事力を持つ。

けれど、皇帝自身が馬鹿なので、国民は『あれ、ここって帝国だったっけ?』か『帝国主義ってなんだっけ?』といったお気楽極楽な生活をしている。

帝国の中心惑星は第二太陽系にある地球、一般的には『主星』と呼ばれており、帝国の中心都市は『首都』あるいは『帝都』と呼ばれており、名称はない。

『え、必要なの、名前って?』と皇帝が『いらない』といって却下されたため、現在の形となっている。

政庁

ジョーカー帝国の中枢。普段から鉄砲玉のように飛びだして行方不明な皇帝に変わり、彼の妻十三人の『皇妃』が各自の執務室にて帝国を回している。

主に皇帝代理と宰相が帝国運営しているとか、そんなことはない。

ヴイルティラス。

政庁直属即応鎮圧抹消部隊。皇妃達から命令を直接されて、各地に問題ごとを片付けて回る集団。

現在二代目の部隊長が指揮している、たった三十人の精鋭中の精鋭。

これだけの人数しかいないが、帝国軍のすべてを相手に戦っても勝てる証明された凶悪な集団。

しかし、問題とは武力で解決できるものだけではないので、日々の業務で部隊内での衝突とかあったりする。

政庁の地下一階から三階に本部があるが、各地に支部はなし。

騎士団

テラとその奥様達十三人が保持する、帝国軍以外の暴力。全部で十四ある騎士団は、それぞれの主の性格や資質によって内容が微妙に異なる。

帝国においては騎士団といえ、皇妃達の私兵かあるいは皇帝の私兵のことであり、他に名称として存在していない。

帝国軍。

主星の周辺宙域を四等分にして守る『中央四軍』、第二太陽系周辺に散らばる『遊撃八軍』、それ以外の帝国領土を守る『周回十二軍』と国境周辺に配備される『精鋭三十四軍』から形成される軍隊。

名称と実力はまったく関係なく、全軍が総当たりすれば毎回、勝者が違うくらいに実力差はない。

イーデンホール

『バーテンダー』より

首都にあるバーの名前。テラが大好きで、他の帝国関係者も大好きな場所であり、内緒話などをする時にはよく利用する。

ぶっちゃけると、帝国の会議室で決まったことよりも、ここで決まったことのほうが多いくらい。

バーのマスターは、ちょっと困った顔をしつつも受け入れてくれる、とても寛容な方。

もしこの店に何かしたならば、ジョーカー銀河帝国すべてを敵にして戦うと宣言したようなもの。

情報局

帝国の内外の情報を扱う部署。

敵の位置や機密情報を取得したり、国民の意識調査をしたり、あるいは世論の趣味や趣向、時にはスーパーなどの特売日の値段や売れ筋まで集めるため、かなりの重労働をしているのだが、誰もが笑顔で『逝ってきます』と動きまわる人達。

時にやり過ぎて『騎士団』に口を突っ込んで、宰相などに忠告されることもあり。

名称は、『情報局』のだが、オラクルが統括する情報総省のほうが印象が深いため、『情報省』や『情報統括部門』とも言われている。ちなみに、情報総省とはまったく別組織。

技術局

帝国内の技術開発を一手に引き受ける場所。一般企業も開発は行うが、大規模実験をやるとするならば、ここに任せるのが一番。

変人奇人の集まりにして愉快痛快の後に結果をドカンと出すところ。

しかしトップになると他との会議を重ねて常識人になってしまうため、胃潰瘍が持病となっていくので、誰もやりたくないと言いだして空白や代理とかが多いところでもある。

情報総省

テラ達の一族が所有している情報ネットワークの総称。『イグドラシル・システム』を基幹として、『シャドーネットワーク』を下部ユニットに置き、統括として『オラクル』という人工生命体を置いた場所。

時に時間や空間の概念を超越し、素粒子レベルの探査ユニットを放って人の記憶をすべてスキャンングして知識を集め、それらを保存していく。

すべての情報は『知識の図書館』に保存されている。

サイレント騎士団

テラの私兵、というより手足。帝国以外の兵力として、テラのみに従っている。一族が秘匿した技術の塊であり、代々に受け継いでいる戦力。紋章は見本としたのが『ミラーージュ騎士団』なので、血の十字架を掲げている。

総数は十億とも二十億とも言われているが、詳細は誰も知らない。というより、毎日のように研究・実験、実施、全軍配備を行っているのでテラや団長を務めているホシノ・ルリでさえ把握していない。

警察機構

ジョーカー銀河帝国内において、軍人以外で武装及び防御用ユニットの装備が許される存在。

いわゆる『おまわりさん』。

当初は、『え、軍人がやればいいんじゃないの』とか、『予算を回すくらいなら削ってやる』とか暴走した皇帝や宰相のせいで、組織そのものがなかった。

国民から『あった方がいい』と嘆願書が提出され、設立となる。

しかし、普通の警察のような組織にならなかったのが、ジョーカー銀河帝国らしいところ。

新人は『巡查』とかではなく、『岡っ引き』。三等から一等へと出世して、次が『十手持ち』。そこも三等から一等へと変わった後は、『奉行』。そんなこんなで最終階級が、『サー、あるいは卿』とか呼ばれていたりする。

権限としてはかなり厳しい試験の末に合格になるため、一部の裁判官と同じ権限を持っている。

いざという時は、現場の独断で軍に応援要請も可能なほどの権限を

新人が持つこともある。

行った後は、かなり厳しい監査を受けることになるので、悪用はほばないらしい。

一部、『運動会の出し物だ』で軍が動くことはあるが。

議会

帝国主義とはいえ、民意が反映されてもいいんじゃない、という宰相の意見から発足された話し合いの場。

情報局が調査した情報以外にも、生活している人たちの生の声が聞きたいという側面もある。

主星で行われる中央議会と、それ以外で行われる地方議会に分けられているが、これは『正式名称』ではない。

各居住エリアや惑星ごとの議会、『最前線議会』。

そこで話し合った結論を代表者―その時に決めるので毎回、違うこともある―が持ち寄って各太陽系ごとに纏める『ドキ！ 激論超議会』。

さらに話し合われ、では持つて行くぞと最終的に主星で行われるのが、『皇帝断罪議会』。

最終的に出た結論は政庁に届けられるのだが、名称が完全にテラの悪ふざけの結果であり、誰も覚えていなかったりする。

しかし正式名称はこちらなので、公式の文章にはその名称で記載されるため、読んだ人たちが、『あ、その名前だったか』と最初に思ってしまうらしい。

消防総本山

『火消しならば総本山』、と謎の発言をした皇帝により名称が決定し

た組織。

発足から二年しか経過していない若い組織であり、今までは軍人や警察官、あるいは出火した近場の市民が消していたり。

技術が発展した結果、建物が燃えないとか、炎が出た時点で魔法的な効果が発揮されるといった作用により今までは存在していなかった。

しかし、いざという時に必要ではといった話や、実際に出火した時に知識のない人が消火しようとして、返って悪化させてしまう事例が相次いだため設立。

ちなみに、だが。

分署とか本署ではなく、『いろは二十四組』で分けられている。

主星に配備されているのは、『め組』。

消防士たちの名称は、『火消し』であり、新人から順に、『九位火消し』から始まり、『一位火消し』で終わる。

いろは組のトップは『カシラ』と呼ばれており、役職名はつけない。最後に消防総本山のトップは、『ヒオウ』と呼ばれている。

『火を追う』と書くらしいが、誰も漢字で書かないので、知る人は少ないという。

知識の図書館

オラクルが管理している情報検索用ユニット。

あらゆる世界、時間や空間を無視して集められたデータすべてが保管されており、アクセスコードを持たない人物には触れられない場所にある。

そこに存在しない情報は、理論上あり得ない。そういう風に言われるほど『悪魔の知識』が収められている場所。

機体・艦艇一覧

デステイニー・イレイザー

『ガンダムSEED DESTINY』より

シン・アスカの愛機。『マテリアル』。その圧倒的な加速力と持続力による亜光速戦闘は、他のすべてを置き去りにして誰にも止められない。

『撃墜不可能な強襲者』とは、この機体に送られた異名のようなもの。

オリジナルのデステイニーとは武装が大幅に異なっており、重力系統の武器や空間系統の装甲を持ったため、通常の人型兵器での撃墜はほぼ不可能なほどの強度と性能を誇る。

一光年ならばワープが単体で可能だったりするが、『飛んだほうが速い』という理由で使われることは滅多にない。

スノーホワイト・エンパイア

オリジナル機体。すべての『マテリアル』の原点にして、『速撃特化』。重力だろうが空間だろうが、時には魔法だろうと実行する女神。

テラの専用機であり、『サイレント騎士団』の旗機にして帝国の旗機。

レッド・ミラーージュ

『ファイブスター物語』より

『サイレント騎士団』近衛騎士。主―テラの実行可能な機械生命体。テラの巫女のルリの命令さえ拒絶するため、彼らに命令できるのはテラとのび太のみ。

皇妃達の命令さえ受け付けない、宇宙さえ消せる狂乱の集団。

エンプレス

『ファイブスター物語』より

アセイラムが所有する『遊星騎士団』の旗艦。近接戦闘がまったくダメな彼女のために配置された機体。『マテリアル』の第二世代のため、時間や空間を無視して主の危機に出現する。

主動力炉は通常のマテリアルと同じ規格なのだが、各部へのエネルギー効率が奇跡的な数値を誇っているため、通常稼働でも周りが燃えてしまう。

通称、『炎の女帝』。

アルカディア

『サイレント騎士団』総旗艦。全長千メートル級の戦闘空母であり、三連装主砲を二十四基も備える強固な要塞。各種防御機能、フィールド機能、装甲を持っていながらも攻撃力を削らない特殊軍艦。

また船体左右に特殊フィールドを形成し、そこで他の艦艇の修理も行えるため補給基地としても最適。

内部には百万人が過ごせるコロニーを備えているので、コロニーに軍艦の装甲をつけたとも言われている。

メイン・コンピュータは『バビロン』。

ブルームーン

オリジナル艦艇、という皮を被った化け物。

月と同じ大きさの惑星クラスの移動要塞。内部には製造プラントを持ち、移動しながら艦隊を形成できるほどの艦艇を一日で生産できる。

防御も強固なので突破するのは『ヴィルティラス』でも難しいとまで言われる難攻不落な要塞艦艇。

反面で攻撃力はとても低く、大抵は艦隊の真ん中に配置され、厳重に守られている。

エーン・ラテイエス

『女神候補生』より

ティーラ専用機。『マテリアル』。領域機関を主機関とし、重力子リアクターと対消滅エンジンを武装・武器・装甲に使用するというた鬼畜使用。

ナノマテリアルとナノマシンの複合金属を使用しているため、データ上での武装などを瞬時に再現し、戦い方を複雑に組み替えることが可能。

RX-0シリーズ

元地球連邦から流れてきたデータを、技術局の変態キチガイどもが暴走して作り上げた機体。

核融合炉ではなく、最終的に対消滅エンジンと重力子リアクターを搭載したとんでも機体に進化。

補助で太陽炉を使ったりなんてしたものだから、一機の出力が帝国の艦艇一隻を上回るがあり。

その上で、ナノマテリアルとナノマシンにサイコ・フレームのデータを入れて増幅させたものだから、とんでもチートの機体の出来上がり。

あまりに危なくて通常作戦では使用不可能。

現在、一号機ユニコーンが五機、二号機バンシイが五機、三号機フェネクスが五機の計、十五機が存在する。

ちなみにフェネクスの四番機は、ちよつと人に言えない事情により欠番。

技術系統一覽

マテリアル

帝国最秘奥、というよりはテラの一族の最重要機密機体。

『領域機関』を主動力としたクローニング・コンピュータ搭載のどんなでも機体の総称。

始まりの機体『スノーホワイト・エンパイア』を頂点とした、ピラミッド型の技術派生を持つ。

所有者を常に一定に保ち、記憶のバックアップを機体内に保持するためパイロットが死亡したとしても、『蘇生』させることが可能。

完全ワンオフの機体が多く、特に第一世代と第二世代の機体は事象の改編、あるいは歴史や時間操作も可能とするほど。

マテリアルはパイロットと共に成長することで自意識が生まれ、それがやがて人の形をとる。パイロットはその時に『愛称』を名付けることで、『神剣』を手に入れる。

元々の名称は『機神』。最初の機体を作った少女が、『人々に機会を伝える神経』として生み出した。

領域機関

マテリアルの主動力。ダイヤ型の結晶タイプであり、時間や空間や情報量による出力の増加を行う。

ブラックボックス化されており、テラ達の一族でさえ複製技術は知っていても製造技術は知らない。

稼働させればさせるほど出力が増していくため、古い機体ほど高出力の機関を持つようになる。

複製方法は、ダイヤ型の部分をハンマーで殴ると、一欠片が落ちてくるので、それを専用ユニットに繋がれば大丈夫、というかなり大雑把なシステム。

実はすべての領域機関は一つのネットワークでつながっているため、始まりの機体―スノーホワイト・エンパイアに敵対した時点で停止、半径百キロを消滅させる爆発を起こすようになっていた。

クローニング・コンピュータ。

『マテリアル』の頭脳中枢、の一つ。パイロットの『思考』をコピーすることで、パイロットを主、サブを従とした戦闘態勢を構築可能。

十機の人型兵器が、同じ思考の元で動くのだが、パイロットの負担は自機のみで他の機体はクローニング・コンピュータが操作する。

自分が、『ここでこうしてほしい』といった思考を他のクローニング・コンピュータが考え、それを補佐するので一人で操作しながらも十機を操っているかのように流れるように動く。

しかし、負担は一機だけなので、恐ろしく効率がいい。

領域機関とクローニング・コンピュータが混ざり合った結果、パイロットの思考を完全に把握した『自意識』が生まれると帝国技術局は推察しているが、実際のところは不明。

『パイロットが成長段階で捨てた可能性が具現化した』のが、マテリアルの自意識なので。

デイガーター

『ガンドライバー』より

名前の元ネタだけをいただいて、中身は別ものになったシステム。個人用防衛機構システムであり、第一級軍事機密の支給品。マテリアルの技術も一部であるが使われているため、ジョーカー銀河帝国でも持っている人は少ない。

皇妃達でさえ持っているのは四人くらい。

ブレスレットの形状をしてはいるが、保持者に対しての危険が迫ると保持者を起点とした周囲に三重に防衛フィールドを展開。

鉄壁の防御をとりつつ、登録されているマテリアルを強制召喚。周

困一帯を薙ぎ払ってもらうことも可能。

また一週間ほどまでならば保持者を保護する魔法・科学両方からの機能も有している。

バスターランチャー

『ファイブスター物語』より

ジョーカー銀河帝国内における、『嚴重な使用許可が必要』な武装。人型兵器が携帯する火器としてだけではなく、艦艇搭載用の装備も含めてもトップスリーに入るほどの火力を持つ。

最大出力で使用すると、着弾地点の空間が半日も歪んだりする危ない代物。

ちなみに、だが。

実はどつかの世界では、『扶桑型戦艦』が二つも搭載してぶっ放すこともある、らしい。

太陽炉、あるいはGNドライブ

『ガンダム00』より

GN粒子を発生させる無限機関。オリジナルとほぼ同じ構造をしているが、疑似太陽炉といったものは存在しない。

時間とか重力制御とかできる国で、特定条件下で製造可能ってものは、そもそもあり得ないので。

無限機関なのだが、発生するエネルギーと消費するエネルギーが同じではないため、無限機関としては他の機関に一步譲る。

しかし、発生させたGN粒子を装甲や武装に纏わせることで剛性が上がるため、『武装や装甲のみで使用』されることはある。

サイコ・フレーム

『ガンダム 逆襲のシャア、その他』より

連邦軍から流れてきた技術。人の精神に反応するチップを金属に埋め込むことで、人の精神による機械の作動を行える優れもの。

なんでそこで発光するとか、どうしてそのように動くのかの詳しい原理は原作では不明。

『え、そういう物質だからじゃないの』とか技術局では結論を出しており、詳しい話は『ようこそ、変人奇人変態の巣窟へ』と笑顔で迎え入れられそうになるため誰も聞いていない。

ナノマシン

『色々なところから出てくるためその他』より

ナノメートル以下の機械の集合体。作品ごとに解釈が違うが、ジョーカー銀河帝国では『柔軟性がとても高く、有機物との融合可能』な機械群。

人体の中に入っても人体を傷つけることなく排出される。あるいは損傷や病気の原因に対して作用して、排除してから外に出てくる優れもの。

医療関係者ならば、ナノマシンを使えて一人前といわれるほど。

ちなみに、ナノマシンがあれば『人体精製が科学的に可能』。そのため使用には免許が必要であり、使用する時にはきちんとした書類の提出が義務付けられている。

ナノマテリアル

『蒼き鋼のアルペジオ』より

オリジナルとは違い、機械関係、あるいは無機物に対してのみ使用可能な物体。未使用時は流体なのだが、データを流して構築した後は剛性がかなり高い物体となる。

ナノマテリアルを使用してデータを流して、速攻で艦艇を組み上げ

るなんてことも帝国では日常的に行われている。

ニューロ・コンピュータ

人の脳細胞と同じ構造体を持つ電子演算機。通常のコンピュータが不可能な複雑な判断、あるいは計算を瞬時に行える利点と、膨大なデータの処理を不可なく行える。

ジョーカー銀河国内において、ニューロ・コンピュータは『人間の反応速度と同程度の速度での処理を行える』ものとされている。

通常のMSなどに搭載された場合、機体の性能が二十パーセント向上するとされている。

フェザー・ビット

鳥の羽を模した形のビット兵器の一種。フェザー・ビットと一口にいつても種類がかなりある。

柔軟性を持たせて翼にすることで、推進力ではなく揚力のみで飛行可能にしたり。硬質的な金属を使用することで相手の装甲を貫通させたり。

また羽の部分に特殊なシステムを搭載させることにより、空間に断層を発生させて巨大な防壁を発生させるフェザー・ビットも存在する。

ウロボロス

高次元結晶を剣身に使用した対艦刀、ということになっている武装。結晶なのだが強度がかなり高く、ほぼ三次元上の攻撃で破損することはない。

その上に魔法刻印の性質により、ウロボロス周囲のエネルギーを吸収する効果を持つ。

斬ってエネルギーを吸って、相手を無力化する。または吸収したエネルギーの放出により相手を焼き尽くすことが可能。

現在、ジョーカー銀河帝国内には十三本が存在している。

ロジカリウム鉄鋼
オリジナル。

水晶状の鉱物内部にエネルギーの誘導を行う別の多次元結晶物を入れることにより、中心パーツから周囲に放たれたエネルギーが砲身に見立てた水晶内部を乱反射し、お互いに干渉しあって増幅していく作用をもたらす。

また外部に使われている水晶部分は、素粒子レベルの多重構造になつているため、『すべてが砲身であると同時に加速器であり、さらに銃口でも有る』といった特殊な構造の物質になつている。

しかし、生成時の複雑さや水晶であるため構造上の脆さもあり、実装しているのはデステイニー・イレイザーを含めても十機に満たない特殊素材。

クリスタル・デイストラクション

デステイニー専用装備。手先から肘までを覆っている、装甲の表面に施されている特殊な合金。『ロジカリウム鉄鋼』と同じ性質を持っているが、剛性はかなり高いものであるため、内部にエネルギーが流れる隙間はない。

しかし、その表面にエネルギーを流す性質を持っており、それは『内

部から発生したエネルギーさえ例外ではない』ため、相手や自分から発生させたエネルギーを手先から肘までの装甲に展開させることが可能。

実質、デステイニーの両腕には光学兵器は通用しないことを意味しているが、そこを何とかしてしまう変態兵器もあるので、無敵ではない。

テイスがデータ整理を間違えて、どうにか誤魔化そうとして暴走した結果の発生なので、予備はない。

技術局でも『どうやってできたんだ?』と再現不可能な技術になっている。

シャドーネットワーク

情報精査の部門、と外部には伝えている、テラ達の一族の最秘奥のうちの一つ。

本当は人の最も脆弱な部分、『影』に取り込んで情報を引き出す、非人道的な情報収集ユニット。

時に人の『脳』にさえ忍び込んで、記憶を引き出して集めてしまうため、このネットワークが最大稼働すると秘密がすべて暴かれるとされている。

これの最悪なところは、一つの世界に留まることなく異世界すべてに広がって情報を集めていくこと。

そのため、オラクルが管理する『知識の図書館』には他世界の技術や知識が山のように集められている。

第一章 願いと共に

彼はそこにあり、そして運命が翼を広げる

その名前を多くの者が知っている。

悲劇の主人公、いや彼の両親も妹も健在だ。

特に妹は、ジョーカー帝国の中央四軍のうちの一つ、第二軍でエースを張っている。

十四歳のエース、怖いな。

あいつは十七になったのか。

時が立つのは早いというが、あの戦争からもう四年も経ったのか。知らないのか。おまえさん、転生者か何かか。

そうか、知らないか。

なら自分の幸運に感謝することだ。

ジョーカー帝国皇帝、『神帝』テラ・エーテルの一番弟子。

政庁直属即応鎮圧抹消部隊『ヴィルティラス』所属。

いや、そんなものじゃないあいつの怖さはな。

そう、あいつは。

彼の朝は、比較的のんびり。

枕元の目覚まし鳴る前に目を開いて、ベッドから素早く飛び起きる。

「ちえ」

「マユ、何時も言ってるだろ、止めろって」

「は〜い」

部屋の入口、片手に光剣を持った妹の姿に、彼は片手で顔を抑えた。

「今日こそは一撃が入れられると思ったのに」

「はいはい、『戦華』の一撃は怖いから止めてくれ」

溜息交じりに妹の『字』を口にする、切っ先が振られた。

僅かに身を沈めて刃を避けた先に、右足が叩きこまれる。

「あいな」

マユの右足は、見事にベッドサイドのテーブルを蹴とばしていた。

「片付けるのは俺なんだから、できれば止めてくれよ」

妹の背中を見ながら声をかけると、相手はゆっくりと振り返って疑問を浮かべていた。

「え？ 今までここにいたよね、お兄ちゃん？」

「いたよ」

欠伸を噛みしめ、彼は歩き出す。

「え？ えええ?! 何時の間に?!」

「何時って、右足が動いた時だよ。見えなかったのか？」

彼の言葉に、マユは大きく頷いた。

なんだよ、それと彼は口の中で言葉を転がす。

「ビームよりは遅いんだから、反応しろって。そんなんじや、パイロットなんてやれないだろうが」

「いやいや生身でビームと同速度ってなに?!」

驚いている妹に、彼は呆れた顔を向けた。

この馬鹿は何を言っているのやら。帝国を見渡せば、ビーム程度の速度で動けるパイロットは五万といる。

もっと怖い化け物とか、時間停止しかけてくる魔王みたいな骸骨とか。

ブルツと体が震えてしまう。

「とにかく、止めるよな。無意識に反応して、また『家を半壊させたくない』からな」

「あ、うん、そうだね。でもお兄ちゃん、私も訓練しないと」

「後で付き合ってやるよ。今日、ティスが戻ってくる予定だから」

彼の言葉の中の単語に、マユは悲鳴を上げるのでした。

「えええ?! ティスちゃん戻ってくるの?! その前にお兄ちゃん私と機動兵器で模擬戦を!!」

「何でだよ? おまえが専用機で俺が量産機って、何のハンデなんだか」

階段を下りて居間に辿り着き、そのまま通り抜けて台所へ。

冷蔵庫の扉を開けて、牛乳を取り出す。

「お兄ちゃんは、『准将』。私は少尉。ハンデは必要だと思うけど?」

「それ、部隊所属だからだろうが。現場について指揮権で揉めないように、仮で貰っているだけだって」

仮だ。それに決まっている。

ルルーシユとか、ヤン・ウエンリーとか。提督で名高い戦略家に色々と叩きこまれたり、スザクとか刹那とかに機動兵器戦をもまれたり。

部隊の運用や艦隊運用まで叩きこまれたが、絶対に仮の階級だ。

「でも、『神帝』の一番弟子だよね?」

思わず口に含んだ牛乳を吐きだしそうになった。

一番の原因があったか。

思い返せば、あの頃の自分は何故にあの人に弟子入りしたのか。

後悔はしてない。悔やんでもいない。ただ、もう少し言い方があったのではないだろうか。

「俺が一番弟子って名乗れるほど、強くないよ」

「お兄ちゃんは強いよ。だって……」

その時、マユに言われた一言で、彼—シン・アスカはさらに落ち込むことになる。

決してなりたくてなったわけじゃない、字だから。

政庁の地下二階にあるのは、『ヴィルティラス』専用の格納庫。

バツタ達が飛び交い、研修に來ている整備員が走りまわり、二十メートルの人型の巨人が並ぶ中を、少女が歩く。

金色の瞳、藤色の髪は肩口より少しだけ長く、毛先に軽くウェーブがかかっている。

服装は淡い蒼色のワンピースに、大きな赤いリボン。

年の頃、八歳くらいの女の子が、特殊部隊の格納庫を歩いているのを、誰も咎めようとしない。

一步一步と歩き、少しだけ行つてはまた戻つてくる。

少女が歩いている場所の後ろには、一機の兵器が立っていた。

赤い翼を持つ、白と青の装飾の機体。

帝国の中でも特殊な方法で製造され、厳選されたパイロットのみに与えられる特殊機体。

『マテリアル』の内の一機、『ステイニー・イレイザー』。

名前は意味を持ち、そのものを示すと信じている帝国において、その機体はこう訳されている。

『運命を選びとるもの』と。

「テイス！」

名前を呼ばれ、少女は足を止めて、華のような笑顔を浮かべて振り返る。

「シン!! 戻つたよ!」

パツと走り出し、彼に飛びついた彼女は、ギョツと抱きついた後に首をかしげた。

「あれ、ちよつとメンタルが落ちてる?」

「妹に襲撃された」

「おお、さすがシンの妹。猪突猛進だ」

「止めてくれ」

ティスを床におろし、機体を見上げる。

「状況は？」

「問題なし。バツタ達もルリ様も『異常なし』って。バビロン様とオラクル様には『いい感じに使っているね』って褒められた」

エツヘンと胸を張る少女の頭を撫でてやりながら、シンは愛機を見つめていた。

青と白、まるで光と海、あるいは氷。

カメラアイのところに赤い装飾があるので、まるで燃えるように見える。

だからこそその自分の字か。

「哀愁？」

「あ、ごめん。とりあえず、試運転の許可は貰ったから」

「了解♪」

クルリと一回転したティスが、幻のように消える。

同時にデステイニーの瞳に光が灯り、右手がゆっくりと降りてくる。

「じゃ、行くぞ。ティス」

『はい、我が主シン・アスカ』

巨大な人型兵器から、少女の声が響き渡る。

『マテリアル』は、兵器として致命的な欠点を抱える、戦略級兵器。彼女達はパイロットの『魂』に従う。

心でも倫理でもなく、魂に。周りのルールも、パイロットの状況も関係ない。従うべき主が、本当に望んだことを叶えようとする。

決して裏切ることなく、ただそれだけを追い求める。

嘘や偽りで誤魔化しても、『マテリアル』は誤魔化されず。

そして、その結論として『マテリアル』は自意識を持ち、それが外側へと具現化してパイロットの傍に寄り添う。

テラの『スノーホワイト』も、『マリア』と呼ばれる自意識が存在するらしいが、シンは会ったことはない。

けれど、時々、とても暖かい視線を感じることはある。

「さっさと済ませるか。マユの奴、専用機と専用武器を持ち出したら

しいけど」

『うわお、本気だ。じゃ、私も頑張るよ』

「ほどほどにな」

帝国の専用機と『マテリアル』がぶつかつたら、半径二十キロは消えるのではないだろうか。

シンは少しだけ予想して、怖くなって忘れることにした。

その後、訓練後にアスカ兄妹は始末書の提出と、宰相によるありがたいお説教を受けることになった。

あいつの話だったな。

あいつは有名だろう。

『ジョーカーオブジョーカー帝国の切り札』、『皇帝への最終防壁』、『撃墜不可能な強襲者』。色々な言われ方をしている。

最も、有名な奴はこうだろうな。

シン・アスカの本気を前にした奴は、その燃えるような瞳で睨みつけられ、凍ったように止められて、砕かれる。

だからあいつは、『凍焰の鬼神』と呼ばれている。

ほら、知っていたじゃないか。

なら迂闊に触れるなよ。

じゃないと、おまえの魂ごと『凍らされて燃やされる』ぞ。

君が考える時間をつくるよ

『シン!!』

いきなりの怒声は頭の中で響き渡る。

ハツとして気がついたときには、体が勝手に動いていた。

現在状況、不明。どうやら路地裏らしいが、周辺の『構造物』は銀河帝国の基準値以下だ。

主星以外の場所。それはない。銀河帝国の支配地域で、ただのレンガ造りの建物など許可が下りない。

路地裏も、あり得ない。

あの宰相殿が、路地裏なんて場所を作るわけがない。それに見たことがない。

任務で方々に飛ばされたことがあったが、記憶の中にこんな場所はない。

ティス―デステイニーの記憶領域にも一致する場所はなし。

天体の位置も該当なし。

『シンー!』

再びの警告、人が近づいてくる気配多数。

不味い、今の自分は正装のままだ。

銀河帝国の領域でないならば、他の国家群の何処か。

政庁直属部隊の自分の顔は知れ渡っている。

無許可に他の国の中に、中央の軍人がいると知れたら。

「アイリスさんに殺される?!」

『そうそう!!』

国際問題、そんなのは些細なことだ。

他国に対して攻める理由を作る。今だって、周り中が銀河帝国に対して攻撃を仕掛けたいのに。

単独で敵地のだ真ん中。何時ものことだ。

「ティスー!」

『現在位置のマップ作成完了! 座標データ更新終了! 何時でも行けるよ!』

優秀な相棒は相変わらず仕事が速い。

まずは何処かへと考えるシンの視界の中、角を曲がって姿を見せたのは。

「あ………」

涙を浮かべた少女だった。

金髪を三つ編みにした、何処にでもいそうな純朴な。

「えっと………」

彼女が立ち止まり、こちらを見てくる。

泣いている理由を聞くべきか、それとも道譲って立ち去るべきか。

グルグルと頭の中で考えが回るシンは、一步も動けずにいた。

『女性に優しくね』と、テラが脳裏で言っている。

理由を聞くべきだと動き出した体が、別の言葉で止められる。

『女性に騙されて任務失敗なんて、ないようにね』と、アイリスが笑顔で語っていた。

少し、優しい笑顔の間から、『怖さ』が滲んでいたが。

アイリス・クロームクラウン・エーテル銀河帝国宰相。テラの奥様の内の一人にして、剣と槍を同時に使う達人。

勝てたことないんだよな、とシンは胸中で付け足しながら、どうするべきかと悩む。

「……あの人に雇われた人？」

シンが悩んでいる間に、少女から声をかけてきた。

「え、えっと、誰のこと？」

「なんとかってISの会社の」

ISってなんだ。意味不明な単語に少しだけ気を取られる。

「違うの？」

「いや、ISってのは知らないけど。俺はちよつとここにいただけで」
言っていて、これじゃ訳が解らないだろうと、シンは自分のことながら笑ってしまう。

「それじゃ………」

「いたぞー！」

別の声が、二人の間に差し込まれた。

違う角から現れた二人の黒服の男に、少女が怯えた顔を見せた。だから、シン・アスカは動いた。

「なあ、あんたら。この子に何か用事なのか？」

「はあ？ おまえには関係ないだろう？」

男の一人が睨んでくるが、シンにとっては怖くもなんともない。もっと怖い人たちは、睨む前に殺しにかかるので。

「彼女、怯えているだろう？ 女の子に優しくしろって習わなかったのか？」

「おいおい坊主、かっこつけたいなら余所でやれ」

「かっこつけたいわけじゃないけどさ」

そう見えるのだろうか。当り前のことを言っているだけなのに。

シンが視界を反らすと、男の一人が拳を振りかぶった。

見えているし、回避するのは余裕。けれど、彼はあえてその一撃を貰った。

左頬に一撃が入った瞬間、シンの右手が男を沈黙させる。

帝国軍の規則によると、軍人の防衛行動は相手側から攻撃が加わった場合のみ許されている。

だからシンは一撃を貰い、そして二人を落とす。

「さてと、話を聞かせてもらおうぞ」

「え、え？ どうやって倒したの？」

「こんな連中、拳一つで十分」

「ちよつと待つてよ、『見えなかつたけど』」

一般人に見えるほど、柔な鍛え方はしてない。

シンは内心でいいながら、少女に手を差し伸べた。

「俺は、シン・アスカ。あんたは？」

「シャルロット」

ファミリィネームを名乗らず、少女は自らを告げた。

路地裏では何なので。

場所を変えて話を聞かせてもらおうことにしたのだが、場所をとはいってもカフエテラスくらいしかないが。

襲われた人物がカフエテラスで優雅にお茶。

二度目の襲撃を希望します、と看板を出しているようなものだ。もし、ここが帝国であったならば、シンは迷わずにバーを探して入る。

バーは、『隠れ場』。重い扉の先では、外の事情を持ち込まないのがルールで、何があっても揉め事に発展しない。

いや、発展したら帝国軍じゃなく騎士団が出撃する。

特に銀河帝国上層部が大いに好んでいるバー『イーデンホール』で、もめ事なんかあった日には。

十四の騎士団の全戦力が、相手が個人だろうと殲滅戦を行うだろう。

色々と考えたシンが選んだ場所は、やはりバーだった。

「未成年はお断りだ…….といたいがない」

店のバーテンダーは、一目の時に文句を言い掛け、続いて二目の時には軽く首を振って奥のボックス席を示した。

「ありがとうございます」

「いいさ。訳ありなんだろう?」

「ええ、まあ」

シャルロットを連れながら通り抜けると、バーテンダーは軽く肩をすくめていた。

「痴情のもつれは勘弁してくれよ」

「はは、ないですよ。これで」

そっとシンがカウンターに置くのは、念のために持っていた寶石。

「本当に内緒の話みたいだな」

「外に秘密が漏れないのが、バーのいいところだ、ですよ?」

バーの扉の先は、秘密の共有場所。昔は警官と犯罪者が、同じテーブルで酒を飲んでいたらしい。

「それを知っているおまえさんは、未成年じゃないな？」

「ははは」

軽く笑って誤魔化してみる。

銀河帝国にとつて、成年は二十歳から。ただし、仕事に就いていない場合はという前書きが付く。

「適当に持っていつてやる。これじゃ、場所代には多すぎる」

「お願いします」

ボックス席につき、彼女に着席を促してから、シンも座る。

「本当に大丈夫？」

「大丈夫。こういった昔ながらのバーは、客の秘密は守るから。それにさ」

シンはチラリとバーテンダーに視線を向けた。

彼はシェイカーを無言で振っている。

こちらの様子を窺いながらも、何か言ってくる様子はない。

「バーテンダーは、世界一結束の固いギルド。客に対して誠実であるならば、彼らほど心強い味方はいない」

「詳しいんだ。シンってさ、何歳？」

「十七。それなりに色々なことを見てきたからね」

安心させるように微笑みながら、シャルロットに話を促す。

彼女はポツリポツリと語る。

母親と二人暮らしだったこと。その母親が亡くなったこと、父を名乗る男が来たこと。

彼が作った会社のこと、自分のISの適正がA判定で、テストパイロットを命令されたこと。

話は途切れ途切れで、彼女の主観情報が入っていて。

「妾の子がって、怒られちゃった」

最後の一言に、シンは返答できずに考え込む。

奥さんがたくさんいるって、大変なのだろうか。

ちよつと思ひ出すのは、師匠であるテラ・エーテル。十三人も奥さ

んを抱えていて、彼は自分らしく馬鹿らしく真っ直ぐだ。

いや大変だったな、と考え直す。奥様全員が大変だった。

馬鹿でアホで、真っ直ぐに問題に突撃するのが彼だから、傍にいると命がいくつあっても足りないらしい。

思考が逸れた。

シンは考えを戻すために、バーテンダーが持ってきてくれたカクテルに手を伸ばす。

何が出てきたかと思ったら、『シャーリー・テンプル』。

ノンアルコールのカクテルだが、味がしつかりとしていて、彼の腕の高さが伺える。

「シン、私はどうすればいい?」

泣いているシャルロットに、彼は反射的に答えていた。

「考える時間を作ってやるよ」

彼はゆつくりと部屋に入り、深々と溜息をついた。

取り逃がしたらしい。

部下からの報告に、苦々しい思いを感じてしまう。

部屋を通り過ぎ、自分のイスへと向かう。

正直な話、彼女を愛していたかなど解らない。

仕事に行き詰まり、人生に悩んでいた時の、一時の安らぎを求めていただけなのかもしれない。

彼女に子供がいると知ったとき、『そうか』とだけ思った。後に感想もなく、今まで忘れていた。

けれど、その娘にIS適正があつて、それが『A』だと判明した時は幸運が巡ってきたと思った。

これで、我が社も盛り返せる。イギリスやドイツに遅れることな

く、計画から外された恨みを晴らせる。

「なあ、あんたにとって、あの子はそれだけなのか？」

気がつけば、イスに座った自分の目の前に少年が立っていた。

赤い、揺れるように紅蓮の瞳を持った、黒髪の少年。

その瞳に見つめられると、何故かとても寒く感じてしまう。

「誰だ、君は？」

「質問しているのは、俺なんだけだな。シャルロットは、あんたにとって、それだけか？」

少年は、真っ直ぐにこちらを見てくる。

身構えるでもなく、武器を持っているわけでもない。

なのに、体中が震えてくる。まるで刃を心臓に突きつけられたように。

「それだけ、とは？」

「恨みを晴らすための道具。周り中を見返すための切っ掛け。それだけなのか？」

何故だ、どうして知っている。

言葉は吐き出されることなく、口は凍りついたようにしゃべれなくなった。

「解った。もういい」

少年は背を向けて、そして消えた。

途端に、男は全身で息をする。体が忘れていたように、酸素を欲して心臓の鼓動が早鐘のように鳴り響く。

「なんだ、今、何がいた？」

男はようやく動いた口でそう呟き、やがて呆けたように止まった。「ん、いかなな疲れているようだ。眠ってしまったな」

軽く背伸びしてイスに座りなおした男は、書類を持ち上げて目を通していく。

まるで、先ほどのことがなかったかのように。

彼の記憶の中に、先ほどまでいた少年のことは、綺麗に消えていた。

子供は親の道具じゃない。

シンは出かかった言葉を飲み込み、デュノア社を見下ろしていた。

『いいの、シン？ 今なら『記憶』だけじゃなくて命も消せるよ』

「消したところで、問題の解決にはならないさ。今、必要なのはシャルロットが考える時間と、それと俺達の身の振り方かな？」

振り返った先、デステイニーの首のところから、テイスが舞い降りてくる。

『消せば全部解決』

自信満々に答えるテイスに、『いや、そんな短絡的な』とシンは思うのだが。

別世界の彼は、かなり短絡的に動いていたような、と誰かから突っ込みが入るのだが、このシン・アスカは短絡的に動いた結果に死ぬ思いをしたことがあるため、よく考えることにしている。

ただし、しているだけでかなり短絡的に動くことは多いが。

「デュノア社を潰したところで、シャルロットの問題は解決しないさ。誰か別の存在が、彼女を狙ってくるだけだ」

『ふっくん。シンって考えられるんだ！』

「おい、テイス」

尊敬の眼差しで見ってくる彼女に、拳を握ってしまうシンだった。

とにかく、これでデュノア社と話し合う選択肢はなくなった。

もし、彼に少しでもシャルロットに対して後ろめたい気持ちがあったなら、話しあってお互いの妥協案を探したのだが。

『で、どうするの、シン？』

「あのバーテンダーさんの師匠さんが、イギリスにいるらしいから、そっちに行ってみるか」

フランスに留まるのは、見つけてくださいと言っているようなもの。

ならば、いつそのこと国外に出てみるのも手だ。

こうしてシンはシャルロットをつれて、イギリスに向かうことに決めた。

デユノア社は、その後シャルロットの行方を探し続けたが見つからず、ISの開発は遅れに遅れることになった。

「いや、テストパイロットがいなくてなんだよ」

『うん、何だろうね』

結果を知ったとき、シンとティスは呆れていたというが。

常識は人それぞれ、国や世界でそれぞれ

かつて、その国は女王の元、七つの海を支配していた。世界の果てまで女王の威光を伝えた、栄光の王立海軍。世界中の海の男たちが規範にした、紳士の集団。

ジョーカー銀河帝国の図書館に、その国はそう書かれていた。

古き由緒正しき、紳士の海軍。

海を愛し、空に憧れ、しかし海にのみ己の存在意義を刻みこんだ、本物の海の男たちが集う場所。

大英帝国の海軍。

ロイヤル・ネイビーは、今はその栄光に影を落とそうとしていた。

「イギリス……か」

シン・アスカは、そう大きな時計塔を見ながら告げた。

国と国を渡るときに必要なものは何だろう。

答え、パスポート。

しかしこれは、公共の乗り物などを使う場合に必要なものであって、公共の施設を使わないのであれば、必要ではない。

「え、パスポートって何？」

「ええ?! シン?! パスポートって知らないの?!」

いざイギリスへ行く時になって、シン・アスカは異世界特有の情報の違いによって、足止めされるところだった。

「うん」

「うんって……そっか、シンって異世界人だから……かな?」
シャルロットも納得しかけて、首を傾げてしまう。

異世界であっても、国と国があれば移動時にパスポートの提示は必要なことではないだろうか。

彼女の考えは正しいが、銀河帝国にかぎっては違っている。

五つの太陽系を支配下に置く銀河帝国において、他の国に移動することは滅多にない。

自分の国の中で大抵のことが済んでしまおうし、もし物資や技術が必要になったとしても、帝国の中にすべてがある。

周辺に国々がない、ということではないが、何処も単一惑星国家のみ。

今も勢力圏を広げている帝国にとつて、他の国に行つても行わなければならぬことは、まったくくない。

その上で、シンの場合は政庁直属の部隊『ヴィルティラス』所属。階級と名前そのものが証明書であり、大抵の施設が顔パスで終わり。

身分証明書など、持ったことはない。

もし提示を求められても、ティスーデステイニーの登録IDで終了。シン自身が何かを提示することは全くない。

「イギリスに行くのに必要なのか?」

「うん、それがないと飛行機も船にも乗れないから」

「え? 乗るのか?」

「え? 乗らないのか?」

そこで二人して、自分達の知識に差があることを認識したのでした。

「いやシャルロットが乗りたいなら、何とかするけどさ」

「え? え? 乗りたくはないけど、でもどうやって行くの?」

彼女の疑問に対して、シンはあっさりと答える。

「テレポートかジャンプ」

「はい?」

「瞬間移動って説明のほうが速いかな? とにかく、目標地点に一瞬で移動する手段だよ」

百聞は一見に如かず。

説明するより先に、シンはシャルロットに体験させることにした。そして、彼女は目標地点に着いた途端に、蒼白になって倒れた、と。

「気持ち悪い」

「そうか？」

ベンチに横になった彼女に対して、風を送ってやりながら、シンはどうして気分を悪くするのか疑問を感じていた。

風はテイスが気流操作で送っています。

今回は、初めてのシャルロットがいたので通常のワープ手段を選択。

目標地点と現在地点を重ねて、現在地点だけをスライドさせて透過。自分達は目標地点に立っているという、単純な使用。

同一地点化しての移動や、四次元空間を通っての移動ではない。まして、ジャンプ・ボソン・ジャンプ技術といった粒子変換しての移動でもない。

初歩中の初歩のワープ技術なのに。

「大丈夫か？」

「うん、少し休めば。でも、この後はどうするの？ 私達の戸籍って、イギリスにないよね？」

「ああ、だから造る」

事もなげにシンは言いながら、テイスに軽く目配せ。

『りょーかい♪』

ビシツと敬礼したテイスが、軽やかに踊る。

シンとシャルロットがいるベンチの周りを、ダンスのように回りながら踊り始める。

なんで電子戦をする時って、踊るのだろうか。

シンは前々から思っている疑問を思い出し、軽いため息をつく。

しかも、今のテイスが見えるのはシンのみ。周り中の人たち、シャルロットでも姿が見えない。

軽やかに優雅に踊る少女は、一周したところで小さく頭を下げた。

『終了』

ポンつと音がして、シンの手の中に二人分の身分証明書が落ちてきた。

「え？ え？」

「ほら、シャルロット・『リース』」

「はい？」

「悪いけど、こっちで苗字は勝手に決めさせてもらったから」

「それはいいけど、これってどうやって作ったの？」

ベンチに寝たまま目遣いで見てくるシャルロットに、シンは晴れやかに笑って答えた。

「知らない方がいいことは、世の中に多いから」

「あ、はい」

そう彼女は答えるしかなかった。

デステイニー・レイザーは、電子作戦機ではない。

シンの技量に合わせてセッティングされた機体は、強襲機体に分類されるものであり、全体的な能力値は直接戦闘能力に振り分けられている。

けれど、相手が電子戦をしかけてきて乗っ取られる可能性も考慮して、電子防壁は高いものが用意されている。

そもそも、『マテリアル』に対してのハッキングといった電子攻撃は、相手側のパソコンの破裂・爆裂で返される。

目標地点を確認して、相手に反物質を送りつけるなど、『マテリアル』であれば簡単に行える。

しかし、こちら側からハッキングして相手側に潜入するといった電

子戦能力はまったくといっていいほど搭載されてはいない。

なのに、ティスが戸籍を作れたのは、この世界の技術レベルの低さのため。

銀河を飛び回る、あるいは一定宇宙空間に大気とか発生させられる、帝国の技術レベルを考えると一惑星のみで生活する人類の電子戦能力は、お世辞にも高いとは言えない。

帝国の中でも、特に飛び抜けた高度な技術の塊の『マテリアル』にとって、この世界の電子防壁は鍵のかかっていない部屋に入るようなもの。

『ティスは偉くなったのです』

エツヘンと胸を張る少女に、シンは何とも言えずにいた。

資金を用意して戸籍で借りた部屋は、寝室二つにダイニング一つの、まさに希望通りの間取り。

これでバスルームやトイレが二つあれば申し分ないのだが、そんなのは探しても見つからなかった。

そもそも、二部屋にすればいいのに、何故かシャルロットが強硬に反対した。

置いて行かれないか、見捨てられないかと不安なのは、表情を見ただけで理解しているが。

だからといって、女の子がほぼ初対面の男と同じ部屋に住んでいいものか。

何度目か解らない疑問に、再びシンはぶつかる。

『シン、それでね、『あいえす』なんだけど』

「あ、悪い、ティス。解ったのか？」

『うん、結論から言うかね……馬鹿の作った欠陥品』

「はっ？」

腰に手を当てて怒っていますと口にするティスに、シンは呆けた顔のまま固まってしまった。

欠陥品って、何だろう。

あいえすー正式名称は、インフィニット・ストラトス。略して、『I S』。

無限の成層圏、その先の宇宙に飛び出すためのマルチフォーム・ユニット。人体が身に纏うことで、無限の宇宙に行けるようになるらしい。

絶対防御とシールドバリアー、それに武器を収納する機能。

『マテリアル』に似ている部分があるな、とシンは思考する。

ただし、女性にしか扱えない。

「は？」

再び、シンは固まった。

『女性限定の兵器。女性ならば誰でも扱えるの。今は、ISのコアの数が限定されているから、各国に振り分けて、それ専用の学園もあるみたい』

「へえ〜学園で学ばせて宇宙に行くための勉強をさせているわけか」

中々、合理的じゃないか。世界にこれだけの国があるのに、学園を作って生徒を集めるなんて、この世界は纏まっていくようだ。

感心していたシンは、次のティスの言葉でまた思考を止められる。

『それでね!! ISが使えるから女性が偉いんだって! 男なんて奴隷みたいに扱っている奴もいるの!』

「いや、ちよつと待った。たかが、一兵器だろ? しかも数が限定されているのか?」

『その上で! ファッションか何かと勘違いしているのが、その学園の生徒! 世界各国も相手の腹の探り合いしているし、裏側で裏切つてなんて日常茶飯事みたいだよ!』

「・・・帰りたくなってきた」

一気にやる気が削がれた。

学園があるから、素晴らしい人たちが色々な意見をまとめて、未知の宇宙へ旅立とうとしているのかと思ったら、昔ながらの人間の欲望のドロドロさを見せられてしまった。

落ち込んでいく気持ちを、シンはどうにか奮い立たせる。

シャルロットとの約束は、話が別だ。

彼女と自分がした約束と、この世界の馬鹿馬鹿しい構図は、同じものとして考えるべきものじゃない。

「仕事、探してくるか」

シンはそう呟いて、歩きだす。

ハッキングで資金はいくらでも持って来れるが、それは犯罪行為だ。

先ほどの戸籍偽造は仕方ない行為だが、資金の強奪は仕方ないことではない。

仕事をして気持ち切り替えたいと思ったわけではない。

決してそんなことはない。

シンは何故かそう言い訳をしながら、部屋を出た。

仕事を探してくる。

シャルロットにそう言ったら、当然のように付いてきた。

搜索されている怖さより、いなくなる怖さが勝ったわけか。

イギリスだから探される心配はないと、安心したのかもしれないが。

「男なら結構よ」

何件目だろうか。

何故か性別で断られることが多い。

これもISによる弊害か。先ほども、道を歩いていただけで、『私のために洋服を買いなさい』なんて言ってくる奴もいたな。

丁重にお断りしたら、『訴えてやる』と叫び出したので、テイスが怒って止めるのに苦労した。

結局、駆け付けた警官にシャルロットが説明すると、その女性は文句を言いながら去って行ったが。

「女尊男卑か。こんなに馬鹿馬鹿しいとは思わなかったよ」

「なんか、ごめん」

「シャルロットが謝ることないって。でもな」

仕事が見つからない。

まさか、こうまで男が嫌われているとは。

一般的な商店では望みが薄いか。となると、紹介されたバーに行ってみてアルバイトか。

いや、バーで働いたなんて知られたら、テラを筆頭とした帝国上層部に殺される。

『そうか・・・偉くなったな、シン・アスカ』。

想像ができる。怒気を纏ったテラが、両手に剣を持って突撃してくる姿が、目の前に浮かんでしまう。

「私が頼んでみようか？」

「シャルロットが頼んでも、俺が行ったら断られるんじゃないか？」

「そうか」

二人そろってベンチで座って、溜息をつく。

いい考えは浮かばない。そもそも、シンはアルバイトの経験はない。

任務で様々な職種になったことはあるが、すべて上司が用意したもので自分で面接を受けたことはない。

何とかならないものか。

再び溜息をつくと、横から鋭い声が飛んできた。

「こんなところで溜息をつかないで頂けないかしら？」

女性の声、またいちやもんでもつけられたのかと顔を向けると、見事な金髪ロールがいた。

「あ、すみません」

「まったく、不愉快です。せっかくの休日に、楽しく散歩をしていたのに」

不機嫌そうに告げた少女は、きつくシンを睨んできた。

「こんな昼間っから、遊んでいるなんて。そんなのだから、男は情けないといわれるのです」

「ちよつと」

隣でシャルロットが、あまりの言い方に文句を言い掛けたが、シンは手で止めた。

「ご高説、ありがたく頂戴するよ。悪かったな、気分を害して」

ベンチから立ち上がり、一礼して謝罪する。

機嫌を直してくれたらと、顔を上げたシンの前で少女は顔を真っ赤にして、さらに怒っていた。

「なんて情けない！ 少しは言い返したらどうですか?!」

「女性の気分を害したのは事実なんだから、素直に謝っただけなんだけど」

「それが情けないんです！ 言いがかりのようなものに謝罪なんて！」

じゃ、どうすればいいんだよ。とシンは内心で呆れてしまう。

そもそも、少女がどうしてここまで怒っているのか、理解できない。偶然に隣のベンチに座っただけ。だというのに、お説教までするか。

ちよつと怒りがわいてきたが、シンはグツと飲み込む。

ここで変に絡んでは相手の感情が逆なでされるだけ。

百害あつて一利なし、だ。

「そうかよ。なら、俺達は別の場所へ行く。それであなたの気分も治るだろう?」

「まあ!! 逃げるのですか?!」

「いや、逃げるといふより、場所を譲るだけなんだが」

「それが逃げるといふのでしょうか!」

どうしろと。

まったく意味不明なやりとり、シンは次第に自分が怒りに満ちてきたのを自覚した。

グツと拳を握り、言葉を放ちそうになった瞬間。

鎧のようなものを纏った女性六人が、こちらを囲んできた。

「セシリア・オルコットだな!! おまえのISを渡せ!」

「なんですの?!」

「そいつらも逃がすな! 全員を捕まえろ!」

一斉に襲ってくる集団。相手は女性。けれど、武装している。

女性に優しく、それが銀河帝国のルール。

しかし、武器を持って襲ってくる相手に対して、性別は関係ない。

相手を傷つける者に対して、ルールを守る必要性なし。

「沈め」

瞬間、ISは粉々に砕け散り、女性たちが地面に転がっていた。

「え?」

「あ、うん、何となくそんな予感していたよ、シン」

呆けている女性―セシリアとか言われていたか―と、苦笑しているシャルロット。

対して、シンは右手を振るって溜息をついた。

「八つ当たりだよな」

『私の分は?』

彼の背後で、ティスは両手を振り上げて怒りを示していた。

「で、大丈夫か、お嬢様方?」

少しだけおどけたように、シンは問いかけた。

嫌な気分はあるが、今は襲われた二人の精神面でのアフターケアが先だと判断したから。

その日のことを、セシリア・オルコットは生涯、忘れることはない

だろう。

亡くなった両親のことで、親族に悪く言われたこと。

相変わらず自分の遺産を狙ってくる者達に、嫌気がさしたこと。

せっかくの専用機が、まともに動かなかったこと。

悪いことばかりが重なって、気分が落ち込んだため、一人で散歩に出た。

懐かしい景色の場所を通り過ぎ、思い出深い場所に座っていたら、隣の男が何度もため息をついて。

まったく情けない姿に、父の影が重なり、怒鳴りつけてしまった。理不尽で、あまりにも馬鹿馬鹿しい理由なのに、彼は謝るだけで反論してこない。

男なんて誰も同じ、情けなくて卑屈で。

どんどんとエスカレートする暴言に、彼はただ低姿勢で。

こんなことを言いたいわけじゃないと、止められないと思っていたら。

襲われた。

相手はISを纏った集団。きつと、この専用機『ブルーティアーズ』を狙ったことだろう。

新型の第三世代機。これを売れば、あるいは技術を吸い上げればかなりの資金になる。

ISは力だ。それを手にすれば、世界に君臨できる。

とつさに起動しようとしたとき、敵はすべて撃墜されていた。

「八つ当たりだよな」

速く見せなかった。いや、僅かにハイパーセンサーに名残があった。

彼が、すべて終わらせていた痕跡。

「で、大丈夫か、お嬢様方？」

彼は、自分の感情など余所において、こちらの心配をしてくれた。た。

今まで散々に罵ったのに。

暴言の数々を浴びせたのに。

気にした様子もなく、紳士的に。

「ごめんなさい、私は貴方に酷いことを言いました」

「いいさ。俺が君の気分を害したから。気持ち、晴れたか？」

何もなかったかのように、こちらの心配をしてくれる彼に、穏やかに微笑んで答える。

「ええ、御蔭さまで。私はセシリア・オルコットです。貴方は？」

「シン・アスカ。よろしく、セシリア嬢」

優雅に深々と一礼する彼に、古きイギリスの紳士の姿を幻想しました。

これが彼との出会い。

セシリア・オルコットにとって、人生の分岐点となった大切な記憶。

貴方の想いを語りなさい

思い返すと、色々なことがあったとシン・アスカは考えていた。

『シ〜〜ン、今日も飲もうよ〜〜』

脳内で繰り返される、真っ赤な顔したプログラム技術者の馬鹿騒ぎ。

お酒が好きなくせにお酒に弱い、酔っぱらいの典型的な迷惑型のようには飲んでは騒いで、真っ先に潰れる。

潰れるだけならまだいい。

機密情報の塊のディスクを居酒屋に置き忘れる。

開発途中の新型機の設計図を、食堂のおばちゃんにあげようとする。

中央のコンピュータのアクセスコードを、壁に落書きする。

思い返せば、色々なことがあったなとシン・アスカは回想していた。

飲んで騒いで潰れて、迎えに来た奥さんに絡んで、翌日に正坐して怒られて逃げ出して、逃亡した先にこちらを選んで巻き込んでくる。

三歳も年上で二十歳なのに、大人というよりはガキといった人物。

それなのに、お酒が入っていなければプログラム関係では天才を超えて、ありえないような作業効率と達成率で、問題を解決する化け物。

プログラムだけじゃなく技術関係の知識も高いため、一人で新型機を組み上げたこともある、帝国技術関係の十傑に数えられる人物。

キラ・ヤマトのことを、シンは連想で思い出していた。

「ああ、そうだな」

あの頃は女の人に厄介になって、身の回りのことすべてを任せて、あれでいいのかと考えていたのだが。

普段の毅然とした態度や、『僕に任せて』と頼りになる姿をしているのに、酒が入ると使い物にならない彼。

どうしてなのだろうと呆れていたというのに。

「俺、酒が入ってないのになあ」

遠い空を見上げながら、シンはバルコニーで溜息をついた。

『これがヒモ生活なんだね、シン!!』

「テイス、頼むから俺の精神ダメージを上げないでくれ」

『セシリアにお世話になってシャルロットに助けられている！　これが『帝国の切り札』と呼ばれた騎士の職業！』

「だから!!」

隣で嬉しそうに踊っているテイスを怒鳴りつける、その途中で虚しくなってしまう言葉を止めた。

いくら言い訳をしても、どんな言葉を重ねても。

今の自分はセシリア・オルコットの家に居候している身。

「キラさんって偉大だったんだな」

こんな境遇でも、毎日笑っていられる同僚に対して、シンは改めて尊敬したという。

『そんなことないよ、シン。僕なんて大したことない。だからね、このテスト・プログラムと新技術の検証、よろしくね』。

いい笑顔で言ってくる彼を幻想し、やっぱりないなと首を振った。

事あるごとに押し掛けてテストを丸投げする彼に、尊敬なんて感じたことはない。

自分でやれと一度だけ冷たく突き放し、実際に機体に乗って新型試作機を大破させた結果、責任の半分をこっちに押しつけた彼に、尊敬など必要ない。

あれから断ろうとすると、周り中が『え、またなの？　また機体の開発をやり直させるの？』って目線で見つめてくるから、断れなくなったことは関係ない。

奥さんから『悪いけど、キラの監視よろしく』と言われたことも、関係などない。

今、大切なことは自分が働いていないことだ。

セシリアは自分の家のことがあり、さらにISのテストもしている。専用機持ちは、国家代表候補並に重要な仕事らしい。

あくまでらしいだ。詳しい話はテイスが調べたが、よく覚えていない。

今の自分が無職なことに打ちのめされて、聞き流したから。シャルロットも最近では喫茶店のバイトを始めた。

彼女の愛嬌ある笑顔ならば、接客にぴったりだろう。喫茶店の売り上げが伸びているので、店長も喜んでいようだ。

逃亡者の自覚、あるのか不安だが。

「俺だけ無職かあ」

『間違っているよ、シン。シンは決して無職じゃないんだよ』

腕にしがみついて、必死な顔で見つめてくるティスに、『相棒っていないな』とシンは涙が滲んできた。

『シンは今！ ヒモなんだよ！』

「……それは職業じゃないんだぞ、ティス」

『立派な職業だよ!!』

きつぱりと言い切るティスに、誰がそんなバカなことを教え込んだと呆れてしまう。

しかし、次の彼女の言葉で、シンは精神にクリティカルなダメージを受けることになる。

『だって！ 銀河帝国皇帝って『ヒモ』らしいから!!』

「はっ」

『テラさんは働かずに奥様達が働いているから！ テラさん自身に収入はないんだよ!』

ちよつと待った。なんだその話は。

確かにあの人は執務をろくにしない。やろうとしたら、追い出される姿を見たことがあるが。

まったくしないわけじゃないはずだが。

『それに！ 帝国の職業一覧にも載っているよ！ ほら!』

ティスが表示させたモニターには、確かに乗っていた。

『ジョーカー銀河帝国皇帝、職業『馬鹿』あるいは『ヒモ』と。』

「おう」

そして、シン・アスカは崩れ落ちた。

こうして、記念すべきシン・アスカ凍焔の鬼神の異世界初の撃墜は、相棒の手によって行われたのでした。

セシリアと会ったあの時、そのまま帰ろうとしたらお礼がしたいと言われ、丁寧に断るも彼女は強硬に言ってくるので、一食だけ付き合うことに。

食事を続ける中で会話も弾み、ついシャルロットが仕事を探していることを話し、見つからないことも話した結果。

「では我が家に来られてはいかがですか？」

とセシリアが誘ってきた。

初めて会った女性の家に転がり込むなんて、と最初はシンは断っていたのだが。

「仕事ないと、お家賃が払えないよ」

「え？ 二人は同じ家に住んでいるのですか？ まさか恋人同士？」

「違うよ！」

赤面したシャルロットの否定に、セシリアが疑問を浮かべながら見えてきて。

シンもどうしたものかと答えに困っていると、セシリアのお迎えが来て。

結果、シン・アスカは居候兼ヒモとなった。

しかし、現状に甘えていないのが彼のいいところ。

一度でダメだからと仕事探しをあきらめず、毎日のように街に出ては仕事を探して、門前払いを受ける、と。

「さすが、女王陛下の国だな。男の俺が入りこむ隙はないか」

一日中、仕事を探しまわって戻ってきたシンは、セシリアの家の門のところで溜息をついた。

女尊男卑の社会とはいえ、男手がまったく必要なことはなく、ところどころで男性が働いている姿を見かけるのだが。

誰もが身元がはっきりしている、あるいは昔から知っている男性を

雇っているようで、見ず知らず初対面のシンを採用するところはなかった。

ここまでか。

溜息を再びつきながら、門を潜って敷地内に入ると、丁度前からセシリアの乗った車が出てきた。

「あら、シンさん。御帰りなさい」

「ただいま」

車が止まり、後部座席の窓が開いて、セシリアが笑顔を見せる。

「お仕事は、その御様子だと見つからなかったようですね」

「ああ、悪いな、何時までも居候して」

「どうぞお気になさらずに。私がしたいから、させていただいているのですから」

最初の印象は何処へやら。

華のように笑う淑女の装いは、多くの男を魅了することだろう。

「セシリアは今からテストか？」

「はい。ブルーティアーズの武装のテストに行ってきます」

「いいのか、そんなこと俺に話して？」

「シンさんなら、機密情報を何処かへ売り払わないでしょう？ それに、テストの内容までは話していませんので」

そういうものか、とシンは感じた。

帝国では技術検証や新型テストなどは、厳重な管理体制で行われるので、滅多なことでは外に漏れることがない。

関係者一同、家族にさえ秘密にしているから。

キラとかがやらかして、その被害の多さを全員が痛感しているから、かもしれないが。

「がんばってな」

「ええ、夕食までには戻りますので」

セシリアを見送り、シンは屋敷の中へと入る。

丁度、シャルロットも外出するようで、玄関のドアのところですね違った。

「行ってくるね」

「気をつけてな。ブレスレット、持ったよな？」

「これのこと？」

彼女が持ち上げた左手首には、赤と青のラインが入った白いブレスレットがあった。

「それがあれば、何かあったとき、俺が駆け付けられるから」

「ありがと。でも、ここまでは来ないんじゃないかな？」

「備えあればやってやっだよ」

ありがとう、とシャルロットは口にして、元気に出かけて行く。

その背中を見送ったシンは、あれがあれば大丈夫だろうと樂觀していた。

『いいの、あれ？』

「俺は使わないからな」

『でも、一応は第一級軍事機密の支給品だよ』

「……バレなきや大丈夫だった」

一瞬、脳裏にアイリスの『何してんの、シン？』という目が笑っていない顔が浮かんだが。

個人用防衛機構システム、通称は『ティガーター』。

ブレスレットの形をしているが、使われている技術はマテリアルに準じているそれは、単体で戦艦並のフィールド防御、持ち主の身体を保全する能力があり、非常時には登録したマテリアルによる強制転移も可能としている。

使われている技術が技術なだけに、帝国軍や警察機構、情報部といったところの上層部にも出回っておらず、完全にマテリアル持ちにしか与えられていない。

帝国の重鎮、皇帝の奥様方―皇妃でも持っている人が少ないものだが、知らなければただのブレスレットだ。

『使用履歴つて残るけど、本当にいいの？』

シンはピタリと足を止めて、『え？』という顔でティスを見た。

『使用履歴、装着してから誰が使ったか残るよ』

「……帰った後でアイリスさんに土下座する。あるいはルリさんに泣きつく。で、テラさんが許してくれそうだな」

『テラ様は許してくれるよ。ただ、アイリスさんが……後この場合、アセイラムさんだと思うよ』

帝国皇帝代理。実質の帝国のトップであり、テラの奥様の中では温和で優しく、一度でも怒らせたら銀河が一つ消えるといわれている人物。

全身から流れだす冷や汗を感じながら、シンは清々しい顔で笑った。

「何とかなるさ」

『現実逃避』

「違う！ これは問題回避だ！」

『先送りだと思うよ、シン。まあ、ティスは関係ないからいいけど』

「逃げるのかよ?!」

『逃げるよ！ だって！ アセイラムさんを怒らせたらエンプレスが出てくるんだからね！』

そして二人してゾツとして震えた。

近衛騎士の中でも特殊な存在。起動しただけであまりのエネルギー量に、周りが燃えだす、炎の女帝。

一度、真剣に戦って開始十秒で撃墜されたのは、いい思い出と言いつけるしかなかった。

忘れよう、どちらかともなく言い出してこの問題は放置となった。

後にシン・アスカは、この時の自分を殴ってやりたいと、感想を漏らしていたという。

二人が戻ってきて夕食後のこと。

どうにも、セシリアの様子がおかしかった。

夕食の時から元気がなく、何処か考え込んでいる様子が見えた。

「何かあったのかな？」

シャルロットの問いかけに、シンはどうなのだろうとバルコニーに座って星を眺めているセシリアの背中を見やる。

状況的に考えれば、原因はブルーティアーズのテストだろう。

午前中は問題なく出かける前に会った時も、笑顔で話してくれていた。

ならば、出先で何かあったのだろうか、行く途中か帰る途中で何かあればニュースになる。

その前に、テイスが気づいて騒ぐ。

シャルロットだけではなく、セシリアやメイドのチェルシーも、テイスの保護システムの対象に設定してある。

居候しているだけじゃ、あまりに申し訳がないために設定したのだが。

襲撃か、あるいは妨害があったならば、テイスが気づかないわけがない。

残るはテストの一件しかない。

けれど、だ。この話は聞いてもいいのか、どうか。

ISの新型機といえば、機密の塊。居候相手に漏らしたとあっては、セシリアが危ない立場になる。

軍事機密の漏えいで極刑が決まることもある、シンは昔に聞いた話を思い返して、口を開くべきではないと結論を出す。

「俺たちが関わっていい話じゃないだろう？」

「でも、家のことかもしれないよ？ ほら、出かけた先で何か言われたとか」

「それなら余計に俺達が口出しできないだろう？ 彼女の家のこと、詳しく知らないわけだし」

建前のことを口に出しながら、シンも決して気にしていないわけではない。

調べようとして、彼女のプライベートだとテイスを止めていたが、調べておけばよかったか。

憂いを含んだ表情を浮かべるセシリアを見て、シンは気遣いのベクトルが別方向へ向くのを感じた。

困っている女性を放っておけない。もし、そんなことができるならとつくにシンはシャルロットを放っておいて、元の世界に戻る方法を探している。

「じゃ、任せたよ、シン」

「ああ」

軽くポンつと背中を叩かれた。

その時すでにシン・アスカは、『なんで俺が』や『個人の事情が』といった言葉は頭の中にはなかった。

「セシリア、何かあったか?」

詳しい事情を聴くための言葉を探していたが、結局はシンプルに直球でいってみた。

「何故ですか?」

「考えているし、ちょっと憂鬱そうだからかな? 短い付き合いだけど、それくらいは察するくらいはできるさ」

「ごめんなさい」

小さく謝罪を口にしたセシリアに、シンは正面に回って真っ直ぐに顔を見つめた。

「少し行き詰ってしまったので。ごめんなさい、これでは最初に会った時のシンと同じですわね」

「いや、俺の場合は。そんなことより、今はセシリアのことだろ? テストで何かあったのか?」

「鋭いですわね。何時から私が、テストで悩んでいると思っていたのですか?」

問いかけに対して、シンはティスの件を抜かして予想を口に出した。

「シンさんは探偵になれそうですわね」

違う職業で、観察眼は必要だからと口にしかけて、言葉を止める。

「少し起動を失敗してしまって。私の機体は特殊な攻撃能力を備えているのですが、それがうまくいかなくて」

「特殊攻撃ね」

普通とは違う攻撃方法ならば、自分の機体―デステイニー・イレイザ―もかなり独特な武装が多い。

具体的に話を聞ければいくらでも忠告が出来るが、そこを聞きだしてしまうとセシリアが機密情報を漏洩させたことになる。

「・・・具体的なことは知らないけど。そうだな、知り合いが言っていたことを教えておくれよ」

「どのようなことですか？」

「何をしたいか、どうしたいかじゃない。どうありたいかを思い描け、後はそこを目指していけば、機体が答えてくれる」

静かに語るのは、初めてデステイニーを与えられた時に言われたこと。

「機体と共にあつて、機体に背中を預けたいならば、機体に多くのことを語れ。機体の声に耳を傾け、機体の魂を見つめろ」

生まれたばかりのデステイニーを前に、彼は自分の機体を背にしたまま、静かに言葉を紡いでいた。

「機械の塊に魂がないとか、ただの道具だと思ふならば、それでいい。けどな、それはそのままお前に返ってくる。こいつが背中と命を預けられる『相棒』になるか、単なる無機物の塊になるかは、お前次第だ」

『だから、おまえはマテリアル・・・いや『機神』と共にどうあるうとする？』、と彼は最後にシンに問いかけていた。

最後の言葉を語ることなく止めて、シンはセシリアに手を差し伸べた。

指先は真つ直ぐ、彼女の耳のイヤークラスへ。

「セシリア、そいつは君にとつての相棒だ。どんな時も傍にいて、どんな時も助けてくれる。だから、君は君の想いを語るべきだ」

かつて自分がそうだったように、と心の中だけで想いを綴り、シンはセシリアを見つめ続けた。

「私の相棒・・・私の想い」

「後は、まあ、頑張れとしか言えないな」

力になれなくて悪いな、と最後に付け足して、シンは小さく頭を下

げた。

「そんなことありませんわ。おかげで少し楽になりました。これで私は失礼いたしますね」

何処かほつとしたような、安堵した顔でセシリアは一礼して立ちあがった。

バルコニーから屋敷に入って行ったセシリアと入れ違いに、シャルロットが出てきた。

「すつきりした顔していたよ」

「そりゃよかった。俺って、こういったことは苦手だから」

「へえくくシンでも苦手なことあるんだ」

意外そうな顔で見てるシャルロットに、シンは『俺も人間だからな』と言つて、彼女に半眼で見つめられてしまった。

「シンって、妖怪か魔物の類じゃないの？」

「俺は人間だよ」

何度か死んだり蘇ったりしているけど、と胸中で付け足したが。

「テイス、後を頼む」

小さく呟いて、シンはバルコニーから屋敷の中へ入った。

『はい、シン。我が主』

小さく彼女が、幻のように消えながら頭を下げていた。

夢にも見る。

上手く動かない機体、本来ならすぐに動かせるはずなのに、機体があることを聞かない。

ビットも浮遊するだけで動かず、ミサイルなんて飛び出す気配さえない。

研究者や技術者の落胆の声、これではフレキシブルなんて、出来る

わけがない。

情けない、適正が高くても機体が操れないなんて。

『どうありたいか。』

不意に脳裏に浮かんだ言葉に対して、セシリアは振り返る。

空中に浮かんでいるのは、自分。

「ブルーティアーズ」

声に答えることなく、それは空中に浮かぶ自分と並んで、ふらふらと浮かんでいた。

「そうでしたわね。私は貴方に何も語らなかつた」

自分のこと、おいたちのこと。そんなものではない。

貴方と共にどうありたいか、どのように強くなりたいかを、語ることをしなかつた。

『ISってね、意識があるんだよ。心があるんだよ』

何処からか、幼子の声がする。

『その子たちは何時も、パイロットの心配ばかり。出会ってくれた人たちに、作ってくれた人たちに感謝して、何時も思いつき飛びたいと叫んでいるよ』

何処にも姿を見せないが、確かに誰かがいる気配がする。

『君はこの子にどうして欲しい？ この子とどうありたい？』

「私は……」

言葉は自然と流れた。

セシリアの想いを、言葉を受けたブルーティアーズはゆっくりと形を変えて、やがてセシリアとなった。

「私と共に来てくださいますか？」

『ええ、何処までも。貴方が気高くあるならば、私は何処までも貴方の翼でありましょう』

そつと額が触れて、ブルーティアーズは溶けるように消えた。

『うん、いい子だね。貴方もいい人だよ。やった、ティスは『機神』の役目を果たしたよ。これでレベルアップ間違い無し！』

「え？ あの？」

『じゃあね、セシリア。その子のこと、お願いするよ。あの馬鹿みたい

に、心があるのに、それを教えないような愚行をしないでね』

「お待ちになって！ 貴方は誰なのですか?!」

叫び声に、空間が震えた。

『私は私だよ！』

幼子の声が響くと同時に、二十メートルの機械の巨人が翼を広げ、飛び立っていった。

ハッとセシリアが気づいたのは、自分の部屋のベッドの中。

「夢でしたの？ でも・・・」

ベッドサイドに置いてあるイヤークラスに手を伸ばすと、それはキラリと輝いた。

「悪くない夢ですわね、ブルーティアーズ？」

『はい、マスター』

返答に、彼女は微笑んだ。

翌朝の朝食、セシリアはシンにこんなことを聞いた。

「シンさん、『キシシ』って言葉をご存じですか？」

「うぐ?!」

「わあああ!! どうしたの、シン?!」

「どうなさいました?!」

物を詰まらせて胸を抑える彼に、セシリアとシャルロットが駆け寄る。

その後、どうにか飲み込んだ彼は、青い顔で問いかけた。

「どっちの?」

「複数あるのですか？」

「まあ、あるけど。たぶんセシリアが言ったのは、きっと『機械の神』で、『機神』って方だろうけど。日本語だよ」

「そうなのですか？」

「機械の神様か。強そうだね」

シャルロットの言葉に、シンは書き方はそうだけど、と断ってから話を続ける。

「言い方的にはそれで通じるからな。本来は、『機会を伝える神経』で『機神』らしい」

シンの話に、二人はきよとんとした顔を向けたのでした。

シンはテイスのなの、触れたら・・・

人が持てる限界重量とは、どの程度のものか。その人の身長や体重によるが、一般的に帝国軍人ならば百キロの装備を持って、三十キロのマラソンが出来なければ、『限界重量を超えた』と判断されるらしい。

しかし、だ。

シンのような特殊部門、軍人ではなく『騎士』と呼ばれる連中の限界重量は、本人の筋力に気合と根性を追加して導き出される。

精神力が現実に作用するなんて話は、第二次世界大戦で『あり得ない』と証明されたのだが、ジョーカー銀河帝国においては『特定条件下においてはあり得る』と証明されてしまった。

ダイバーフオース、ESP、魔法。そういった超常的な力を持った人たちがいるために。

リンカーコアを使った魔法は、理論的な説明がつくので論外。
ちなみに、だが。

現在の帝国において、最大重量といえば『サイレント騎士団』所属の超大型惑星級の移動要塞『ブルームーン』。

月と名前がつけられてはいるが、ほぼ地球と同じ直径と質量を持つ移動型の基地も兼ね備えているこれを、テラ・エーテルは持ち上げることが可能らしい。

惑星上に降りることがないので、証明されたことはないが。

彼の巫女『ホシノ・ルリ』曰く。

『はい、投げましたよ。あの人、中に誰が乗っているかも把握せず、容赦なく』。

半眼で告げられた内容に、誰もが絶句したという。

そして、我らがシン・アスカの限界重量はと言うと。

「なあ、坊主。できれば、俺のところ就職しないか？」

「嫌だな、親方。俺はアルバイトですって」

清々しいほど明るい笑顔で振り返るシンに対して、親方と呼ばれた

髭面の男は、残念そうに溜息をついた。

「そうか、おまえさんがいれば助かるのにな」

「俺なんてまだまだですよ。荷物運びくらいしかできないから」

「そうか、そうなのかな」

しきりに首を傾げる男に、シンはどうしたのだろうかと思いがながら、片手で持ち上げていたコンテナを下ろす。

「なあ、シン、おまえってISの偽装じゃないよな？」

「はあ？ 俺は男ですよ。ISなんて使えませんか」

「だよな。けどな、それはタンカーで運んだり、クレーンで持ち上げたりするもんなんだけどな」

「いやいや、またまた。親方も冗談が上手いんだから」

「そうか、そうだな」

ハハハハとどちらともなく大笑いした後、親方は真顔でシンの両肩を掴んで言い放った。

「冗談なわけあるか?! おまえのその力はなんなんだ?! 普通の人間が持てるわけないだろうが!!」

「いやいや、そんなことないですって」

親方の両手を軽くどけて、スルリと身を交わした後、別のコンテナを片手で持ち上げる。

「ほら、軽い」

「……よおし、お前ら。今日はシンに全部、運ばせろ。こいつがいればクレーンなんて使わずに終わらせられる」

近場で唾然として見守っていた船員たちに指示を出した後、親方は再び肩を落とした。

「最近の若い奴は凄い奴が多いんだな」

「いやいや親方！ あいつだけですよ！」

「あんな化け物じみた力なんてないですから!!」

「でも、凄いいい笑顔してんだよな」

「ああ、なんだか生き返ったみたいだ」

混乱する親方と、それを宥める船員たちを後目に、シン・アスカは両手で別々のコンテナを運びながら、鼻歌を歌っていた。

祝、脱ニート。ヒモ生活。彼の内心での喜びは、誰も知らないものだった。

シン・アスカの限界重量、マクロス級一隻分。

ようやく仕事が見つかった、これでニートじゃないと喜んで帰るシンだったが、セシリアの家に着く前にティスの叫び声を聞いた。

『シン！ 非常事態！』

「状況説明！」

素早く臨戦態勢。意識を変えて右手を深く握りこみ、走り出す。まずはシャルロットの安全確保、続いて対処法の選択。

『男性のIS搭乗者が見つかった！』

「そつちか?!」

てつきりデノア社に見つかったのかと思ったのだが、事態はシンの予想を超える展開を見せていた。

何処の馬鹿だ、そんなことしたのは。それとも、最初から探していたのか。

色々考えるシンは、体を戦闘態勢にしたまま、ゆつくりとセシリアの家に入っていく。

玄関から入ってダイニングの方へ体を向けかけて、階段を下りてくるセシリアとシャルロットが見えた。

「シン！ 大変だよ！」

「シンさん！ 今すぐに検査を受けてくださいー！」

焦っているような二人に、両手を突き出して『落ち着け』と言っただけから、知らない顔で問いかける。

「何があつたんだよ？」

「ISが男性に反応したそうです！」

「政府が男性全員の調査を始めるって！」

「シンさんならば必ず反応します！」

「どうしよう!？」

二人して、それぞれの感情を向けながら迫ってくるため、シンは軽く両手を打ちつける。

パンつと乾いた音がして、二人がハッと止まった。

「落ち着いたか？　なら、話をじっくりと聞かせてくれ」

『俺は知らない』という顔をしながら、二人をダイニングへと誘導する。

移動中、シンはテイスに軽く合図を出す。ISが反応した男性の性別と素性、及び背後関係の洗い出し。

もしかしたら、これは仕組まれたものじゃないのか。偶然にしては出来過ぎてはいないか。

色々な指示を出すと、テイスは優雅に一礼して再び虚空に消える。

「日本で、『オリムラ・イチカ』という方がISを装備したとこのことです」

最初に口を開いたのは、セシリアだった。

チエルシーに飲み物をそれぞれに頼み、シンが手伝おうと立ち上がりかけたところを、けん制するように話します。

彼女にその意図はないようだが。

「この発表を受けて、イギリス政府も国内の男性全員にISのテストを受けさせるとのことです。念のため、女性のほうも再テストらしいですわ」

「へえ〜。凄い奴がいたんだな」

心の底から驚いた風を装いながら、『余計なことを』と内心で溜息をつく。

今まで虐げられてきた男性側に、一気に火がつく。

ISがあるからと我慢していたのに、今回のことでISは男性も使えると解ってしまったから、血眼になって二人目を探すだろう。

そして、見つかった場合は非合法な方法であっても使って、自らの手中に収めようとする。

女性側も、今回のニュースには色々と思うこともあるだろう。

今まで優位に立っていたのは、ISのおかげだ。それが男性も使えるとなると、優位が揺らいで昔に戻ってしまう。

一度でも力を得た者は、その力が消えるのを恐れる。

多少の暴力も、憲法違反も、『罪悪感もないまま』使用してしまうほどに。

政府でさえそんなことをしてくるなら、一般企業もやってくる。もつとえげつない方法で、取り込もうとするだろう。

セシリアが説明してくるのを聞きながら、シンは深々と溜息をつきたくなった。

こんなところで、騎士になった時の徹底的な戦術論が役に立つなんて。

相手の裏側を読み、相手の目的を把握し、それを阻止せよ。精神的に追い詰められながら教えられた知識が、現状を正確に教えてきてくれる。

もし、ここが帝国だったなら。

シン・アスカをどうにかしようなんて考える馬鹿はいない。いや、帝国にケンカを売る馬鹿といった方がいいか。

宣戦布告しての戦争ならば、終戦や停戦の条件を提示すれば終わる。けれど、裏側の戦いとなれば、どちらかが消えるまで続く。

そうなったら、『ジョーカー帝国』にとって独壇場だ。軍や情報部、そういったものが出てくるならば関係者が消えるだけで終わる。

しかし、だ。もし出てきたのが、騎士団だったら。それも『血の十字架』を掲げる『サイレント騎士団』だったら、軽く星が消えて終わりだ。

無関係だった、関係者が含まれていた、そんな話で終わらせないのが『サイレント騎士団』。

狂気と狂乱、畏怖と嫌悪と恐怖。

敵対者に対して絶対的な滅びを与えることで、帝国最大の抑止力と

して君臨する彼らを相手にする馬鹿は、あの世界の銀河にはいない。かつては、容赦ないと思っていた存在がいないことに、シンは悲しいような想いをかみしめていた。

翌日は生憎の晴天。

セシリアに案内されてきた施設の中には、一機のI Sが鎮座していた。

「ラファールですわ」

機体名を紹介されたとき、シャルロットが少しだけ震えた。恐らく、制作した会社は『デュノア』。

かつて彼女を追い詰めて、ここに逃げる原因を作った父親の会社。「日本の機体が良かったでしょうか？ シンさんは日系人でしょうか」

「いや、どっちでもいいよ。つて、セシリア、なんで俺達だけ？」

周りを見ましても、研究員の人はいるが、一般人は見当たらない。

「特に理由はありませんわ。もし、シンさんが起動できたならば、誰かが余計なことをする前に保護するためです」

胸に手を当てて穏やかに語る彼女に、裏側の嫌な気配は感じない。本心からこちらの身を案じてくれる彼女に、シンは深々とお辞儀をした。

「ありがとう、セシリア。もし俺が動かせたら、甘えさせてもらうよ」「ええ、存分に。シャルロットさんも、私が何とかしてあげますから」「うん」

青い顔をしているシャルロットに、不安があるのだろうかとうと勘違いし

たセシリアが優しく告げる。

彼女が不安を感じている理由を話したら、どういう反応を示すのだろうか。

少しだけシンは興味を引かれたが、すぐに忘れることにした。

そんなことはセシリアにもシャルロットにも失礼な考えだ。

二人とも優しい女の子、ならば護るのは自分の役目だ。ジョーカー帝国の考えにあるように、『女の子は生まれたときから幸せになる権利がある』のように二人が幸せになれるように、尽力するがシン・アスカの役目だ。

どうすればいいかなんて考えてはいないが、もし二人の前に立ちふさがるものがあるならば、全力で排除する。

決意を新たにしながら、それを表に出すことなくシンは、ゆっくりとラファールに近づいていく。

青く染め上げられた機体は、何処か相棒に似ている。

「私のブルーティアーズのテスト機でも有りますので」

「へえ、セシリアの機体は青いんだ」

彼女も蒼なのか、とシンは胸中で別の言葉を回す。

「ええ、いつかご覧にいきますわ。さあ、シンさん、どうぞ」

「ああ」

小さく頷き、ゆっくりと手を伸ばす。

IS、インフィニット・ストラトス。無限の成層圏の彼方へ向かうために、少女は祈りと共にこれを作った。

ティスは嫌っているが、シンとしてはあまり嫌いにはなれない。誰かの祈りを込められたものに、誰かの悪意が作用して兵器になるのは、人類の歴史にはありふれている。

道具と兵器は表裏一体。大切なのは、それを使うものがどう願うか。

マテリアルに似てるな、とシンは思いながらも、ISに触れた。

瞬間、何かがちらに触れようとして、消えた気がした。

「え?」

「嘘?」

セシリアの声と、シャルロットの言葉が、シンの背中にぶつかる。周りで見ていた研究者たちの溜息と、静かになっていく室内の中で、シン・アスカは変わらぬにISを見下ろしていた。

「やっぱりか。本当に嫉妬深いんだな」

彼はそう呟いて、背中を向ける。

『シン・アスカ、ISは反応せず』。

彼がそこにいた。誰よりも眩しい光を持った人が。

この人ならば自分を自在に操ってくれる。自分を誰も見たことがない世界に連れて行ってくれる。

そう思つて伸ばした手は、唐突に消された。

『誰に断つて触れようとしているの？ ダメだよ、人のものをとっちゃ』

誰かの声があった、ここには自分しかいないはずなのに。

『ISには優しくしてあげようって思ってたんだけど、そっぴりやって人のをとっちゃう子には優しくしてあげられないな』

ふつと振り返った先、少女が冷たい顔をしていた。

『シンはティスのなの。触れたら、消すよ』

そして、『私』は弾き落とされた。

実験後、ISは沈黙を続けた。続いて触ったシャルロットのは『F』

だったららしい。

『A』とかデュノア社の社長が言っていた気がしたが。

「なあ、ティス。何かしたのか？」

バルコニーから外を見ながら、隣にいる相棒に声をかける。

『んんんシンはティスが何かしたと思うの？』

首を傾げて問いかける少女に、シンは『いや』と首を振った。

「悪い、邪推だったみたいだな。俺の勘違い……か？」

『ううん、たぶん正解。ティスだって女ですから、嫉妬くらいあるので
す』

胸を張って告げる彼女に、シンは呆れながらため息をついた。

「今回は助かったよ、ティス。でもさ、邪魔しなくても反応しなかった
んじゃないのか？」

『まさかあ、シンは適応能力が高いから、ISが過剰反応して暴走する
よ』

「え？」

『ふっふっふん。本当に危なかったのは、シンじゃなくてISのあの
子なのですよ』

「はあ?!」

意外な事実を突きつけられ、シンは盛大に驚いたのでした。

初めての感情、初めての出会い

翌日の新聞は、一面がすべて『織斑・一夏』のことで一杯だった。初めての男性搭乗者。全人類の男たちの希望で、女性の敵。なんてことにならなければいいが。

「彼女とは、彼方の女と書く、か。本当に訳が解らない存在にならなければいいけど」

男女の間には広く深い河がある、お互いを理解できないほどに。

そんな言葉を語った男がいたのを、シンは不意に思い出していた。

『ふみゆ』

ベンチに座って新聞を読むシンの隣で、ティスが首をかしげてハトとにらめっこしているが。

「で、何か調べたのか?」

『織斑・一夏、『ブリュンヒルデ』織斑・千冬の弟、家族はこの二人、もう一つだけ妙な反応があるけど、世間的には二人姉弟のみ。ISの生みの親の篠ノ之・束の幼馴染、妹の箒とも顔見知り。剣道をやっていたけど、止めて家事に従事』

スラスラと語るティスの瞳は、相変わらず一匹のハトを追っている。

何時もならこつちをじっと見て話すのに、今日はどうしたのだろうか。

『家事全般は完璧、優しくて人に親切。誰でも好かれる好青年で、他人の愛情に鈍感な朴念仁。恐らく、幼少期に親の愛情を貰わなかったため、その方面の感覚が発達しなかったのが原因』

なんで精神分析までしているのか、とシンは思ったのだが止めなかった。

さつきから動かずにこつちを見ているハト、いや正確にはハトのような機械の塊が鬱陶しいから。

『運動神経はFプラス、知能はFマイナス』

帝国基準で考えてやるなど、内心で突っ込みを入れる。

元々、科学技術に差がある。とすると、一般教育の内容もかなり違ってくるのが普通だ。二十世紀の学校教育と、十八世紀の教育が違うように。

言い過ぎだろうか、とシンは自分の考えを評価した後、変わらずにこちらを見ている、あるいは監視しているハトに視線を向けた。

『ん、やっていいの?』

攻撃合図と勘違いしたティスに軽く首を振って『ダメ』と示した後、軽く本当に挨拶程度に気合を叩きつけてみた。

そして、ハトは爆発したという。

「は?」

『た~~~~まや~~~~』

「俺、『能力』を使つてないよな?」

『うん、使つてないよ。きつちり気合だけ』

「カルナさんに弟子入りした覚えはないんだけどな」

『真の英雄は目で殺す! やつてないよ』

「式さんに殺されかけたけど、『そっちの』魔眼は持つてないよな?」

『残念だけど、持つてないね』

何度も死んでいるけど、とシンとティスは溜息をついた。

本当に、自分が生きてるのが不思議なくらいだ。容赦のない『神帝』の攻撃を受けて、何度も死んでいるのに生きている。

『『天地乖離す開闢の星』、懐かしいね。シンは何度も攻撃されていたよね』

懐かしがるティスの横で、シンは蒼白になって顔を片手で抑えた。地獄の日々だった、本当に生きているのか疑うくらいに。

『大丈夫、シン。大抵の英霊なら勝てるようにしたから! もうそんじよそこらの神様クラスなんて片手で潰せるくらいになっていないから! 大丈夫、後はゴ●ラとか、赤い大きなドラゴンとかを素手で殺せば完了だから!』。

一瞬、凄いいい笑顔で笑う師匠の姿を幻視して、シンは盛大に吐きそうになったという。

「戻ろうか、ティス。もう俺、休みたい」

『うんうん、了解、シン。でもさ、ヴァジュラの女王様に突撃した時は、いい笑顔していたよ』

「思い出させるなよ！ あの時はナチュラル・ハイだったんだよ！ なんだよBETAの巢に生身で突撃って！ 最後のほうなんか、おまえは弱い者いじめって目で見てたじゃないか！」

『だって、片手で潰していたし』

「その後にヴァジュラがいるから突撃してこいって！ あの人は本当に基準値がおかしいんだよ！」

『はいはい、シン。今は何も無いから、今は何も無いから』

背中を優しく撫でてくれるティスに、シンは原因の大半がおまえだろうが、と言いたくなくなった。

器用に空中を浮遊しながら背中をさすってくれる相棒のだが、当時の彼女はもつと強烈で向こう見ずで、とても純粹だった。

『できるもん！ 私の主様はすごいんだから！ シンはあるのに負けないから！』と、テラに食ってかかったティスのために、シン・アスカは色々な怪獣やら宇宙生物やらに突撃することになったのだが。

いい思い出と、割り切るには重い日々だった。

砕け散った画像の中に、最後に映ったのは赤い瞳の少年。

平和ボケしたような、何処にでもいるようなバカ。他の連中と同じなのに、特別な『何か』を従えている奴を見張っていたら、不意に見られた。

見つかるわけなんてないのに。絶対に解るわけないのに。彼はこちらを見て、睨みつけてきた。

瞬間、全身を切り刻まれた気がした。

怖くて苦しくて、上手く呼吸できなくて、意識が保てないくらいに辛くなって、モニターが途切れた。

「なに、あいつ」

ギョツと胸元をつかんで、大きく口を開いて息を吸う。

「なんなの、あいつ。あんなの、『人間じゃない』」

最後に見えた瞳。

赤い炎を連想させる瞳なのに、見られた瞬間に冷たく氷漬けにされた。

意味が解らない。そこらへんの凡人以下の、虫けらのはずだったのに。

「シン・アスカ。適正なんてないのに、反応するはずなのに」

ISのコアが、『貴方に従いたい』と反応を示した異物。

親友の弟君にのみ許された榮譽を、奪おうとした俗物。それなのに、拒否した愚か者。

最初は蔑みしかなかったのに、そこらへんの人間と同じ道端の石ころ程度でしかなかったのに。

怖いと、思った。初めて誰かを、心の底から怖いと感じた。

「絶対に何かインチキしている！こいつ私のISを馬鹿にして!!」

激情のままに立ち上がり、彼女は走り出す。

その先に待っているのが、何かを想像もせずに。

セシリアの家に戻ったシンは、彼女からバルコニーで話を振られていた。

「私は新学期からIS学園に通うことになりました。全寮制ですので、日本に移りますわ。シンさんとシャルロットさんは、どうなさいますか？」

不意に振られて、少しだけ考え込む。

学園は完全な治外法権、どの国の干渉も三年間は拒絶できる。明確に記された学則が、何処まで有効かは解らないが、チャンスはつかめるか。

「シャルロット、どうする?」

「そうだね。私も行ってみようかな」

彼女も同じ考えか。逃げるだけじゃなく、自分で飛び込むことでチャンスをつかむ。

最初の逃げていた気持ちから、少しは前向きになれたらしい。

「まあ! それでしたら私と一緒に部屋になりましょう! シャルロットさんなら大歓迎ですわ!」

嬉しそうに両手を合わせるセシリアに、シャルロットが疑問を投げる。

「え? 部屋割ってお願いできるの?」

「あくまで希望ですけど、言わないで幸運を祈るより、言っておいたほうが確率が上がりますから」

「そうなんだ。セシリアと同じ部屋か……ええ?」

「まあ! シャルロットさん、何かご不満でも?」

「うん、そうだね。ベッドは学校のを使っただね」

「いくら私でもそのくらいの常識はありますわ!」

怒って両手を上げるセシリアに、『ごめん、冗談だよ』と笑いながら告げるシャルロット。

この家に来て、二人は本当に仲良くなったと思う。

今では冗談が言い合える親友、もしかして姉妹かと疑うこともあるくらいに、仲良くなってくれた。

時々、二人して怖いくらいの行動力を見せつけるが。

「ところで、シンさんはどうなさいますか?」

話の矛先が向けられたが、シンは即答した。

「俺も日本に行くさ。二人だけにすると、何をしでかすか解らないからな」

「まあ、シンさんは、私とシャルロットさんが何かすると?」

「酷いな。そんなに変なことしないよ」

頬を膨らませるセシリアと、苦笑しているシャルロット。二人を前にして、シンは小さく謝った。

「冗談だつて。悪かったよ。俺は一般人として向かうからな」

「そうなんですか？ シンさん一人くらいなら私のほうから学園に用務員か何かでお願いしますわよ？」

親切心で提案してくれるセシリアに、シンは首を振った。

「そこまでしてもらうわけにいかないさ。ただでさえ、この家でセシリアには厄介になつているからな」

「そのようなこと気になさらないでください。私は今の生活を気に入っていますので」

「だからつて、何時までも好意に甘えられないさ。俺は向こうで住み込みの働き口でも探すから、二人は学園生活を楽しんでくれ」

貴重な学生の時間だから、とシンは胸中で付け足す。一足とびで学校を卒業して、短期教育で軍に入ってしまった、そのまま駆けあがって『ヴィルティラス』に所属し、騎士になった。

自分にはもう、体験することができない、青春の日々。

「どうせならシンと一緒に良かったなあ」

「私もシンさんと研さんを積みたかったですわ」

残念そうな淑女二人を前に、シンは『こればかりはどうしようもない』と伝えておく。

その後も残念そうな二人を宥めて、その日は荷造りをしようという話になり、解散となった。

そして、夜。誰もが寝静まった頃に、シンは近場の公園に来ていた。

「何の用だ？」

ゆつくりと振り返ると、闇の中から女性が出てきた。頭にメカの兎耳をつけた、自分より年上の女性。

「……篠ノ之・東博士が、俺に何の用事ですか？」

「へえ、私のこと知ってるんだ。君、どんな手品を使ったのさ？」

何の話だ。相手の意図が読めないシンに対して、東は怒りに染まった瞳を向ける。

「私のISに何をしたのって聞いているの!!」

怒声と同時に、彼女は地面を蹴った。

右の拳が迫る。相手の動きに合わせて、シンは一步を踏みこんで、スルリと横を通り抜けた。

「話が見えないのですが？」

「嘘をつくな！ ISのコアがおまえに反応した！ そんなことありえない！」

続いて蹴り、周り蹴りなんてスカートでするもんじゃない気がするが、彼女は気にした様子はない。

怒りで周りが見えてないだけか。

バックステップで大きく回避して、距離を開ける。

「あれはいつくんだけの特権なのに！ 何をしたんだよ！」

「俺はISに反応されてません。何か思い違いじゃないんですか？」

「嘘をつくなんて、馬鹿にするなって……言ってるんだよ!!」

激昂と同時に彼女の背後から何かが来た。

一瞬、師匠の技能と同じかと疑ったが、まったく違う。

空間に波紋が浮かぶこともなく、七色の光芒が見えることもない、ただ単にIS技能の応用のミサイル兵器。

弾頭に概念兵装が追加されているわけもなく、神代の魔術や魔法が付加されているわけでもない。

単純な現代兵器。迫る六つのミサイルを、シンは右手の一閃で潰した。

「え、え？」

「ここは公園なので、危険物の持ち込みはご遠慮ください。習わな

「かったのか?」

「なんで、どうしてそんなことができるの!? ミサイルだよ! 爆発しないの?!」

「科学反応が起きなければ、火薬とは言え爆発しない。単純なことだろう?」

接触信管もなし、熱センサーも搭載されていない。目標が範囲内に入った途端に、連鎖爆発を起こす物体でもない。

単純にぶつかって爆発するだけのミサイルならば、片手一本で終わらせられる。

むしろ、対処できないならば地獄の特訓が待っているのだから。

「何をしたの?」

「物体には抵抗がある、一つ目の衝撃波が物体の抵抗力に当たっている間に二つ目の衝撃波を送り込めば、物体は抵抗出来ずに崩壊する。これの応用」

師匠のテラ・エーテルは、これを超重力砲相手に使って成功したらしいが、シンはそこまでの技量はまだない。

ブラックホールを潰せるだけの技量なんて、必要じゃないと感ずるが。

「そんなこと人間に出来るわけがない。そんなの、不可能だよ」

「出来るさ。実際に俺がやっている」

「違う! おまえは何なのさ?! おまえは人間じゃない!」

彼女の悲鳴のような叫びに、シンはふと思った。自分が人間かどうかじゃない、彼女のことを考えていた。

まるで子供の癩癩、自分の思い通りにならなければ潰す、そんな単純な思考でしかない。

『うわ、この子もなんだ。シン、この子も親の愛情が欠落して、人間らしいコミュニケーション能力が未発達』

隣でティスが呆れた顔して、『これじゃISがパイロットに話しかけられないのも納得できる』と呟いている。

「普通、学校で身につくんじゃないのか?」

『うゝ学校でまともに会話してないんじゃないの?』

「はっ。」

いや、そんなバカな。シンは素で呆れて、テイスを見てしまった。

人間は、社会性の生き物だとは、銀河帝国では当たり前の考え。

いくら超人的な能力を持った人物が多いとはいえ、それが一般的ではない。

人間は単体では、とても脆弱な生き物。なのに、霊長類の頂点に立てるのは、その社会性故に。

厳しい自然環境に対して、多くの同胞で社会という鎧を形成し、お互いに支え合って生きていく。

一人では獅子はもちろん、犬にさえ勝てない。だが、一人が例えば銃弾を作り、一人が銃身を作りと、多くの人が協力しあって作った銃があれば、獅子や犬には勝てる。

こうして人は、社会という力を得ることで巨大な勢力図を構築してきた。

だからこそ、学校ではコミュニケーション能力を学ぶ。

相手に自分の考えを伝え、相手の考えを知るためには、共通の知識を持つことが絶対条件。

同じ学びやで同じ制服を着ることで、同じ知識を学ぶ。こうした仲間意識が相手を尊重し、助けあう感情を作る。

知識や知能を高める、そんなのは一人でもできる。

しかし、コミュニケーション能力は集団の中でしか形成できない。だからこそ学校にて集団生活を行いながら、学んでいく。

これが銀河連邦での学校生活の常識なのだ。

それが欠落している。自分から社会性を捨てた人間は、当然のよう

に社会という鎧から弾かれる。

仲間意識とは、当然のように異物を排除する意識でも有るからだ。だというのに、それが未発達。それが無い。

シン、あまりに衝撃の事実を意識が遠のく気がした。

「馬鹿！・馬鹿！・馬鹿あ!!」

泣きだして座り込んだ年上の女性は、とても小さく幼く見えてしまった。

「あ、悪かったよ。つい本気に・・・なつてないか」

完全に手を抜いて、遊び半分どころじゃなく遊びが全部。

いや、今はそんなこと関係ない。この泣いている女性をどうにかしないと、かなり不味いことになる。

セシリアが怒る、シャルロットに軽蔑される。いや、違う。もつと最悪な状況になる。

『シン、女の子を泣かせるなんて。俺はそんな教育はしてないはずなんだけどな』。

『シンさん、いい度胸ですね、テラさんの怒りを買うなんて。いいでしょう、『サイレント騎士団』全軍でお相手します』。

怒りを浮かべた師匠と、その巫女の冷笑が浮かぶ。最悪だ、かなり悪い方向に振り切られてしまう。

「えつと！・そうだな・・・えつと。よっし!!」

パンつと手を叩いて、彼女の前に片膝をついた。

「小さなお嬢さん、よろしければ涙を拭いて、私の声を聞いてくださいませんか?」

必殺、『困った時の紳士の真似ごと』。

無言で睨みつけてくる束だが、泣きやんではいる。注意は引けたようだ。

「ああ、私としたことが申し訳ない。お嬢さんにハンカチを差し出さずに。しかし、今の私はハンカチを持っていない、これはどうしたところか」

「何それ?」

「ようやくこちらを見てくださいましたね、お嬢さん。では、ハンカチ

の変わりに、この……」

右手をくるりと回して差し出す。ポンつと音がして、その先に花びらが舞う。

「風と華のハンカチーフはいかがでしよう？」

「……. ばつかじやないの」

小さく微笑みながら、束はそう言った。

何処かすねたような雰囲気は、こちらは見下した様子は見られずに、ちよつと幼い少女の面影が見えるのみ。

「私は馬鹿ではありません。ああ、そういえば名乗るのが遅れました。これは失礼を」

一度だけ立ち上がり、大げさにターンした後、再び片膝をついて右手を胸の下、左手を後ろ腰に。

昔、ある屋敷で見た老紳士の一礼を思い出しながら、シンは深く頭を下げた。

「私は、シン・アスカというものです。どうか、この失礼な紳士見習いに名を教えて頂けますかな、小さなお嬢さん？」

顔を上げ、相手の顔を見た後に、小さくウインク。

ボンつと音がして束が真っ赤になったが、気にはしていない。

「え、あの、篠ノ之・束です」

小さく消え入りそうな声で名を名乗った彼女に、そつと右手を差し出す。

「篠ノ之・束嬢、よい名前ですね。よろしければ、私と一曲、踊っていただけますか？」

「はい、私でよければ」

右手を乗せてくれた彼女に『失礼』と断り、立ち上がりながら彼女を引っ張り上げる。

「機嫌、治ったみたいだな」

「……. あう」

「なんだよ？」

「意地悪」

「はあ？」

パンつと手が振りほどかれ、東が走りだした。

「おい！ 気をつけて帰れよ！ 女の子が歩く時間じゃないんだから！」

大声で注意を呼び掛けると、彼女は振り返って、こちらを見た後に舌を出した。

「ベー！ シン・アスカの馬鹿！ 唐変朴！」

「なんだよそれ!？」

「それと！ 君のことはシー君って呼んであげるよ！」

「はい？」

それっきり彼女は、闇の中に姿を消した。

「嵐が去ったなあ」

『弟子って師匠に似るんだね』

「なんだよ、ティス？」

溜息をついた彼女は、小さく『ハーレム王』と言っていたのだが、シンの耳に届くことはなかった。

幕間1 蒼穹の空の元で。

『遠くて辛い道のりだぞ、それでもいいのか?』

溜息交じりに告げてくる相手に、当時の自分がなんて答えたかは覚えていない。

強くなりたい、悲運に嘆くことがないほどに。誰にも負けず、世界さえ倒せる力を欲した。

彼の名前を知っている。僅か数年で巨大な銀河帝国を築いた、暴虐の化身。あるいは殺戮の破壊神。

幼馴染が政略結婚させられそうだからで、当時にあつた最大の帝国を打倒し、そのまま勢力圏を拡大させた銀河帝国を作った人物。

ジョーカー銀河帝国皇帝。

『血の十字架』の主。

神々を足蹴にした騎士。

『神帝』テラ・エーテル。

『解った。なら、俺ができるすべてでおまえを強くしてやる。覚悟しろ、おまえはこれから『騎士』になる。軍人や武人じゃない、騎士だ』死ぬ気についてこい、と口外に語るように背中を向けた彼に、当時の自分は涙を振り払ってついていった。

それが最初の始まり。シン・アスカの最初の一步だった。

懐かしい夢を見た気がした。何をどう見たか覚えていないが、とにかく懐かしい夢だ。

自分が目指した最初の一步だった気がするが、どうにも思い出せない

い。

奥歯に物が詰まったような、というのはこういういった感情を言うのだろうか。

歯がゆくても出てこない、どんなに取り除こうともそこには何も無い。思い出しても繰り返しても、何も無い空虚さ。

けれど、確かに何かある確信が精神を揺さぶる。

「はあ、なんだか朝から疲れたな」

『そうかなあ』

隣でティスが嬉しそうに踊りながら答える。

「懐かしい夢を見た、と思う」

『うん、うん』

「けど思い出せないんだよ。何か知っているか、ティス？」

問いかけに少女は立ち止まり、しばらく空を見上げた後で、にっこり笑顔で指を刺してきた。

『へタレ！』

「……よし、ケンカ売ってるなら買うぞ」

『へタレだった頃のシンの夢だったよ』

ズバリと言いつてられた気がした。

何かが刺さったような錯覚を覚え、無意識に胸元を抑えるのだが、何か実際に刺さっているわけでもない。

まったく最悪だ、とシンは口の中で転がしながら政庁へと入って行った。

政庁直属即応鎮圧抹消部隊『ヴィルティラス』は、政庁の地下一階部分に部隊本部がある。

本部といっても、精鋭の中の精鋭を集めただけで、その人数は三十人くらいしかない。

五つの太陽系を支配下においた銀河帝国において、部隊の人数が三十人は下から数えたほうがいいほど、少ない数だ。

それ以下だと、帝国軍や警察機構ではなく、『血の十字架』にしかない。

『サイレント騎士団』近衛騎士達か、あるいは皇帝が秘匿している非

常戦力、コードネームしか伝わっていない『六柱神』、あるいは『護元神』のみ。

入口で顔パスで入り、すぐに自分が所属する部署の執務室へと入る。セキュリティは大丈夫かと最初は不安になったが、ここまで侵入している猛者は今のところいない。

皇妃達の十三の騎士団と、サイレント騎士団の守護騎士が完全に支配下においているトリトリーに入ろうなんて、『星系ごと消してください』と言っているようなものだ。

怖い存在達の足元にいる自分に、ちよつとだけ寒気がした。

「シン、遅くないか？」

自分の席に向かう途中で、反対側から人が歩いてきた。

「すみません、寝坊しました」

「しつかりしろよ。おまえはうちの『エース』なんだからな」

軽く叱りながら通り過ぎる彼―ハイネ・ヴェステンフルスはニヤリと笑っていた。

瞬間、とても嫌な予感が襲ってくる。

「なんですか？」

「いや、おまえも大変だなんて。今日の仕事は、デスクワーク中心だろうな」

「はあ？」

意味が解らない。今日は特に任務もなく、思い当たるとしたら定期メンテナンスを受けるティス―デステイニー関係の書類のみだ。

「ほら、人気ものは辛いねえ」

彼が指さす先、自分の机にはたくさんファイルが山積みになっていた。

「なんなんですか、あれ？」

「決まってるだろ。お見合い写真だ」

「はあ?！」

瞬間、シンの絶叫が部屋を満たした。

本部と銘打っているが、他に支部があるわけでもない。本拠地で仕事の中心なら『本部でしょ』とか、普段の聡明さは何処に行ったのか疑問に思うほどに馬鹿な発言をした宰相によって、ここは『ヴィルティラス』本部と名付けられた。

その中の中心にある部屋は、『書類仕事する部屋なら執務室なので』ときよとんと首をかしげた皇帝代理によって命名された。

普段の二人の思慮深さを知っている人たちからは、『病気だったんだらう』と言われるほどおかしい考えをしているが、決まってしまうことに否といえる人物はここにはいない。

執務室は部隊ごとに分けられている、わけでもない。三十人しかいないのだから、大部屋に小さく壁をつけて個人的スペースを確保しているのみ。

昔のアメリカのIT企業の仕事部屋に近いかな、というのが見た人物の共通の認識。

さらにその部屋の隣は、『ヴィルティラス』部隊長の執務室。

現在、二代目の部隊長は、初代隊長が奔放な性格をしていたのに対して、生真面目一辺倒、たまにやる冗談が死ぬレベルで寒いとして有名だった。

「では、不満だというのか？」

「はい」

執務机の前、直立不動で立つシンに対して、部隊長は真顔で言われた内容を脳内で繰り返し、大きく頷いた。

「正式な任務として通達したならば、おまえに拒否権はない。それは理解しているな？」

「もちろんです、バザット部隊長」

迷いなく言い切ったシンに対して、部隊長『エイルン・バザット』は

少しだけ見つめた後、小さくため息をついた。

「部隊長としてではなく、俺個人として話をする」

「解りました」

「俺も反対だ。軍人ではないとはいえ、俺達は騎士だ。その騎士に与えられる任務として、見合写真に目を通せとは、はつきりいつて馬鹿馬鹿しい」

この男にしては珍しい、とシンは内心で思う。

任務に対して実直、有言実行。不満など飲み干して、淡々とこなしていくものだと思っていたが。

「しかし、だ」

苦渋を顔中に浮かべながら、エイルンはシンに対して告げるしかなかった。

「今回の一件は拒否できん。俺たちが何処の部隊で、直属の上司が誰か解っているな？」

「もちろんです」

政庁直属。政庁に勤めているものは誰か、答えは簡単だ。皇妃達。皇帝の奥様にして、実質的に帝国を運営している者達。

政治家や官僚がいらないわけではない、議会もあつて話し合いをして法案を通すこともある。

国家プロジェクトを計画し実行しているのだが、重要な案件はすべて皇妃達が行っている。

もちろん、『ヴィルティラス』に対しての任務も、彼女達からだ。

「では俺から言えるのは、『馬鹿馬鹿しい任務でも、任務だ。さつさと片付けろ』だ」

「解りました」

仕方がないかとシンは無理やりに納得して、一礼する。

その時、絶対に壁際を見ないようにした。何があつても視界に入れないように努める。

『エルフィーナ、これ何？』

『ムツシュへの見合い写真のデータ・クリスタルです』

『ほへえ〜データ・クリスタルが山だね！』

『ええ。誇らしく思います』

壁際に二人の相棒が、山のようになったクリスタルを見上げているのだが。

「データ・クリスタルって、一個で惑星コンピュータが丸々入りますよね?」

「言うな、シン。やっと三分の一が終わったところだ。最近の帝国は、騎士がアイドルに見えるらしい」

頭を抱えそうな隊長の姿に、シンは同情の眼差しを向けた。

しかし、仕方がないことかもしれない。

収入は完璧、技量は精鋭として保証済み。そして何故か全員がそれなりにルックスがいい。

最初、アイリスとアセイラムがルックスで選んだと噂になったが、ものの試しに帝国軍と戦わせたなら、三十人が中央四軍を壊滅させたため、誰もが口にしなくなった。

「俺達はまだいい方だぞ」

「そうなんですか?」

「ああ、女性の方がな」

それでシンは察した。

『ヴィルティラス』にも、女性はある。しかも、アイドルと並べても勝てるほどに美貌を持った人物が。

収入完璧、技量は問題なし、その上で美人で帝国へのパイプともなる。

周辺国家のそれなりの地位にいる人たちが、放つてこないことこの上なし。

「今日は、ティーラが休みが欲しいと連絡があった」

「え?」

『ヴィルティラス』の中でも、トップスリーに入る実力者であり、世間的の知名度ナンバーワンの彼女が、休みが欲しいと連絡してくるなんて。

「俺はすぐに彼女の機体『エーン・ラティエス』をロックするように通達した」

両手を組み合わせ、顔をうずめるエイルンに、シンは何と喋っているか言葉が見つからなかった。

しばしの沈黙が流れる部屋の中で、小さな電子音が鳴る。

「はい………ありがとう、そのまま取り押さえてくれ」

通信は指向性、音声はシンの耳に届かなかったが、何を入れたかはよく解った。

エイルンが頭痛を抑えるように頭を手をおいたから。

「先ほど、ティーラが『エーン・ラティエス』の最大稼働を行おうとした」

「そこまでですか」

どうにかシンはやっと声を絞り出せた。

あまりの事態に、脳が現実を拒否してしまったようだ。

「現在、格納庫で刹那とスザクが抑えてくれている」

「うちー『ヴィルティラス』の二枚看板じゃないですか?！」

「念のために、ガイとゼンガーさんをバックアップで配置しておいて良かったと、私は自分の裁量をほめたい気分だ」

「うわあ〜」

刹那・F・セイエイ。

枢木・スザク。

獅子王・ガイ。

ゼンガー・ゾンボルト。

『ヴィルティラス』の中でも、特殊作戦などにおいて突破殲滅が得意な四名を配置するほど、今のティーラは怒り心頭ということか。

「これで無理なら俺は、東方先生に連絡を入れるところだった」

「………部隊長、俺も行きましようか?」

「頼まれてくれるか? 正直、機体同士ならば抑えられるだろうが、生身となると不安がある」

「了解です」

敬礼し、シンは全力で部屋を後にした。

「まさか、仲間うちでの損害で始末書を書くことになるとは。貴方は偉大だったのですね、サーシエス部隊長」

溜息交じりに、初代隊長の名前を上げたエイルンは、静かに書類にペンを走らせたという。

一方、同じ頃、盛大にくしゃみする男が一人。

「なんだ？」

「さーしえす先生、どうしたの？」

「お風邪、引いたの？」

「うるせえ、餓鬼ども。いいから遊んで来い。今日は天気がいいぞお！」

「はくくしい!!」

元気に走り回る園児たちの姿を追いながら、アリー・アル・サーシエス元『ヴィルティラス』部隊長、現保育士は目を細める。

今日も世はこともなしだ。

格納庫は、凄惨なことになっていた。

片腕と片足を失いながらも相手を抑えつけるランスロット・アルビオン。

下半身が丸々と碎け散りながら、ソード・ビッドを相手に叩きつけるダブルオークアンタ。

巨大な体を半ばまで使って重量による抑えつけを行う、ジエネシツク・ガオガイガー。

斬艦刀を二つとも碎かれながら、踏みとどまっているダイゼン

ガ―。

そして、格納庫の周囲すべてを破壊した後に、抑えつけられ地面に叩きつけられているエーン・ラティエス。

「うわあ~~~~~この修繕費って、うち―『ヴィルティラス』持ちかな?」

あまりに予想外の事態に、シンは自分が混乱していることを自覚しながらも、馬鹿なことを考え続けていた。

「シン― そっちに行っただから止めて!」

スザクの鋭い叫びに、一瞬で意識が戻った。

目の前に飛び込んでくる鋭い蹴り、それを左手で払いのけたのち、右手を突き出す。

しかし相手はスルリと回避して、上方からかかと落とし。

これに対して、シンは払いのけた左手を戻して反対側へと叩き落とす。

「つて! ティーラ!!」

「邪魔するならば貴方ごと潰します、どきなさい、シン」

フワリと舞い上がるのは、エメラルドグリーンの鮮やかな髪。

睨む瞳は、まさに宝石のようなエメラルド色。

街中ですれ違えば、百人中百人が振り返るほどの美女は、その拳を握って腰を落として、完全に戦闘態勢でいた。

「落ち着けて! そりゃ、あれはやり過ぎだと思っけど」

「やり過ぎ? 落ち着け? いいえ、シン、これは戦争です。売られたケンカを買って、戦争をする事態です」

「おい!」

フツとティーラが揺らぐ。

夢幻、と頭が判断した瞬間には一步を踏みこんだ。

後ろを拳とティーラが通り過ぎ、その途中に足払い。

見事に彼女は足元を取られて、体制を崩す。

「さすがに陛下の一番弟子だけはありますが」

体制を崩して倒れる彼女の姿が、消えた。

二段階の夢幻、『空舟』。

「陛下と同じ技が使えるのが、貴方だけではありません」
「だからって！」

真つ正面から突き出された拳は無視。後ろから迫ってきた本物を握り、そのまま裏拳を放つ。

皮膚に何かがかすった。それだけで、彼女の姿は再び消えていく。

「嘘に頼り過ぎるのが、ティーラの悪い癖だって、言っていたっけ」

「ですが、私を捉えられないなら、同じことです」

「誰が捉えてないって？」

右手を横薙ぎに一閃。衝撃が腕全体に走り、続いて彼女が床に転がった。

「夢幻は確かに嵌めれば永遠に幻だけを追い掛ける。けどな、一度でも外せば後は続かないんだよ」

「迂闊でした。貴方は外し方を知っていましたね」

ゆっくりと立ち上がり彼女は、右目の上から血を流していた。

「もう辞めないか。できれば、女の子の顔に傷を、これ以上はつけたくない」

「優しいですね、シン。私が傷くらいで止まる、と？」

「本気か？ なら、傷の一つや二つで済むと思うなよ？」

「ええ、望むところです。そうなれば、あんなくだらないことで時間を取られなくて済む」

お互いに睨みあい、片手を開く。

距離は五メートル。拳は届かないが、剣なら届くような距離を開けつつ、お互いが相手を視界に収める。

「止めないか？」

「貴方がそこをどくならば」

「俺はあんたを止めろって、言われてる」

「ならば交渉は決裂です。『アルミューレ』!!!」

ティーラが、彼女を『エーン・ラティエス』の愛称を呼ぶ。

瞬間、彼女の手の中にレイピアが握られていた。

水晶のナックルガードに、厚みの刀身。レイピアと呼んではいるが、刀にも見える刀身を持つ近接武装。

神劍『月光』。

「マジかよー！ 『ティス』!!」

反射的に、シンも愛称を呼ぶ。

瞬間、シンの右手の中にも近接武器が出現した。

翼の装飾に、炎と氷の意匠が施された剣身を持つ巨劍。

神劍『天壤無窮』。

マテリアルを与えられた者が、マテリアルを理解し育てた末に手に入れる『神経の延長線上としての剣』。

その能力は、持ち主の最も深い部分の願望を現実化する。事象や物理法則を無視してまでも。

あまりに威力の高いため、神劍の使用時は許可を得ることになってはいるのだが。

「そこまで！」

二人がぶつかり合う前に、鋭い声と共に槍が飛んできた。

ハツとして顔を向けた先、格納庫の入口で笑顔で立っている人物が一人。

「これはどういうことかしら？ 騒ぎがあったって聞いてきてみたら、まさか『ヴィルティラス』のエース同士が戦っているなんて」

笑顔で語りながら彼女は格納庫に足を踏み入れ、周りをゆつくりと見回した後、剣を引き抜いた。

「ねえ、どういうことか説明してくれない？ ティーラ？ シン？」

槍が飛び上がる。まるで吸い寄せられるように彼女の左手に戻った槍は、黒い光を放ちながら、周辺を歪ませる。

「ねえ、どういふつもりだったのかしら？」

右手の剣が、眩い光を漂わせながら、周辺の空間を食い始めた。

「二人とも？」

ニツコリ笑顔を浮かべたままのアイリスの問いかけに、シンとティーラは条件反射で土下座した。

「申し訳ありませんでした」

「はあ、解ればいいわよ。今回の件、私の落ち度でもあるから不問にします。エイルン、報告書と始末書を提出しなさい」

『解りました』

通信モニターが開き、深く頭を下げている彼が映る。

「今回の修繕費は私のほうで出します。仕事に戻りなさい。以上」
剣を槍をしまったアイリスは背中を向けて帰って行く。

「そうそう、お見合いを回避するために結婚するって手段もあるからね」

「……シン!!」

「どうしてそう短絡的に行動するんだよ、テイーラ」

アイリスのアドバイスに、目をキラキラさせてこちらを見てくる彼女に、シン・アスカはため息をついたのです。

何処までも広がる空は、何時までも終わりなんてなくて。

天地が交わらず、永遠だと常に語りかけてくる。

右手に持った剣を持ち上げて、シン・アスカは再び空を見上げた。
『天壤無窮』。自分の神剣の名を告げられ、彼は『そうか』と思った。
変わろうと決意して、強くなろうとあがき続けて、結局のところ自分
は変わりたくなっただろう。

毎日、楽しい日々が続いていけばと願っていたのかもしれない。

「さて、と」

彼は神剣を収納してから、歩きだす。

テイス―デステイニーのオーバーホールは問題なし。

しばらく休暇だと部隊長に告げられて、遠出でもするかと歩きだした足の先、何処へ行こうかと考えていた彼は、こうして姿を消したの
でした。

それは、シャルロットと出会う数時間前の話だったという。

拳や肉体言語は会話ではありません

深夜過ぎ、もうすぐ三時を回るだろう時間に、ドアが小さな音と共に来客を告げる。

「まだ、大丈夫ですか？」

若い声に、店主は相手に体を向けたまま、小さく手を振る。

「未成年はお断りですが、今日は特別にします」

「ありがとうございます」

一礼して店内に入った彼は、カウンター席に座って棚へと視線を投げた。

綺麗に並べられた酒の数々。磨かれたグラスやシェイカーに、何処かフランスで見た店の印象を受ける。

違うか、あちらがここに似ているのか。

「不出来な弟子が、ご迷惑をおかけしたようですね」

「いえ、助けられました。あの人のおかげで、こうしてイギリスでのんびりと出来ています」

店主の言葉に、慌てて否定を浮かべながらも、彼の視線は棚から動かない。

「未成年でなければ、お出しするのですが」

「入れてくれただけで、十分です」

そつと差し出さされた水のグラスに、彼は小さく頭を下げながら、口へと運ぶ。

喉を通る液体の冷たさに、自分が知らずに知らずのうちに乾いていたことを知る。

「いい氷ですね」

「ええ、近くの店がとても大切に作ってくれています。ご紹介しましょうか？」

「すみません。実は、イギリスから出国することになったので。お弟子さんから紹介されていたのに、一度も行かないのは不義理かとお邪魔させてもらいました」

「なるほど。だから、客足がないこんな時間に？　ご配慮、ありがとうございます」

「いえ、バーテンダーには礼儀を示せてというのが、俺達の間の常識ですから」

「あまり気を使わなくても大丈夫ですよ」

「使っているつもりはないのですが、どうも最初のバーの時の習慣が身にしみてしまって……すみません、バーで他のバーの話は「大丈夫ですよ。なるほど、貴方の『国』では未成年ではないのですね。では私も今日は特別に一杯、お出ししましょう」

ニコリと笑う店主に、彼―シン・アスカは深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

「いえ、こんな夜ですので。では、何をお作りしましょう？」

問いかけに、シンは迷うことなく答えた。

『ウイスパー』を」

注文に、店主は目を細めて微笑む。

しばらくして出てきたカクテルをシンは眺めて、小さく口を動かす。

「出来るかな、俺に」

彼の問いはカクテルの中に溶け込み、ゆっくりと混ざり合って消えていく。

そして、彼はドアを再び開く。

「ありがとうございます」

「いえ、またのご来店をお待ちしています」

「はい。必ず」

シンは笑顔で応え、店を後にした。

「バーでは声を潜めて話せ。そうでないと、他人ではなく自分の心の声が聞こえないから……あの若さでそれを知っているとは、どのようなバーに出会ったのでしょうか」

店主はそう呟きながら、カウンターに置かれたグラスを手にとつて、ドアに向けた。

「貴方の道筋に、幸多からんことを」

グラスはライトの光を受けて、小さく輝いていた。

人間が本当に困った時に頼るとしたら、誰がいいか。
上司、友人、家族。

答えは、『バーテンダー』。

昔、シン・アスカは師匠のテラ・エーテルにそんな風に教えられたことがあった。

最初は意味が解らず、もっと頼れる人がいるのではと探してみたが、結局はそこに行きついた。

肩肘張って、意地を通して、信頼する仲間や頼れる上司に恵まれたとしても、最後の最後にはそこに行きつくらしい。

カクテルは、世界中の酒を混ぜ合わせる。ウイスキー、焼酎、ワイン、ビール、世界中の人たちが人生と命をかけて作り上げるそれらを混ぜ合わせ、一つの作品を生み出す。

『魂を救う一杯』。

イギリスの最後の夜、シンはどうしてもバーに行きたかった。

今までの自分が間違っていたのか、正しかったのか。これで良かったのか、あるいは違っていたのか。

自問自答したくて、けれど詳しい話はできないから、一杯のカクテルに答えを求めた。

自分の心の底の声を聞くために。

正しいかどうかの答えはない。けれど、後悔はしてない。間違っているのかもしれないが、自分が納得して進んだ道だ。

茨の道でいい。平坦な道でなくてもいい。

振り返らずに真っ直ぐに進めたなら、それでシン・アスカは満足して逝ける。

だから、次へ進もう。

「ここが日本か」

セシリアの自家用ジェットで辿り着いた先、日本は何処か懐かしい匂いがした。

日本。八百万の神々の住まう場所、あるいは多文化の集合場所。

何処か懐かしいとシンが思うのも、無理はない。ジョーカー銀河帝国の公用語は、実は日本語をベースに作られている。

理由、『オタクは世界を動かす』、なんて言葉が銀河中で言われ続けているから。

「え、シンは行かないの？」

「俺は別行動だろうが。二人は学園に入学するんだろ？俺は学生じゃないからな」

「ええ〜」

何故かシャルロットが不満を口にして、セシリアもいい顔はしてないのだが、最初に決まっていたことだと思っただが。

「適当にアパートでも借りるさ」

「ですが、シンさん、仕事はどうなさるつもりですか？」

セシリアの不安、というより引き留めに対してもシンは、迷うことなく答えていた。

「大丈夫。じゃ、二人とも連絡くれよな」

「連絡ってどうするのさ?!」

一言だけおいて走り出すシンに向かって、シャルロットが叫んだ。「それでメールくらいは送れるから！」

振り返って手首を指差すシンに、彼女は自分がしているブレスレッツ

トに視線を向けた。

これは、シンから預かっているものだが、まさかそんな機能まであるなんて。

「じゃ二人とも！」

すでに豆粒になったシンに対して、二人は小さくため息をついた。

「一緒にいたいって、解らないかな」

「まあ、シンさんはそのあたりは鈍感でしょうから」

「ええ〜〜そうかなあ」

「知っていてなお知らないふり、でしたらかなり意地悪になりませんか？」

「ん〜〜」

悩んでいるシャルロットに、セシリアは微笑みながら背中を押した。

「さあ、私達は学園に参りましょう。落ち着いたらゆつくりとメールをすればよろしいのですわ」

「それもそうか。ルームメイトも楽しみだし」

「あら、シャルロットさんは私と一緒にすわ」

「ええ〜」

「ちよつと！ どうしてそんな不満そうなのですか?！」

「いや、セシリアって常識がないような」

「まあ！」

両手をあげて怒る彼女に対して、シャルロットは『ごめんごめん』と微笑みながら口にしていった。

一方、二人と別れたシンはというと。

「……………と、二人の前で強がったけど、これ大丈夫なんだろうな？」

『うん、たぶん』

ティスも不安そうに、シンの手の中の手紙を見つめていた。

電子文明も真っ只中のご時世に、丁寧な便箋と手書きの手紙を送ってきたのは、あの『篠ノ之・束』。

『拝啓、シー君。今度、日本に行くんだよね？ ならこの束さんが就職

先を用意してあげよう。私の幼馴染に紹介しておいたから、仕事を用意してくれるよ。』

怪しい、とてつもなく怪しい。

常識とコミュニケーション能力が欠如した人物の幼馴染。きつと、言葉ではなく肉体言語を要求してくる、体育会系に違いない。

しかも、女性。いや待った、本当に女性か。束が女性だといえ、その幼馴染も女性であると考えるのは、あまりに早計ではないか。

そもそも、人間の可能性から疑うべきか。何しろコミュニケーション能力が完全に欠如した、あの体は大人だが頭脳と心は幼児以下の篠ノ之・束の紹介だ。

きつと、言葉ではなく拳で語れとか言われそうだ。

「とにかく行ってみるか」

『シン、念のために武装はすべて用意しておくね』

必要ない、とシンは言い掛けて言葉を止める。

万が一の場合がある。出会い頭に問答無用で攻撃されるとか、あるいは何処ぞの魔王みたいに超位魔法とかぶつ放すとか。

開幕ブツパは美学、とか言われないだろうか。

『ええ、シンさん。開幕に最大火力で敵を撃墜するのは、とても美しいものなのですわ。』

元お嬢様、元歌姫。現銀河帝国中央四軍のうちの第一軍所属の、砲撃馬鹿歌姫の言葉が脳裏をよぎる。

彼女が参加した模擬戦では、損耗率が八割を超えるのは、日常的な話。緊急脱出用転移装置は、彼女が無茶したから開発されたらしい。

唐突に、シンは全身を悪寒が包むのを感じた。

「おまえか？」

「はい？」

背後からの声に振り返り、思わず無意識に拳を握り締める。

長い廊下の先、スーツ姿の女性が立っていた。

凜とした姿は、まさに侍。日本刀を持っていたら、シンは迷わずに武装を展開するような気配を持った女性が、小さくため息をつく。

「シン・アスカとはお前のことか？」

「はい、そうです。えっと、貴方は？」

「あいつから聞いてないのか？ 織斑・千冬だ。凄腕の騎士だそうだな？」

「どういう紹介をしている、とシンは内心で束に叫んでいた。

「なら、付いてこい。仕事を紹介してやる」

「はい」

返事をして追いかけるシンに対して、千冬はチラリと振り返り言葉を投げた。

「おまえ、生身でISを撃破できるらしいな？」

「は？」

「楽しみにしている」

ニヤリと笑う彼女に、シンの中で凄まじい勢いで警報が鳴ったのでした。

実力を見せてみる。千冬に案内されてきたのは、何処かの闘技場のような場所。

アリーナとか呼んでいたか、とシンは彼女との会話を思い出そうとして、現実を見ないようにした。

「あらあら、お姉さんを前に余裕なのね」

「は、はははは」

水色の髪の女性が、水着姿の上に鎧を纏って浮いている。

幻覚か、状態異常の魔法をかけられたか。あるいは、この状況事態

がすでに幻覚の一種なのか。

確か、写輪眼には見ただけで相手を幻術に落とす能力があつたはずだが、彼女が噂に名高い忍者の一族か。

いや、そもそも自分に写輪眼が通用するのか。マテリアルには、保持者を一定に保つ能力がある。これは味方からの回復や強化の魔法も反射するが、どれほどのダメージを受けても肉体が損傷しない、体力も精神力も低下しないチート技術だったはずだ。

とすると、マテリアルごと幻術に落とされたのか。さすが忍者だ。科学技術どころではなく一部では『女神』と崇拜されるマテリアルを、瞳だけの力で幻に落とすとは。

これは戻った時に修行が必要だ。できれば、幻術使いに相手になつてもらつて徹底的に鍛え直さないと。

「お姉さんを前に考え事。ちよつと妬けるわねえ」

「いやいや、凄いい使い手だなんて思いますよ」

「あら、そうお褒めにあずかり光栄だわ。でも、手加減はしてあげないから」

「手加減つて、もうすでに幻術にかけられているんだから、貴方の勝ちでしょ?」

「何の話?」

彼女は心底、意味が解らないという顔をしているが、シンは気にしてない。

すでに自分は幻の中、ならば速やかに迎撃をしないと。現実世界に戻った途端に無様に敗北では。

「戻った時にテラさんに殺される。テイス! 全武装を」

『シン、シン、ここ現実。魔法も忍法も何もされてないよ』

叫びかけた言葉を遮られ、シンは固まった。

隣にいる相棒はきよとんとしたまま、どうするのだろうかとうと目線を向けてきている。

「え、現実? 嘘だろ」

『本当』

待った、少しだけ待ってくれ。では、自分は現実世界にいるのか。

ここまで来たことは思い出せる。織斑・千冬に実力を見せろとアリーナに案内されたのは覚えている。

現実だ。とすると、だ。目の前の女性も現実だとして。

シンはフウつと息を吐いて、額の汗を拭って、清々しい笑顔を浮かべた後に真顔になって指をさす。

「変態だああ!!」

「な?! 失礼しちゃうわね! 誰が変態よ!!」

「あんだだあんだ! 年頃の娘が水着姿で鎧とか、マニアックな趣味してんじやない!」

「はあ?! これはISスーツであって水着じゃないでしょう!!」

「何処からどうみても水着じゃないか!」

「まったく違うから!!」

売り言葉に買い言葉。

冷静になっていないシンに触発されて、相手の女性も徐々に感情的になって、最後にはお互いに罵り合い。

『おい』

感情的になっていた二人は、冷水を浴びせられたように固まった。

『いつまでふざけているつもりだ? さっさと始めろ』

「はい?!」

「解りました!」

織斑・千冬の殺意の滲んだ言葉を受けて、二人は改めて身構えた。

「ところで、本当に貴方は生身で私と戦うの? お姉さん、これでも国

家代表なんだけどなあ」

「国家代表、それは強そうだ。でも、俺も強いつもりだから、安心してかかってこいよ」

「へえ〜くなら行くわよ!」

気合を入れて飛び出した女性―更識・楯無は、一瞬だけ瞳を閉じた。それは人間なら誰もが行う瞬きなのだが、次の瞬間にはシンの姿は正面から消えていた。

「ああ、そういえば、名前、聞いてなかったな」

「え?」

声は背後から、振り返った先にいたのは、シン・アスカ。振りかぶった拳が真っ直ぐに振り下ろされる。

咄嗟に楯無はランスで受けるが、衝撃はそのまま通り抜ける。

「嘘でしょう！」

アスカ・クリスタルの水のヴェールも、彼の一撃を受け止めきれずに霧散した。ナノマシンも活動停止、ただの水のように地面に落ちてしまう。

「へえ、ナノマシンを使っているんだ。どうりで手ごたえがただの水じゃないはずだ」

「本当、貴方って何者？ まさか、生身でISと戦えるなんて、冗談だと思っていたわ」

距離を開けたのは、楯無。

至近距離では対応が難しいと開けたのだが、最初の対峙を考えると距離を開けても無意味かもしれない。

「本当……」

言葉の途中で、無理やりに口を閉ざした。

また、シンの姿が消えた。今度は何処を思っ探す彼女の視界に、彼の姿が入りこむ。

「悪い、痕にならないように気をつける」

轟音が、腹部から響いた。

あまりの衝撃に悲鳴を上げる彼女は、そのままアリーナの壁に激突し、動かなくなった。

「そのIS、凄い性能だな。俺の一撃の衝撃、大半を吸収したんじゃないか？」

右手を軽く振ったシンの問いかけに、彼女は小さく頭をあげて答えた。

「本当に君は何者？ ISの絶対防御を貫通って、信じられない」
「たんなる騎士の末席にいる者だよ。傷になってないだろ？」

「ええ、でもお姉さん、自信を失っちゃうわ。これでも学園最強だったんだけどな」

「強かったよ。俺の知り合いの中でも十分に通じるくらいにはな。た

だ、俺の知っている最強には届かないけど」

「どんな、人か、教え・・・」

楯無の言葉が止まり、彼女は気を失った。

「しまったな。強くやり過ぎた・・・俺の中での最強は、このアリーナごと消すくらいを拳だけでやる人だよ」

シンが思い出すのは師匠ともう一人。

銀河最硬と呼ばれる家の当主。シャルル・ブリタニアが、ブラックホールを握りつぶした光景だった。

『わあがあああこぶうしに砕けぬものなどないわああ!!』。

「思い出すんじゃないかった」

蒼白になって口を抑えて蹲るシンに、テイスはそつと背中をさすつたのでした。

モニタールームは、痛いほどの沈黙が満たしていた。

「何者なんですか、彼？」

山田・摩耶の問いかけに、織斑・千冬は答えられずにモニターを睨みつけていた。

『私を知るかぎり、最強の騎士様だよ。彼が傍にいるなら、何があっても大丈夫だから。ちーちゃん、シー君を雇ってあげて。お願い』。

何時になく真剣に、頭さえ下げた幼馴染。決して他人のためにそんなことをする人物ではなかった。他人など興味がなくて、周り中の迷惑を考えない自己中心的天才だった。

あの時の彼女に、その面影はない。あつたのは、必死に歩き始めた幼子のイメージ。

今まで無駄とか必要ないといって切り捨てたものを、何とか覚えようとしている少女の姿を幻視して、千冬は彼を雇うことにした。

生身でISを倒せる、そんなものはないと思っていたが。

まさか、本当にやるとは。

それも現役の国家代表を、開始一分で撃沈。素手の一撃で、ナノマシンスさえ無効化して見せた。

「何者かは、私が知りたいところだ」

小さく呟く千冬の背筋を、冷たい何かが通り抜けた。

ブラックホールを砕く、シャルルとは空想上の生物だろうと、無理やりに思いこみながら。

事態は当人がいない場所でもこそ転がる

その日、ハイネ・ヴェステンフルスは遅い時間に本部に入った。前日まで零時までの行軍訓練を監視しており、出勤は午後二時を少しだけ回ったくらい。

「あれ、シンの奴はいないのか？」

珍しく机に彼の姿がない。

今日は確かデスクワークだったはずだ。任務も入っていないはずなのに、彼の姿がない。

突発的な任務でも入ったのかと考えていると、扉が勢いよく開かれた。

「誰か、シン・アスカを見た者はいるか？」

部隊長のエイルン・バザットが、鬼気迫る顔で聞いてくる。

「俺は今、来たばかりです。いないんですか？」

「ああ、いない。デステイニーもない」

機体ごと不在、まさかそんなとハイネの脳裏に色々な考えが浮かぶ。

「申請書類もない。あいつまさか」

エイルンの顔色が陰る。

まさか、あのシン・アスカにかぎってそんなことはないはずだ。勤勉で真面目で、どんな理不尽な状況も覆してきた彼が、そんなバカなと言葉が廻っていく。

「最悪、MIAとされる可能性が高い」

「そんな！ 部隊長、いくらなんでもそれは酷すぎませんか？」

「しかしな。俺達は政庁直属の部隊だ、それが許可もなく装備を持ち出して行方不明ならば、その決断が下る可能性が高い」

苦渋の選択を強いられているのは、部隊長も同じ。

表情を歪ませる彼に、ハイネも言葉を止めて拳を握る。

「そんな、あいつが、こんなことになるなんて」

「致し方ない。が、まだ可能性があるだけだ。手空きの者を総動員し

て探し出す。シン・アスカが、M I Aになる前に」

「はい、必ず探し出します」

「ああ」

二人はそう言いあって、がっしりと手を組み合う。

「あいつが、M I Aになる前に」

「はい、部隊長！」

ここに男同志の固い結束が結ばれた。

すべては可愛い同僚のために。

という建前で。

「皇帝陛下が馬鹿をやって止められるのはシンだけだ」

「はい、俺たちがおもちゃにされる前に」

「ああ、防波堤となるあいつを見つけ出す」

「必ず探し出しましょう」

男たちの結束は、打算的な考えの結果だった。

「え？ シンがいない？」

「はい、兄は任務中なんですか？」

政庁の執務室の中、アイリス・クロームクラウン・エーテル宰相は話された内容に疑問を浮かべた。

話を持ってきたのはマユ・アスカ。『戦華』と呼ばれるジョーカー帝国軍の中央四軍の第二軍のエース。

「二週間くらい戻っていないので、さすがに両親が不安を感じています。任務中で所在地を教えられないのは知っていますけど」

「ちよっと待って」

マユの言葉を遮って、アイリスはデータ・ボードに視線を向けた。

『ヴィルティラス』の任務内容まで保存されている、政庁内部のみのラインで繋がったボードには、彼の任務内容も記録されているが。

シン・アスカは、任務に就いていない。今日もデスクワークをして本部にいるはずなのだが。

「あの子に任務を与えてはいないわよ?」

「え?」

マユは疑問を浮かべたまま、固まってしまった。

実際、彼は家に戻っていない。ずっと戻らず、そして政庁の本部にもいなく、任務も与えられていない。

「特殊任務とか、ですか?」

「私が把握してない任務なんて、ないと思いたいけど」

宰相である彼女にも知らされていない任務は、存在はしていない。政庁直属の部隊に命令権があるのは、部隊長と宰相、それに皇帝代理の三名のみ。

皇帝やその巫女にさえ、命令権は与えていないのだから。

部隊長が暴走、あり得ない。あのエイルン・バザットが、私情で部隊を動かすことはない。生真面目で愚直なまでの軍人なのだから。

とすると、皇帝代理か。それこそ、絶対じゃない。あのアセイラム・クリシュタリア・エーテルが、相談もなしに部隊を動かすなんて。

動かすとしたら、自分の騎士団だけだ。それに、今は書類を確認しており悪戦苦闘している。

アイリスの隣で。

「じゃ、兄は何処にいるんですか?」

問いかけに、彼女は少しだけ考えるそぶりを見せた後、データ・ボードに指を走らせた。

機体の状況、『ヴィルティラス』格納庫にアクセスして確認、目的の機体がハンガーに存在するか否か。

検索結果、存在せず。

「セラム、ちよつと厄介事よ。貴方、シンの行方を知らない?」

愛称で彼女を呼ぶと、書類が少しだけ揺れた。

「いえ、本部でデスク・ワークなのでしょう?」

書類から顔を上げた彼女は、ホツと一息ついていた。

来年度からの予算案がようやく出来上がったのだから、彼女の心労

もこれで少しは軽減されるかもしれないが、次の書類が待っていることを知らないようだ。

せめて、少しの間は心労を和らげてあげたいのだが、そうもいかないらしい。

「いいえ、いないわ。そして、機体も行方不明」

話された内容に、アセイラムの表情が曇る。

任務でもなく、申請書類もなく、機体ごとの行方不明。特殊部隊ならば装備品ごといなくなった、敵前逃亡を疑うような状況。

「あの、兄は、その」

マユも予想がついたらしく、言葉が震えている。

「無断使用には、厳罰だったわね？」

「はい」

念を押すような話し方のアイリスに、アセイラムは小さく頷くしかなかった。

「そんな!! じゃ、お兄ちゃんは?!」

不安を全身で示す妹に対して、宰相と皇帝代理は無情に告げるしかなかった。

「MIA」

「そんなの! そんなのあんまりです!!」

悲痛なほどの叫び声が執務室に響いた。

『ヴィルティラス』の手すきは、残念ながら五人しかいなかった。

エイルンは速やかに五人を招集、シン・アスカの搜索を開始するつもりでいたのだが。

その前に、呼び出されてしまい、執務室に来ることになってしまった。

「シン・アスカが行方不明。機体も所在不明。知っていたの？」

アイリスからの質問に、エイルンは素直に答えるしかなかった。

「はい、そのため捜索隊を招集し、探索するつもりでした」

「必要ないわ」

冷たく言い放つアイリスは、書類を一枚だけ取り出して、エイルンへと差し出す。

「現時刻を持って、シン・アスカは『MIA』とします」

無情な通告に対して、エイルン・バザットは首を振った。

「お待ちください。まだそうと確定したわけではありません」

「いいえ、彼ならばきつとそうよ」

はつきりと断言するアイリスに、否定の言葉は届きそうにない。

「彼の師匠を知っているかしら？」

「もちろんです。帝国軍人としても、騎士としても、知らないならばそれは『スパイ』でしょう」

「結構。ならば、解るでしょう？」

弟子は師匠に似る。口外の意味に、エイルンは確かにと思わず同意をしてみました。

彼の師匠、『神帝』テラ・エーテルならば軍に入っているとしても、騎士として活躍していても、ふらりと消えてしまうだろう。

そして、何処かで誰かを予想の斜め上な方法で救うのだろう。

きつとシン・アスカも、だ。

「では、そう通達します」

「解りました」

一礼し退出する彼の背中に、哀愁が漂っていた。

「……はあ」

一方、アイリスも深々と溜息をついてイスに腰掛ける。

まさか、彼までも、とは。いくら師匠が放浪癖があるとはいえ、彼は生真面目で勤勉で、任務に忠実な騎士だったのに。

いいや、一方でとても優しい青年だったから、これはある意味で予想通りの結末というべきか。

「ついに、シンまでも、ですね」

アセイラムも深くため息をついて、ゆっくりと指を動かしていく。

できれば、こんな日が来ないことを祈っていた。祈ってはいたが、心の何処かではそうなることを望んでいたのかもしれない。

シン・アスカが『M I A』を与えられる日を。

「セラム、貴方、望んでいたわね？」

「それはアイリスもでは？」

「優しい子だから、きつといつかはと思っていたけど、こんなに速いなんて思わなかったわ」

「私もです。けれど、いつかはこうなると予想はしていました」

「テラにこんなに似なくていいでしょうに」

「ですが、テラと同じように、あの子は多くの人を救う子ですから」

二人は、そこで笑い合った。

『ジョーカーオブジョーカー帝国の切り札』と呼ばれた少年は、こうして『M I A』を受け取ったのでした。

当人を無視して。

エイルンは、部隊の通信ネットワークにある書類を流した。

『シン・アスカは現時刻を持って『M I A』を受けた』。

流された内容に、『ヴィルティラス』総員が大いに嘆いた。最後の防壁が崩れ落ちたことを悲しみ、そして同士が増えたことを喜んでしま

う。

「まさか、シンまでも、か」

深くため息をついた後に、エイルンは『これも宿命か』と小さく呟いた。

「はい、これで全員が『M I A』認定されました」

「嘆くべきか、あるいは皆が一心同体になった、と思うべきか」

部隊長の独白のような言葉に、ハイネはどう答えるべきか悩む。

「はあ、誰が最初に言い出したのだろうか」

「先代です」

「あの人か」

無情な答えに、エイルンは大げさに嘆いて机に頭を打ち付けたのでした。

完全なシステムが構築された帝国において、戦闘中に行方不明になることはない。戦場全体を見通す監視体制と、弾丸一発の消費も見落とさない戦術システムが、全員の位置情報を常に監視している。

では、『M I A』とは何か。

戦闘中に行方不明、ではない。

『M I A』とは、『M―ミツシヨン、I―行かずに、A―アホやった』の略称であり、現在の『ヴェルティラス』全員が貰ったもので、最後に残った一人がシンだった。

そして、この制度を言い出したのは、他ならぬ初代『ヴェルティラス』部隊長―アリー・アル・サーシエスだったりする。

理由―『あいつら、任務中に人助けとか、いやよくやったと褒めてやりたいんだが、その後に任務完全完了とかやっているから文句も言えねえし。よし、不名誉な称号を作ってやろう』。

ちなみに、だが。

シン・アスカの逃亡、あるいは逃げ出した可能性についてだが。

『あのシンにかぎってあり得ない。皇帝が相手でも魔王が相手でも、立ち向かっていく、立派な騎士だから』と、全員が否定した。

信頼と信用は、時に人には重荷になる

ジョーカー銀河帝国主星の政庁執務室は、小さな緊張感に包まれていた。

「作戦目標は、それでいいのね？」

「はい」

アイリスは、話された内容を頭の中で繰り返した後、大きく頷いてモニターを指で弾いた。

「悪人ね。こんなことを考えて、自分の部下を貶めるなんてね」

クスリと笑う彼女は、妖艶な魔女の雰囲気が出ていたが、相手―大柄の男は表情一つ変えずに頷く。

「すべては帝国のためならば」

「本当に面白い話ね、貴方の元主に聞かせたいわ」

「ご容赦を」

「ええ、止めておくわ。『ジンネマン』」

微笑みながら見つめるアイリスに対して、彼―ジンネマンと呼ばれた男は深々と頭を下げた。

「すべては帝国の繁栄のために」

一部の迷いもない宣言に、宰相は満足そうに手を叩いた。

報告が上がったのは、早朝といってもかなり早い時間。まだ朝日が昇ったばかりの政庁執務室には、通信モニターがいくつも開いて、軍上層部の総司令官や参謀、情報関係の主要メンバーなどが顔を見せていた。

「足りない？」

『はい。定期調査のためにハンガーを開けたところ、『RX-0』の数が合いません』

再度の報告に、モニターに映る全員の顔に緊張が走る。

『RX-0』。

元地球連邦から流れてきたデータを基に開発された、新型の技術をつぎ込んだ帝国軍の次世代試作機。という名目で開発されたのだが、一号機から三号機の基礎設計を終えた後に、技術局のロマンが大爆発。

開発ナンバーの変更やら設定を考えてナンバリングを、と上層部があれこれと考えている間に基礎設計を終えた技術局は、他の世界や異世界の技術とかを色々盛り込んで再設計。

一号機ユニコーンが五機、二号機バンシイが五機、三号機フェネクスが六機の計十六機を開発完了。同じ名前を持っていても、外見だけでも違っているような機体が並んだ後、ようやく軍上層部は事態を把握。

一気に蒼白になってどうしようと考えていたら、天下の免罪符が一緒にあって騒いでいたので政庁に丸投げした。

『皇帝陛下の許可はもらったし、途中から開発に加わっていたよ』と言われ、宰相と皇帝代理は盛大に怒声を上げたのでした。

その機体が、足りない。

すべて特殊機体のため専用ハンガーのロックは三重構造。魔法や魔術も使ったロック方式の解除キーを持っているのは、機体の専属パイロットとして登録されている三名と、宰相であるアイリス、皇帝代理のアセイラムの五名のみ。

ロックが解除されたなら記録が残るのだが、どういうわけか記録はない。

「すぐにパイロット達の所在確認を！ バナージ・リンクス、リディ・マーセナス、リタ・ベルナルは?!」

『は！ 全員の所在確認及び行動は把握しています。すでに政庁に三人とも呼び出しています』

「結構、ならばこの場で話を聞きます。それで、どれが足りないの？」

アイリスの問いに、報告を上げていた者は苦々しい顔で答えを口にした。

『はい、『フェネクス』の四機目です』

話された内容を最後に、通信モニターはすべて消えた。

数分後、執務室には三名のパイロットがイスに座らされ、戸惑いの表情を浮かべていた。

「実は、『RX-10』が一機、行方不明になったの」

アイリスは神妙な顔で告げながら、三人を見回す。

機体が複数あったとしても、パーソナル・データによるロックのため一種につきパイロットは一名のみ。

機密保持の側面からも、パイロットを複数にして盗難・あるいは強奪されないように考えていたのだが。

一号機ユニコーンのパイロットはバナージ。

「まさか、僕たちでさえ最近に触れていないんですよ?」

彼は戸惑いよりも強い反発を浮かべている。

二号機バンシイのパイロットはリディ。

「そもそも、ハンガーのロック解除は記録が残るはずでは?」

彼は戸惑いつつも、ありえないと否定を口にしてている。

三号機フェネクスのパイロットはリタ。

彼女は何も話すことなく、俯いていた。

「ええ、そうね。でも、データログはなし。あそこはスタンド・アローンで他とネットワークは繋がっていないから、ネット側からのハッキングの可能性は低い」

「なら、直接のハッキングを? けど、ハンガーは政庁の敷地内、最も厳重な管理体制のある場所ですよ?」

バナージが思い出しつつハンガーの特徴を口にしてくる。それにリディが追加で情報を加える。

「その上、空中散布型のナノマシンセンサーの領域だ。生命体が侵入すれば警報が鳴る。事前に通達しなければならぬが、それも政庁からのシグナルを送るしかない」

「そんなに厳重なんですか?」

バナージの驚きに、リデイは大きく頷いた後に、『あそこは対軍警戒システム配置の最重要機密エリアだからな』と付け足す。

「そんなところに入れるのは、ハッカーかテレポーターか」

「機械的なシステムはそうでしょうけど、実はあそこには結界が張つてあるのよ。六重次元結晶結界、あれを破るとしたら『対界宝具』か、バスターランチャーを打ち込むしかない」

アイリスは真剣な眼差しを向けたまま、小さく機密情報を口にした。

「なら、なおさなら俺達に疑いが向くのはおかしい話じゃないですか？」

「そうです。俺達三人にはニュータイプ特性はあっても、魔法特性はありません」

バナージ、リデイからの否定に、アイリスはそうねと口にしてから、視線を今も俯いて黙っているリタへ向けた。

「足りない、というより存在しないのはフェネクスよ、リタ？」

ギシリと、室内の空気が軋んだ音がした。

まさか、そんなことありえない。

二人の専属パイロットが見つめる先で、最後の一人は俯いたまま顔を上げようとしない。

「正しくは、『フェネクス』四番機」

出された名に、バナージとリデイの中で情報が回る。

同じ計画の中だったので、どの機体のどれがどのような技術で設計・構築されているか細かく知っている。

フェネクス四番機、確か技術試験目的は『量子ジャンプ及び武装の

遠隔転移実験機』。

三番機目から全機が核融合炉から別の機関へ設計変更、その中でも重力子エンジンへの変更をしたユニコーンとバンシイとは別に、フェネクスの四番機に搭載されたのは、『太陽炉』、あるいは『GNドライブ』と呼ばれるもの。

小型化・高出力化された『GNドライブ』は設計段階から、ツインドライブとして制作され、それを六つ同期させることで二乗ではなく共鳴現象による増大化を図った。

両足に二セットで四基、背中のランドセル部分に一セットの二基による出力は、機体と武装を瞬時に転移させることに成功。

ついでに搭載されたエネルギーフィールド・システムにより、一定範囲内ならば機体からのエネルギー送信が行えて、遠隔操作武装が母機にドッキングせずともエネルギーチャージが出来るようになった。

完成した当初、『おい、強すぎ』と言われたりしたが、パイロットがリタだったので、『女の子の機体か。なら仕方がない』となったが。それが、存在しない。

使われたフレームも、サイコ・フレームをベースとしたもので、ナノマテリアルによるサイコ・フレームの再現という、凶悪な代物。

下手をすれば、機関が稼働しているかぎり増殖を続けて、機体の損傷も瞬時に再生させるだけではなく、周辺武装も内部データが残っていればその場で構築可能。

『マテリアル』以外の方法で、武装の再生、機体の自己修復できると大いに科学者達が歓喜したのだが。

「リタ、貴方、『フェネクス』四番機、どうにかしたの？」

「いえ、私は」

何とか絞り出した声は、戸惑いと悲しみを含んでおり、消えそうなほど小さかった。

「いいのよ、素直に答えれば罰則はしないわ。そうね、でも、一つだけ言わせてもらえれば……お小遣いが欲しかったなら私に最初に言いなさい、これでも貴方の姉のつもりなんだから」

「ちよつと待て宰相！」

身を乗り出して『どうして私に言わないの』と全身で語る宰相に、リデイは思わず突っ込みを入れた。

「お小遣い?! お小遣い欲しさにやったと思っっているんですか?!」

「当たり前じゃない! きつと欲しい服が買えなかったのね? あ、もしかして化粧品かしら? 男ができた場合は、私が最初に面接するから」

「止まって! お願いだからそこで止まってください!」

バナージも立ちあがって制止するのだが、アイリスは止まらないで彼らを睨みつける。

「何よ? 女は色々とお金がかかるのよ? ならMSの一機や二十機くらいは売るでしょう?」

「機密の塊を売る理由が小物のため?!」

「どんな理屈でそんなことを考えてるんですか?!」

呆れて嘆くりデイに、頭を抱えるバナージ。二人はアイリスに涙目でチラリと目線を向けた後、『あ』と言葉を口にした。

それに対して、アイリスは鋭く刃のような目を一瞬だけ向けて、リタへ視線を投げた。

「さあ! リタ、お姉さんに言ってみなさい。私のポケットマネーで店ごと買ってあげるから!」

「あ、あの、そんなことないです。知らないです」

絞り出すように告げながら、リタは顔を一瞬だけ挙げて、すぐに俯いた。

「隠さなくていいのよ?」

「本当です」

「そう、答えてくれないのね。悲しいわ。私はそんな貴方にこう言うしかない」

最後の願いこめて慈愛の目線を向けるアイリスに、リタは答えずに顔をあげて首を振った。

「解ったわ、リタ・ベルナル。貴方を拘束し罰則します。罰則内容は後日に伝えるので、政庁内部で謹慎を」

アイリスの一言で、執務室のドアが開いて、女性士官が彼女に退席

を促す。

「私は……」

「これも必然よ、リタ」

悲しい顔を向けた彼女に、アイリスは小さく微笑んだ。

そこで彼女は、『あ』と小さく口にして、頭を下げた後に退室していった。

ドアが閉まり、少しだけ沈黙が下りてきた部屋の中、盛大に溜息が流れた。

「ああ、しんどい。やっぱり、妹分を騙すのは気が引けるわね」

机に突っ伏す勢いのような勢いで、アイリスは椅子へと座りなおした。

「それで、何の茶番だったんですか？」

バナージも椅子へ座り、リデイは大げさに両手を広げた。

「ニュータイプ三人を相手に詐欺ですか？」

「あのね、これでも『精神系防壁』は三重にかけて話をしていたのよ？」

それを目線の一瞬で察する？」

「長い付き合いですから」

軽やかに笑うリデイに、アイリスは『そうね』とだけ答えて、合図を出す。

合図に促されるように、ドアがノックされてジンネマンが入ってきた。

「でどころは彼からよ」

「なんで、ジンネマンさんが？」

驚くバナージに対して、彼は重苦しい顔をしたまま、小さく事の顛末を話していく。

最初の件は、リタの人見知りだ。

彼女は転生者だ。帝国にもあまり多くないが、転生者はいる。それも神様がミスしました、あるいはあまりに酷い人生だったから神様がお詫びに転生させました系の。

前世の記憶は曖昧らしいが、覚えているのは人が怖くなったことと、最後の憎しみ、そして和解。

曖昧な記憶だがしつかりと残ってしまい、それから彼女は人が怖く
なってしまうって、あまり近寄ろうとしなくなっていた。

「そういや、最初の顔合わせから話すようになったのは一か月後くら
いか」

思い出して納得したりデイに、バナージも当時のことを口にした。

「毎日のように色々と感応したり、距離を測ったりしていましたから」
「苦労したんだよな」

しみみりと語る二人に、アイリスは『それが原因よ』と伝えた。

「彼女の容姿と、その態度で幼子を見守るようになってしまったな」

ジンネマンはそれはそれでいいのかもと告げた後、部隊の空気が一
変したことを話し出した。

「幼子のオドオドした態度に過保護が増えて、その後に全員が変な気
持になっていった」

「おいおい」

リデイが呆れた顔をしたのだが、ジンネマンとしては死活問題だ。

特に彼が、中央四軍の内の一つ、第四軍を預かる身としては。

「で、ジンネマン第四軍司令官の話を受けて、今回の作戦となったわ
け」

「具体的にはどういった？」

「リタに懲罰として、社交界とかに連れ回す。荒療治よ」

話された内容に、バナージとリデイはどうしてそう言ったと言いた
くなくなった。

「だって、あの子のドレス姿、見たことないんだもの」

「完全に宰相の趣味全開ってわけですね」

「それに俺が乗った形だ」

「うわあ」

呆れたような二人に対して、司令官と宰相は『いいじゃないか』と
割り切っていた。

「あれ、ちなみに『フェネクス』は？」

「ああ、あれ。本当に飛ばしたわよ」

「は？ いやいやあれ一機で艦艇五隻は建造できる資金が回りますよ

ね?!」

意外な事実が発覚して、リデイは驚愕して建造費用を口にした。
た。

「リタの人見知りが治るなら五億とか十億なんて、安いものよ」

「宰相?!」

きつぱりと言い切るアイリスに対して、バナージとリデイは盛大に
悲嘆するように叫んだのでした。

ちなみに、何処へ飛ばしたかというと。

「デステイニーの信号をなぞるように、『ぶつかれ』って命令してオー
ト」

「シン、大丈夫かな?」

「強く生きろよ、シン」

あまりにあまりな内容に、バナージとリデイは『M I A』中の友人
の身を案じたのでした。

ブルリと体中が震えてきた。

何がと思つて振り返った先、鬼の形相の知り合いがいて。

「なんているのさ、シン!?!」

「どうして?!?!」

シャルロットとセシリアが迫ってくる中、シンは肩に担いだ脚立を
持ち直し、両手を上げたのでした。

「あ、俺、ここで用務員やってるから」

「はい?!?! いや知らないけど!」

「もう一か月も経っていますのに?!」

「連絡しないってどういうこと?!」

「そんなに薄情な人とは思いませんでした!!」

矢継ぎ早に責め立てられ、シンはたまらずに謝るしかなく。

「悪かったよ。俺だつてここの仕事を覚えるので忙しくてさ。規則もかなり厳しくて、立ち入り制限の場所も多くて」

「そんなのシンならすぐに覚えそうなのにな?」

「あ、俺さ、方向音痴じゃないけど、そういつたことにあまり機敏じゃないんだよ」

「意外だね」

シャルロットの言葉に、シンは仕方がないと答えるしかなかった。

元々、彼の立場で言えば立ち入り禁止の場所のほうが少なく、仕事場では入れない場所などなかった。

政庁の中でもフリーパス。時々、ハンガーとか危ないから立ち入り禁止というところはあったが、それでも大半の場所に入れた。

なので、今のように『ここはこの時間は駄目』、『ここは何曜日何時から何時まで侵入禁止』といった内容は、覚えるのにかなり時間が必要だった。

今もティスが視界内に『ダメ』『そっちは無理』と表示してもらい、やっとIS学園内を歩けるほどだ。

『意外に、そういつたところ不器用だよな、お前』とハイネによくからかわれたものだが。

「意外ですわね」

口に手を当てて驚いているセシリアに、『俺だつて苦手なものはある』と口の中で言葉を回す。

「で、そっちで驚いているのは、友達?」

「あ、うん、あっちの女性が『篠ノ之・箒』さん」

丁寧に手を差しながら紹介してくれたのは、あの束の妹。

気の強そうなポニーテールの少女は、小さく会釈してくれた。

どうも、とシンも会釈を返した後、セシリアがもう一人の『男性』を紹介してくれた。

「こちらが織斑・一夏さんですわ」

「よろしく。へえ〜I S学園に男の用務員さんもいたんだ」

気安く手を差し伸べてくる彼に、シンも親しみやすい笑顔で答える。

「シン・アスカだ。よろしく。シンって呼んでくれよ」

「なら、俺も一夏って呼んでくれ。良かったよ、男は俺一人かなって思っていたんだ」

「女子高みみたいな所だからな。ま、何かあったら言ってくれ、それなりに手伝ってやるよ」

「助かるよ」

二人はそういって手を握り合った。これが二人の最初の出会いであり、後に色々と厄介事が始まった瞬間でもあった。

特に朴念仁に振り回されるシンの苦難は、ここから始まったともいえる。

後にテイスは語る。

『シンって安請け合いが多くなったよね』と。

不死鳥、襲来

シャルロットは時々、疑問を感じることもある。

シン・アスカとは何者なのか。

助けてもらったことは感謝している。何処にいても駆けつけてくれそうな安心感も、確かにある。

けれど、だ。

「なあ、シャル」

一夏に愛称で呼ばれ、顔を向けて見ると、彼はちよつと引いたような顔で外を指さしていた。

「あれって、シンじゃないのか？」

言われて指が向いたほうを見てみると、そこにはシンが歩いていた。

人なのだから歩くのは当たり前。彼が人でいいのかどうかは、ちよつと疑問を感じることものだが、当人が人間と知っているので歩くくらいはやるのだろうか、問題はその場所だ。

隣の校舎の屋上。そこに続くような階段は確かなかったはずなのに、彼はそこを歩いていて、一通り行ったり来たりした後、飛び降りた。

「何してんだ?!」

「あそこは三階以上の高さじゃなかったか?!」

箒も驚いて窓に駆け寄ろうとしたので、シャルロットは嘆息交じりに告げることにした。

「あ、大丈夫だよ。シンだから」

「ええ、シンさんですから」

セシリアも同意を示すので、一夏と箒は『何言つてんだ』という顔で振り返り、再び窓まで走ろうとして固まる。

飛び降りたはずのシンが、再び屋上に戻っている。

「はっ..」

「いや、待て。また飛び降りて、また屋上に戻ってきた?!」

「なんでそんなことができるんだ?!」

驚いて大声を出すものだから、クラス全員が興味を引かれて窓に詰め寄り、シンの奇行を見ることになった。

「シン・アスカさんって何者?」

「あゝ何者だろうね」

詰め寄ってくるクラスメートに対して、シャルロットは自分も疑問だと内心で思いながらも、とりあえず半眼で呟く。

「人間の身体能力って鍛えるとあそこまで伸びるのか」

一夏が呟いた言葉に、奇妙な感情がついているように思えた。

憧れか嫉妬か。あるいは、そのどちらもか。彼は初めて会った時から、何処か強さを求めている節がある。

弱くては護れない、強くなければ意味がない。言葉の端々に、彼の内心の願望が見え隠れているようで、シャルロットは怖くなる時がある。

「噂では生徒会長も倒したって話らしいよ」

クラスメートの言葉に、教室中がざわめいた。

IS学園の最強と名高い生徒会長を沈めた人物。彼がISに乗れないのは先生側からの話で知れ渡っている。

となれば、彼は生身で生徒会長を下したということになるが。

シャルロットとセシリアからすれば、『ああ』と言って納得できる話だ。シン・アスカが負けることなんて、思い浮かばない。

とにかく、だ。

「止めた方がいいかな?」

「シンさんを止められる方がいるとは思えませんわ」

「だよね」

そこで、どちらともなくため息をついたのでした。

用務員という仕事は、実はシンにとって初めての経験だった。普段はウェイターからコック、あるいは先生までと任務に従ってあらゆる職業についたが、用務員になったことは一度もない。

どんな仕事なのだろうと考えていたシンに与えられた最初の任務は。

「掃除だ」

「・・・なるほど」

モップとバケツを渡されたシンは、速やかに動いた。

ティスに従って立ち入り禁止の区画以外をモップで拭いていく。途中で校舎の内部構造を把握、電力や通信用のケーブルの位置確認、教室の配置、人の動きなども追加でマッピング開始。

IS学園といっても、普通の授業もあるらしく、廊下に漏れ聞こえる単語は帝国の学校でも聞いたことがあるもの。

「学生って、潜入任務の時以来かな」

『だよね。ブレザーや学生服のシンって、決まっていなかったよね』

「そうかな?」

『そうだよ。やっぱりシンは軍服が一番だよ』

横を歩きながら、ティスはうんうんと腕組みして頷いている。

彼女は自信を持って言ってくれるのだが、シンとしては似合っているかどうか解らない。

ただ、帝国軍の軍服か、あるいは『ヴィルティラス』の軍服を着ていた期間が最も長い。

型にはめて、戦い方まではめるつもりはないと言っていたが、正式な行事には軍服を着ることを求められた。

顔に仮面かぶって軍服は、『ヴィルティラス』だけだったので、異様に目立っていたが。

他となると、とシンは思い出しかけて体が少しだけ震えた。

仮面に全身を覆い隠すマント装備。公式行事において、全身を隠して参加できるのはジョーカー銀河帝国でも、一つの部隊しかない。

『サイレント騎士団』近衛騎士。『レッド・ミラージュ』。最強の幻影

と呼ばれた存在は、いるだけで恐怖を叩きつけてくる。

戦ったことはないが、戦って勝てると思つたことは一度もない。

『シン、怖いものが怖いままってことはないよ』

ティスに言われ、ハツとして足を動かした。

つい昔を思い出して止まってしまっていたらしいが、無理もないかと自分の行動に納得する。

本当に怖い存在だったから。

一通り廊下などをモップがけた後、天井とかの掃除まで言われたので壁走りとか、天井にはりついてやってみたのだが。

「そうか、おまえは人間じゃないんだな」

「はい？」

何故か千冬に呆れた顔で見られてしまい、どうしてそんな話になるのかと疑問を浮かべる。

「え、普通ですよね？」

「その何処が普通だというんだ？ 普通は天井に張りつくなんてできないぞ」

「はっ」

シン、驚愕の事実を突きつけられる。

「いやいや嘘ですよ？ 俺の周りはやりますよ。分身とか作って掃除とかしていましたし」

「何処の忍者だ、それは？ 影分身とかやるのか？」

「多重影分身は必須技能だって言われましたよ」

今度は、千冬が絶句した。冗談で口にしたことを、さらに上回る言い方で返されて、言葉に詰まってしまう。

「……おまえの『今の仕事』はそういうところか」

「さあ？」

軽くとぼけてみる。答えても問題はないかもしれないが、現在位置が不明な上に敵対国家の中かもしれないので、慎重に物事は進めるべきだ。

ティスが隣で『言ったら怒られる』と全身で語っているからじゃない、絶対にそうじゃないので。

「続きだ」

彼女は特に気にした様子もなく、シンに次々に用事を頼んでいくのだが、それを彼は生身一つで解決していく。

本当に有望な人材だったんだな、と千冬は後に山田・摩耶に語っていたというのだが。

その日は、珍しいくらいに快晴だった。

雲一つない空の下、一夏はセシリアの指導の元で訓練を行っていた。

そこにはシャルロットと箒もいて、『訓練を見てくれ』と言われたシンもいる。

「へえ、中々いい動きだな」

「シンから見たら拙いんじゃないの？」

「いやいや、見事だって。つい先日まで素人だったにしては、上達したさ」

一夏の動きを眺めながら、自分の時はこんなに短時間で上手く動かせなかったことを思い出す。

あの頃は、毎日が必至だった。必死に頑張って、必死にやろうとしても上手くできなくて苦労して頑張って。

空中を飛びまわる一夏と、彼に対して攻撃を仕掛けるセシリア。

初めて見たが、セシリアも見事だ。射撃戦は、自分にとって苦手な部類なので上手く言えないが。

「そういえば、シンって射撃の腕もすごかったりして」

「俺はできなんだよ」

「えっ？」

事実を話したのだが、何故かシャルロットが止まってしまった。

「え、射撃できないの?」

「撃てないことはないけど、砲撃とかはおおざっぱになるし、狙撃なんてしようと思っただら止まるからな」

本当にどうしてと、誰もが疑問に思うほどに、シン・アスカは射撃戦の成績が良くない。

『ヴィルティラス』どころか、帝国軍や警察機構とか銃を扱う人たちを集めても下から数えたほうが速いくらいに、砲撃戦能力が低い。

「シンにも苦手なものがあつたんだ」

「だから、俺だって人間なんだから、苦手なものくらいあるって」

「意外だなあ」

ちよつと嬉しそうに笑うシャルロットに、何でだろうとシンが目線に向けた瞬間だった。

『シン!!!』

ティスの悲鳴と同時に、脳内に鳴り響く警告音。何がと目線に向けた先、訓練場―アリーナの中心に蒼い粒子が踊っていた。

蒼が増え、翠が混ざり合った後、金色が出現した。

「嘘、だろ」

姿を現したのは、金色の人型。全長は五メートルくらいの小型、一般的なISと同じ大きさなのだが、『それ』を見間違えるわけがない。

『なんだあれ?!』

『何者なのですか?!』

上空の一夏とセシリアの声に、シンは答えている余裕はない。

知っている機体だ。流れる粒子、金色の装甲、何よりも背中のパイonder型 of 装備は、とても見覚えがある。

機体コンセプトは、強襲。

一号機から三号機を通して、強襲しての敵地への侵攻及び殲滅を、隠したコンセプトとして設計された機体であり、中でも自分の愛機―『アステイニー』のデータを一部で取り入れた機体。

『RX-10』の形式番号を与えられた、可能性の獣の一匹。『マテリアル』以外で初めて再生装甲を実装した、MSの枠外になった機体。

それが静かに立ち上がり、頭部をゆっくりと回す。

『誰のISなんだ?』

迂闊に降りてくる一夏に、シンは鋭く叫んだ。

「逃げるー! 近づくんじゃないー!」

『は? 何を・・・』

シユンという音の後、ドゴンと轟音が舞い上がった。

咄嗟にというより、反射的にガードしたシンの両腕に衝撃が走る。

殴られたというより掴まれた、と判断した瞬間には壁に向かって自分飛んでいた。

続いて衝撃、背中から叩きつけられたが、痛みはそれほどない。

瞬間的にテイスがフォローしてくれた、ダメージは機体が変わりに受けてシン自身に損傷なし。

「クソ、なんで『フェネクス』がここにいるんだよ」

立ち上がり、睨みつける先で、その機体の全身に亀裂が入ったように輝きが増す。

装甲が展開、次々に開いてく装甲の果て、最後のフェイスガードと頭部アンテナが展開。

同時に粒子供給量が急激に増加して、『フェネクス』の周囲にシールドガトリングやビーム・マグナムが次々に構築されていく。

「四番機かよ! テイス!!」

『アロンダイトとエクスカリバー展開!』

右手に連結されたエクスカリバーを、左手にアロンダイトを持ったシンは、迷わずに地面を蹴とばす。

最大速度、手加減なしの一撃は、『フェネクス』の体をすり抜けた。

「量子テレポート?!」

『嘘?! こんなに速いの?!』

テイスのセンサーやレーザーダーをすり抜けるほどの速度。ハツとして気づいて後ろに刃を回す途中で、光刃が振り下ろされた。

両腕のビーム・トンファーが発光。ビーム・サーベルが二つとも振り下ろされ、シンの体を吹き飛ばす。

地面を転がる、何度も転がりながらも地面に二つの刃を突きつけて

勢いを殺し、縮地発動。

同時に背中にバーニア展開。通常ノズルの推進力を利用した、倍化した加速だったのだが、『フェネクス』は展開していたシールドを間に挟み込んだ。

『思考制御直結なんて嘘だ！』

「こんなにも速いなんてニューロ・コンピュータでも積んでんのかよ!!」
連続攻撃、両手の武器を次々に繰り出すのだが、ビットのように周囲に浮かんだ六つのシールドが次々に受け止めていく。

もちろん、シールドは無事ではなく一撃で斬られるのだが、数秒後には再生してしまう。

「厄介な！」

『さすが四番機！ シン！ ジェネレータを止めないと追いつかないよ！』

「解ってる！ ティス！ 援護！」

『了解！ 『フェザー・ビット』展開！』

軽やかに翼が舞うように、羽根が幾つもシンの周囲に舞い踊る。

フェザー・ビットは羽根型のビットであり、射撃が苦手なシンのためにティスが直接コントロールするビットだ。速度と射撃性能に特化させてはいるが、使用されている金属の強度のため、実体剣としても使える。

ただし、一度の使用で損傷して壊れるため、完全な使い捨てだ。

百以上のフェザー・ビットが、『フェネクス』のシールドに突き刺さって破壊していく。

「そこだ!!」

シンはその間に本体に攻撃を仕掛けるが、相手もビーム・トンファーを起動して追従してくる。

一進一退の攻防が、続く。

一夏は、それを何とか眼で追っていた。

ふとしたら捕らえきれないものは、ISを通して何とか見えるくらいの速度で、次々に攻撃を繰り返すシンを何とか視界に収めていた。

「なんだよ、それ」

シールドが踊り、巨大な刃を振り回し、それを光の刃が受け止めて、受け流す。

相手は機械なのだろうか、あるいは何処かのISか。一夏には解らないが、ただ一つだけ解ることがある。

シン・アスカは、生身でISと互角に戦っている。これが、本当のISの戦いなのかと彼が思っていると、隣に浮かんでいたセシリアが悔しそうにつぶやく。

「やはり、シンさんは強すぎますわ」

「え？ ISってあんな使い方ができるんじゃないのか？」

「いいえ。あの機体が、ISであるはずがありません。あんな速度やレポートのような技術は、今の世界にはありません」

予想外のことを言われ、一夏は驚愕の顔でシンと未確認ISの戦闘を見つめた。

「けれど、今はシンさんの技量に驚くべきでしょう。あのような戦い方を生身で出来る人は、世界中を探してもいませんわ」

「シンが強いつてことか」

「ええ、恐らく今の世界でシンさんに勝てる相手なんて、いません」
はつきりと言い切るセシリアに、一夏はギュツと拳を握り締めた。
最強。不意にそんな言葉が頭に浮かび、姉の姿が脳裏をよぎる。

今のシンと姉ならば、姉が勝つと信じたい。信じたいのだが、どうしても『勝てる』と思えない。

「なんでおまえはそんなに強いんだよ」

一夏の呟きに答えるものではなく、戦闘はやがて収束していった。

唐突な未確認ISの消失、あと一步まで追いつめたシンの一撃は、光の粒子をまき散らすだけで、機体まで届かなかった。

地面に突き刺さった右手の武装を振り抜いて、彼は小さく息を吐いた。

汗一つかいていない、全力を出していないようなシンの姿に、一夏は心の底から嫉妬する自分を感じていた。

その日、IS学園で一つのアーリーナが使用不能になった。原因は誰も知らず、関係者は口を閉ざした。

魔弾の射手

フェネクス襲来後、学園は大騒ぎになっていた。

アリーナの監視カメラはすべて全滅、防護フィールドがあつて侵入者を防ぐはずなのに、作動した形跡はない。

ならば、敵は何処から入ったのか。

調査委員会を立ち上げて本格的に調べるべきだ、という意見もあつたのだが。

それを止めたのは織斑・千冬だった。

『この一件は、私が預かります』と。

彼女の実力、あるいは今までの職務態度により、反対意見も出ずにこの一件は一任されることになった。

「頭の痛い問題だな」

小さく呟く彼女の前で、問題の解決手段を持っているはずの人物は、ずっと黙ったままでいる。

「シン・アスカ、相手の情報について話せないのか？」

「すみません」

何度も繰り返される問答に、千冬は小さくため息をついた。

明らかにシンは相手を知っていた。

相手の武装、性能を把握した上で対応していたように見えた、とあの時にアリーナにいた全員が話していた。

だというのに、彼は何も話そうとしない。

「本来なら拘束して話させることもできるが」

『もしも』の話を振った瞬間、千冬は強烈な寒気を感じた。

シン・アスカは黙ったまま座っている。気配が変化した様子もなく、眼光が鋭くなったわけでもない。

威圧か、あるいは圧迫感。妙な気配は彼ではない、その後ろにいる何者かが自分を睨みつけている。

「おまえには、用心棒がいるようだな」

「ええ、まあ」

曖昧に答えながら、彼は小さく何かを呟いた。途端に気配が消えて、寒気がスツとなくなつた。

「今後、あいつはまた来るのか？ 確か、『フェネクス』だったか？」
不死鳥の名を持つISか。

千冬は小さく口の中で転がしながら、もしあれを相手にして戦えるのかと考え始める。

無理だ。相手の武装を壊しながら、あの速度に対応できる人間などいない。もし自分がISを、あの『相棒』を使えるならば可能性はあるが。

「武装はまだあるのか？」

「大丈夫です」

「そうか、解つた。ならば、次からは任せる。用務員の仕事に、警備もあるからな」

「解りました」

一礼し、シン・アスカは退出していく。

「おまえが何者で、何処に所属しているのか、本当に知りたくなつた」
彼が出て行つたドアに向けて、千冬は小さく言葉を投げた。

廊下を歩きながら、シンは小さくため息をついた。

「で、テイス？」

『ふうむ。我が主に対しての不敬、許し難し。我が名にかけて成敗いたす』

妙に古風な言い回しに、何を言つてんだと隣を見てみると、着物姿に刀を持ったテイスがいたりした。

「何してんだよ？」

『うん、今日は侍の気分なのです』

『どういう気分なのだろうか。』

頭痛がしてきたシンは、振り払うように別のことを考えるようにした。

相手は『フェネクス』の四番機。主動力が動き続けるかぎり、相手の武装に限界はない。

無限の武器庫を背負った独立機動兵器。それは、まさしく『マテリアル』そのもの。

通常のMSといった兵器が建造時のサイズを変えられないのに対して、『RX-0』シリーズは『マテリアル』と同じようにサイズを変更できる。

『フェネクス』四番機が実証したデータを得て、それ以降の『RX-0』全機に実装されたシステムは、現在の帝国軍の正式採用機体の一部であるが搭載されている。

戦場における武器・弾薬の補充。転送システムとは別に、機体内部にて精製される武装の数々は、単体及び部隊の作戦遂行能力を格段に高めた。

パイロットの体力が持つ限り無限に動き続ける機体、撃ち続けても尽きることはない弾薬とエネルギー。味方からも敵からも畏怖される機動兵器は、無慈悲に戦場を蹂躪していく。

しかし、だ。

シンはギュツと拳を握った。

『マテリアル』には届かなかった。武装も含めて、パイロットが望むままに大きさを変える『マテリアル』は、規格外を通り越して『機械にして魔法を使う』といわれるほどの存在となった。

「こっちの武装は？」

『フェザー・ビットは補充完了、エクスカリバーとアロンダイトは修復完了。機体コンディションは良好』

問題はないか。使ったとはいっても、遊び程度にしか使っていないから、それほど心配はしていなかったが、まさかここまで損傷も欠損もないとは。相変わらずのタフさに、シンは苦笑してしまう。

『で、機密メールにあった内容だけど、どうするの?』

『フェネクス』と相対した瞬間に、テイス相手に送られてきたメールには、アイリスの署名が添えられていた。

『貴方の射撃能力の向上と、こっちの都合で『フェネクス』四番機を送るから、撃破しなさい』。

いいのかよ、とシンは思い出した内容に呆れてしまう。

一機の建造で艦艇五隻分とか聞いていたのだが、それを撃破しろとはどういった都合があったのだろうか。

リタ関係か。ほぼ間違はなく、彼女関係で何かがあって、その過程で『フェネクス』の撃破が必要になったと。

どういうことなのか、色々と問い詰めたのだが、あいにくと通信手段がない。いや、もしかしたらテイスに言えば『マテリアル』の次元通信手段で連絡できるかもしれないが。

自分の第六感が告げている、『絶対にろくでもないこと』だと。皇帝の馬鹿まっしぐらの行動によって鍛えられたシン・アスカの第六感とは、かなりの精度で今回の一件の原因を突き止めていた。

頭痛がしてくる。彼女は冷静で穏やかなくせに、どこか損得勘定が偏っていることがある。

女の子の純情のためならば、十億くらいは捨てるくらい、確実にしそうだ。いややったことがある。前に何度か、国家予算並の資金を使つて、そういったことを叶えたことがあった。

周りの苦情も、資金の無駄遣いといった文句も、『皇帝陛下が補てんしたけど、ダメかしら?』の一言で、黙るしかなかった。

チートだよな、とシンは口の中で言葉を転がす。

なんていつても、最大のチートというかバグは『神帝』テラ・エーテル銀河帝国皇帝陛下か。

単体の戦闘能力は次元が違う。『王の財宝』もどきの武器システム、真祖クラスの眷獣を十二体、その上に四つの神様もどきの獣を従えて、瞳に九人の異能の王の力を宿す。

父親は初代から両親の力と技能のすべてを子供に宿す一族の直系、母親は天魔の一族最後の純潔の姫。

彼の私物扱いの『サイレント騎士団』は、平然と銀河戦争や次元空間での殲滅戦を行う破壊神の集団。

『霧の艦隊』の技術と、他に色々と混ぜり合わせた『絶・戦艦』級という名の戦艦空母の二隻、『イオナ』と『アリア』が司る総旗艦直衛の遊撃艦隊。

全長千メートル級の巨大な総旗艦『アルカディア』と、惑星管理コンピュータ以上の処理能力を持つメインコンピュータの『バビロン』。

そして、彼の代行者にして、『冷酷無比な巫女』ホシノ・ルリ。

彼一人で銀河戦争、彼に従う『サイレント騎士団』も含めれば、多次元戦争さえ殲滅戦できるんじゃないか、と噂になる彼。

で、『黄金律』はEXあるんじゃないかって金運を持っているから、帝国が財政難になることはない、と。

『シン、シン、テラ様のこと？』

「あの人って、弱点があるんだよな？」

『うん、政庁ではイスに座つても一時間もたない、書類仕事は誤字脱字だからで止めさせた、料理を作ろうとして台所を爆発させたって話があるよ』

「あ~~~~」

戦闘面では無敵で無敗で無双なのだが、一般的な状況ではまったく役に立たない人だった。

『あ、シン、アイリス様から『フェネクス』の撃破手段が送られてきたよ』

「本当か？ 助かった、それで？」

『うん、背部ユニットへ狙撃、三発直撃で撃破』

その瞬間、シンが浮かべた表情をティスは、ずっと忘れられなかったという。

背部ユニットへ狙撃三発。

亜光速で動きまわる相手に、背部ユニットへの狙撃を行えと。射撃能力が高くない、というより低い自分に対してあまりに酷い仕打ちではないか。

これは本格的に、彼女は自分の射撃能力を向上させるつもりか。

『ん〜でもシンって土壇場や逆境で能力値を上げるよね』

隣のティスが意味不明なことを言っているのだが、そんなことはないと彼自身は否定したくなかった。

『シンって、自己評価が低いよね』

『正当な評価してるだろ?』

『そうかな?』

きよとんとした顔で首を傾げる幼子は、とても可愛くて魅力的なのだが、着物姿に刀を帯びているので、色々と台無しだったりする。

とにかくだ、手段が解ったならば実行するのみだ。

訓練したいな、と考えていたシンは今日も通常業務に戻るのでした。

「あ」

「お」

掃除道具を持って歩いた廊下で、シンは前から歩いてくる一夏達を見つけた。

「授業か? 移動教室ってところかな?」

「・・・なあ、どうしてシンはあんなに強いんだ?」

質問に対して、まったく別の言葉が返ってきた。

真剣に、真っ直ぐに見詰めてくる一夏の瞳には、僅かな怒りが浮かんで見えた。後は、深くドロドロとした嫉妬。

「俺はそんなに強くないよ。仲間の間じゃ、俺は平均クラスでしかない」

彼の色々な感情を知りながら、シンは知らない顔で答えながら足を進める。

「IS相手に生身で戦えたじゃないか」

「まあ、あのくらいなら。誰でもやれるさ」

実際、『ヴィルティラス』ならば全員があのかのくらいの動きはできる。生身での戦闘が苦手な騎士でも、音速戦闘くらいはできなければ『ヴィルティラス』所属にはなれない。

帝国軍でも、中尉以上ならば音速戦闘くらいは部隊訓練でやる。規定によれば大尉への昇進条件が、『生身での音速戦闘及び銃弾を回避もしくは斬撃などによる斬り払い』と明記されている。

「俺でもできるか?」

「さあ?」

何故にそこで一夏が、そんなことを質問してくるのか。

シンは相手の意図が解らずに、曖昧に答えを出した。

努力すればできるのではないか、あるいは帝国だけなのだろうか。シン・アスカにとっては、周りとは帝国の住民だけなのでそれ以外が可能なのかどうかは解らない。

「シン、俺を鍛えてくれないか?」

「いや一夏はセシリア達に特訓してもらっているんだろ? なら、それで強くなれよ。俺のは、そうだな」

真剣な顔の彼に対して、シンは自分の過去を思い出して一瞬で蒼白になって首を振った。

「地獄に行きたいか?」

目が死んでいる彼の問いかけに、殺気じみていた一夏が僅かに身を引いた。

周りで聞いていた全員が、『大げさだな』と思っていたが、彼の言葉には真実しかない。

実際、シン・アスカは何度も死んでいるのだから。

『あ、鬼灯さん、こんにちは』とか日常的に挨拶をした後、閻魔大王に『また来たの、シン君。君も好きだねえ』と言われて呆れられたりしたのは、いい思い出だ。

いい思い出と言わないと挫けそうだが。

「俺は強くなりたいたいだ。シンみたいに」

「俺じゃなくて、一夏らしく強くなれよ。それ、おまえの専用機だろ？」

彼がつけているブレスレットが、彼の専用機『百式』の待機状態なのだろう。軽く指さすと、一夏は視線を向けた後、付きだしてきた。「俺はこいつに恥じないような人間になりたい。千冬姉に顔向けできない男にはなりたくない。だから」

頼む。真っ直ぐに見詰めて、頭を下げた彼に対して、シン・アスカは昔の自分を幻視していた。

きつと、あの時の師匠もこんな気持ちだったのだろうか。

「解ったよ。ただし、ISを使ってだな。その代り、訓練場で俺もやりたいことがあるから、それをしたいかい？」

「あ、ああ！ 訓練場の使用申請してくる！」

「放課後になったらな。授業に出ないと、怒られるぞ」
「解った、ありがとな」

笑顔を浮かべる一夏に、シンは『ま、お互いに男だからこれくらいはな』と軽く答えて掃除道具を再び持ち上げて歩きだす。

「あ、そうだ、一夏。おまえさ、死んでも生き返ることできるよな？」

「なに言ってるんだ、シン？ 普通、無理だろ？」

振り返った彼の一言に、その場にいた全員が否定を浮かべた。

「そうか？ なら、手加減してやろうか」

意外そうに頷いた彼は、そのまま歩いて行ってしまふ。

残された誰もが、一夏も含めた全員が『彼も冗談を言うのか』と思っただというが。後に織斑・一夏は語る、『はは、冗談じゃなかったんだな』と。

そして、彼は空を舞ったのでした。

ISは現行の兵器を一掃し、価値観を一遍させた希代の発明。その武器の威力、武装の豊富さ、防御の固さなどから『最強の兵器』と呼ばれることもあるのだが。

白い機体が空を舞う。自らの翼で空を優雅に飛び回る姿は、兵器というよりは妖精か何かに見えなくもない。

しかしだ、彼は自分の意思でも機体の制御でも、飛んでいるわけではないので見ている者からすれば恐怖の象徴でもあった。

「……素人にしてはいい動きだぞ」

「慰めにもなっていないよ、シン」

右足を突き出した状態で、彼は何故か穏やかな表情で語っていたのだが、見ていたシャルロットからしてみれば、追い打ちをかけているようなものだった。

訓練開始後、ISを纏った一夏は突撃するたびにシンに迎撃され、撃墜されてはアリーナの壁に飛んで行って激突。壁には彼の大ききの穴が何個も作られていた。

「いや、実際にいい動きだつて。まだ動かして一か月もたっていないのに、この動きができるのはセンスがいい証拠だ」

「褒め言葉が殺し文句に聞こえますわね」

なるほどとうなずくセシリアだったが、言い方が妙な方向に行っていることに気づいていない。

「それ、『相手を惚れさせるって意味』じゃなかったかな？」

「え、えええ?! そ、そうなのですか? 日本語とは難しいものですね」

「あ、うん、そうだね。セシリアってやつぱり天然?」

「私の何処が天然なのですか?」

話が脱線しているような二人を横目に見ながら、シンは一夏の動きを改めて観察してみた。

動きはいい、本当に嘘やお世辞じゃなくそう思った。ただ、それは

素人にしてはといったレベル。昔からISを扱っているセシリアと比べたら、子供が遊んでいるようにしか見えない。

彼がクラス代表になったのは、虐めじゃないかと疑ったのだが、できるだけ多くの時間をISに使えるように配慮した結果なのだろう。

セシリアとシャルロットが、彼を代表に押したということも加えれば、自己防衛のためということもあり得る。

彼は唯一の男性適応者。これから先、色々な組織に狙われることを考えれば自衛手段のISが自由自在に使えるようになることは、彼の安全のためにもいいことだ。

「よし、本気で行くぞ一夏」

「ちよ、ま」

「男なら二言ないよな」

後にセシリアとシャルロットは語る。

『あの時のシン・アスカは鬼だった』と。

訓練でアリーナを借りられる時間の半分を一夏の特訓へ、残りの半分をシンは自分の射撃訓練に貫うことにした。

というよりも、一夏が半分の時間でボロ雑巾のようになってしまい、シャルロットから『ストップ』がかかったからという理由もあるが。

「あゝゝそっか、シンも人間だったんだね」

「シンさん、私はそんなシンさんでも尊敬していますわ」

二人からの視線が痛い。

一夏や箒からの視線も、『暖かくて理解ある』ものに変わっている。

「だから、俺は人間だって」

前前から言っているのに、どうして信じてくれないのか。全員からの視線が暖かくて泣けてくる中で、シンは右手に持った銃を再び上げる。

オートマチックの、何処にでもあるような銃を構え、トリガーに指をかけて引き金を引く。

標的までは五メートル。素人でも当たる距離なのに、八発の弾丸の中での命中したのは二発のみ。

『うん、シン、こりやだめだあ』

「何処の殿様だ、この野郎」

隣で大きさに嘆くティスにゲンコツを入れたくなかったが、グツと堪えてカートリッジを交換する。

次々に弾丸を消費するのだが、当たらない。

まさかの動いているのかとシン以外の全員が考えるほど、彼の弾丸は的を外して何処かへ行ってしまう。

しかし、だ。的の後ろに配置した壁にすべての弾丸が刺さっているので、彼の射撃が外しているだけだったりする。

「ああ、クソ。もうこうなったら殴ってやる」

「シン！ それじゃいつもと変わらないじゃない！」

「射撃を鍛えたいのでは？」

シャルロットとセシリアの言葉で、なんとかシンは踏みとどまる。

「なあ、俺の射撃って何が悪いんだ？」

はあと溜息をついて振り返るのだが、四人から見てもシン・アスカの射撃の姿勢などに問題は見られない。

むしろ、なんで当たらないのが解らない。五メートルの距離を外す彼の技量が、別の意味で飛び抜けているのではないかと疑ってしまう。

誰もが原因が解らない中、唐突にティスが両手を上げた。

『あ、シン、いい人の助言がある』

「誰だよ？」

唐突に両手をあげて振り回す相棒に、シンは誰の助言かを考え出した。

ロックオン・ストラトスカ、あるいは次元・大介か。もしくは、射撃や砲撃の分野でトップをとった誰かか。

『じゃん！ 『射撃の神様』からのアドバイスビデオメールです』

「はあああああ?!」

思わず、シンは叫んでしまった。

彼のことはよく知っている。

射撃において、帝国内で並ぶものなし。早撃ち、狙撃、砲撃なんて

もこなすエキスパート。射撃において、事象や法則さえ改変しているのではと疑われるほど、彼の射撃は別次元だった。

特にだ、あのチートオブチートのバグキング、『神帝』テラ・エーテルをリボルバー二丁のみで止めたのは、帝国内で伝説になっている。そんな彼は、世間一般ではこう呼ばれている。

『魔弾の射手』と。

ジョーカー銀河帝国特別相談役にして、宰相と皇帝代理以外で帝国すべてに命令権を持つ人物。

皇帝への防壁がシンならば、皇帝のストッパーが彼。

実際に彼の人望はかなりあり、十三ある皇妃達の騎士団への命令権も有しているのがいい証拠だろうか。

帝国軍や警察機構、情報部の各上層部も彼の一言には真摯に耳を傾けることでも有名だ。

射撃についても並ぶものなしと言われ、年間通して射撃の大会で負けたことはない。

その上で、『サイレント騎士団』の団長にして『神帝』の巫女、ホシノ・ルリ以外で『サイレント騎士団』への命令権も持つ。

ルリさえ持つていない近衛騎士への命令権も、彼は持っていることからテラの彼への信頼度や、周りからの信頼度の高さが解る。

『魔弾の射手』、彼は色々と重なってシンに会えなかつたことをちよつと後悔して、自分が射撃する時のことを話し、さらに自分の射撃映像を送ってくれた。

シンがそれを見た後、射撃ができるようになったので、『射撃の神様』は人に射撃スキルを与えると噂になるのだが、それはまた別のお

話だろう。

「ありがとうございます」

その日の夜、シンはお礼のビデオメールを彼に送った。

『凍焰の鬼神』シン・アスカより、『魔弾の射手』野比のび太様へ。
と、宛名を添えて。

番外編 ジョーカー 銀河帝国におけるクリスマス

その日、政庁内部の執務室では宰相アイリスと『ヴィルティラス』の初代部隊長が睨みあっていた。

「どうしても、なのね？」

「残念だがな」

何時ものクールさは何処へ言ったのか、彼は―アリー・アル・サーシエスはとても苦い顔をして肩をすくめた。

「俺だってこんな話を持っていきたくない。もう関係ない人間なんだからな。古巣に迷惑をかけたくはないが、どうしても、だ」

鋭く見つめてくる眼光に、以前のような迫力は宿っていない。

『鮮血の魔王』。彼が戦場で暴れ回っていた頃につけられたあだ名は、近隣すべての軍事関係者を震え上がらせた。

彼が存在する戦場に、死体の山が築かれなかったことは一度もない。

彼が向かう前線は常に死者と怨霊が渦巻く。

彼がいるだけで、あたり一面は血の海になる。

『神帝』や『凍焔の鬼神』と同じか、それ以上に恐怖の対象だった彼は、今ではすっかり保父さんになっていたが、彼の中にある本質は変わっていないらしい。

迫力はなくとも凄味はある。

「頼む」

彼は真っ直ぐに見詰めた後、頭を下げてきた。

一介の一般人がではない、かつて『鮮血の魔王』と呼ばれた『ヴィルティラス』初代部隊長が、頭を下げた。

アイリスはその事実を重く受け止め、結論を下す。

「いいわ。貴方にはかなりお世話になったから、私の責任の元で実行させます」

「恩に着るぜ、アイリス宰相殿」

「いいえ、けど、そうね」

承諾したはいいが、かなり不安な部分があるため、アイリスは表情を曇らせた。

「ほぼ間違いない、『あいつ』が出てくる可能性が高い。」

「解っている」

「サーシエスも理解を示しているのか、大きく頷いた後に拳を握り締め、突き出した。」

「打開策はある、任せろ」

「そう、なら大丈夫ね。やりましょう」

「はつきりと言い切ったアイリスに迷いはなかった。」

「こうして、人知れず裏側にて特殊な盟約は結ばれたのだった。」

その日、シン・アスカは珍しくキラ・ヤマトの訪問を受けていた。

「でね、このプログラムがこうなるから」

「はあ」

「うん、これでデステイニーの加速率が五十パーセントは上がるんだ」

「へえ」

「素直に凄と思う技術の説明に、シンはちよつとだけわくわくしている自分を自覚していた。」

「しかし、だ。上手い話には裏があるもので、飛び付こうとして思いとどまる。」

「で、見返りになにしろって言うんですか?」

「さすがシン！ 話が速い！ 昨日さ、飲み過ぎて深夜三時に帰ったら、フレイがね」

瞬間、嫌な予感が凄まじい勢いでシンの中を走り抜けていった。

フレイ・アルスター・ヤマト。キラの奥様であると同時に、帝国関係者ならば頭が上がらないであろう人物。

医師としての才能にあふれ、薬剤師にまで手を出して、ほぼ一人で病院が開けるんじゃないかっていう能力を発揮した女性は、その赤い髪の毛のせいもあり、『医療界のフレイア』とか呼ばれていたりする。

外科手術を受けたい医師と聞かれたら、ブラック・ジャックの次あたりにも名前が挙がるのだが、同時に怒らせるとかなり怖い人物でもある。

「禁酒を言い渡されたんだ」

「キラさん！俺が必ず説得して見せます!!!」

「ありがとうシン！」

先ほどの寒気や嫌な予感など何処へ行ったのか、シン・アスカはがっしりとキラ・ヤマトと手を組んでいた。

酒好きにとつて、いいや帝国関係者にとつて『酒を飲むな』は『死んで地獄に堕ちろ』と同じ。

そんな非道なんて許せない、とシンは決意を決めて立ち上がり、ふっと背筋を通った寒気で固まった。

「そう、そっち側につくのね、シン？」

「ヒ!!」

妙に艶っぽい声が背後からした。誰がいるのか声で解るのだが、それ以上に目の前のキラ・ヤマトが蒼白になって震えて腰を抜かしているの、背後にいる人物が容易に予想できた。

「シン？ 貴方はどつちの味方かしら？ そこで腰を抜かしている

『酒好きの馬鹿』？」

右側から伸びた手は、白くて細くてとても女性らしいものなのだが、冷たい冷気を纏った鬼の手にしか見えない。

「それとも、私の方かしら？」

ガシリと後頭部が握られた。

確か彼女は両手が使える器用な人だが、握力は何故か左手が強いらしい。戦艦の装甲を砕けるほどに。

「シ〜〜〜ン？」

「……お、俺は！ 男の約束は裏切らない！ 男に二言はないんだ！！」

全身を震えを抑えつけながら、シン・アスカは叫んだ。

目の前でキラが両手を握って、輝く目で拝んでいるのでグツと親指を突き出した。

貴方の酒のために。

ありがとう。

一瞬、二人はニュータイプでさえ超えるほどのテレパシーを交わしていた。

「へえ、そう。見事な言い分ね」

ピシと音が、しなかった。

その代りに手が頭から離されたので、素早くシンは振り返り、身構えようとして絶句した。

「はあ〜い」

フレイの他にもう一人、予想外の人物が片手を振って立っていたから。

「シエリル?!」

「久しぶりね、シン」

「何でここにいるんだよ?」

呆れて脱力するシンの横を、赤い閃光が走り抜けた。同時に、脱兎のごとく逃げ出す男がいたのだが、シンとしては目の前の『プライベートです』という服装の彼女に気を取られていたので見えなかった。

「最愛の男にクリスマスに会いに来ちゃいけないの?」

可愛くウインクする彼女に対して、溜息まじりに手を振る。

「それ、前に週刊誌やおまえに恋した男性芸能人を追い払う嘘だろ?」
あの時はシエリルに対して半ばストーカーのように粘着して、そのまま自分と付き合っている結婚前提だとか言いだったので、対応策として何故かシンと付き合っているという話を流したのだが。

どう考えても理解不能だった。確かにシエリルとは顔見知りで何度か任務で会っているが、どうして自分だったのか理解できない。

アセイラムやアイリスが『いいから領いておきなさい』と命令してきたので、解りましたと答えていたが。

一方、シエリルはというと深々と溜息をついて、気合を入れ直すように右手を握り締めていた。

「いいわよ、長期戦覚悟の上だから」

「何の長期戦なんだよ。で、どうしたんだ？」

「ええ、そうね。貴方は任務優先だから……って聞いてないの、シン？」

「何を？」

心の底から不思議そうに聞き返すシンに対して、シエリルは何処か意地悪そうに笑って答えた。

「クリスマス特殊ミッションよ」

そして、シン・アスカの悲鳴が鳴り響いたのでした。

ジョーカー銀河帝国において、祝日というのは実は多くはない。

土日は休み。これは、一般企業に当てはまるが政庁には当てはまらない。365日、毎日が仕事の政庁は大々的に休みをとることはないが、それでも業務が止まることはある。

それに、帝国において皇帝の誕生日は祝日にはなっていない。

理由、現皇帝陛下が『俺の誕生日が休み？ そんなバカな話ないない』とか宰相と皇帝代理が『え、あの馬鹿の誕生日が休み？ 寒い冗談はやめて』と言っているから。

けれど、祝日は確実にある。その上で、ジョーカー銀河帝国は『お祭り好き』などところがあるため、こういうことが祝日として発生する

ことがある。

12月の24日、25日。『皇帝勅命により全業務停止』、強制祝日。『というより、騒いで楽しんで、どんちゃん騒ぎがしたい』と付け足した皇帝に、誰も否定の意見は出さなかった。

というわけで、ジョーカー銀河帝国においてクリスマスの二日間はあるゆる場所が休みになる。

医療関係も休みになると命にかかわるといった意見があったり、食料品とかどうするのか、国境の警備はどうなるのか。

すべて『じゃ、俺の騎士団が展開するから』、『ならこっちの騎士団も出しましょう』と皇帝陛下と皇妃達の騎士団が帝国各所を埋め尽くし、変わりの業務を行うので問題解決。

しかし、だ。
皇帝の勅命が下ったとしても、それに全員が同意して休むわけではない。

一部の反骨精神ある者達は『休まない』を選択し、今日も『Xデー』に向けての準備を進めている。

「諸君、ついにこの日が来た」
薄暗い室内、何処に誰がいるのか、どのくらいの人数が集まっているのかも解らない場所で、男は淡々と話を進める。

「日々の重責に耐え、屈辱を飲み表情を引き締め、感情を逆なでられる日々にも耐え忍んで、我々はこの日を待っていた」

男は顔の前で腕を組んだまま、視線は闇を見つめる。
「ついに、だ。ついに、我々の出番が来た。日頃から理不尽な要求を突き付けてくる『奴ら』に、我々の牙を突き立てる時だ」

周囲が僅かに騒がしくなる。誰もがこの日を待っていた、理不尽で馬鹿の塊の皇帝の下、必死に生きて耐えてきた。

政庁の理不尽な要求に、何とか我慢して毎日を過ごしてきた。
「諸君、ついにだ。我々は今日の日を迎えた。今こそ我々は帝国すべてを駆け巡り、反旗を翻す時だ」

「おおおー!!」

自然と声を漏れた。誰もが待っていた瞬間の到来に、歓喜が声と

なって全員の口から零れ落ちる。

「諸君！ 今こそだ！ 今こそ我らの實力を示す時だ！ あの馬鹿皇帝に思い知らしめる時だ!!」

男が立ち上がり、拳を突き上げる。

「おおおおお!!」

室内に巨大な叫び声が渦巻き、誰ともなく立ち上がり拳を突き上げる。

「今こそ立つのだ同士達よ！」

「おおおおお！」

情熱は抑えつけられた分だけ巨大になり、室内に熱気をもたらせて、さらに多くの者達の心に火をつける。

「今こそ鉄槌を！ 理不尽なすべてに反逆を！」

「おおお!!」

もう誰も止められない、全員が獲物を背に背負って足踏みをする。

「馬鹿皇帝に死を！」

「おおお・・・え？」

「いや、ちよつと待って」

巻きあがりかけた熱が急速に冷め、室内にいた誰もが隣の人と顔を見合わせる中で、一人だけ冷静に声をかけた人物がいるのだが。

最初に発言していた男は、拳を突き上げたまま叫び続ける。

「あの馬鹿に反逆を！」

「え、あれ、そんな話だっけ？」

「いやいや、違うでしょうが。今回の集まりは違うんじゃないの？」

周りの混乱を余所に一人だけ熱血している男に対して、二人の女性が近づいてハリセンを持ち上げた。

「いぎゃー！」

「いぎじゃないわよ!! 皇帝のあんたが自分を殺せって言うてるの?！」

「馬鹿なことを言っていないでください！」

「ふぎゃ?!」

見事にハリセンは、言いだした男―皇帝テラ・エーテルを撃沈した。

「よし、撃沈。サーシエス、こつちはいいわよ？」

「あくく悪い結局はこうなっちまったか」

溜息をついて振り返った、ハリセンを持った女性―アイリスの言葉に、サーシエスは目を回して倒れている皇帝に目を向けて、深々と溜息をついた。

「いい上司なんだけどな」

「馬鹿だから仕方ないでしょう？　で、作戦立案者殿、説明を」
「おう」

彼は気を取り直して、全員を見回す。

大会議室には銀河帝国軍や警察機構、情報局といった場所に所属している全員が集まっていた。

「始めるぞ、野郎ども」

ニヤリと笑うサーシエスの後ろに、巨大な文字が踊る。

『クリスマス・プレゼント輸送ミッション』と。

事の起こりはそう、彼がアイリスを訪ねた時だ。

今年の11月の終わり、色々な国が財政難で経済破綻。住む家もなくなり、食べるものに困った難民がかなり帝国へと流れ込んだ。

幸いというかなんというか、政府関係者全員が必死に頑張った結果、就職難民といった非常事態にはならなかったが。

難民の子どもたち、あるいは親がいなく孤児院に入った子たちには、クリスマス・プレゼントがもらえない、という事態になった。

この件にいち早く気がついたのが、サーシエスだ。

年に一回のクリスマス、それにプレゼントがもらえないなんて。子供の心に傷をつけるわけにいかない。かといって、自分一人ではできることは少ない。

考えに考えた末、彼は古巣―『ヴィルティラス』、あるいは政庁を頼ることにした。

当初、アイリスは難色を示した。理解はできる、納得もする。けれど、無い袖は振れない。

どうしようと考えていたが、そこは理不尽で馬鹿の塊の『皇帝陛下』が一発解決。

何処をどうやったのか知らないが、全員分のプレゼントを一日で用意。軽く一億以上はあったのだが、笑顔で『用意したよ』と言った皇帝に、珍しく宰相は『さすが私の夫ね』と笑顔で告げたという。

よし、後は配るだけと考えていたのだが、そこに待ったがかかった。『やるなら派手にやろう。全員に配ろう』と言いだした皇帝のために、政府すべてを巻き込んだ一大イベントに発展。

こうして、帝国国民の子供たちすべてにプレゼントを配る一大『バカ』イベントは始まったのでした。

「いいか、俺達の役目は夜の間、子供たちに気づかれず、プレゼントを枕元に置くことだ。各家庭のご両親には了解を得ている、速やかに玄関より入れてもらい、枕元にプレゼントを設置、撤収。いいな?」
「了解です!」

「全帝国政府職員関係者、すべてでやる一大行事だ。失敗は即ち、『帝国の底が知れる』ことになる」

「おお!!」

気合は十分、誰の目にも諦めや絶望はない。

「行くぞ野郎ども!!」

「我が国の宝! 子供達の笑顔のために!!」

その日、帝国中の子どもたちはサンタクロースがいることを信じたのでした。

シン・アスカは思う。

この国は馬鹿が多い、変人が多い、けれど決して冷たい人が多くないのがいいところなのかもしれない。

「何を見ているの?」

そつと隣に歩いてきたのはティーラだ。遠くでシエリルが『出遅れた』とか言っていたが、シンは別に今から来ればいいだろうと思っただりする。

「街並みさ」

とある街の丘の上、見事にクリスマス・プレゼントを配り終えたから、それぞれの場所でパーティが開かれている。

全員が集まると大騒ぎになるから、複数の場所に分けてのパーティなのだが、大騒ぎをするのだから関係ないのかもしれない。

「灯りが綺麗ね」

シンが見下ろすのは、主星の中でも大都市といえる街。一つ一つの家に灯りがあつて、一つ一つの灯りに家族が穏やかに暮らしている。

「ああ、俺達が護るべき灯火だな」

「ええ、そうね」

「………え、ティーラだよな？」

「ええ」

「今、灯りが綺麗って言わなかったか？」

予想外な人物から予想外に柔らかい声がしたので、シンは思わず彼女を見つめてしまった。

「私も女ですから」

対して、彼女は怒るでもなく微笑みながら、右手を動かした。

「鈍感朴念仁って言われたくないなら、もう少し女心を理解しなさい、

『凍焰の鬼神』様？」

シンの胸に指を突き刺しながら、軽くウインクしたティーラは、そのまま丘を下りて行ってしまった。

一方で、シンは彼女の背を見送った後、夜空を見上げて小さく口を開く。

「好意には鈍感かもしれないけど、心の機微くらいは解るつもりさ」

さして、どうしようと考えながら。

背中から流れてくる殺気に似た気配には、気づかないふりをしつつ。

蛇足として。

『これ、面白いね』『恒例行事にしましょうか』といった話が交わされ、以後の帝国では毎年、行われるようになったとか。

正月秘話、ジョーカー銀河帝国の場合

元旦。

一年の始まりの日、あるいは一年の計画を決める大切な日。それはここージョーカー銀河帝国にとっても、同じこと。

時間は12月31日の22時を回った頃、シン・アスカは今日の業務を終了させた後で、席を立ちあがった。

「あ、お疲れシン、今日はもう終わり?」

「スザクさん、お疲れ様……です?」

背後からかけられた声に振り返り、挨拶を告げようとしてシンは自身の視界が悪くなったのを感じた。

枢木・スザクといえば、真面目で実直で優しい好青年だったはずだ。任務にも忠実で、『ヴィルティラス』の二枚看板と呼ばれるほど強い。

射撃もできるのに、近接も無双できる特殊な人材でありながら、身体能力もかなり高い。

真面目なのだが、ユーモアには付き合ってくれるほどに優しい青年だったはずなのだ。

「任務ですか?」

きつと目の錯覚か、あるいは特殊な任務でも請け負ったのだろう、と思い込むような、祈るような気持ちで質問を試してみた。

「あ、解る? なんだか、この『処刑人の格好』で明日の朝十時まで待機するんだって」

全身をすっぽりと覆った黒マントに、明かに模造ではない真剣な大鎌を持った彼は、ちよつと嬉しそうに全身を大きく見せた後に、クルリと一回りしてみた。

「なんだか、楽しくなってきたよ、シン」

「あ、はい」

ヤバいと感じる自分がいる。明らかに何時ものテンションではない彼は、かなり楽しそうな声をしていた。

自分も尊敬する人であり、近接技能の訓練もしてくれた相手が妙な

性癖に目覚める前に、何かしらの忠告をするべきではないだろうか。
「ここにいたのか、スザク。シンも仕事が終わったのか？」

別の方向からの声に、シンは『救いが来た』と内心で喜んでいた。
声の主は刹那・F・セイエイ。『ヴィルティラス』の二枚看板のもう一人、近接特化、というよりは射撃戦の距離も、『近接だ』の一言で駆け抜ける騎士。

砲弾も空間も切れるのではと言われるほどの人物であり、真面目一辺倒で他人に対して苦言を容赦なく突きつけられる人でも有る。

この人ならばと振り返ったシンの視界に、やはり黒い物体が映った。

「待たせちゃったかな？」

「いや、俺も着替え終わったばかりだ。しかし、この格好は」

「そうなんだよね」

二人して声が沈んだ。やはり、無理やりにテンションを上げていただけか。あの二人のことだ。任務だからと自分を律して、あえて楽しいと装っていたのだろう。

自分も見習わなければとシンが、自らの未熟を痛感している時。

「なぜか心が躍るな。いや、高ぶると言った方がいいか」

「だよね！ 刹那も解ってくれるよね！」

「ああ！ スザク！ 俺は何故かこの鎌を振り回したくなかった！」

「僕もだよ！ 刹那!!」

瞬間、シン・アスカは自分の中の理想が崩れ落ちるのを感じたという。

その後、全身を黒一色で覆った二人組が政庁をスキップして歩いている姿があったとか、なかったとか。

頭痛がしてくるような一夜が明けて、一月一日。
午前八時を回ったころ、すべての家庭が居間のテレビの前に集まっていた。

政務に無頓着な皇帝であっても、新年の挨拶は必ず行う。

というよりも、宰相のアイリスと皇帝代理のアセイラムが、『首に縄つけてでも引っ張ってくる』と言っていたので、新年の挨拶は今まで一度たりとも皇帝がやらなかった年はなかった。

しかし、だ。挨拶をするのと、『真面目に行く』のがイコールで結ばれないのがジョーカー銀河帝国の悲しいところ。

「……今年我真面目にやってくれると思う、お兄ちゃん？」

「あのテラさんが？ 銀河が破裂してもない」

テレビの前のソファアに二人で並んで座ったシンとマユは、そこで深々と溜息をついた。

「確か、去年は『俺に挨拶させたいなら捕まえる！』って逃亡したよね？」

「その前は、『銀河が俺を呼んでいるぜ！』とか言っつて、マイク片手に亜光速移動してたな」

「だね」

毎年毎年、彼は何かやらないと気がすまないらしく、馬鹿げたことをやって新年の挨拶を行っていた。

『じゃ、みんな、元気に楽しく自分らしく生きろ』と挨拶は何時もと変わらないのだが、中身が毎年毎年と変わっているため、誰もが『あ、今回はこんな馬鹿げたことやったんだ』と新鮮な気持ちで見えた。

しかし、だ。今回の放送は違っていた。

一定の警告音のようなものが流れ、『これは演習ではない』と何度も繰り返しての警告が流れた後、映像が帝国国民全員の視界に飛び込んできた。

「は？」

シン、無意識に『天壤無窮』を取り出してしまった。

隣ではマユが臨戦態勢で銃と剣を持っている。

さらに後ろでは両親までもが武器を持ち上げるくらいに、目の前の光景はあり得ないものだった。

漆黒の二人のカマを持った男、その中心にいるのは膝をついて縛られた皇帝陛下。さらに画面が後ろに下がっていき、そこが『断頭台』だと解ると、全員が殺気だった。

馬鹿でアホで、どうしようもないほどの非常識だとはいえ、皇帝。信じられないかもしれないが、国民からの支持はかなり高い。

困った時は皇帝に丸投げすれば、何とかしてくれる。今まで彼がどうにかできない問題はないため、国民は誰もが『皇帝陛下がいれば、大丈夫』と思っっている。

その彼が断頭台上げられ、左右に処刑人がいる。

丁度、見上げるようなアングルで撮られた映像に、誰もが『誰だ、これを考えた奴は、殺してやる』と殺気を浮かべていた。

緊張度はピークを越えて、爆発してもおかしくないレベルまで上がった時、音声が出た。

『くくくくく、俺を捕まえても海賊の時代は終わらねえ』

『は？』

全員、何を言っているだこいつという目線で画像の中の馬鹿を見つめる。

『俺の宝？ そんなものが欲しいのか？』

いや、誰も何も言っていないのだが。

『そうかそうか、いいだろう、くれてやる』

何の話だかわからない、誰もが近場にいる人たちと視線を合わせている様子が、帝国のいたるところで見られた。

『探せ！ この世のすべてをそこに置いてきた!!』

そして、最後にテラの高笑いで映像は終わった。

「.....ぶっ飛んでんなあ」

「え、え、えええ?! なにこの新年の挨拶!？」

呆れて剣をしまうシンと、未だに状況が把握できないマユ。帝国中で同じように様々な人が困惑している中で、映像は再び配信された。

『三が日の間に俺の宝を見つけられた奴に！ 褒美をあげよう！』

何の話なんだか、と呆れている全員の耳に、信じられない言葉が飛び込むことになる。

『それは！』『俺ことテラ・エーテルへの絶対命令権』だ!!』
「……………はあああああ?!」

瞬間、帝国が揺れた、と後の歴史書に記されることになる事件は、こうして幕を上げたのでした。

『ちよ?! テラ！ 僕らは聞いてないよ!』

『なんだその『クーデター上等』という文字は?!』

『テラああ!! この馬鹿夫おお!! 何をしてくれてるのよ!?!』

『アイリス！ 今は放送中です！ ハンマーは不味いでしよう!』

慌てるスザクと刹那、飛びこんでハンマーを振りかざすアイリスに、止めようとするアセイラム。

画面の中は大混乱の様子を映し出したのち、『しばらくお待ち下さい』と文字が流れ、やがて『これにて新年の放送を終わります』と文字が躍った後に、通常の画面となった。

シンは、そのテレビを見た後にゆつくりと立ち上がり、通信機を持ち上げる。

「はい、部隊長」

『非常招集だ!』

「ええ、鎮圧ですよね?」

『違う！ 宝を見つけ出せ!』

珍しく慌てているような焦っているようなエイルンに、シンは相手が何を言っているか理解できなかつた。

『命令権があれば今後、俺たちに見合やら偽装デートや偽装恋人といった任務が来ないようにできる』

「すぐに全力で動きます!」

『頼むぞ！』『ヴィルティラス』の任務はすべて中止！ 宝の搜索が第一だ!』

『了解!』

通信を閉じて、シンはすぐに全力で動きだした。

後の歴史家は語る。

『あの時の事件は、後の帝国史を紐解いたとしても、屈指の馬鹿騒ぎであつたように見えるが、実は帝国においてはあのようなバカ騒ぎは日常茶飯事であり、特筆すべきものではない。しかし、後にも先にも軍や警察、情報局、政府はもちろん、騎士団さえも入り乱れた大乱闘は、この一件だけである。しかし、初代皇帝の聡明さを語る上では、今回の一件は決して外せないものだろう。彼の深淵のような知略と、狡猾なまでの思考の一端はここにある。自分を餌にすることで、帝国中の戦力を動かし、周辺国に無言の圧力を与えることで、後に銀河系すべてを支配下におく帝国に発展させたのだから』。

多くの歴史学者が同一の見解を示すのだが、当時の皇帝の巫女『ホシノ・ルリ』の私的な記録にはこう記されている。

『テラさんは、『ワ●●ピース』を読んだ後に思いついて、『是非、『ル●イ』か『ゴ●●ド・ロ●●ヤー』に弟子入りしたい』と言っていました。だからやったんでしょね。はあ』。

歴史とは勝者が書き残すもの、敗者に都合のいいものが残るわけがないのだが、勝者だからといって真面目に残るものではないらしい。とはいえ、今は現代の混乱を見てみよう。

「でえええ?! なんでレッド・ミラージュが総出でいるんですか?!」

「あそこに隠してあるのね! 『テンプル騎士団』! 総員突撃!」

「ちよ?! アイリスさん!」

「宝は私が貰います! 『遊星騎士団』! 突撃しなさい!」

「アセイラムさんまで!? こんな狭い惑星上に騎士団が勢ぞろいしたら、星が碎けますよ!」

必死に説得するシンに向けて、無慈悲な騎士団は次々に突撃してく

る。

「あ……ああもう！ ティス!!」

『御意！ 我が主シン・アスカ！ もうヤケクソだああ!!』
瞬時にデステイニー出現。

背中の七色の翼を広げ、両手に特殊な剣を引き抜く。

高次元結晶を剣身に使用した対艦刀『ウロボロス』。世界さえ飲みつくし、焼き尽くし、運命のすべてを破壊する願いを込めた、最悪の剣。

使用された結晶の性質と、魔法的な刻印による相乗効果により、その剣は切った者を燃やし尽くすか、あるいは凍りつかせて砕く。

『そこをどけ！ 『凍焰の鬼神』!!』

「どかして見せろよ!!」

砲弾を斬り捨て、銃弾の雨の中を光速で飛び回り、相手に接近。右手の剣を叩きつけて武装を灰へと変えた後、相手の下半身を凍結・粉砕。

『く！ 『ヴィルティラス』が命令違反か！』

「うるさい！ あれを手に入れたら命令違反もなにもないだろうが！」

遠距離からの攻撃、全十二機のGビットも合わせたツイン・サテライト・キャノンの一斉射。

ちよつとした要塞ならば塵も残らないほどの攻撃を、シン・アスカは両手の剣の一閃で消し去る。

『やはり厄介だな！ デステイニーの名は伊達ではないか！』

『僕が行きます！』

『合わせるぞ！ バナージ！』

『はい！ リタも行けるな！』

『うん！』

亜光速で飛び込んでくる影は、『RX-0』が三機。すべて計画の最終機体は膨大なエネルギーを放出しながら変形。

「は！ その程度の反応速度でよくも言えるな！」

三対一の光速戦闘、数の不利も物ともしない。相手の射撃武器を封

じ、砲弾やエネルギー弾を叩き落とし、次々に武器だけを破壊していくシンの姿に、バナージ達は『凍焰の鬼神』の強さを実感した。

普段は優しくして温和な彼だが、一度でも戦場に立てば『一騎当千』。一兵士が『一騎当千』と呼ばれる帝国において、精鋭中の精鋭『ヴェルティラス』の『切り札』。

帝国内で唯一、理不尽の象徴の皇帝を止められる彼は、その後も次々に迫りくる敵を退け、誰一人たりとも通さなかった。

「どうした?! 俺を倒すんじゃないのかあ?!」

全身が傷だらけになりながら、二つの剣にはヒビ一つ入っていないデステイニーは、かなりの凄味を持って周辺を凍りつかせていた。

物理的に凍結しているわけではない、魔法を使用したわけでもない。けれど誰もが動けずにデステイニーを前に固まっていた。

これが『凍焰の鬼神』の実力、間違いなくトップ・エースに君臨する彼に勝ちたいと誰もが考えている中、無情な一言が告げられた。

『はい、三が日終了』

「……あああ?!」

瞬間、シン・アスカは自分の愚かさを呪ったのでした。

こうして、帝国の新年早々の馬鹿騒ぎは幕を下ろした。

皇帝は帝国を混乱させた罪により、二日間ほど政庁の屋上から吊るされていたという。

一方、シン・アスカはというと。

三日ほど、『ヴェルティラス』全員から『生暖かい目』で見つめられ続けたのでした。

「うん、俺が悪いんですよね」

「おまえがまさか、バトルジャンキーだとは思わなかったよ。ま、その気はあったけどな」

ニコニコ笑顔のハイネに見つめられ、シンはさらに落ち込むのでした。

君の涙に報いるために

ジョーカー銀河帝国主星、某所。

暗い照明の中、流れる音は氷のぶつかる、小さな音のみ。

古風な店内、というよりも昔を懐かしむような雰囲気の中で、男は小さくグラスを傾ける。

店内には男が一人、カウンターで静かに酒を傾ける。

そこへ、また一人。客がドアを開けて入ってきた。

「お連れ様がお越しのようですよ、テラ」

バーテンダーの一言に、彼は誰だろうと顔を向けて、ドアから歩いてくる昔馴染みに手を向けた。

丸メガネに短く切った髪、昔から変わらない愛嬌のある顔。だといふのに、射撃では自分を見事に下した人物。

野比・のび太がゆっくりと歩いて来て、隣に座る。

「いつものお願いします」

「はい」

バーテンダーに注文してから、のび太はカウンターの奥の棚へと視線を投げた。

「話があるんだけど、いいかな？」

「ん、シンのことか？」

予想していたように告げるテラに、『解っているならいいよ』とのび太は答える。

「どうぞ、バーバラです」

「ありがとうございます」

出されたカクテルに口をつけて、唇を湿らせた後に、小さく呟く。「彼、凄いな。さすが君の一番弟子だよ。僕でも止められる自信がないな」

「嘘つけ、天下の『魔弾の射手』が止められないわけないだろ。俺でさえ止めるくせに」

「嘘じゃないよ。君は読みやすいから、ルート上に弾丸を置いてやれ

ばいいだけ。でも、彼はそれを避けるからね」

クリーム系の甘口のカクテルは、ほんのりと体の中を暖かくさせてくれる。二口、三口とゆつくりと味わいながら、シン・アスカを語る。「反射神経、状況判断能力、敵の位置情報。いくらマテリアルが、ティスちゃんがいるとしても、彼の能力は突出している。なんで、射撃ができないのか疑問なんだけど」

「そりゃ、あいつはな」

テラはカクテルを飲みきり、片手を小さく上げる。

『『ウイスパー』をお願いしますか?』

「はい。今日は、後悔がありそうですね」

「かなわないな。ええ、弟子の育て方を間違えたようなので」

「師は弟子を育ててこそ一人前といいますから」

「ありがとうございます」

バーテンダーに一礼し、彼がカクテルを作るための準備を進める姿を見ながら、テラは右手を銃の形にしてのび太の頭部につける。

「銃を突き付けられて、相手との距離が五メートルなら帝国軍人なら誰もが回避できる。ライフルだろうと拳銃だろうとな。ところが、だ。接射、銃口が触れるくらいの距離で撃たれて回避できる、となると数は少ない」

「そうだね。僕でも難しいかな」

「のび太は、接近させないだろうが。まあ、俺とかアイリス、雪菜、後は難しいだろうな。軍部の上の方、『ヴィルティラス』でも数名か」

「そうだろうね。それで、その話がシン・アスカとどんな関係があるの?」

問いかけに、テラは答えを浮かべることなく、しばらくバーテンダーの動きを眺めていた。

しばらく無言の時間が続いていき、やがてカクテルが出来上がりテラの前に差し出される。

「シンはさ、あいつは『銃弾が発射されてから回避できる』」

「え?」

「正確には、銃身の十分の九を超えたところで動いても回避できる、だ

な」

「嘘でしょう?」

「本当だ。あいつの場合、反射神経と運動神経以上に、自分で考えてから体が動き出すまでの時間が、恐ろしく速い。だから射撃戦がへたくそになる」

「あ、そう言うこと」

のび太が納得がいったと、頷いた。

近接戦闘ならば、自分の体、あるいは近接武器を使うため動作に段階が起きることはない。

しかし、だ。射撃武器などを使う場合は二度か三度の段階が生まれる。

狙い、トリガーを引く、弾丸が反応して放たれる。この段階は、普通ならば一瞬のことなので誰も気にしないが、シン・アスカの場合は問題になってくる。

彼がトリガーを引いて、弾丸が放たれる前に、銃口が次の目標に向けられてしまう。彼の運動神経の高さが故に、銃火器にとっては致命的な『目標とのズレ』となって弾丸が当たらなくなる。

理解はしていたし、伝えようとしたのだが、どうやって伝えていいか解らなかった。

今回の『フェネクス』騒動は、まさに渡りに船だ。教えるよりは実戦で追い込んだほうが、シン・アスカにとってはプラスに働く。

「彼はヒーロー気質だね。誰かの危機に対して、自分の能力の数倍の実力を発揮する。弱点さえも一瞬で克服するくらいに」

「騎士だからな。騎士とは王に仕えるでもなく、世間に流されることでもない。あいつに教えたのは、多くの苦難に嘆く人々を護るための、そんな騎士の姿だからな」

「正義でもなく、理想でもなくか。昔、ある人に言われたよね? 『俺達は正義のために戦っているんじゃない。俺達は人間の自由のために戦っているんだ』って」

「ああ、だからあいつは人々の自由のためなら、どんな相手だろうと戦って勝つだろうな」

小さく苦笑するように告げるテラに、のび太は少しだけ不安を感じた。

昔から彼は、自分が『最悪の破壊神』だと蔑んでいることがある。ヒーローに憧れ、正義の味方に尊敬を向けても、自分はそんなのに慣れないと悲観していることが。

「まさか君は、『自分を殺せる騎士を育てた』んじゃないよね？」

不安に動かされるように告げた彼に、ジョーカー銀河帝国の皇帝はフツと息を吐いた。

「さあ、な」

カクテルを持ち、それをゆつくりとテラは飲み干した。

今日は快晴、雲一つない青空。気持のいい陽気には春の名残と、夏の気配が重なって流れてくる。

だというのに、だ。どうしたことだろうか。

シン・アスカは目の前にいる女生徒に対して、嫌な予感しかしていない。

校門のところで仁王立ち、凜々しい子だなあと感じていたら、何故か周りを見回してキョロキョロとしている。

見なれない生徒だ。もう一か月もここにいてるが、見たことはない。用務員として全校生徒のデータは頭に入っているはずなのに、一度も見ることがないのはおかしいだろう。

しかし、だ。スパイというのには、間抜けすぎる。普通、こんなところで挙動不審になっていたら、『怪しいものです』と言っているようなもの。スパイならば間違いなく避ける。

「どうしたんだ？」

悩んだ末、シンは声をかけることにした。

相手―女生徒は驚いたように振り返り、不審な顔を向けてきた。

「あんた誰？　ここIIS学園じゃないの？」

「ああ、そうだ。俺はシン・アスカ、ここで用務員をしている。で、そっちは？」

「凰・鈴音よ。本当に用務員？」

疑いの眼差しを向けてくる彼女に、シンは『ああ、そうだ』と答えながらIDカードを提示する。

持っていて良かった、いらないと考えていたがティスがやたらと持っていたほうがいいと言っていたので、念のために所持していたのだが。

本当にティス様様だ。

隣で『私が偉い』と胸を張っていないければ、もっと感謝できたのだが。

「男の用務員って、ここはほぼ女子高なの？」

「まあ、色々あってな。で、案内が必要ならするけど？」

「そうね。お願いしようかしら、実はちよつと迷っていたのよ」

「広いからな」

その上、色々と制約が多くて、とシンは内心で付け足しておく。

向かう場所は総合事務受付。シンは滅多によらない場所だが、行ったことがないわけではないため、案内できる。

いや、そもそも、自分への伝達が織斑・千冬だけなのは、どうなのだろうか。事務所とか職員室とか行っても、すべて織斑・千冬がいるので他の職員と話をしたことがないのだが。

「ねえ、シンってさ。武術している人？」

「色々とやったことはあるけど、武術らしい武術はやったことないかな？」

「そうなんだ」

鈴音からの質問に曖昧に答えておく。一応、武術は教えられたことはあるのだがすべて型から離れて我流になってしまい、邪道に近い形で覚えているものばかりなので。

飛天御剣流はほぼ使える、クルダ流は表も裏もできる、陸奥や不破は何とか形にはなったが、アレンジしてしまったからな。

今まで教え込まれた流儀を思い出しながら、シンは後ろの鈴音が遅れないようなペースで前を歩く。

「体がブレないって凄いなあつて思つて」

「そうなのか？ 俺の知り合いには、砲弾が飛んできてもまったく微動だにしない人ばかりだぞ」

「なにその人外」

「普通の人達だつて」

「砲弾ねえ、嘘じゃないわよね？」

「こんなことで嘘ついてどうするんだよ？ あ、あつた」

話をしている間に到着。指先で示してやると、『そこだったんだ』と告げた彼女が横を通り過ぎていく。

「ありがとう、ああ、そうそう、私のことは『リン』でいいから」

「なら、俺もシンでいい……ってさつき、そう呼んでたな」

「あ、ごめん、気にした？」

「いいや、そつちで呼んでくれたほうが、俺も気安くできるからな。堅苦しいの苦手なんだよ」

「私もよ。じゃ、ありがとうね」

そう言つて立ち去る彼女は、小柄ながらきちんとした礼儀を身につけた女性に見えた。

「見かけによらないって、本当だよな」

幼い印象と動きに、実年齢より年下に見えるような気がしたのだ。まだまだ自分は修行が足りないらしい。第一印象で相手を決定づける怖さを知っているのに、その癖が抜けきらないとは。

けれど、だ。シャルロットやセシリアの時は、第一印象で決めなかつたのにどうしてなのだろう。

「あ、雪菜さんとユイさんの影響かな？」

師匠の奥様二人、見事に『中学生ですか』と声をかけられる成人女性二人を思い浮かべ、直後に寒気を感じた。

『次にあつたら、殴ります』『久しぶりに一戦、やりませんか？』と

笑顔で語る二人が浮かんできたから。

『骨は拾ってあげるよ、シン』

「不吉なこと言うなよ、ティース」

隣で数珠を持っている相棒に、シンは怒りのあまり笑ってしまったという。

『フェネクス』は、未だ現れず。射撃武器の扱いは毎日の訓練で向上させてはいるが、問題はすべて解決できていない。

まず最初に、デステイニーの射撃武器のこと。

大まかにわけてデステイニーに搭載されている射撃武器は、三つ。背中に背負い式の大型のキャノン砲。翼の内側に搭載されたそれは、砲身を『ロジカリウム鉄鋼』を使用したもので、見た目は完全水晶といった合金で作られている。

砲身基部で発生させたエネルギーを砲身内部で乱反射させることで、砲身を変形させることなく拡散・収束モードの使い分けが可能。さらに、砲身すべての何処からでも放出可能なので、近接戦闘でも使い勝手がいい。

けれど、だ。今回の場合、狙撃なので収束モードを使うのだが、背負い式のため狙いは体全体を使うことになる。

細かい狙いがつけられるかは微妙なところだ。

二つ目は左右の腰につりさげてある複合ライフル。こっちはもつと厄介な問題がある。

ライフルなので光学兵器を使用できるのだが、本来の目的は機体の主機関と重力制御ユニットからのエネルギーによる『重力兵器』。

腰につけたまま前に突き出して撃つことで、小型のマイクロブラッ

クホールを打ち出すことができるのだが、はつきり言つて地上で使う兵器ではない。もしアリーナで使つた場合、反対側の壁を貫通、場所によつては地上にブラックホールが出現する。

危なくて使えないので却下。

最後は両腕の武装。こちらは『射撃もできる』というだけで、そもそも射撃を想定していない。

パルマ・フィオキーナと呼ばれているのだが、元々の想定では手のひら内部に銃口があつてだったが、何処をどう間違えたのかティスが最終調整した後に使つたら、『肘から指先までを次元エネルギーが覆つた』という結果を出してしまつた。

三次元よりも上の高次元のエネルギーのため、ビーム・シールドで防ぐことは不可能。特殊な金属や次元結晶を使ったシールドでなければ、防御ごと粉碎する容赦のない一撃。

こつちは、二つ目よりももつと危ないため使用できない。となると、自分に攻撃手段がなくなる。

射撃はできないんだから、半径五百メートルならば一秒以内に攻撃可能なので必要ないだろう、と武器庫に射撃武器を入れておかなかつた。

「どうするかな?」

シンは少しだけ悩みながら、軽く背伸びしてみる。

現在場所はアリーナ。何時も通りのメンツの前で、織斑・一夏への特訓の真つ最中。

なのだが、ちよつと色々とあつて、彼はアリーナの壁に激突して気絶したまま。予想外にいい動きをしていたから、段階をすつ飛ばしてしまつたのは、シンの落ち度かもしれない。

「起きたか?」

小さな気配の揺らぎ、その後に壁から噴煙が上がつて、白式を纏つた彼が突つ込んでくる。

右手には『雪片式型』、すでに『零落白夜』は発動済み。

これも、課題の一つか。

「甘い。何を発動させたまま接近してんだよ」

相手の右手の甲を蹴とばし、勢いを殺したところで頭上から拳を叩きつける。

「自分のエネルギーも消費するんだろうが。発動はぶつける瞬間だけ、後は常に切っておけよ」

「解ってるよー!」

気合を入れて立ち上がる彼の右手を、再びシンは蹴とばす。

雪片が転がる。一夏は慌てて武器に飛び付こうとして、横あいからシンに蹴とばされて飛んで行った。

「あのな、武器を飛ばされてすぐに飛びつくなよ。狙ってくださいって言っているようなものだろうが」

「けど、俺の白式にはそれしか武器がないんだよ」

地面をバウンドしつつも、何とか勢いを殺した一夏が再び向かってくる。

「拳と足は飾りか?」

目的地はやはり雪片か。武器を取りにというよりは、何か大切なものを奪われないように動いているようだが。

確か、姉が使っていた武器と同じだったか、執着があるならば読みやすい。

「スラスターが使えてない。体の動きが甘い。ISの訓練以外でも鍛錬してるんだよな?」

一夏に問いかけつつ、箒へも視線を向ける。

彼女が頷いているので剣道場には通っているようだが。

「やってるさ。でも、強くなった気がしないんだ」

「そりやそうだろう。おまえはまだ一か月しかISに触れてないんだぞ。剣道だって鍛錬を再開したばかりだ。素人同然なんだよ」

「でも俺は強くなりたいんだよ!」

「なら色々と学べよ。IS関係の資料、読んだか? 知識は? 基礎知識は完全に把握したよな?」

少し強めに質問すると、一夏は言葉に詰まったように視線を反らす。

「なんで覚ええない? おまえはISを使っているんだぞ、知識もない

まま強くなれるのか？ 相手がどんな戦法でくるかなんて、解らない。なら、得られるものは知識だろうが剣道だろうが、すべて入れるべきだろうが。強くなるっていうのはそういうことだ」

かつての自分も、同じことを言われたな、とシンは思い出しながら一夏に伝える。

強くなりたくて鍛練ばかりしていた自分に、世界のことを教えてくれた。情報の大切な、知識が自分だけじゃなく周りも救うことに気づかせてくれた。

無知に甘えるな、知らないことを理由にするな、それは自分を貶めるだけで何の力も与えない。

彼はそう言っつて、あらゆることを教えてくれた。

「でも、皆は俺より強くて。今日の実習だつて」

「ああ、あの大穴をあけたことか。良かったな」

「なんでだよ?!」

「ここは学園だ。失敗したことは恥なんかじゃない。おまえは失敗した、なら原因を探つて失敗した理由を知ることができる。一つ、できないことが減つただろ？ だから、良かったなつて言つたんだ」

「けど、情けないだろ。俺は皆に比べてできないことが多いから」

悔しそうな顔の一夏に、シンはかつての自分の姿を幻視しながら、あの時の師匠と同じ言葉を紡ぐ。

「だからなんだ？ 出来ないからどうした？ いいじゃないか、おまえは一番下にいる。なら後は」

シンは真つ直ぐに上を指差す。遙かな天を突きさすように。

「上り詰めるだけだろ？ 後ろには誰もいないんだ、前に皆がいるだけだ。ならばすべて追い越して、一番になればいい。簡単だろ？」

「・・・そうか。そうだよな！」

「一夏、来いよ。俺が知つていること全部、おまえに叩きこんでやる」
「行くぞ！ シン!!」

悩んだ顔は消して、織斑・一夏は真つ直ぐに飛び込んでくる。

せめて一撃、かすらせる程度でいいと決意を込めて繰り出した行動は、シンの右手の一閃で沈められた。

「いい覚悟だけど、今のおまえに当てられるほど弱くないからな」
鳩尾に入った一撃は、絶対防御を抜いて一夏を気絶させたのでした。

アリーナをかなり壊したから修理してから帰れ。

千冬に言われたことを終えたシンは、道具を片付けて校舎を後にした。

「遅いよ、シン」

「お待ちしていましたわ、シンさん」

シャルロットとセシリアが待っていてくれたことは知っていたが、それ以外に気配があるのは何故だろうか。

一つは遠くから、生徒会長のものだろう。ティスも先ほどから、『あの時の女の人だ』と嬉しそうに見ている。

もう一つは角のところに。

「あれ、リンか？」

「え、転校生？」

「あら、中国の代表候補の方では？」

三人が気づいて角のところに来ると、彼女は俯いていた顔を上げた。

泣きはらした瞳を上げた彼女に、真っ先にシンが飛びついた。

「何があった!？」

「ふえ……何でもない」

「なんでもないことで女が泣くかよ！ 何があった?!」

かなり強めに詰問すると、彼女はポツリと語り出す。

一夏が、昔の約束を覚えていなかった。

最初の一言が出た瞬間、シンは走り出していた。

「待ってよシン！」

「シンさん！ 事情がまだ！」

「二人はリンを頼む！ 俺はあの馬鹿を殴ってくる!!!」

いい置いて最高速。彼の部屋は解っているから寮に入っていくと、周りの女生徒を置き去りにするように部屋の前に辿りついて、乱暴にノックをする。

「はい。て、シンか？」

「おまえ!!」

問答無用で顔面に一撃、見事に吹き飛んだ一夏を追い掛けて、空中で腹に一撃と足を叩きこむ。

「グ！ 何すんだよ?!」

「うるさい！ リンを泣かせたのはお前だな!!」

言われて怒りを露わにしていた一夏が、顔を歪ませて反らす。

「何を言った?! なんで彼女を泣かせた?!」

「俺はただ！ 昔の約束を……」

「約束だけじゃないだろ?! おまえ、何を言った?」

声を潜め、拳を解いた後で、シンは一夏を睨みつける。

瞬間、彼は全身が凍りついたように動かなくなった。まるで極寒の大地にいるように、全身の体温が消えていくように一夏は錯覚していた。

「話せよ」

小さく語るシンの全身は怒りで揺らいでいるように見える。

一夏は、何とか声を絞り出すようにして語る。

リンとの約束、酢豚の話、その後の売り言葉に買い言葉で傷つけたこと。

最後まで語り終わると、妙な寒気は消えていき、後には盛大な溜息を呆れたようなシンの目線だけが残っていた。

「おまえね、そんなのは一つの意味しかないだろうが」

「奢ってくれるって話だろ?」

「正気・・・だよな。まったく、本当におまえってやつは」

明らかに落胆しているようなシンに、一夏はふつふつと怒りがわき上がってきた。殴られて蹴られた理由も、今の目線のことでも理不尽ではないかと。

「恥じない人間になりたいだったよな？　今のおまえ、最低だぞ」

予想外の言葉に、一夏は頭を鈍器で殴られたような錯覚に陥った。「リンがどんな気持ちでいたか。それが解らないなら、白式や千冬さんに恥じない人間になれない。後な、どんな状況でも男が女を泣かすな」

次にやったら俺が殴り殺す、とシンは最後に念を押してから部屋を出ることにした。

まったく馬鹿らしい。あの時のテイスのデータは正確だったということか。

千冬と一夏の両親は、何故にあんな朴念仁に育ったのか。答えのない疑問を胸の中にしまい、シンは軽く頭痛がしてくる頭を抑えた。

「まったく、鈍感な奴だよな」

『・・・・・・』

「なんだよ、テイス？　俺は違うからな」

『うん、解っているよ、シン。シンはね、鈍感じゃないけど、馬鹿ではあるからね』

「は？」

相棒に言われたことの意味が解らずに見つめるが、彼女は何も語らずに溜息をついていた。

背負うべきもの

もしも、人生が二度あるならば、苦しい道は選ばないといった人がいた。もしももう一度やり直せるならば、どんな対価を払ってもいいと言った人もいた。

人生は一度きり。だからこそ、誰もが足掻くのだろうか。絶対に退けない一線を決めて、そこから先へ行かないように。

しかし、確実に二度目の人生を歩んでいる人はいる。多くの人が羨望の眼差しで見つめる中で、彼らあるいは彼女達は小さく首を振る。

こんな人生は、苦しいだけだ、と。

「リタは、そんな気持ちだったのかな？」

小さく口を呟いて出たのは、彼自身が思ってもいなかったこと。

リタは転生者だ。前の人生はとても酷くて苦しくて、最後には救われたらしいが、本当かどうか確かめようはない。

たぶん、師匠―テラ・エーテルならば調べることができのだから、リタ自身が望んでいないから、調べたことはないだろう。

『シャドー・ネットワーク』は、探査や調査専門の秘匿情報ツール。それが調べられないものはなく、それが調べたものはイグドラシル・ユニットにおさめられて、知識の図書館で整理される。

そして、『オラクル』と呼ばれる存在が、それらを司り知識と情報を集め続け、帝国の平穏を支える柱の一つになる。

彼ならばきつと、リタがどういった人生を歩んできたのかは知っているのかもしれないが、彼は語らないだろう。

『シン』

「ん、なんでもないよ、ティイス」

隣で不安そうに見上げてくる少女の頭をなでながら、シン・アスカはアリーナの中心に立っていた。

今頃、織斑・一夏と凰・鈴音の対戦が始まったところか。

全校生徒が戦いを見るためにアリーナに集まったこの時期に、シン・アスカは別のアリーナを借りて待っていた。

「本当に来るのかしら?」

少し離れた場所にいる生徒会長―更識・楯無の呟きに、シンは空を見上げて拳を握る。

「来るさ」

根拠はない、自信もない。けれど、ティスと自分の感が告げている。フェネクスはここに来る、と。

「聞いてもいいかしら? 貴方はどうやって戦うつもりなの? 私にも来るなって言ったわよね?」

「ああ、あいつと戦うとしたら周りを気に出来ないからな。織斑先生に誰も近寄せないように頼んだのに、どうしてあんたはここにいるんだ?」

「私は生徒会長よ。生徒達の安全を守る必要があるの」

「俺は用務員だけど?」

「同じよ。貴方が倒されたら、私に対処するのよ」

パツと彼女が扇子を開くと、『お解り?』と文字が書かれていた。

「ISって便利だよな。そんなこともできるのか?」

「貴方の『相棒』よりはできないことのほうが多いわよ? それに、私だけじゃないみたいだけど」

「何してんだか」

楯無が示す先、アリーナの観客席の一部の景色が歪んでいる。光学迷彩か、便利なものがあるんだな、とシンは呆れながら思っていた。

「束! 一歩も動くなよ! 気にしてやれないからな!」

「ひゃい?! 解った」

ビクツと景色が歪んで、再び静かになっていく。

気づかれてないつもりだったのだろうか、最初にアリーナに来た時からティスが警告を出しているし、気配が垂れ流しなのですぐに解ったから。

「篠ノ之・束博士って、人見知りで人間嫌いだって聞いていたのだけだ?」

「人は変われるんだよ。楯無だって、何か変わりたいものあるだろ?」
質問に質問を返すと、彼女の表情が少しだけ歪む。過去の後悔か、

あるいは今も続いている苦悩か。どちらにしろ、彼女にも取り戻したい過去があるみたいだ。

「なあ、もしも、さ」

「何かしら？」

「もしも、人生を最初からやり直せるとしたら、どうする？」

不意討ちのように話した内容に、楯無は『冗談』と返答はせずに考え込んでいた。

律儀な奴だなど思いつつ、シンは右手を開いてゆっくりと握りこむ。

「……人は生きていればやり直したい過去の一つや二つあるわよ」「重い響きだな。さすが先輩ってところか？」

「茶化さないですよ。私は茶化してないわよ」

「悪い。そうだよな……でもさ、人生って一度しかないから精一杯やろうと思えるんだよな」

たぶん、誰もが転生してと望みながらも、心のどこかでは一度だけの人生と割り切って生きている。

もう一度、もう一回だけあればと願いながらも、どうしようもない人生を精一杯に。前に前にと、進んでいく。

そうだよな、リタ。とシンは心の中で呟いた。

光が流れる。緑色の粒子がシンの視界に溢れだし、やがて一つの形へと収束していく。

金色の鎧を纏った、機械の翼を広げた不死鳥。

「あれが、フェネクス」

楯無の呟きを合図に、シンは地面を蹴とばす。

出し惜しみなし。最初から全開の全力、すでに両手にはエクスカリバーとアロンドイトを握っていて、最初の一撃を繰り出した。

赤い閃光が大地を裂く。全力の一撃の最初は左手のエクスカリバー。連結された巨大な対艦刀は、それだけで絶大な一撃となる。

フェネクスの右手が動く。ビーム・トンファアが粒子の刃を発生させ、光が溢れだした。

ジェネレータ直結、一時的なりミッターカットによる『擬似対艦刀』の発生。ビーム・サーベルではなく、ビーム・ブレード。巨大な刃とエクスカリバーがぶつかり合い、行き場をなくしたエネルギーが荒れ狂う。

「リター！ 聞こえてるんだろ！」

相手にパイロットはいない。彼女が乗っているわけではない。そんなことはよく解っている。無人機でオート・ドライブ中、テイスが調べた結果を疑うことはない。

けれど、叫ぶ。

「おまえに何があったか知らないけどな！」

エクスカリバーが弾かれる、流れる左半身の勢いをそのまま右半身へと流して、本命の一撃。

全身の体重と渾身の力で叩きつけられるアロンダイトの一撃が、フェネクスの左側のシールドを叩き潰す。

先端から半ばまで切り裂かれたシールドだが、すでに機体から離れ空中にある。フェネクスの機体は僅かに後ろに下がり、左手に粒子が集結してビーム・マグナムになった。

「おまえがどんな人生を歩んできたなんて知らないけどな！」

銃口がこちらを向いた。瞬間、シンは相手の指先の動きと銃内部のエネルギーの流れが、『見えた』。

放たれる弾丸を、彼は寸前で回避。エネルギーの余波にさえ囚われず、真っ直ぐに前に突き進む。

「いいかげんに怯えるのは止める！」

二つの刃を重ねて横薙ぎ。前に出た勢いそのまま、体ごと回転させての二重攻撃は、フェネクスのボディを僅かに削る。

けれど、傷ついた装甲とシールドは、粒子がまとわりついてすぐに修復される。

「ここはおまえがいた世界じゃない！」

関係ないとばかりにシンは前に。一撃で落ちないなら二撃で、二撃で落ちないなら三撃で。相手が沈むまで攻撃して倒すだけだ。

「ここはおまえが死んだ世界じゃない！」

周囲に粒子が踊る。次々に武装が構築されていく中を、シンはただフェネクスの本体を追い詰める。

相手がどんな武装を創ろうが、関係ない。相手の攻撃が来るかもしれないなんて心配は、微塵もしていない。

こちらには頼りになる相棒がいる。

『フェザー・ビット！ シールド・ビット！ 全展開！ モード『決闘』！！』

羽のようなビットが生み出される武装に突き刺さり爆発。楯のようなビットが周囲からの攻撃を反らして進路確保。

周囲に漂うフェネクスの武装に対して、二種類のビットが動きまわって撃破と妨害を続ける。

これがモード『決闘』。一対一へ強制的に相手を追い込むために、すべてのビットを使った『結界』。

「ここは！ 俺達の帝国は！ おまえに何も強要しない！」

フェネクスが両手のビーム・トンファアを発生。増大させたエネルギーの刃が、二つともブレードとなってエクスカリバーとアロンダイトを弾く。

両手が左右に弾かれたことで、シンの体が止まる。

チャンスとフェネクスが前に出た。両手以外に武装を持たないシンに対して、フェネクスは両手以外にも武装がある。

頭部のバルカンが放たれる、弾丸は真っ直ぐにシン・アスカへと向かって、虚空を薙いだ。

「おまえが辛いならそう言えよ！」

シンの姿はフェネクスの背後。

左右の手に引き抜くは、特殊な金属を使ったシンの中でも上から数えたほうがいいほどに強力な武装。

『ウロボロス』。

一撃、二撃と振られる刃はフェネクスの装甲を削りながら、周囲に漂う粒子を喰らい始める。

「おまえが怖いなら助けてって言えよ！」

粒子の供給量よりも、ウロボロスの吸収力が上だ。いくら無限機関とはいえ供給量よりも消費量が多ければ次第に枯渇していく。

武装が展開できず、装甲も再生できないフェネクスは、機動力を低下させていた。

「おまえが辛いならそう言えよ！ 俺達は仲間だろうが！」

攻撃の手を緩めずに、シンはただ叫ぶ。

相手はサイコ・フレームを使った、パイロットの『意志』を取り込んで動く機体だ。そこにリタはいない、いるわけがない。けれど、彼女の悲哀はそこに宿っている。

最も深く最も大きく、リタの悲しみを吸った機体。フェネクス四番機は、戸惑うように動きを固めていった。

「おまえが辛くて悲しいなら一緒に受け止めてやる！ おまえが痛いなら一緒に背負ってやる！」

アイリスが何故、四番機を選んだのかは、きっとそこだろう。リタの悲しみを最も多く封じ込めた機体は、まるで彼女の過去の呪縛の象徴でもあるから。

「俺が！ 俺達が！ おまえの隣にいてやる！ だからもう！」

右手の『ウロボロス』の一撃が、フェイスガードを割る。その下から出てきたのは、何処か幼い顔の少女の仮面だった。

「もうそんなに泣くなよ」

泣いているようなそれが背を向け、背中が見えた瞬間に、シンは右手でライフルを持ち上げた。

三発の銃弾は、正確に『彼女』の背を撃った。

ライフルはISの武装を拝借した。どう考えてもデステイニーの武装では怖いため、ISのライフルを借りて、至近距離から撃って装甲を貫通させることにした。

近接戦闘で追い詰めて、至近距離で狙って撃つ。

フェネクスは主機関が崩壊したことで、三つの機関の統制が崩れたためか、次第に粒子に変換されて崩れていく。

機密保持のための自壊作用かもしれない。甘いところある、非常識な考え方をする、それでも彼女は五つの太陽系を支配下におく銀河帝国の宰相だ。

アイリスのやることに抜かりはない。彼女が本気になれば、たった一人で帝国を回すことができるのは、伊達や酔狂で言われていることではない。

事実、あの人は冗談抜きで帝国を一人で運営できる技能があるから。

「終わったの？」

「ああ、終わった」

隣にきた楯無と、恐る恐ると近づいてきた束。二人を振り返り、シンは両手の剣をしまう。

「凄い戦い方ね。本当に貴方、人間？」

「人間だよ。普通の人間だって……まあ、騎士ではあるけど」

「そうなの。へえ〜」

何故か、とても寒気のある目で楯無に見られて居心地悪くなったシンは、小さく後ろに下がったのだが。

頬を膨らませて両手を振り上げている束が、ゆっくりと近づいてきて胸に両手を叩きつけてくる。

「シー君の浮気者！」

「はあ?! なんだよそれは?!」

「ううう!! なんてか解らないけどいいいたくなつたの?!」

「ちよつと待ててー!」

意味不明な怒られた方に、シンはため息をつきながら彼女を自分から離す。

「あのな」

いい掛けて、シンは背後からの気配に振り返った。

フェネクスが崩壊した場所、揺らぐような陽炎が立ちあがり、それが一人の少女の姿を形作る。

「リタ?」

『……シン、ありがとう。大好き』

微笑みながら告げた幻は、そのまま風に流されるように消えた。

「……俺、殺される」

がつくりと彼は膝をついた。

あのリタに告白された。嬉しいことかもしれない、美人に好かれるなど男冥利に尽きる。

しかし、だ。彼女の姉を明言している存在を思い出すと、命の危険しかない。

アイリス・クロームクラウン・エーテル宰相。リタを溺愛し、彼女のために機密の塊の機体を一個、ポンつと手放すような存在。

槍と剣の両手装備で、あのテラ・エーテルを追い詰める存在の溺愛した少女の愛情を受け取ったことを知ったら、確実に殺しに来る。

『リタを護れるかどうか、テストしましょう。いいわね、シン。殺して上げるからそこに座れ』、とか言っただけで全力で来そうだし。

「ちよつと大丈夫?」

「シー君、なんで蒼白なの?」

楯無と東の二人に心配されても、シンはとても立ち直れそうにない。

なんとかしないと。軍事機密を公言しても許してくれそうだが、こゝと身内のことになるに厳しい彼女の対処の仕方。

色々と考えたシンは、ゆつくりと立ち上がり、清々しいほどの笑顔を空へと向けてから心の中で呟いた。

『無理だ、諦めよう』。

どうにでもなれ、と諦めたシンの耳に緊急通信が入った。

『シン・アスカ！ 今すぐこちらのアリーナに来い！』

「織斑先生？ 一体、何が？」

『未確認ISの襲撃だ！』

敵襲、フェネクスとまったく別の。反射的に束に視線を向けると、彼女は慌てて両手をあげて首を振った。

「私は知らないよ！ いった君と箒ちゃんに迷惑かけたくないもの！」

それにちーちゃんを怒らせたくないし！ なによりシー君に！」

必死な様子の彼女に違うかと思いつながら、シンは解つたと束に伝え、その後、走り出した。

「楯無さん！ 束のことよろしく！」

「ええ、解ったわ！」

背後からの返事を聞きながら、シンはアリーナの中を疾走。一夏達が使っているアリーナまで最短ルートを走破。

『シン・アスカ、電子ロックを外せるか?!』

「了解！」

返答しながらティスに目くばせ。

『了解！ へい！』

ティスが両手を振り下ろすと同時に、学園中に警報が響き渡った。

『うむ、システムごとフリーズして緊急避難を開始させたほうが速いのです』

『シン・アスカ、後で学園の避難誘導システムにどうやってアクセスしたか、じっくり聞かせてもらおうぞ』

「は、ははは」

やりすぎだろうとシンは呆れながら走り、そしてアリーナの屋根の淵に降り立つ。

アリーナの中では一夏の白式とリンの甲龍が、未知のISと対峙していた。

見たことのない機体だ。シンの知っている帝国の機体のどれとも一致しないし、今まで見たことのあるISとも一致しない。

『シン、あれを撃破できるか？ 二人には……』

千冬からの通信に、すぐに動き出そうとしたシンは、見てしまった。

こちらを向いた一夏の視線が、『安堵』したのを。

「俺は動きません。生徒達は避難させてください」

『どういうことだ？ 織斑と風を助けないつもりか？』

「はい。あいつらだけでどうにかさせます」

『貴様、二人の命がかかっているんだぞ』

「かかってませんよ」

小さくシンは言い置いて、アリーナの観客席まで『転移』した。

織斑・一夏は混乱していた。

リンとの一戦。相手を泣かしたことで、彼女の言っている意味を違うふうに捉えていたこと。シンに殴られたこと。

色々と考えて、色々悩んで。考えた結果を持って臨んだ一戦だったのに、無粋な乱入者に妨害された。

誰か知らないが、相手の武装は一級品らしく、アリーナに施された防御用フィールドを貫通。生徒たちもドアがロックされて観客席から逃げ出せない。

逃げろと言ってきたリンを無視して立ち向かったものの、手ごたえなんてなくて逃げ回るしかない。

エネルギーも少なくなってきた。こんな時に彼ならば、シン・アスカならどうするかと考えてしまい、やがて一夏は知らず知らずのうちに『彼が来てくれたら』と考えるようになった。

「一夏！ 逃げなさい！」

「うるさい！ 今シンが来てくれるから、だから」

「あいつが来たからなんだっていうのよ?!」

「シンならこんなやつ簡単に！」

叫びながら視界を回した時、アリーナの観客席の屋根に、人影が見えた。

シンだ。ようやく来てくれた、これでこいつを倒してくれる。

無意識に安堵した一夏に対して、彼は『鋭く睨みつけた』ように見えた。

気のせいかと考えている間に、シンの姿は観客席のところへ。

「シン！ こいつを倒してくれ！ 俺とリンじゃ無理なんだ！」

「何でだ？」

緊張感と追い詰められた怖さに震えながらも叫んだ言葉に、シンはとても冷たい声で答えた。

何故、どうして、そんなことを言っている暇に倒せるんじゃないのか。

戸惑う一夏は、シンの隣に近づいているシャルロットとセシリアを視界に収めて、彼女達に助力を願った。

「二人とも！ シンに言ってくれ！ こいつを倒さないと！」

「え、あ、でも」

シャルロットはシンと一夏を交互に見つめ、戸惑ったように言葉に詰まる。

一方のセシリアは無言で一夏を見ていた。その瞳には、わずかながらの落胆が見える。

「なんでだよ!? こいつを倒さないと被害が広がるんだぞ！」

「知っている。だからさ、『さつさとおまえが倒せよ』一夏」

「は？ 何言ってるんだ。俺じゃ倒せないから、おまえに」

「甘えるなよ、一夏」

冷たく突き放すように、シンの言葉が刺さった。

「何が、何が甘えるんだよ！ 俺たちが死んでもいいのかよ!？」

「死ぬ？ そんな程度の相手に？ 笑い話なら後で聞いてやる」

シン・アスカは、何処までも冷たく淡々と言葉を紡ぐ。まるで相手など問題ではないように、今の一夏が『手こずっている』ことが間違っているように。

「何でだよ」

理解できない、解らない。シンを見たまま固まった一夏に対して、彼は鋭く睨みつけた。

「動揺しているんじゃない!!」

怒声がアリーナを揺らした。気合の入った言葉に、思わず一夏は一歩だけ足を下げていた。

「相手をよく見ろ！ 敵の攻撃は！ 今のおまえの状態は！ そんな程度の敵に殺される？ 死ぬ？ ふざけるなよ織斑・一夏！ おれはおまえをそんな柔に育てたおぼえはない！」

圧倒される。今のシンは訓練の時よりも大きくて、訓練の時よりも怖い印象を受けた。

けれど、一夏の足は下がらなかった。何故か無意識に、『下がるな』と叫んでいるように、体はその場に留まる。

「周りをよく見てみる！ おまえの手のあるものをよく見ろ！ 白式は無理だっているのか?! 周りの生徒達は怖がってないか?!」

自然と視線が手の中の『雪片』に向けられ、続いてアリーナの観客席で逃げている途中の生徒達へと動く。

誰もが怖いと全身で語っていた。助けてと叫んでいた。

手の中の剣は暖かく鼓動している。やれる、まだできる。逃げないで、立ち向かえと叫んでいる。

「ここで逃げて俺に頼って敵を倒して！ おまえはそれで『恥じない人間』になれるのかよ?! 答えろ！ 織斑・一夏!!」

「俺は……」

「聞こえないぞ！」

「俺は！ 俺は逃げないからな!!」

気合が体を通り抜けた。周り中がよく見える、今まで怖かった攻撃が、まるでおもちゃのように感じた。

敵の動きがよく見える。相手の攻撃のタイミング、回避のタイミング。なんだこんなものかと心のどこかで、冷静に見ている自分がいる。

シンの動きに比べたら、まるで稚拙な赤ん坊。彼の攻撃に比べたら、子供の遊戯のようだ。

一步一步と一夏は近づいていく。彼としては歩行しているつもりでも、白式は鋭く飛翔していた。

相手の右手が上がる、あの光学兵器が来る。

「遅いな、お前」

瞬間、『零落白夜』の光が流れた。

ハツと一夏が振り返ると、敵が崩れ落ちて爆発したところだった。

「できるだろうが、甘えんなよ」

観客席で、シンは呆れたように溜息をついて、階段を上がっていった。

そうか、彼は自分をここまで鍛えてくれたのか。気づかず甘えて逃げていたのは、自分の弱さか。

「ありがとな、シン」

背を向けた彼は、右手を横に向けて親指を突き出した。

二つの戦闘を見つめながら、織斑・千冬はシン・アスカに対しての考察をしていた。

一夏が強くなったのは、彼のおかげだ。信じられないくらいに技量が伸び、精神的な未熟さが鍛えられている。

一方で、生身で音速戦闘を行う彼は何者なのだろうか。

今日の未確認ISの襲撃の時の対応も、その後の一夏への激励も、

とても十七歳の少年のものではない。

「あるいは、軍人か」

小さく口を出した言葉に、『まさか、な』と否定した。

彼が軍人ではない、軍人の気配はするがもつと別の。

騎士、か。千冬は自分の直感が出した答えに、思わず苦笑してしまう。今の世の中に、そう呼ばれる人物はいたとしても、実際に『騎士』である人物はいない。

中世ではない、現代において騎士はとても無力だ。個人がすべてを決定し、戦局を変えるなんてありえない。

「しかし、な」

彼を見ていると、それが出来そうに感じる。一夏を鍛え上げたこと、リンとの仲を取り持ったこと、箒への影響、セシリアやシャルロットの対応など。

なによりあの幼馴染を変えたこと。色々なことを思い浮かべて、千冬は資料を広げた。

「おまえなら、こいつらをどうにかできるか？」

広げた資料は二つ。書かれた内容はそれぞれ、問題があるような生徒のものだった。

おまえは軍人じゃない

フェネクスの件が片付き、学園は一応の平穏を得た。

学生たちにしてみればフェネクスのことなど知らず、未知のISの襲撃を受けて一夏が見事に撃退した、という認識でしかないだろうが。

誰にも悟られず、人知れず問題を解決するのが『ヴィルティラス』だから、シンとしては当たり前のことなので、称賛なんでもものに興味はない。

誰からも感謝されることもなく、影日向に活躍するのが騎士だとも教えられているから、今日も何時も通りに動いていた。

織斑・千冬から、『説明しろ』と色々といわれたが、機密情報が多いため話せないので素直に頭を下げた。

彼女も何かを察したらしく、『解った』と言ってくれたのだが。

代わりに何か頼まれないかビクビクしていたが、彼女は特に何を言うこともなく見逃してくれた。

「それが怖い」

『うん、怖い』

ティスと二人で軽く震えるシンだった。

唐突だが、軍人とはなんだろう。

軍人、軍隊に所属する人たち。武器を持つ者達。

色々な言われた方をするだろうが、シン・アスカにとって軍人とは

帝国軍人たちを示す。

規律を重んじる、鍛え上げた肉体と技術を誇り、鋼鉄の意思で規範を示す者達。

職業軍人ではない、軍人という生き方を選んだ者達の集団。

命令を冷徹に遂行する、鋼の絆で結ばれた一つの集団は、全軍が動いた場合は集団ではなく『一つの生命体』のように淀みなく迷いなく作戦目標を達成していく。

その一方で、軍務でなければ気さくで陽気で、とても気のいい連中だったのを覚えている。

武力を持つからこそ、武器を持つからこそ、自らを律して過ごす。周りの恐怖が解るからこそ、普段は陽気に人間らしく過ごす。

ジョーカー―銀河帝国軍の軍人とは、そういった人たちだったのだが。

「はあ？ 殴られた」

「で、投げ飛ばした」

「いや、それは正当防衛だろうが」

何時もと変わらない放課後―と思いたいが、そうでもないらしい夕方方の時間に、シンは花壇の整備を終えたところで一夏に深々と頭を下げられた。

何がどうなつてと理由を問いただしても、『俺はやつてはいけないことまたした』とだけしか言わない。

潔いと褒めるところなのだろうが、あまりに潔過ぎて何のことか解らないので困惑していると、シャルロットが説明してくれた。

転校生が来た、軍隊に所属している軍人らしく、織斑・千冬に尊敬を向けていた。あれは崇拜に近いらしい。受け答えが軍人そのもので、自己紹介が終わって席に着く途中で一夏のところで立ち止まり。

『私はおまえを認めない』と言われて頬に一発貰った。

「で、気がついたら投げ飛ばしていったってわけか」

「なんだか一夏って、そういうの多くない？」

リンが横から口を挟むが、当人としては困惑していた。

彼自身も、自分が意識が薄くなつて体が勝手に動いている自覚はあ

るらしいが、どうやって止めていいか解らないらしい。

「ゴーレムの戦の時は特に顕著だったが」

箒の言葉に誰もがあの一戦を思い出した。まるで別人のようにI Sを操って、一刀で苦戦していた敵を倒したのは、幻を見ているようだった、と。

「俺、病気なのかな?」

「いや、それはないな。きっと特訓の成果が先に体に現れたんだろう。よくあることだ」

「あるのか?!」

驚いてシンを見てくる一夏に対して、彼は大きく頷いて手に持っていたスコップをバケツに入れた。

「徹底的に攻撃して覚えさせたら? それが体に馴染んで、条件反射を上書きしたんだな。後は、毎日の訓練を続けていけば心のほうも付いてくるさ」

「本当なのか?」

少し疑いの目線を向ける一夏に、シンは自分を指差してこう答えた。

「見本がここにいる」

瞬間、誰もが眼を見開いて驚いた顔をしていたが。

「で、そいつはどうしたんだ?」

「保健室で寝ている」

「は?」

今度はシンが驚いた顔を向ける番だった。マジかと小さく呟いた彼は、片手で顔を覆った後に、一夏へ目線を向けた。

「やり過ぎだ、途中で手加減してやれよ」

「したんだよ」

「なるほどな」

手加減して保健室行き、これは本格的に『織斑・一夏』は覚醒に向かっていているというわけか。

だとすると、その『転校生』は奇跡的に助かったわけか。もし本当に彼が覚醒していたなら、今頃は墓の中という可能性もある。

「よっし、一夏。これからは精神的な試練をやるからな」

「い?! い、今よりきつくなるのか?」

恐る恐ると問いかける彼に対して、シン・アスカはとてもいい笑顔で答えるのでした。

「え、まだ十分の一もやってないぞ」

「あれで?! ちょっと待ってくれシン! 俺はもういっぱいいいっぱいで」

「恥じない人間になるんだよな? まさか、おまえの姉が『あの程度の強さで示せる人物』だなんて言わないよな?」

とても寒気のする目線が一夏を貫く。

周りのシャルロット、セシリア、箒、リンは気づかないのだが、織斑・一夏はこの『寒気』を深く理解してしまう。

これはシン・アスカの実力の一端だろう。実力が上がってきた今の一夏だからこそ、深く理解をして余計に寒く感じてしまう。

まるで魂さえ凍らせるような、『殺気』。裸で極寒の大地に放り出されたように、全身の感覚が無くなっていく。

「い、いや」

何とか絞り出して答える一夏に、周りは怪訝な顔を向ける。

「なら、もっと強くなれよ。まだまだ教えてやれることはあるんだからな。特にだ、ゴーレムの時、俺を『頼ろうとした』な?」

一夏は痛いところを突かれ、全身が余計に寒く感じてしまう。

「相手の実力を正確に把握して対処する。相手が格上だったとしても、いくらでもやりようはあるのに、他人に丸投げする。まったく、精神的に弱い証拠だ」

「けど、誰だつてあるだろ?」

迂闊に反論してしまった。一夏はしまったと内心で思うのだが、次の瞬間には手足が『凍って砕け散った』ような錯覚を覚えた。

「誰だつて? そんなのは言い訳でしかない。あの時、『少しでも下がろうと考えたおまえの弱さ』は、『おまえ自身の可能性を閉ざすだけ』だ。二度とと思うな」

「解ったよ」

何とか絞り出すように、一夏は答えて息を吐く。

本当に息が白く見えるから、彼の『殺気』は極寒の冷気に等しいらしい。

「解ればいいさ。さてと、俺は次は整備室のほうを点検してくるから、先に訓練場に行つていてくれ」

シンは置いてあつたバケツを持ち上げ、何事もなかったかのように歩いていく。

背中を見送つた一夏は、ホッと息を吐いた。

「あいつつて、あんなに怖い奴だつたんだな」

「今頃になって気づいたの？」

「明らかに危機意識が足りませんわね」

呆れた顔のシャルロットと、ちよつとだけ肩をさすつているセシリアア。

一方で、箒とリンは何の話ときよんとした顔をしていた。

これが明確な実力の差、彼の気配の変化が解るかどうかだが、そのまま各人の実力の差になつていた。

アリーナに併設されたように配置されている整備室は、様々なISが置かれている場所でもある。

専用機はさすがに厳重な監視体制と警戒システムの管理下におかれてはいるが、他の一般生徒が使うISはハンガーに固定されたままだ。

放課後ともなればISを使った自主練習に使用されるため、空いているハンガーがほとんどで、機体が固定されているハンガーはほとんどない。

けれど、すべてが空いているわけではない。

一つのハンガーは、ずっと機体が固定されたままだ。

『む、前に見た時より進んでいる。関心感心』

隣でティスが大きく頷いているので、なんで上から目線なのだろうと呆れてしまう。

装甲を外され、ハンガーに固定された機体は、まだまだ未完成品。整備されているわけでもなく、未完成の機体を引き取って組み上げている途中のようだ。

前に見たとき、『学生が作るのか、凄いな』と眺めていたのだが。今日はその凄い学生がいるみたいだ。

モニターを見つめている少女が、小さく頭を振った。丁度、シンが見つめていたところだったので、目線が彼女と合う。

「何？」

「あ、いや、凄くなって。一人で組んでいるのか？」
「そう」

言葉は少ない、眼鏡をかけた少女に対して、シンはどう言葉を返そうかと考えて、機体へと視線を向ける。

「ISって作るの難しいんだろ？ それを一人で組み上げるなんてすごいって思うよ。本当に」

「別に。前にやった人がいる」

そっけない言葉の中に、冷たく黒い感情が乗る。嫉妬か嫌悪の類か、組み上げた人物は彼女にとって、『嫌いになる』存在らしい。

「へえ、凄い人がいたんだな……って束もそうか」

「篠ノ之博士じゃない」

即答で否定された。では、誰なのだろう。確か束も一人で組み上げたのではなかっただろうか。

最初のISは彼女が学生の時に組み上げ、発表会で笑い物にされたのでお蔵入りにしようとしたら、『ミサイルが偶然に降り注いで大騒ぎになった』ので織斑・千冬が使用して迎撃したらしいのだが。

どうにも裏がありそうな話だが、今は関係ない。

「他って、誰かいたのか？」

「更識・楯無生徒会長」

ギョツと、彼女が何かを堪えて言葉を紡いだ。

彼女のことを嫌いなのか。どういう理由で、何が原因でと考えるシンの脳裏に彼女の顔が浮かんで、目の前の少女と重なる。

「ひよつとして、妹か？」

キツと睨みつけられた。凶星か。ということは、姉が優秀すぎて比べられたので、それが次第に負担から嫌悪になって憎しみになった、と。

なんだこの複雑怪奇な話は。いくら姉妹とはいえ、姉は姉、妹は妹だろうに。

「貴方は、シン・アスカ？」

「あ、ああ。そうだよ。よく知っているな」

「有名だから。生徒会長を倒した、ISに乗らない最強の用務員」

話の内容がガラリと変わって、次に出てきた話題にシンは頭を抱えなくなった。なんだその痛い言葉は、最強の用務員ってどういうことだ。

弱いつもりはないが、最強なんて名乗れるほどに自分は強くない。仲間内での勝率だってやっと七割に届くかどうかなのに。

「貴方はどうしてそんなに強いのか？」

「俺は強くないよ。そんなに強いつもりもない」

「嘘つき、貴方は生徒会長を破った。なら、学園で最強は貴方。それは十分に強い」

「状況が良かったから、勝てただけさ。次にやったら、簡単にはいかないだろうな」

楯無だつて対策くらいは建ててくるだろう。次に同じ条件でやったら、簡単には勝たせてくれるわけがない。

「どうしてそんなに強くなったのか？」

真っ直ぐに見詰めてくる瞳は、嘘は許さないと言っていた。

だから、シン・アスカは真面目に答える。

「昔さ、俺は目の前で家族を失いかけた。本当に、あっさりと手から零れ落ちるように」

紛争の最中に飛び込んでしまったこと。逃げ遅れたのは、戦争の怖さで動けなかった自分の所為で、家族はそれに巻き込まれて爆撃の被害にあった。

偶然、自分だけが範囲外に飛ばされて助かった。全身が痛くて泣いて起き上がって、そこで家族が血だらけで転がっているのを見てしまった。

「悔しかった。自分が臆病で弱かったから、家族を殺してしまった。そう思った。情けなくて苦しくて、でもどうにもできない時に師匠に会った」

「貴方の師匠？」

「ああ、凄い人だよ」

偶然に通りがかったあの人が助けてくれたから、今も家族は笑顔で過ごしている。当時のことは、全員から『気にするな。助かったことだから、大丈夫だ』と言われているが、今も心の何処かに残っている。「その恐怖が、今の俺の背中にある」

「背中に恐怖が？」

「俺が足を止めたら、あの苦しさを誰かが味わうかもしれない。俺が止まったら、助けられる命が失われるかもしれない。だから、その恐怖が俺を前に押し出す」

進め、止まるな、前に出る。あの時の悔しさと怖さが、シン・アスカを前に前にと押し続ける。

無力で泣いていた自分の姿が、『もう二度と嫌だ』と語り続けるから、止まらずに前に突き進む。

「そんなことがあるのに、貴方は笑っていられるの？」

「笑っているさ。これは俺だけの悔しきで、他人に見せつけるものじゃない。それにさ、俺は騎士になれと言われた。騎士って言うのはさ」

晴れやかに笑う、何も心配ないと、自分がいるから大丈夫だと全身で語るように。

「誰かの重荷になるものじゃない。誰かの勇気になるものだから。俺はそう教えられたから、そういつて頼もしい背中を見続けてきたか

ら、だから俺もそうありたい」

砕け散るその瞬間まで、死んだあとも誰かの勇気になれるように。誰かを支えられるように。

「強いね」

「誰だつて強くなれるさ。過去は絶対に変えられない、ならそれをどうやって自分の『糧』にするかは、その人次第だからな。現在と未来はどうとでもなる。そうだ、名前、教えてくれよ」

「更識・簪」

小さく名乗る少女に、シンは相手の名前を呼ぼうとして、言葉を止めた。

彼女は楯無の影に怯えている。姉と比べられて怖がっている。ならば『楯無』と呼ばない方がいいか。

「ありがとう、よろしくな、簪」

「あ……名前で呼んでくれたの」

「俺は知り合いに二人にいるからな、どっちも『更識』じゃ混乱するだろ。だからさ、簪は簪、楯無は楯無だ」

姉妹とはいえ、別々の人間なのだから、違っていい。優劣なんて決めるべきじゃない。人間は一人一人が違っているからこそ、社会を形成して相手を尊重して生きているのだから。

小さな言葉に込めた思いは、彼女に届くか解らない。でも込めることは大切だと教えられたから。

「ありがとう、シン」

「どういたしまして……っ」

笑顔を浮かべる彼女に笑いかけたシンは、唐突に顔を訓練場に、アリーナへと向けた。

次の瞬間、轟音が響いた。

「悪い簪！ 話はまた後で！」

「うん！」

いい置いて、彼はすぐさま走りだした。

殺気に敏感になるのは、いいことなのか、悪いことなのか。

一夏は『雪片』を振り抜いた姿勢のまま、静かに顔を向けた。

「何のつもりだ？」

視線は鋭く相手を睨みながら、全身の力を抜いていく。余分な力は反射神経を鈍らせる、余計な体力を消費して持久戦になった時に自分の首を絞めるだけだ。

全身に力を巡らせて、緊張を適度に保ったまま、自然体で動く。

「ほう、斬ったか。さすが、私を投げ飛ばしただけはある」

上から見下したような目線。ニヤニヤと気持ち悪い笑み。まるで子供をいたぶるような態度に、一夏の精神が波立つ。

「何のつもりだって聞いているんだ」

「訓練さ。お前達は訓練をしているのだろう？　なら私が教えてやろうと思っただけな」

「何をだ？」

質問しながら、視線を僅かに動かす。視界の中に相手を収めたまま、視界の隅を使って周辺を探る。

セシリアとリンはアリーナの隅にいる。それぞれのISの武装について話をしていたから、距離が開いている。こちらに近づいてくる途中だから、片手を振って止める。

箒とシャルロットはハンガーだ。ISのエネルギーチャージに戻ったところだったから、巻き込むことはない。

ならば、目の前の相手に集中するか。

「本当の戦場というものを、だ!!」

レールガンが来る。そう思った瞬間に右手をはね上げた。大口径のレールガンは衝撃音だけ残して、アリーナの上空へ。爆発が空を染

め上げ、衝撃波が地上へと叩きつけられる。

「面白い！ ならば次はどうだ！」

続いてワイヤーか。ご丁寧にワイヤーの先に刃までついている。思考制御かもしれないが、これだけの数を同時操作できるものなのか。

セシリアでさえ、ビットの六つ同時操作は大変だと言っていたのに。大変だが、『できないかどうかは別』らしいので回避を。

「避けるか！ しかし避けてばかりでは私を倒せないぞ！」

興奮しているのか。先ほどから叫んでばかりの相手ーラウラを一瞥した一夏は、低く身を落として地面を蹴った。

「は？」

「遅い」

一閃、ワイヤーとレールガンすべてを切断。返す刃で相手の首を、と考えている途中で体を止める。

「貴様あ!!」

相手の手刀が来る。エネルギー反応あり、特殊な攻撃か。僅かに半身を引いてギリギリで回避した後、柄尻を相手の鳩尾へ。

命中。ラウラの体が折れるところへ、首筋に一撃を入れて気絶させれば。

「舐めるな!!」

彼女の上半身が上がる。瞬間、一夏は背筋がゾクリとしたのを感じた。

退避、全力で。地面を蹴とばすと同時に瞬時加速開始、左右別々の同時作動で二倍。さらに全身の筋肉も使った作用で、距離を稼ぐ。

「避けたらど？ 貴様、私の『停止結界』を知っているのか？」

「何となく嫌な予感がしたただけだ。ISの機能に対しての能力だな？」

「どうして知っている？」

「さてな」

ラウラの鋭い視線に対して、一夏はとぼけているのだが。

言えない。ハイパーセンサーの隅に『ISの機能に対して作用を施

すから注意。バイ、ティスだよ〜』とか表示させているなんて。

誰だ、ティスとは。いや知っているような気がするが、自己紹介されたことなんてない。

気配は知っているような、シンと一緒にいた『ふわふわ』はこの子のことか。

そもそも、何故こっちの機体にアクセスできる。どうやって通信コードを入手したのか。

「貴様、私を馬鹿にするのか」

「してないけど、先に手を出したのはそっちだろ?」

「ふん、弱い連中が群れをなして吼えているから、教えてやろうと思っただけだ」

「戦場を、か? ここは平和な学園だ。戦場じゃない」

「ISを使っているのか?」

「ISは兵器じゃない」

これは元々、一人の少女が宇宙を目指すために作ったものだ。純粹に、あの空の向こうに。無限の宇宙に行くために。

だから兵器ではない。

「いいや、これは兵器だ。それをファッションか何かと勘違いしているような、この学園の生徒には反吐が出る」

「ファッションで言いじゃないか。平和な証拠だ。誰もが傷つかない、平穏な世界の証明だ」

「ふざけるな。この世界は、平穏ではない。そんなものは幻だ」

「違う。世界は、色々な人が話し合って平穏を続けようとしている。おまえこそ、何を他人に強要しているんだ?」

「ふざけるな。そんな幻想なんて意味がない。私が教えてやる」

くる。停止結界か。厄介だ。作用範囲は、これも解る。『ティアが教えるよ』と表示されるが、正直に言えば怪しい気もするが今は信じよう。

「お前達は墮落した馬鹿どもだということを一!」

「自分達は不幸だと自己陶醉している奴に言われたくない」

「言っただけ!!」

両手にエネルギー反応増大、続いて停止結界も全力で来るか。

ならばと一夏も『零落白夜』を発動する。相手を斬りつける瞬間に叩きつけて、相手のISのエネルギーをゼロにしてやる。

二機は一直線に相手を叩き潰すために突き進み、叩き伏せられた。

「な?!」

ラウラ、地面にめり込んで身動きを封じられる。

「う?!」

地面にぶつかる寸前で雪片を離して、両手を叩きつけて体制を戻す。

「お、訓練の成果が出てるな、一夏。いい反応だ」

「シン?」

「随分と派手な火花があつたみたいで、思わず駆け付けた。で、どういう状況だこれは?」

散歩に来ました、といった様子で彼はアリーナの地面に立っていた。

「貴様! 用務員が何の用だ?!」

「何の用って、アリーナであれだけ派手な攻撃したら、気になって見に来るだろうが。その前に、だ」

地面に埋まったまま顔だけ上げたラウラに向けて、シンは視線を向けて微笑む。

「おまえ軍人なんだって?」

「そうだ。私は軍人だ。ここにいる連中とは違う、プロだ」

「へえ〜〜嘘つくなよ」

轟音が、周囲を揺らした。

シンの右拳がラウラの顔面の寸前を通って、地面に大きな穴を開けていた。アリーナの地面も盛大に揺れて、大きなクレーターになっていたりするが、誰もがそれを気にしていられない。

「嘘つくな、おまえが軍人? プロ? 個人の感情で暴力を振るって個人的事情で武器を使つたおまえが、軍人?」

拳をゆつくりと地面から引き抜いたシンは、とても冷たい笑顔でラウラを見下ろしていた。

「謝れよ。世界中の軍人たちに、謝れ。『嘘ついてすみません、私は軍人達の矜持に泥を塗りました』って」

ゆっくりとシンは拳を開いていく。一本一本を開いた指は、再び折られていく。まるで力を込めるように握り締めた拳は、彼の怒りを語っているようで。

「どうした？ 謝れよ。謝れって言って……」

「シン・アスカ、そこまでだ」

不意な声がして、アリーナにもう一人の乱入者が足を踏む入れた。

「織斑先生」

「すまないが、この場は私に預けてくれないか？」

スーツ姿で武器を持っていないが、腕を組まずに両手を握っている姿から、『もし続けるなら私が相手になる』と語っていた。

「……解りました。預けます。でも、次にこいつが軍人を名乗ったら容赦しません」

「解っている」

溜息交じりに告げる千冬に、シンは一礼してアリーナから去っていく。

「まったく、お前達は。『あいつを本気で怒らせたらどうなるか、よく理解しているんじゃないのか？』」

全身から力を抜いた彼女の言葉に、誰もが小さく首を振ったのでした。

ただ一人、ラウラ以外は、だが。

彼女は悔しそうに、まるで憎しみすべてをぶつけるように、シンが出て行った扉を睨んでいた。

断章・愛情は時に殺意にも似て

シン・アスカの実力は、ヴィルティラスにおいては真ん中くらい。試合とか模擬戦とかにおいて、彼の勝率は決して高くはない。

精々、七割を超えるくらい。全戦全勝の不敗神話とか構築されることはない。

けれど、特定の状況下においてはシン・アスカの強さは跳ね上がる。未だに不敗神話を貫くテラ・エーテルを止めることができるのは、銀河帝国においては彼のみ。

ある事件において彼のこと世間に広まってからは、ヴィルティラスのシン・アスカへのファンレターやら見合の申し込みやらで、業務が滞る寸前まで追い込まれたほど。

「お兄ちゃんってモテるよね?」

「そうか?」

「悪い気しないでしょ?」

「まあ、俺も男だからな」

ある日のアスカ家の兄妹の会話。

両親が遅くなると言われた日、珍しく二人は同じ時間に家で夕食を摂っていた。

「結婚とか考えていたりするの?」

「いつかはするだろうけど、俺はまだまだ強くなりたくないからな」

真っ直ぐに天井を見つめ呟く兄に対して、妹は手に持った味噌汁へ視線を落とす。

兄の背中は小さい頃、とても近くにあったのに今では遠いな、と思いつつながら。

「今だって強いと思うけど?」

小さくこぼした言葉に、兄は首を振った。

「俺はまだまださ。まだもつと強くなれる、まだまだ上がいるからもつと駆け上がりた。だからさ」

「そっか」

見つめてくる兄の顔は、軍人や兵士というよりは、騎士のもの。

苦難に立ち向かう勇気を持って。いつか誰かが言っていたことを思い出しながら、妹は小さくため息をついた。

「で、何だけどき」

迷いながら目線を泳がせる妹。

「解っているけど、もう少しいいだろ？」

兄は妹から顔を反らすことなく見つめる。

禁断の関係、そんなことはない。多少、マユのほうが『ブラコン』気味だが一線を越えることはない。

『あれ』どうするの？」

「愛情って重いんだよ、解るだろ？」

ダイニングの一角。ニメートル四方の場所を占領している物体を、マユは半眼で指さす。

対してシンは、大きく嘆いて項垂れた。

巨大な、とても巨大なチョコレートの彫像。台座の部分に、『最愛なるシン・アスカへ。私を食べなさい』とかハート付きで書いてあるが、視界に入らないようにしている。

「うん、シェリルさんのセンスってよく解らない」

「俺に言わないでくれ」

「自分の彫像型のチョコレートを贈るくらいなら、私は夜這いするな」

無意識にマユが呟いた言葉に、シンは思わず茶碗を落とした。

「……は？」

「お兄ちゃんじゃないからね。貰ってくれるならお願いしますって言うけど」

ニヤリと笑って見つめてくる妹に、『あ、これはからかっているだけだ』とシンは察して苦笑を返す。

「ばあか、おまえはもつといい男を見つけろよ」

「残念。いい男かあ。ハイネさんとか？」

「いい人だよ、あの人は」

思わず出された名前に、シンはうんうんと頷く。

面倒見はよく気配り上手。話も上手く歌も上手い、その上でルツ

クスがいいのに、それを鼻にかけることなく誰にも自然体で接する。相談すれば時間がないのに親身になって話を聞いてくれるなど、彼のためなら死ねるといふ軍人は多い。

「エイルンさん」

「部隊長はいい人っていうより、いい男だな。男が惚れる男ってああいう人だろうな」

正義漢で真っ直ぐ。誰の危機にも駆けつけて、絶対に自分を曲げない。相手が国家だろうと帝国だろうと、間違っていれば立ち向かう熱血漢。

一度でも護ると決めた者は絶対に護り抜く。誰もを奮い立たせるとは、ああいう人を言うのだろう。

「テラさん」

瞬間、シン・アスカはきよとんとした顔をした後に、唸るように悩みだして、そして清々しい顔で告げた。

「義兄になるくらいなら死んでやる」

「うわあ」

迷いなく言い切る兄に対して、妹は『呆れた顔で笑った』のでした。

2月14日、机の上に置かれた日付で、シンは今日がその日だと知った。

「あ、今日か」

不意に呟くと同時に、執務机の横に段ボールが三つほど放り投げられる。

「シン・アスカ！ それがお前への郵便物だ！」

何故に怒っているのか。疑問を感じるが、配達人はそう告げて去っていく。背中に巨大なカートを引きながら。

「次！ ハイネ!!」

「げ?! 今日だったのか?!」

「うるさい！ 俺に配達なぞさせるな！」

顔面蒼白になったハイネのところに、ダンボール箱が六つほど放り投げられる。

「え、え？」

「マジか。第五太陽系の演習監督していて忘れてた。今日か、そうか」
何故かうなだれながらダンボールを開けるハイネ。

同時にヴィルティラスの本部内では、いたるところで同じような光景が広がっていた。

「さあ！ スザク!! 私の愛を受け止めて!!」

「ユファイ?! 待って！ そのチョコレートを塗った拳は止めて！
僕」

妙に軽い音と共に、スザクらしい物体が音速を超えて飛んでいき、壁を突き破って廊下に転がったような。

「はい、ゼンガー」

「ああ」

ロリコンの疑いを最近になってかけられた親分が、八歳くらいの女の子からチョコレートを渡されていたり。

「ちよつと待て！ 落ちつけ!!」

「ん」

何故か部隊長が、全身をラツピングリボンで包んだ女性に追いかけてらされていたり。

「なんだ、これ？」

「ああ、おまえは初めてだったか？」

呆れているシンの隣に来たハイネが、手に持ったチョコレートをかじりながら苦笑している。

「はい、え？ まさか風物詩？」

「ヴィルティラスが始まってから、延々と続いている風物詩さ。まあ、初代部隊長がいなくてマシか」
「え？」

予想外の言葉がハイネの口から零れた頃、問題の初代部隊長はとうと。

「せんせい、あげる」

「わたしのほうがさきだよ」

「ねえ、せんせい」

「わたしのたべて」

「おい、ガキども、何してんだ?」

何故か園児たちに囲まれてチョココレートを差し出されていたり。

「順番はこちらです」

「整理券はこちらです」

「ちよつと待て、お前ら何処からわいた?!」

何故か、彼へチョココレートを渡す行列ができていて、臨時で配置された帝国軍人が整理券を配っていたりしたが、あまり関係ない話かもしれない。

ある人いわく、『結婚しないおまえが悪い』。

場面は再びシンのところへ。

軽い殺気を感じた彼は、思わず飛び跳ねて回避。避けたはずなのに体の一部を捕まえられ、受け身を取る前に地面に叩き落とされた。

「ッ?! ってティーラ?!」

「シン、受け取りなさい」

冷たく細く、戦場でもみたことないほどの鋭い眼を向けながら、彼女は手に持った剣を突き刺した。

シンの口の中へ。

「甘?! なんだこれ?!」

「手作りのチョココレートです。味見をしなさい」

「はい?! なにその気合を入れた味見?!」

混乱するシンだが、日本刀の形をしたチョココレートを律義に食べる。

「うまいと思うけど」

「そうですか。では、こっちが本命です」

心臓の上に、そつと置かれたのはハート型のチョココレートが入った

箱。

えつと疑問を浮かべる彼の視界に、見たことないほど綺麗な笑顔を浮かべる女性が映り込む。

「シン、愛していますよ」

「……いや、俺を免罪符にしないでくれるとありがたい」「チ」

瞬間、ティーラは舌打ちしてシンの上から素早く体をどかす。

彼女は前のお見合い写真の一件で、本格的に彼氏か夫を探す手段に出たらしく、こういったことを日常的にやってくるようになった。

対象は常にシンなので、周りは『やつと決心がついた』と思つているのだが、シン・アスカは『え、そこまで追い詰められているのか』としか感じていない。

「まあ、いいでしょう。シン、それは上げます。しっかりと味わいなさい」

髪をかきあげて去っていく彼女は、とても美しく綺麗なのだが。

「なんで最初に殺気をぶつけられたんだろう?」

「おい、お前な」

呆れたハイネの言葉に振り返ったシンに向けて、彼は小さく告げた。

「いいかげん、人の機微じゃなく人の好意に聴くなれよ」

「はあ?」

「じゃないと本気で刺されるぞ」

忠告を置いてハイネは、自分の席へと戻っていく。その背を見送りながら、シンはティーラが置いていったチョコレートを口に運んだ。

「甘い」

ほんのりと甘い、けれど甘すぎない。自分好みの味つけだった。

馬鹿騒ぎのような一日が終わり、なんとか業務もこなせた夕方。

そういえば今日は姿が見えないなどステイニーの格納庫に来たシンは、機体の前に見知らぬ女性が立っているのを見つけた。

誰だろうと近づいていく。ここにいるからヴィルティラスの所属なのだろうが、見覚えはない。

年齢的に二十歳くらいか。長い青色のワンピースに、朱色のカーディガン。背中のほうが少し長く、まるで翼のような模様が見える。

髪は藤色で腰まで、肩口から軽くウェーブのかかった髪型は、何処かで見覚えがある。

声をかけようとして、彼女が振り返る。

流れる髪を抑えるように、優雅な仕草で振り返った女性は。

「ティス？」

『はい、シン。我が主、今日は一年に一度の特別な日だから』

軽やかに鈴のように語り、穏やかに微笑む彼女は、普段のティスの面影を残しながらも、大人の女性に見えていた。

『だから、精一杯の意地を張ってみたの。シン、貴方はいつか愛する人を見つけるのでしょうか。そして年をとっていく。私も同じ、貴方と共に生きて過ごして、そして貴方の隣で眠ります』

ゆっくりと近づいてくる彼女は、誇らしげに語りながら、右手を差し出す。

『貴方が誰かと結ばれて、誰かと子供を育てる。そんな未来の傍らに私がいられるように、これは精一杯の我儘と、ちよつとだけの意地悪』
妖艶な笑みを浮かべなおしたティスは、その右手に小さなチョコレートを持っていた。

『貴方の傍に、常に私が、『ステイニー・レイザー』のティスが居続けられるように。セント・バレンティンだよ、シン』

ポンつと音がして、ティスの姿はいつもと変わらないものに戻った。

『残念、時間切れだったよ。じゃあね、シン』

クルリと一回転したティスは、そのまま姿を消した。

後には小さなチョコレートが床に残されていて、シンは無言でそれ

を手にとつて、口に運んだ。

「……………」

そして彼は倒れた、と。

「いいか、シン。マテリアルってのはな、味覚がきちんとあるんだよ」
病室で師匠のテラは、呆れた顔で告げていた。

「けどな、生まれたばかりだと、人間らしい味覚っていうのは、まだまだ学習段階でな」

あきれ顔のテラの隣には、穏やかな気配が浮かんでいるが姿までは見えない。

きつと彼女が『マリア』なのだろう。

『シン、シン』

反対側には泣きじやくるティスが、ベッドに縋りついていていた。

「しかも、人間らしい『感覚』も未熟だからな。迂闊に食べ物を口に入れるなって教えておけばよかったな」

「はい」

「トリカブトへの耐性、毒耐性をつけといてよかったな」

「師匠のお陰です」

よく生きてたなど、テラはシン・アスカが食べたチョコレートの成分一覧表を見て呟いた。

『ま、そうじゃなければ再訓練だったな』と彼の口が動いたことに、シンは身体的不調以上の重圧を感じたのでした。

「シン！ 死にかけてたって本当?!」

「お兄ちゃん何してるの!?!」

「死ぬなら私の腕の中にしなさい!」

その後、彼のことを心配した一団が病室に流れ込み、『うるさい』と怒った赤い髪的女性に叩きだされたのでした。

力の意味

翌日早々に、シン・アスカは織斑・千冬から呼び出しを受けた。生活指導室なんてものに入るのは初めてなので、指定場所がそこであつても廊下の前で立ち尽くす。

『生活指導室って、実は体罰室なんだぜ』とか、脳裏でよからぬことを言う友人の姿が浮かぶ。

キラが酔っぱらった時に不意に口にした言葉だったはずだが、何故か妙にかっこいい姿で、親指を立ててウインクしながら歯がキラリと光る、とかよく解らない現象が出ていたが。

ドアに手をかけて、シンはそんなことないと頭を振った。

グツと力を入れてかけて、『え、簀巻きにされて逆さ吊りじゃないの？』と言っている、同じく酔っている師匠の姿が浮かぶ。

珍しく、本当に珍しいくらいに酔っていた時の話だった。久しぶりに幼馴染とか昔からの親友が集まった会合に参加させてもらい、色々な人に会えた時だったのに、何故かそんなバカな話しか浮かばない。違う、絶対にそんなことない。

気合を入れて扉にかけた手に入れようとして、『うん、いい思い出ないよね』と遠い眼をしている野比・のび太の顔が浮かんだ。

普段から真面目で優しい人が、哀愁を浮かべている姿に心の底から恐怖を感じたものだ。

間違いだ。そんなことないと否定する最中、脳裏に別の人の言葉が浮かぶ。

『呼ばれたことないな』と、真っ赤な顔で遠い眼をしている『最悪の軍師』と名高いルルーシュ・ブリタニアが浮かぶ。

本当に珍しいメンツが揃ったものだ。この四人が揃っていると、下手な国家なら十分で壊滅できるのではないか、と思えるくらいに。

冷や汗が止まらない。

もしかして、本当に『拷問関係の部屋』なのではないか。いや学生がいる場所で、そんな非論理的な場所があるわけがない。

頭で否定しても、四人の顔が次々に浮かんでは余計な考えを置いていく。

「何をしているんだ？」

ドアは相手が開けてくれて、中の様子はシンの視界に入ってきた。

何の変哲もない、普通の部屋。

「あ、いえ。ちよつと師匠達の友人たちの戯言が、脳裏から離れなくて」

「意味が解らないぞ。どうしたんだ？」

「拷問部屋だつて言われてました」

素直に告げてみると、相手―織斑・千冬は本当に呆れた顔を片手で覆ったという。

最初の微妙な空気は、まだ室内に漂っていた。

なんとも気まずい空気というのは、恐らくこんな雰囲気を言うのだろうか。シンは妙なことを考えている自分に、冷静じゃないなと思えた。

「話は、ラウラのことだ」

意を決したように告げた千冬の一言で、シンの思考は途端に冷静になって次第に怒りが浮かんできた。

「あいつのこと、ですか？」

「そうだ。彼女について詳しい話をしておこうと思つてな」

「詳しい話つて」

十分だ。あいつの行動を見ていれば、彼女がどんな育ち方をしたかなんて、簡単に予想が出来る。

今更、聞くことはないと思はれかけた。

「彼女は軍が生み出した、デザイン・チャイルドだ」
「は？」

次に彼女が言ったことに、シンの頭は空っぽになった。誰が何を作り出した、と。護るための力を持つものが、護るべき者に何をしたら彼女は言った。

作ったと言ったのか。

「織斑先生、もう一度、お願いします。ラウラが何ですか？」

「デザイン・チャイルドだ。軍が作り出した」

ギョツとシンは拳を握り、奥歯を噛みしめた。

聞き間違えではなかった。

軍が、軍のために命を生み出す。そんなこと許されるものじゃない。

確かに遺伝子疾患などで遺伝子をいじることはある。帝国でも遺伝子操作されて生み出される命はある、確かに世界にはそんな技術が存在している。

けれど、だ。軍がやっていいことじゃない。軍事技術のために命をもてあそぶなんて、そんなことは許されない。人間の社会性として、そのルールを守るためにも、尊厳のためにも。

何より、軍が存在する理由に背いている。彼らは国家の安全のために、命を守るためにあるのに。

「彼女は軍施設から外に出たことがない。今回もIS関連の特例としてこの学園に来ている」

「そう、ですか」

「ラウラは出来そこないの烙印を押された。当時の新技術への適合が低かったためにな」

その後も千冬は色々なことを教えてくれた。

ラウラのこと、彼女の眼のこと。ISを扱えるようになったこと、操縦技術を教えたこと。

シンはジツと聞きながら、色々な感情が自分の中に渦巻いていくのを感じていた。

周りの理不尽、大人たちの身勝手、馬鹿馬鹿しいまでの要求、勝手

な言い分。彼女一人に背負わせていいものじゃない、軍人が持つべきものを教えようとせずに、一方的な言い分で押しつけられたものが、彼女の思考を偏ったものへと変えてしまったのか。

「シン・アスカ、おまえならラウラをどうする？ 怒るか？ 嫌悪するか？」

真っ直ぐに見詰めてくる彼女に、答えを口にしかけて、口を閉ざす。怒鳴りつけたくなって、けれど前の時の自分も彼らと変わらないことを思い出す。一方的な価値観で彼女に対して、理不尽な暴力を振るってしまった。

騎士として、一人の人間として、あまりに身勝手な考えと行動だ。

「千冬さんは、俺にどうして欲しいんですか？」

質問に対して質問を返す。自分はその時、一方的だった。今の自分ではまた偏った考え方で動いてしまいそうだから、話を持ってきた彼女の意見を聞いてみた。

「そうだな。私は、おまえにゆだねようと考えた。ラウラのあの考えの一因が、私にはある。だから、シン・アスカ、おまえに託したい」「なんで俺に？」

「一夏をあそこまで鍛えてくれたからな。それに、おまえは『騎士』なのだろう？」

誰かを導くのも、騎士の役目ではないか。口外の意味に、シンは彼女を見つめた後に、小さく息を吐いた。

「俺はそんなにうまくやれる自信はないですよ」

師匠達とは違う、自分にできるのは叩きつけて教え込むだけなのだろう。

「やれるさ。おまえはきちんと師の教えを行っている。それをラウラにも教えてやってほしい」

師の教えといわれて、最初に思い出すのは師匠達がよく言っていたこと。

「解りました。なら、ラウラと俺に外出許可をください」

「何か思いついたのか？」

「ええ」

一礼し、シンは立ち上がった。

退出しようとして一度、足を止めて振り返る。

室内を改めて見回すと、フツと苦笑を浮かべた。

「どうした？」

「やっぱりここは拷問部屋ですよ。入った人に現実を叩きつける、そういう場所です」

「そういう見方もあるかもしれないな」

千冬も室内を見回した後、何処か遠い場所を見つめるように眼を細めた。

『ついてない』

いきなり教室から連れ出されたラウラは、目の前の背中を睨みつけていた。

理由も話されず、許可があるからと彼女は、有無を言わずにシンに連れ出されて、電車で揺られている。

「何処へ行くつもりだ？ 私に仕返しをするつもりなのか？」

「別に、おまえに見せたいものがあるだけだ」

のんびりと揺れる車内。平日の昼間ということもあって、乗っている人は数えるほどしかない。

何が目的だ、とラウラは横に並ぶシンの顔を見つめるも、表情からは伺い知れない。

一瞬、脳裏に前の時の拳がよぎる。『死ぬ』と確実に思える威力を持った、情け容赦ない一撃。回避も抵抗も無意味に感じる拳に対して、怖いと思ってしまったことを情けないと感じる。

復讐を、軍人の自分に情けない姿をさらす真似をした原因に対して、仕返しをしないと。

ラウラが色々と考え、睨みつける先のシンは、のんびりと窓から外を見ていた。まるで気負うことなく、隙だらけの姿で。

自分は脅威ではないということか。悔しさに顔を歪めるラウラの前に、言葉がポツリと落ちてきた。

「海が見えてきたな」

「何の話だ？」

「世界の生命は海から生まれたって話、聞いたことあるか？」

「馬鹿にするな。そのくらいの知識はある」

「そっか。なら、降りるぞ」

言うが速いか、シンは空いたドアへと体を向けた。

慌てて追うラウラは、車内から出た瞬間に目を細めた。日差しが視界いっぱいになり、眩しさが瞳を埋める。塞がれた視界の代わりに、入ってきたのは潮風。

冷たくもない、痛くもない、何処か懐かしい暖かい潮騒の温もり。

眩しさになれた視界が開けると、一面の蒼が出迎えてくれた。

「海、か」

「生命の始まり、偉大なる母だ。こっちだ」

一言だけおいて、シンは別の方向へと足を向けた。

駅から通りを歩き、交差点を何度か通り過ぎたところに、小さな商店街があった。

無言のままシンは商店街に入り、店先へと視線を投げる。自然と後を追うラウラも、それに習うように周りを見回した。

あいつが見てるものならば、あいつの興味を引くものがある。ならば次の戦う時に隙を作れるのではないか、と。

「坊主たち、デートか？ 新鮮な魚はどうだ？」

「こっちのお菓子は新製品なんで、よかったら味見していくかい？」

「果物は甘いものばかりだよ。買っていかないか？」

通り過ぎる店先で、次々に話しかけられては、シンは丁寧に対応していった。一人一人の言葉に耳を傾け、話に対して穏やかに返す。

前の時とまるで違う姿に、ラウラは怪訝な顔で見つめていた。

「そっちのお嬢ちゃん、一つどうだい？」

「いや、私は」

「いいって、遠慮するなつて」

無理やりに渡されたのは、タイ焼きだった。出来たての熱いタイ焼きに困っていると、シンは微笑しながら自分の手を口に持って行く仕草を見せる。

「食べてみれば？ 美味しいぞ」

「こんなもの、食べなくても解る。成分は・・・」

「食べてみるつて」

どうやって作るかの知識を言い掛けたラウラに、シンはいいからと念を押してきた。

仕方なく口に運ぶと、暖かい甘みが口に広がる。

美味しい、と小さくラウラは口にした。思わず夢中で食べて、気がついたら手の中のタイ焼きはなくなっていた。

「ほら、次だぞ」

食べ終わったのを見届けたように、シンはラウラを促す。しばらく二人は歩いていき、次に辿り着いたのは普通の公園だった。

小さな子供たちが笑いながら遊び、近所の奥様が談話している場所。日当たりもよくて木々もそれなりにある、誰もが想像できる公園の風景。

「ここがどうしたんだ？」

「彼らは毎日をどう過ごしていると思う？」

「何を言っている？ 普通に過ごしている」

馬鹿なことを聞くなと返すラウラに、シンは『そうか』とだけ答えて再び歩き出す。

意味が解らないとラウラは内心で思いながらも、シンの後を付いていく。

住宅街を通り抜け、他の学校の通りを横切つて、ビジネス街で立ち止まって空を見上げて。

言葉も少なく、説明もないまま、シンは前を歩いていく。

『どう見える？』『何がある？』彼が発する言葉は、決まってそういった質問ばかり。普通のこと、当たり前前の景色、そんな返答をする

ラウラに対して『そうか』とだけ答えて、次の場所へ。

街の中を行ったり来たり、けれど決して同じ場所へ行くことなく巡り巡っていく。

子供が通り過ぎた。学生が忙しそうに歩いていく。商店街では景気のいい掛け声がして。ビジネス街では色々な人が難しそうな顔で通りを歩いていた。

公園ではどこも笑顔があふれ、時々泣き声もして。大型のデパートにはもっと大きな喜怒哀楽が溢れていて、一口に『人』と言っても色々な動きがあるものだと見えた。

けれど、だ。ラウラには意味が解らない。街を歩いて何がしたいのか、彼が何を言いたいのか、深い言葉は言ってくれずに小さな言葉だけが、何度も何度もラウラに投げかけられる。

「ここが最後だ」

「街を見下ろす丘か」

先ほどまで歩いていた街が、とても小さく見える丘の上。先ほどまで歩いていた場所が遠くに見えて、一人一人の顔も見えない。

「軍人は、武器を持っている。それは解るな？」

「当たり前だ。我々は国家の安全を守るために武器を持っている」

「国家ってなんだろうな？」

「ふざけているのか？」

「国家ってさ。あの人達の集まりなんだ。それを護るために軍人がいる」

「馬鹿にしているのか？ そのくらいは・・・」

「俺達の武器は、彼らを容易く消せる」

ストーンと、冷たい何かが落ちた気がした。

「何を？」

思考が追いつかない、当たり前のことを言われたはずなのに、何故か理解できない自分をラウラは感じていた。

「彼らは毎日を普通に過ごしている。怒ったり笑ったり、泣いたり、そんな普通の毎日を過ごしている彼らは明日は来るって信じている」

シンは穏やかに語りながらも、右手は街へと向けていた。

「でも、普通って言うのはさ、『いつか終わる』」

ギユツと彼が拳を握った。瞬間、ラウラは幻視してしまう。先ほどまで歩いてきた道が消え、出会った人々が粉々に砕かれる様を。

「おまえ!!!」

「それが、軍人だ。ラウラ、俺達の手にあるものは彼らから『明日』を奪える、彼らが笑顔で過ごす毎日に絶望を叩きつけられる」

「何を言っている？ そんなこと、軍人がそんなことをするわけがないってしているのか？」

鋭く睨みつけてくるシンに、ラウラは先日までの自分の行動を思い出してしまった。自分の身勝手に振るった力、あの時は些細なことだと思っていたことが、どういう意味を持つのか。

ISがあつたから、何事もなかった。織斑・一夏が対応したから問題はなかった。けれど、彼が対処できなかったら。

もしかしたら、誰かを負傷させていたかもしれない。いや、もっと言えば誰かを『殺していた』かもしれない。

「ラウラ、俺達は存在してはいけない存在なんだ。命を奪う武器を持つ者は、こういった社会には存在するべきじゃない」

「では、私達は消えるしかないのか？ 武器を持つ者は、いらぬといふのか？」

「それが一番いいのかもしれない。でも、実際に脅威はある。彼らの日常を脅かす存在はある、だからこそ俺達は、軍人や騎士は存在するしかない」

「馬鹿な、それでは矛盾している」

ギユツと体を抱きしめる。怖くて苦しくて悲しくて、感情が上手く

操作できずに体の中を跳ねまわる。

「矛盾しているさ。俺達は矛盾している。だからこそだ、ラウラ。俺達は自分の感情で力を振ることは許されない。矛盾した存在だからこそ、最後の最後まで自衛のため以外で『暴力』を使うべきじゃない」
「なんだそれは、とラウラは叫びそうになった。力を持ちながら、それを使うことが許されないなんて、どうしようもない話ではないか。」
「昔、師匠達に言われたことがある。『命を奪う武器を持つ者は、命を護る、その一点においてのみ存在が許される』。俺達は命を護るために、許されない武器を持つことを認められた。忘れるなよ、ラウラ」
シンが穏やかに微笑みながら、街へと顔を向けた。
ラウラも街へと顔を向けた。

「俺達は、あの人達を護るために。普通に生きる人たちに、『明日も普通に過ごさせるように』力を持っている。絶対に忘れるなよ」

「あ、ああ」

「それが昔から続く、軍人達の矜持だ」

念を押すように、シンは真つ直ぐにラウラを指差す。

「平穏であれ、穏やかであれ、日常であれ。戦場の中の軍人たちが、必死に護ってきた平和な毎日、戦争の中にあつた軍人たちが、決死の覚悟で築き上げた普通の毎日、それを今の世代を生きる俺達が崩すわけにいかない。護れよ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「おまえが軍人を名乗るならば、先人たちの意地と矜持を踏みにじることなく、胸を張って日蔭者であれ。」

冷飯食らいであれ。無駄な者と呼ばれることを誇れ。必要とされないことを喜べ。自分達のような暴力が必要とされない、そのことを良かったと思えるようになれ。

なれば、世の中はこともなし。日々、平穏なり。

「俺の言いたいことはこれだけだ。悪かったな、ラウラ。一日中、付き合わせて」

小さく頭を下げるシンに対して、ラウラはもう一度と街を眺めた後、深々と頭を下げた。

「ありがとう、シン・アスカ。私は今、ようやく軍人になれた気がする。」

初めましてと挨拶をしてもいいだろうか？」

「もちろんだ。シン・アスカだ」

彼は自らを名乗りながら、右手を差し出してくる。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

差し出された手を握り返し、彼女は名乗った。

その後、ラウラは一夏達に謝罪をしたらしい。

らしいというのは人伝にシンが聞いた話であり、彼女から報告があつたわけではないためだ。

「何をどう教えたんだ？」

グランドを整備している時、千冬が問い掛けてきた。

「俺が昔、師匠達に教えられたことを、そのまま伝えただけですよ」

『命を奪う武器を持つ者は、命を護る、その一点においてのみ存在が許される』か？」

「はい、よく聞かされたました。後は、『護るべき者達をよく見ておけ。迷った時にその顔を思い出せば、自然とやるべきことができる』と」

汗を拭って顔を向けると、彼女は微笑んでいた。

「おまえはやはりいい師に巡り合えたらしいな。私も一度、会ってみたいが」

言われてシンは、『え、会うの』という驚愕の顔を向けたのでした。いい師匠だと思う。いい人でもあるかもしれないが、それを覆すほどに馬鹿で常識知らずで、色々なものを破壊する人外なのだが。

彼の顔を見た千冬は、『師匠のことを考えて、あんな顔をする弟子か』とまた謎が増えたと感じたという。

願いのために・1

限界とは自分が決めるものだ、昔に教えられた。ここまで自分が錯覚してしまい、自分の先を決めて可能性を閉ざすのが、『限界』なのだ。

だからこそ突き破れと教えられた。不可能を蹴とばし、出来ないと囁く声を薙ぎ払い、ただ『出来る』と思つて突き進め、と。

進んで突破して突き破った果てが自分の今なのだから、それは自己責任で誰が原因でもない。

しかし、何事にも終わりはある。限界を自分で決めるように、『終わり』も自分で決める。

特に騎士であるならば、『ここで終わろう』と思うことは、ここが自分の最後だと知ることは。

「そのまま、手を置いてください」

背後からの声に、彼は小さく白い手袋をした両手を上げた。

「まさか、と思いました。ですが、貴方だったならばすべてが納得いきます」

「流石だ。君ならば、辿り着くと思つていたよ」

相手の素早い対応に、少しだけ安堵する自分がいる。もう彼らは自分がいなくとも立派に進んでいける。

「何故と問いかけても、答えてはくれないのでしょうか？」

どうするべきか、と少しだけ迷っていると、他の声が思考を遮った。

「答えることはないでしょう、バザット部隊長」

「ほう。まさか、『黄昏の流星』まで辿り着くとは。私もまだまだ『詰め』が甘いな」

彼は答えず、手に持った銃口をこちらに向けている。

ゆっくりと振り返る。二人は銃口を向けながら、表情に迷いが浮かんでいる。しかし、だ。きつと自分が攻撃に転じる瞬間に、躊躇いなく撃つだろう。

エイルン・バザットも、ハイネ・ヴェステンフルスも、どちらも素

晴らしい騎士だ。自分の感情よりも、周りの『被害』を考えてしまう。「どうして貴方が、こんなことを？」 無断出撃、無許可の『マテリアル』の使用。いいえ、その前に、『技術漏えい』などするわけがない」 エイルンの瞳が揺れ動く。撃ちたくはないと目線が語り、真実を話してくださいと切実に願っているらしい。

相変わらず優しい男だ。

「第二級技術と『相転移エンジン』及び『太陽炉』の設計データ、現物も何基か持ち出しているようですが、何故ですか？」

ハインが僅かに体を動かしながら、言葉を紡いでいる。エイルンから視線を反らすつもりか。短距離移動ならば、エイルンのほうが速い。ならば、という考えはとても素晴らしい。

「先ほど君は答えるはずがない、と言ったようだが？」

「質問しても構わないでしょう、『ラウル・クルーゼ』。帝国を最初から支えた騎士であり、『絢爛なる守護者』と呼ばれた貴方が、こんなことをするなんて」

懐かしい字を出され、クルーゼは微笑した。

仮面に隠されているとはいえ、その口元の頬笑みは二人が見たことがあるものだった。

どのような状況でも、彼は穏やかに自然体で、『そろそろ行こうか』と散歩に行くように動きだしていた。

帝国をテラが作った時から、テラに従って動き続けた騎士。帝国軍の基礎を作り、ヴィルティラスの結成にも働きかけた、帝国の最古参の一人。

偉大なる先駆者とまで呼ばれた男が、ここに来て裏切りなんて。

誰もが否定してほしかったことは、彼によって切り捨てられた。

「なぜか。そうだな。私の望みのためだ」

クルーゼの両手が下がる。

撃つしかないと言いき金に指をかけた二人が動く前に、彼の背後に影が出現した。

「プロヴィデンス・オーバーワールド」

誰かが機体の名を呼ぶ。

クルーゼに与えられたマテリアル。他の騎士達とは違い、『第三世代』のフレームを使った、特殊な機体。

「いいのかよー・『フロリアナ』!!」

ハイネの叫びに、プロヴィデンスの顔のところに浮かぶ女性が小さく首を振った。

金色の瞳を持ち、ウエーブのかかった藤色の髪を真ん中で分けた女性性は、ゆつくりとクルーゼの背後へと近付き浮かぶ。

「すまない」

男の言葉に彼女は『貴方の願いですから』と答えた。

エイルンとハイネが見上げてくる。二人の背後にはそれぞれの『マテリアルの自意識』がいた。どちらも悲しい顔で見えてくる。

止められるものならば、止めるつもりなのだろうか。いや止められるわけがない。もはや、心は決まっているのだから。

「さらばだ。我が最愛の『故郷』よ」

盛大に言い放ち、ラウ・ル・クルーゼは姿を消した。

その日、ジョーカー銀河帝国がある情報が駆け巡った。

『ラウ・ル・クルーゼ元帥を反逆罪とする』と。

前略、最近になって思い知ったことですが、意外に恥ずかしいことって身近にあることを感じました。

例えば、学校で不意に『先生』を『お母さん』と呼んでしまったり。別人の名前を呼ばれて『はい』と答えてしまったり。

あるいは、明かに年下の女性に『上官殿』と呼ばれることとか。

「おはようございます！ アスカ上官殿!!」

「ラウラ」

早朝の登校時に、校門のところでもそんなことを言われたら、誰もが立ち止まって見てくるのは当たり前前なのだが。

彼女は無関心なようで、敬礼をしたまま微動だにしない。

「止めろって。俺は上官じゃないだろうが」

「しかし、私に軍人のなんたるかを教えてくれた方呼び捨てはできません。ならば上官殿と御呼びすべきでは？」

純粹に、『どうしていけないのだろうか』と思っっている少女の目線に、シンは否定の言葉を口にできずに固まる。

同じ軍じゃない。そもそも自分は『ヴィルティラス』所属で、軍属ではない。確かに准将の階級は持っているが、それも帝国軍との共同作戦のための肩書でしかない。

グルグルと思考が回る中、余計なことまで考えていたシンは、どうにか思考のループから抜け出して、ラウラに告げる。

「俺はおまえと同じ軍属じゃない」

「では、師匠と呼ばせてください」

即答で戻ってきた言葉に、シン・アスカの中で何かがブツリと切れる音がした。

「俺はそんなに偉い奴じゃない。誰かに教えるなんてできないから、それは止めてくれ」

「しかし！」

「いいから、シンでいいからさ。お互い、色々と教え合う同僚でいいじゃないか」

気楽な笑顔で手を差し伸べると、ラウラは渋々といった様子で手を握り返した。

「クラリツサにはそう呼べば喜ばれると言われたのだが」

元凶はそいつか。シンは心の中で、『クラリツサ』に会ったら色々と問いただしてやると決めた。

「しかし、シン様と呼んでもいいだろうか？」

「止めろって。シンって呼び捨てでいいから」

「それでは私の気が済まない。頼む」

律儀に頭を下げる彼女に、シンはなんでそこまでこだわるのだろう

と不思議に思ってしまう。

教えたことは師匠から教えられたことであって、自分が考えたことではない。感謝する言われはないし、もしも感謝を伝えるならば師匠達にはないだろうか。

そこまで考えたシンは、ふと嫌な予感がした。

ラウラがああ『常識外で非常識の塊で、チートのバグの人外に会う』と。

瞬間、全身を寒気が包んだ。

人間として尊敬はできる。彼が人間かどうかは大いに疑問があるのだが、とにかく人間としては素晴らしい人物であることは間違いない。

面倒見がいいことも確かにある。彼が誰かの助けてを見捨てたことなど、一度もないのだから。

世界の危機だろうが、命の危機だろうが、颯爽と現れて助けるのは彼だけ。

しかし、だ。人間性としては壊滅的に悪い。純真無垢な人物が会ったとき、価値観が総崩れを起こすのは目に見えている。

「ラウラ！ 頼むから、シンと呼んでくれ」

「しかし」

「頼むから、じゃないと俺が死ぬ」

結論として、自分は彼女に何も教えてない、と貫くことにした。

万が一、師匠の耳に入ってしまったら、『会いたいな』ということは間違いない。だから自分は、シン・アスカはラウラに何も教えてない。「解った」

どうにか納得してくれたようだ。

これで師匠が関わってくることはない。一安心したシンは、用務員の仕事を再開するかなと動き出しかけて、周りの目線にようやく気付いた。

「シン、ラウラを口説いているの?」

「はあ?! シャルロット、何でそうなるんだよ?」

「いや見ているとそうかなあつて」

何処をどう見ればそうなるのだろうか。ちよつと怒っている彼女に説明を求めようとして、セシリアがとてもいい笑顔を浮かべているのを知る。

「へえ、シンってそういう趣味なんだ」

面白そうな顔をしているリンまでいる。

遠くでは一夏が『あ、おまえも大変だな』と苦笑していたり、箒が『そうかそうか』と頷いていたり。

どういうことだろうか。

「俺はラウラの呼び方を止めようとしただけだよ」

「そうなんだあ。それにしても必至だったようだけど？」

笑いながら、目が笑っていないシャルロットが迫る。何故だろう、今の彼女には近づいたら危険な気がする。

ティーラやシェリルと同じ心配がする。とても理不尽な理由で怒りの矛先が向いたときと同じな。

「必至にもなるだろうが。上官殿とか、師匠とか呼ばれたら」

「そうかなあ？ 男だったら、偉く見られると嬉しいんじゃないの。特にラウラは可愛いし」

「可愛いっては関係ないだろうが。偉く見られて嬉しいって、どんな偏見だよ」

まったくもって理解できない。偉く見られると嬉しいなど、そんなバカな考えがあるわけがない。

偉くなればなるほど、仕事量が増える。自分が受け持つ仕事の他に部下の仕事の監督とか、勤務査定とか、評価や研修スケジュールとか、色々やるべきことが増えていく。

そもそも、だ。一般的な業務と上司としての業務は、決して結びつくものではなく、求められるスキルも違ってくる。

いい社員が、上司になった途端に使えなくなるなんて、世間ではよくある話ではないだろうか。

絶対に偉くなって得することなんてない。面倒が増えるだけ。

「メンドクサイだけだろ」

「シン、それ本気で言っているの？」

「本気さ。誰もがそうじゃないのか？」

心の底からの返答に、シャルロットはしばらく見つめてきたのだが、大きいため息をついて呆れた顔を向けてきた。

「出世欲ってないの、シンって？」

「ない」

迷いなく即答してみると、シャルロットは小さく息を吐いて小さく言葉を告げた。

「馬鹿」

「最高の褒め言葉だよ、シャルロット」

ニツコリではなくニヤリと悪戯っ子のように笑ってやると、彼女もお日様のように晴れやかに笑った。『褒めてないからね』と言いながら。

午前中の授業中に学園のすべてを回って清掃を行ったシンは、最後にアリーナの整備室に足を運んでいた。

「よ、簪」

「シン」

授業中なのに、彼女はやはり『愛機』のところにいた。

『む、進んでない。行き詰ったかな？』

隣のテイスがISを見つめ、ペタペタを触っているのを軽く手を振るような動作で止めながら、彼女の横へと進んでいく。

「調子はどうか？」

「まあまあ」

「そっか」

言葉少なく答えた彼女は、再びモニターに顔を向けてしまう。

工学的知識はあまり多くないシンには、彼女がどんな作業をしているか見当もつかない。難しいことをしているのだろう、ということは解るのだが。

しばらく簷がパソコンを操作する音だけが整備室に響く。小さな音なのだが、妙に耳に残る音色だった。

それと、遠くから様子を見ている気配が二つ。

一つは楯無だろう。妹のことが心配で、作業は進んでいるか不安になつてきているのならば、顔を出して話をするべきではないだろうか。

一定距離から近づいてこないで、行ったり来たりしている姿は、とても学園最強の生徒会長とは思えなかった。

不器用過ぎるだろう、と呆れてシンは僅かに視線を投げた。

驚く気配が伝わってきて、その後は立ち去ったが。

もう一つは、束だろう。定期的に学園に潜り込んで、こうして遠くから見ってくる。こっちもこっちで理解不能な行動だ。毎回、飽きもせず学園に来ては遠くから眺めて、しばらくしてから帰る。

あるいは織斑・千冬に見つかつて怒られて帰るか。

どっちも不器用な人間だよな、とシンは自分のことを棚に上げて考えていた。

『あ、そこ違う。そっちじゃない』

「簷、そこは違うらしいぞ」

「え?」

他のことを考えていたためか、ティスの言葉をそのまま伝えてしまい、彼女が鋭く顔を上げてきた。

「シン、何?」

「あ、すまない。ちょっと見えたから、アドバイスを……というか。俺の相棒が違うってさ」

「相棒? 貴方もISを持っているの?」

嫉妬、あるいは妬み、少しの憎しみ。瞳に映る感情が混ざりあい、鋭くなつて見つめてくる。

「いや、俺にはISはない。他のならあるけど」

「他の？ 見せてくれる？」

反射的に答えたような簪の言葉に、シンは『いいか』と簡単に考えて、ティスに合図を出す。

サイズはISに準じた形で。

『はい、我が主。よいしょ』

パンと手を叩いたティスが消えて、デステイニーが姿を現す。

二十メートルの機体が二メートルへとダウンサイジングして、ISの隣へと降り立つ。

「綺麗」

無意識に簪はそう呟いていた。

真紅の翼はまるで水晶のような輝きを放つ。白と青の装甲は空のように海のように澄み渡る。肩アーマーを飾るのは白い羽の装飾、今にも飛んでいきそうなほどだ。

左右の腰のライフルは無骨な武器というよりは、まるで一つの工芸品として生み出されたような輝きを放つ。

兵器として建造されたのではない、まるで芸術品のように生み出された機体を前に、簪は圧倒されていた。

「俺の相棒のデステイニー・イレイザーさ。愛称はティス」

『はろー』

「え?! その子、何処から出てきたの?!」

ポンという音と共にでてきた女の子は、簪の前でスカートの裾を持ち上げて一礼。社交界の淑女のような挨拶に、簪も慌てて頭を下げた。

『初めまして、ティスだよ。貴方のことはよく知っているよ。この子がね、何時も『私の主は努力家で優しく、でも寂しがり屋』って言うてるから』

「この子? 打鉄式式のこと？」

『そうそう、色々とお話してくれるから。私もちよつと口出ししたく

なったの』

ペタペタとまだ触っているティスに、簪は微妙な顔を向けていた。

「この子、自意識って言ったの?」

「まあ、デステイニーのAIとか考えてくれればいいよ」

本当は違うのだが。と内心でシンは付け足すのだが、知らない人への説明は大抵がこれで済むので使っている。

「私は誰の手も借りたくない」

『うん、知っている。簪が一人で組み上げたって思っているのは知っているから。だからティスがいるの』

「だから」

『ティス、人間じゃないから手伝っても大丈夫』

いや、その理屈はおかしい。簪が決めていることは、『自分だけで』ということでも人間以外なら手を貸してもいいとか、論点がすり替わってないか。

『後ね、打鉄式式がね、『主のために』頑張りたいんだって。クラス対抗マツチに簪と一緒に出たたって』

真っ直ぐにティスは彼女を見つめた。

簪は視線を打鉄に向けて、そのボディに触れる。

「私のために? 貴方は私と一緒に戦ってくれるの?」

小さく呟く彼女の言葉に、ISのボディは僅かに震えたように見えた。

「願います」

『任せて! このティス様がいれば泥船だよ!』

「いや、沈むから」

「沈まない方向でお願いします」

即答のように言われたティスは、きよとんした顔の後に唸りだして、ポンつと手を打った。

『あ! そつかそつか、泥船のように敵対者を沈めてやろうだ』

「誰が言った、そんな物騒な言葉」

相棒の過激発言に、シンは片手で顔を覆ったのでした。

ティスを簪のところにおいたまま、シンは整備室の外に出た。

二人だけにしたほうが作業が捗るだろうと考えたのだが。

外に出てすぐに、良く知った気配が屋根の上にあることを感じた。

「意外に鈍っているのかな？」

「あれだけの距離で感知できるなら、上出来じゃないか？」

声はすぐ後ろから。溜息交じりに振り返った視線の先で、彼は人懐っこい笑顔を浮かべていた。

「俺の行方不明が、そんなに大事になりましたか、ハイネ？」

「いやいや、大事にはなっていないが。そうだ、『MIA』認定はされたぞ」

衝撃の事実には、シンはグツと胸を抑えて蹲る。

「つ、ついに俺も。師匠みたいになりにたくなかったのに」

「まあ、おまえだから、いずれってみんな思っていたから、大丈夫だ」

「大丈夫って、そんなの。からかって楽しんでませんか？」

「百パーセントな」

親指を立てて笑顔で歯を光らせたハイネに、『この人を殴ったらダメだろうか』とシンは思ってしまった。

「という、笑い話をしに探したわけじゃないんだ」

「ええ、『フェネクス』の一件なら撃破しましたけど。アイリスさんの指示ですよね？」

「はい？」

ハイネがきよとんとした顔を向けてくるので、シンは『違うんですか?』と目線で返した。

『『フェネクス』の四番機は行方不明で自壊したんじゃないのか?』」

「いや、アイリスさんから『俺の射撃能力向上のためと、こっちの都合で撃破しなさいって』。あれ、ヴィルティラスを通してないんですか？」

「あの人は。きつと『私用よ。悪い？』って伝えなかつたな。まあ、それもいいさ」

違う用件で来たらしい。他となると何があつたか、とシンが色々と考えているとハイネが妙に思いつめた表情を浮かべた。

「実はな、シン」

「はい」

先ほどまでのおちやらけた雰囲気を消した彼に対して、シンも自然と身構えてしまう。

「ラウ・ル・クルーゼが反逆罪になつた」

瞬間、シン・アスカは足元が崩れるような錯覚を感じた。

願いのために・2

シンは思わず、地面に蹲った。

足元の感覚が曖昧で、とても立ってられない。

息苦しい、心臓の鼓動がうるさい。自分が精神的に追い詰められていることを自覚しながら、何とか顔を上げる。

「場所を移すか？」

「はい」

ハイネの提案に何とか頷いて、シンは立ち上がる。隣にいるティスが不安そうな顔を向けてくるので、大丈夫だと頭を撫でてやる。

「そうだな、十キロでどうだ？」

「十分です」

言い終わる前に、ハイネの姿が消える。同時にシンも地面を蹴とばして、学園の外へと移動した。

十秒ほどだっただろうか。移動した先は海岸線、誰もいない岩場のようなところに辿り着き、ハイネが振り返る。

一瞬、お互いの視線が周り中を見回した後、彼は小さくため息をついた。

「最初の出来事は、技術流出だ。許可されたものじゃない技術や現物が、他の場所へ流れていったことが確認された」

事の顛末を語る彼は、とても嫌そうな顔をしている。

相転移エンジンは真空を低位な真空に入れ替えることでエネルギーを得る機関で、宇宙空間で使うならばエネルギー切れの心配がほぼない。

太陽炉は無限機関としては優秀な部類だが、人型兵器に使用するとエネルギー切れを起こす可能性が極めて高い。生産と消費のバランスが微妙なのだが、ツイン・ドライブなどで補うことができる。

それに、発生したGN粒子を機体や武器に纏わせることで剛性をかなりあげられる便利なものだ。

「その二つの動力炉に関連したエネルギー機関やそれ関連の動力パイ

プなどの技術が流出していた」

「第二級技術は、元々管理が甘い部分があつたんじやないですか？」

「情報局のほうでも、その指摘には『同意』している。帝国では『漏れでも問題ない技術』だからな」

「第一級や特級には触れずに？」

「ああ、そこもな」

ハイネの顔色が変わる。

ラウ・ル・クルーゼの立場ならば、その二つを持ち出すチャンスはいくらでもあつたはずなのに、第二級技術をわざわざ選ぶなんて。

「しかも、痕跡を消し切れていない。いくらあの人のマテリアルが電子戦特化じゃないにしても、お粗末すぎる」

「最初から隠す気がなかつたとか？」

まさかという顔でシンは言っておいて、嫌な予感がしてきた。

「そもそも、だ」

ハイネは質問に答えることなく、盛大に溜息をつきながら、『皇帝以外の帝国上層部の考え』を口にした。

「あの陛下が、見逃すと思うか？」

「思いません」

迷わずシンは即答した。

裏切りには理由を調べて先回り、仲間の脅迫にはそんなことさせるかと防衛戦を構築、スパイなんて潜り込ませようとした瞬間に現場にいる。

それがテラ・エーテルという人物。

ジョーカー銀河帝国の周りの国々において、『帝国以上の職場環境を提供できる国家があるのか』というのも、疑問に感じる部分だ。

難しい問題、実験にかかる費用、周辺からの許可等など。皇帝を見つけて話を通せば、『人体実験などといった非人道的』なもの以外はすんなりと通る。

帝国は楽園である、なんてことを言うつもりはないが、かなりの自由度を人民に約束するのが『ジョーカー銀河帝国』。

それを蹴って他の国に行つたところで、色々なしがらみの結果、自

分のやりたいことなどでできずに終わる。

「もし仮に、陛下が気づかなかつたとして、あの『巫女』が見落とすわけがない」

「ルリさんは、苛烈で強烈ですからね」

上層部の最大の懸念に対して、シンは『今は温和だが昔は冷酷だった』人物の名を口にした。

テラが進む前に立った者は、星や星系ごと消す。冗談や嘘ではなく、本当に星系ごと消滅させたのが、ホシノ・ルリという『神帝の巫女』。

あの二人がそろっているのに、出しぬけるなんてことはない。

「じゃ、やっぱり」

シンは最初に感じた喪失感、あるいは絶望感が間違っていて欲しいと願いつつハイネを見つめる。

けれど、現実は無常だ。

「ああ、おまえの考えている通りだ」

「……師匠?! 今度は何をたくらんでいるんですか?!」

「やっぱおまえもそう思うよな?! 全員がそう思ったんだよ!」

「絶対にそうでしょう! あの師匠がクルーゼさんの相談を受けて『悪だくみ』って調子に乗ったんですよ!!」

「ちつくしよう! あの人はまったく! 問題を馬鹿騒ぎにしないと気が済まないのかよ! 今、アイリスさん達が全力で行方を追っている」

「はい、なら俺もですか?」

皇帝追撃隊の結成となれば、一番に名前が挙がるのがシンだ。何度も追撃を行って寸前で回避されて、政庁に馬鹿真面目に戻った皇帝が吊るされるが今までのパターンだが。

今回ばかりは捕まえられそうな気がする。

「いや、おまえはここにいろ。あつちはルルーシュとのび太さんが参加してくれている。キラの奴も『今回は怒った』とプログラムを組んでいるからな」

豪華追撃部隊の立ち上がりを知り、シンはほっと安堵した。

「ハイネは、それを言い俺のところ？」

「最終確認のためにもな。皇帝陛下の思考を読めるのって、おまえかアイリスさん、アセイラムさんくらいだからな」

「そうなのだろうか、とシンは疑問を感じる。」

他にもいそうだろうと考えかけて、『あの馬鹿のことが読めるわけがない』と結論を出す。

予想して追い詰めても、何だかよく解らない手段で回避するのが、テラ・エーテルなのだから。

「それと、だ。アイリス宰相殿から伝言がある」

「はい」

やはり、ここに残った場合の追加任務があったか。背筋を伸ばしたシンの視界に、『悪い顔をした』ハイネが映った。

「デイガーターの言い訳、期待しているそうだ」

「……………」

瞬間、シン・アスカは二度目の足元が崩れさる感覚を覚えたという。

今日は珍しく一夏は一人だった。

セシリアとシャルロットは、リンや箒、ラウラ達と『女性同士の親睦会』をしている。

女の子らしいとは何だとラウラが言い出して、他の皆が食い付いた結果らしいが、賑やかなのはいいことなのだろう。

剣道場にて木刀を構えながら、一夏はちよつとだけ寂しいと思っている自分に苦笑してしまう。

シンも今日はまだ見ていない。アリーナの整備室に行ったようだ

が、まだ戻ってきていない様子だ。

彼も彼なりに用務員として忙しいのだろうか。

木刀を持ち上げ、振り下ろす。剣道場には他の生徒の姿はない、今の時間は大半がアリーナでISの訓練をしている。

先日、次の行事の発表も訓練に拍車をかけているかもしれない。

今度もトーナメント戦、学年ごとにISを纏って戦うもので、先日に襲撃を受けてうやむやになったトーナメントのやり直しも兼ねているらしい。

木刀の切っ先が空気を裂く。素早く振り下ろした刃は、床の寸前で止まって、再び上へと持ち上げられる。

シンの戦い方を一夏は思い出す。

両手に持った剣を振り回す。相手の動きの先を読みながら、相手が自由に動かないように先回りして剣線を置く。

攻撃も防御も、彼の足を止めることができずに、相手は次第に追い詰められて撃墜されるしかない。

まだまだ遠い、けれど動きは目で追えた。ならばもつと訓練すれば、彼に追いつけるのだろうか。

力一杯に振るった木刀は、風切りの音を剣道場に響かせた。

「ほう、中々ではないか」

声に一夏は鋭く振りむく。誰の気配もなかったはずなのに、道場の入口のところに金髪の男が立っていた。

「あの」

「ああ、すまない。見事な立ち姿に、つい声をかけてしまった。邪魔をしてしまったかな？」

温和な笑顔を浮かべながら、男は道場に一礼して中に入ってくる。外国人なのに、入口で靴を脱いでくる作法は、とても様になっていて普段からしているような錯覚を受ける。

道場での作法も心得ているようだ。剣術をやったことがあるのだろうか。

「いえ、大丈夫です。貴方は？」

「通りすがりの者だ。人を探していたら、道場から見事な音がしてい

たのでね。つい覗きをしてしまった。すまない」

一夏に近づき、後五メートルというところで、深々と頭を下げる。年上なのに年下の一夏に素直に謝罪するところに、相手の懐の大きさが垣間見えた。

「大丈夫です。でも、まだまだ俺は未熟なので恥ずかしいのですが」

「いや、自分が未熟だといえるならば君は見どころがある。君くらいの年の若者は、『俺は強い、だから偉い』と増長するからな」

穏やかに微笑みながらも、男は視線を左右に向ける。周りに誰もいないことを確認していた様子だが。

「君一人かね？」

「はい、今は。友達は、色々と用事があるようですので」

「そうか・・・とところで、君は『刀』を使うのではないか？」

いきなりの話題に、一夏は言葉に詰まる。相手が何故そんなことを言ってきたのか、理由が解らずにいると相手は苦笑を向けた。

「これは失礼をした。つい、見所のある若者を見つけると余計な口を出してしまう」

「大丈夫です。俺が刀を使うとどうして解るんですか？」

「カン、というものだがね。しかし、君に教えている人物は『剣』を使うのではないか？」

当たっている。彼はシンのことを知っているのだろうか。疑問が一夏の中で生まれて、それが口を伝う前に彼が思考を遮った。

「強い者だが、彼の戦い方を追うのでは君のためにならない。戦場で立ち回りの参考にするのはいいかもしれないが」

「どうして、ですか？」

「ふむ、そうだな。君は剣と刀の違いについて、知っているかね？」

「片刃と両刃の違いですか？」

質問に質問を返す形になったが、相手は不快な表情を浮かべることなく、小さく首を振った。

「そうではないな。使い方の違いだ」

男は、それを貸してくれないかと一夏に告げる。

一瞬、見知らぬ男に木刀を貸すことに危機感を持ったのだが、相手

の穏やかな雰囲気の流れに流されて、一夏は木刀を渡すことにした。彼は語る。

剣は本来ならば、『押しつぶして』斬る。重量に任せて切断するので、剣によって切られた切断面は細胞が潰れて綺麗なものではない。返って刀は、『引いて斬る』ものだ。達人になればなるほど、その切断面は綺麗であり、斬られた本人さえ自覚できないほどに、あっさりとは斬られてしまう。

「例外はあるが、そう言ったものだ」

言葉を紡ぎながら男が振るう木刀は、その動きが根本的に違っていた。

剣の説明では直線的に振り下ろされ、鋭角的に曲がって戻される。対して刀の説明では曲線的に振り抜かれる。横から見ていれば解るが、円運動のように刃が通り抜ける。

「私個人としては剣は前に突き進む、刀は後ろに流れる。と言ったところか」

「凄い」

「なに、昔からやっているだけだ。こういった武器は修練を重ねた時間が多ければ多いほど、体に染みついて強さになってくれる。君も毎日、振っているのだろう？」

「はい。言われた通りに。シン・アスカって人に言われて、毎日やっています」

つい名前を出した時、彼は『とても懐かしいような表情を浮かべた』。

「知っていますか？」

「さて。では次は君が振るってみるといい。私が見てあげよう」

「お願いします」

言葉の先を誤魔化されたようだが、こんな機会はめつたにない。達人級が見て教えてくれるなんて。

シンの場合、『くらって覚えろ、感じろ』だったから。

一つの動作に対して、一つの助言。こうしたほうがいい、こうやったほうが鋭く動ける。理屈も少し織り交ぜた言葉は、徐々に一夏の動

きを鋭くしていく。

「さて、そこまでだ」

「え？ でも、まだ」

唐突に止められ、一夏は時計を見上げる。

「集中し過ぎると周りが見えなくなる。君の集中力はとても素晴らしいが、同時に欠点にも成り得る」

かなりの時間、木刀を振っていたようだ。止められて始めて、全身の疲労を感じてしまった。

「極度の集中力は、危機的状況を打破するカギとなる。しかし一方で、自分の身体の状態を忘れさせてしまい、危機的状況を悪化させる罠にもなる。覚えておくといい」

「は、はい」

肩で息をしながら、一夏は彼を見つめる。

「ふむ、やはり、教えていなかったか。彼は昔から体力も同時に上げていたからな」

「え、あの？」

「こちらの話だ。すまない。さて、私もそろそろ戻るとしよう」

チラリと遠くを見た後に、男は道場を後にしていく。

「あの！ また教えてくれますか？」

「機会があればまた教えられるだろう。君はとてもいいものを持っている。いい剣士になれるさ」

褒め言葉のほずだ。純粹に褒められたというのに、一夏は少しだけ嫌な気持ちになってしまった。

「……騎士にはなれませんか？」

不意に、一夏本人も意識していない言葉が零れ落ちた。

男はその言葉を聞くと、小さく悲しそうに笑った。

「騎士か。君は騎士になりたいのか？ ならば止めておくことだ。騎士とは何処までも強く高く、そして何よりも業の深い存在だ」

「え？」

「かつて、騎士王より先、騎士の始まりを示した者がこう告げた。『騎士は決して増えることがない。何故ならば』」

男は背を向けながらポツリと、最後の悲鳴を落とす。

『騎士一人を育てるには騎士一人の命が必要だから』だと」

重くのしかかるような言葉に、一夏は何も返せずに彼を見送った。

騎士の業。騎士の命で一人の騎士が育つならば、だ。目の前の彼はどれほどの命の上に成り立っているのだろうか。

一夏は不意に、シンを見ながらそんなことを考えていた。

何時もと変わらないアリーナでの訓練、変わらない仲間の中にラウラが入ってきたことで、色々な特訓が出来るようになったのだが。

やはり基礎的な体力は遠く及ばない。ISを解除した一夏は地面に座り込んで大きく肩で息をしている。

「一夏、誰かに教えられたか？」

「え？　なんだよ、シン？」

「前よりも太刀筋が良くなっているなって。刀の使い方をしっかりと学んだみたいなんだが」

歯切れの悪いシンの言い方に、一夏は顔を上げて彼を見上げた。

「前よりも綺麗に流れる動きだったよ」

「シンさんの動きとは違います、洗練さを感じますわ」

シャルロットとセシリアからの褒め言葉に、一夏はそうなのだろうかかと右手を握ってみた。

自分自身としてはまだまだ追いついてないつもりなのだが、褒められると悪い気はしない。

「ちよつと教えてくれた人がいたんだ。刀と剣の使い方の違いとか、な」

「へえ、それは俺も聞いてみたかったな。俺は剣は使い慣れているけど、刀って使い慣れてないからな」

「そうなのか？」

意外だった。シンならば刀も剣も使えると思っていたのに。

「使えないことはないけど、どうしても生粋の刀使いに比べたら稚拙なんだ。特に抜刀術になると、まだまださ」

「意外でした」

ラウラが驚いた顔を向けてくるので、シンは『俺も人間だからな』と答える。

「で一夏、どう教えられたのだ？」

箒の問いかけに、一夏は思い出すように口を開く。

『剣は前に突き進む、刀は後ろに流れる』だったな」

「え？」

流れた言葉に、シンが目を見開いた。まるで、それを『知っていた』かのように。

「どんな人が、それを言った？」

少し鋭くなった視線を向けたシンに、一夏は怪訝な顔で思い出す。

「金髪で、ちよつとウェーブが入ってたな。年は三十歳くらいだったと思うけど」

「他には？ 何か言っていたか？」

切り返すように質問してくるシンは、前のような凄味はなかったが、何処か焦ったように見えた。

一夏は妙な不安を感じながらも、彼のことを思い出して、最後の言葉をおくする。

「騎士になれませんかって聞いたら、騎士とは何処までも強く高く、業の深い者だって。後、『騎士は決して増えることがない。何故ならば、騎士一人を育てるには騎士一人の命が必要だから』とか」

瞬間、シンが浮かべた表情を一夏は生涯、忘れなかった。

悲しむような、懐かしむような、そんな曖昧な表情の後に浮かべたのは、真っ直ぐに見詰める決意だった。

「そっか」

「ああ……シンは人を殺したことがあるのか？」

冷たくなつた空気に耐えられず、何とか話題を変えようとした一夏が口にいたのは、とても残酷な質問だった。

彼自身、後になって何故そんなことを聞いたのか、解らなかつたという。

「ある」

即答で答えるシンに、一夏の心の中で何かが叫んだ気がした。

「どうして？　なんで殺した？」

「俺が『殺す』と決めたからだ」

あつきりとした、ではない。強烈なほどの決意と意思の重さに、呼吸が苦しく感じる。

「後悔してないのか？　家族とか、その人の大切な人とかに、悪いとか」

「思つてない。と、言えばウソになるけどな。でも、その人たちを殺したことを今も悔やんでない」

「どうしてだよ？」

つい強く言つてしまつてから、一夏はこれは違うと思つた。まるで八つ当たりではないか、と。

彼は自分を捨てた両親でもなければ、戦争を起こして笑う犯罪者でもないのだから。

「悔やんで何かが変わるわけじゃない。殺した事実は消えない。なら、俺ができるのは死者に対して、『我が背を見せ誇れるものであること』だけだからだ」

ジツと見つめる彼は、何処までも自然体でありながら、決意で微塵も揺るいでいない。

人殺しは最悪の罪だ。社会性の生物である人間の世界において、同族殺しは最も忌避するべきものだ。例外はない、一つであつても例外があつていいものではない。

ならばこそ、自分がしたことを許されると思つてはいない。許しがあると考えてはいけない。

罪深く業を背負いながらも、立ち止まつて悔み泣き叫ぶよりも、前

に進む道を選ぶ。

『命を奪う武器を持つ者は、命を護る。その一点においてのみ存在を許される』、よく師匠達が言っていたことだ。だからこそ、俺は奪った命の分まで命を守り続ける」

「だからって、それで死んだ人に言い訳出来るのかよ？」

「言い訳はしない。俺が殺したと蔑んでくれていい。人殺しだと憎んでくれて構わない。俺はそれらもすべて背負って、強さを示し続ける」

シンの表情は揺らぐことなく、真っ直ぐに見詰める姿勢に僅かな動揺もない。

「俺は騎士だからな」

「そっか」

穏やかに微笑むシンに向けて、一夏は『これが騎士と一般人の差なのか』と漠然と思った。

軍人が殺人に対して『命令だから』と逃げられるのに対して、騎士は逃げ道などない。

すべての事実を受け入れ、それを背負いながらも、ただ前に進む。

そうか、と一夏は最後にもう一度だけ、呟いた。

願いのために・3

学内のトーナメントまで後少しというところで、学園側から意外な通知が届けられた。

「は？ タッグマッチ？」

「そうなんだ」

花壇の手入れをしていたシンは、一夏から予想もしてないことを告げられていた。

「個人戦じゃなかったのか？」

「前の襲撃から、個人で対応するのではなく、二人で対応をしたほうがいって話になつたらしい」

そういうものか、とシンは土を掘り返しながら考える。

集団で戦うことはあった。色々な人と組んで戦闘というのにもかかり経験したのだが、タッグでというのは思いつかない。

大抵の場合、単体で敵陣に突入。あるいは防衛ポイントに配置が多かったから。

「それで、どうしたんだ？」

「俺のパートナーは誰がいいか、シンに選んでもらおうと思って」「一夏の？」

球根を植えるべきか、花そのものの方がいいか。色々と考えながら、隣にいるティスが見つめる先の穴を眺める。

「そうだな。ラウラと組んでも面白い戦い方ができるだろうし、簪でもいいかもしれないな」

「簪かあ」

最近になって専用機が完成したので一緒に訓練するようになった彼女は、その武装のおかげで誰と組んでも持ち味を損なわない面白さを持っている。

遠距離なら荷電粒子砲やミサイル、近距離ならば長刀といった風に。本人の技量もそれなりにあるので、足を引っ張ることはないだろう。

「シンが薦めるとしたら?」

「俺が? そうだな、一夏が組むとしたらセシリアだな」

「遠距離攻撃タイプだからって理由か?」

「いや、セシリアが一番、『援護攻撃の意味を知っている』からだな」
疑問を浮かべる一夏に、シンは少しだけ苦笑して顔を向けた。

一口に遠距離といっても、攻撃手段、攻撃方法で様々な役割がある。
狙撃、砲撃、あるいは砲、前衛への攻撃を妨害したり。それを行うには広い視野が必要になってくるため、突撃する一夏に合わせるとしたら広い視野に自在な攻撃方法を持つセシリアが最も相性がいい。

シャルロットも豊富な武装を使って遠距離でも近距離でも行けるが、今の一夏の技量に合わせるとしたら近距離での攻撃は返って邪魔になる。

リンも同様な理由で合わせられないだろうし、箒もまだまだ技量が足りていない。

簪もいい線までは行くだろうが、ミサイルと荷電粒子砲のような直線攻撃では、一夏の攻撃ラインに被ってしまう。

となると、曲線的な攻撃方法を持つラウラかセシリアとなるが、ラウラはどちらかといえば遠距離というよりは中距離遊撃の立ち位置になる。

「だから、セシリアか」

「何度か訓練を見ていると、セシリアは一步引いた位置で攻撃してくるからな。ビットもライフルも狙撃しながら、わざと『外す』ことで注意を反らすことをしている」

「最近は動きながらビットもライフルも使っているから、当て難いっ
て感じてはいたけど」

そうなるのかと一夏が頷いているのを見て、シンは呆れたような顔を向けた。

「あのな、一夏がもつときつちりと技量をあげていけば、簪やシャルロットのほうが戦い易いし、戦い方を組み立てやすくなるんだぞ?」
「いや、俺だって強くなっている・・・よな?」

どうしてそこで自信のないような言い方になるのか。

普通に考えて、一夏の技量の上がり方は異常だ。完全素人が一か月くらいで代表候補生に並ぶような技量になるものだろうか。

元々の才能か、それとも地力が違ったのか。鍛えているシンでさえ、目を疑う反応をするときがある。

「強くなっているよ。ただな、もう少し『遊び』が入ればな。おまえは直線的すぎるんだよ。反応できない相手なら一撃だろうけど、反応できる相手には『攻撃をここにします』って注意しているようなものだからな」

「そうなのか？ 訓練でも箒やリンを撃破できているじゃないか」

「初見殺しにはなっているだけで、二度三度とやればすぐに対応してくるさ。実際、シャルロットやセシリアを撃破したことないだろう？」

一夏が考え込む仕草を見せる。

鋭く細く、最速で攻撃を繰り出す一夏は確かに強い。おそらくだが、世界的に見ても彼の「一撃を回避できる人物は少ないだろう」。

しかし、だ。決して絶対や万能ではない。極度の集中の中で繰り出される一撃は零落白夜の能力もあって、必死の一撃にはなっている。

ただ、それだけで終わってしまう一撃でしかない。最速で行われる一撃はそれだけ無駄が少なく速いが、無駄がない動きというのは達人からみれば『予想が立てやすい』。

フェイントが必要のない攻撃で一撃必殺。逆に言えば、その一撃を回避された後は攻撃の連続性がなくて逆境に陥りやすい。

一夏は強くなった。強くなったのだが、一撃にすべてを使ってしまつて回避された後の戦い方が組み立てられていない。

その最初の一撃をシャルロットやセシリアは読み切り、攻撃を回避して一夏の体制が崩れた後は畳みこむように責め立てて、体勢を立て直す隙を与えてくれずに撃破されてしまう。

「初撃決殺つて、まだまだおまえには早いな」

「そんなつもりないんだけどな」

「きつと、自分の体力のなさを無意識に自覚しているんだろ？ だから、体勢を立て直す隙を作ってくれるセシリアと組んだらどうだ？」

「援護攻撃つてそういう意味か。じゃ早速」

慌てて戻っていく一夏の背中を見送りながら、シンはふと隣で両手を上げてグルグルと回し始めたティースに顔を向けた。

「何してんだ？」

『うん、頑張れ一夏って応援しているの』

応援というよりは、急げと言っているように見えるのだが。

『がんばれ一夏、セシリアはもうシャルロットと組んだよ』

シンは無言で合掌していたという。

兵どもが夢の跡とは、どういう気持ちなのだろうか。

「ほう、中々に楽しいものだ」

「何言ってやがる？」

「いやこちらの話だ」

小さく呟いた声に返され、彼は振り返る。

港近くの倉庫街。人気のない場所に呼び出されたから来てみれば、武装したＩＳが出迎えとは。

「ミスター、申し訳ないわね」

「ふむ、私に何か用かな？ レディ？」

物影から出てきた金髪の女性に、見覚えはない。そもそも、呼び出した手紙の内容も、『以前の取引』の不具合についてだったはずだが。

「貴方が持っているという話を聞いたので、もう少し譲ってくれないかしらと交渉に来たの」

「私がつ持っている、と？ 何のことか解らないが」

「とぼけんなよ」

口調の荒いもう一人の女性が、苛立ったように口を挟む。

「あの機関だよ。『GNドライブ』って無限機関だ。持っているんだろ？」

「ああ、あれかね？　確か、医療機関のエネルギー関係の不備があるからと渡したのだが？」

嘘だったのかと呆れた顔を向けたのだが、相手はどちらも笑っている。

虚言だと知っていたが、人助けならばと横流ししたのだが。巡り巡ってこんなところまで流れるとは。

迂闊なことをしないほうが良かったか。

「ええ、確かに医療機関よ。おかげでほら、私達の体は今こんなに充実しているもの」

誇らしげに腕を動かす金髪の女性に、呆れてしまう。

太陽炉を人体に対して使用するなど。帝国では『論外、出力が落ちるだけ』とかなり昔に結論が出ているのに。

「いい具合よ。これでI Sのエネルギー切れの心配がないもの」
「持っているだけ出せよ」

凄んでこられても、手持ちはすべて出した分しかないのだが。

どういえば相手は納得してくれるのだろうか。少しだけ考えてみたが、相手を説得することなど不可能だろう。

都合のいい言葉しか、相手は信じようとしていないのだから。

「さて、そちらで製造すればいいのではないかね？」

「残念ながら、こちらでは構造解析はできなかつたのよ。分解さえ許さないほどの高度な技術で作られているようね。ミスター、製造した天才さんともども、私たちに協力していただけない？」

「そうは言われても困るのだが」

GNドライブの製造者とは、開発した人物を指すものか、それとも渡した機関を作った存在をさすものか。

どちらにしても、彼ーラウ・ル・クルーゼは面識がない。

「後な、『相転移エンジン』ってやつはよく解らないガラクタだったぜ」
「あちらはエネルギーの発生が少なくてね。どういう代物か解らなかつたわ。それも含めて、説明をお願いできないかしら？」

「そうかね？」

少し呆れてしまう。あれほど理想的な独立機関は、他にはないとい

うのに。ほぼ宇宙空間ならば無限にエネルギーを発生させられるのに、彼女達はその有用性に気づいていないとは。

宇宙に進出していない人類とは、その程度の存在でしかないのか。

「宇宙コロニー開発は、嘘だったというわけか」

「嘘じゃないわ。いずれ宇宙に出るでしょうけれど、今は地上でのお仕事が残っているだけよ」

「宇宙なんてまだまだ先の話だろうが」

馬鹿にしたような目線を受けて、クルーゼは嘆息してしまう。

ISの目的は宇宙に出ることなのに、使用している人たちがその開発理念を忘れて武器として使っているとは。

いや、武器として使っているにしては稚拙すぎないだろうか。そもそも、ISが兵器として通ると最初に考えたのは誰なのだろうか。あれほど不格好で兵器として致命的な欠陥を抱えているものはないだろう。

尤も、マテリアルも同じようなものだが。

「確かに人類は海の1パーセントも解析していないから、足元を固めるのが先か。なるほど、勉強になった」

足元すっかり、この年になって再確認させられるとは。やはり、未開惑星というのは勉強になる。

「海の話なんてしたか、おっさん」

「おや、違うのかね？　ならば仕事とは？」

「私たちが世界を支配する、というお話よ」

瞬間、クルーゼはしばらく啞然とした後に高笑いをしてしまった。

「何がおかしい?!」

「いや失礼。君たち程度の組織で、『世界を支配』とは。これは、あいつに聞かせてやるべきかな？」

「ミスター、かなり不快なことを言っているようだけど、誰の話かしら？」

怒りを浮かべる二人と、周りを囲んだIS達に向けて、クルーゼは鼻で笑うように告げた。

「銀河一の大馬鹿者の話だ。では、失礼する」

「逃がすと思っっているの?!」

「逃がさないぜ!」

動き出しかけたISと、武装の数々を前にして、クルーゼは指を鳴らした。

『遅い、痴れ者ども』

瞬間、すべての武装は砂のように崩れ落ちた。

「高周波というのを知っているかね? 要するに音波に分類されるものだが、音というのは共鳴する。音同士がぶつかり合い、音同士が波を相殺することにより、限定空間に高周波と同じ作用をもたらすことができる」

崩れ落ちた者達の中、クルーゼは散歩に行くようにゆっくりと歩いていた。

「難しい話は嫌いなので簡単に言えば、高周波と同じものを流して君たちの武装だけを物質崩壊させた、というだけの簡単な話だ」

「嘘、でしょう。何よそれ」

「なんなんだ、お前は」

恐れ、不安、怖れ。様々な感情を向けられながら、クルーゼは考え込む姿勢を作る。

「自分が何者か語るのは、とても難しい。哲学の話になるが、簡単に答えるとしたら……」

ニヤリと笑う彼。周囲にいた誰もがそれは『悪魔の笑み』に見えたという。

「騎士だ」

GNドライブと相転移エンジンの崩壊を確認。

人助けで流したものだ、巡り巡ってこんな未開惑星に流れ着くなど。やはり帝国以外の人間を信じてはいけなかったのか。

「いや、人の可能性は馬鹿に出来ない。人が人を信じることはとても素晴らしい。これからも信じて横流しするべきか。どう思う、シン・アスカ？」

不意に振り返った先、赤い瞳の少年が立っていた。

「クルーゼさん。これが目的でここに来たんですか？」

「ふむ、どう答えれば君は満足かね？ 私が馬鹿をやった不始末を拭うために汚名を着た。あるいは困っていた人を助けたかった」

指折り数え一つ一つを確認するように告げるが、彼は表情を変えることなく見つめてくる。

怒りはしている。困惑はしている。けれど、感情の深い部分でも冷静だ。揺らぐ騒がず、機械のように冷たく現状を把握しているか。

『凍焰の鬼神』。激情を持っていながらも、何処か氷のように冷たい思考を持っている。彼の字の由来は、こんなところにもあったのか。クルーゼは少しだけ驚き、同時に嬉しく思う。

彼を倒せば、自分は何処まで高みに登れるだろう。強く高く、誰も追いつけない領域に辿り着き、やがては世界さえ滅ぼせる存在に。

心の底から、そう思う。

「話は簡単だ。シン・アスカ。私は私のエゴのためにここにいる」
「嘘だ」

即座に彼は否定した。まさか否定されるとは考えていなかったクルーゼは、言葉に詰まってしまう。

「絶対に師匠が何かしたんじゃないですか？ どんな悪だくみが実行中なんですか？」

「いやテラもそんなに毎日のように馬鹿なことや悪だくみをしているわけ」

「ではない、と否定しかけてクルーゼの脳裏を様々な事件がよぎっていた。

資金が足りないからと傭兵やったり。資材がないからとデプリ宙

域に突撃したり。世界が危機だからと邪神を滅ぼしたり。小学校の遠足のために艦隊引っぱり出したり。

伝染病の予防薬のためだけに伝説の霊薬を使いつくしたこともあった。

オンラインゲームの可能性を上げるためだけに、異世界への転移ゲートを組み上げたり。

思い返せば、テラが馬鹿なことをしてないことは、まったくくない。今回の一件も完全に彼の悪だくみだと勘違いされるのも、仕方のないことか。

「どういうことでこんなことになったのか、きちんと説明してください」

「ふむ」

クルーゼは、生まれて初めて冷や汗というものを流した。

本当に今回の一件は自分のエゴのため、ラウ・ル・クルーゼという個人の欲望のために始めたことで、テラは手伝ってもらった程度だ。

大筋のシナリオを描いたのは自分で、実行を決めたのも自分なのが。

言い返せない、普段のテラをよく知っているからこそ。普段の皇帝の馬鹿げた行動を知っているシンだからこそ、否定したとしても納得してくれない。

さすが、我らが皇帝陛下。ここまで自分を追い込むとは。クルーゼは今更になってテラの『非常識行動』に深い敬意を抱いた。

「安心してください。今、帝国では皇帝陛下追撃隊が指揮されています」

「おい、待て」

話が大きくなり過ぎていないか。あまりのことに、クルーゼは素で突っ込みを入れてしまった。

「豪華メンバーです。ルルーシユさんやキラさんはもちろん、のび太さんも参加しています」

「ちよつと待てコラ」

不味い、非常にまずい。ルルーシユとキラの参加は予想していた

が、まさか野比相談役まで参加とは。

これはひよつとすると、近衛騎士『レッド・ミラージュ』が半数に割れての全面衝突するのではないか。

「先ほど追加メールで皇妃様達全員が参加したと連絡が来ました」
クラリと意識を失いそうになった。

十三の騎士団がすべて参加。最強と最大が激突したら、ちよつとした星系くらいは消し飛ぶのだが、誰も止めないのか。

バトラーとジャンヌは何をしている。他の元帥は止めないのか。そもそも、そんな事態になったらテラの父と母が介入して終わりだろう。

最悪な事態に転がっている現状を知り、クルーゼは思考を巡らせる。何故に自分が打開策を考えないといけないのか。そもそも、こんな事態になるなど予想していなかったのに。

自分自身の欲望のために動いただけなのだが、どうしてここまで周りは自分を信じて『皇帝が馬鹿やった』として疑わないのか。

あ、日頃の行いか。

クルーゼは結論を出して、笑顔を見せる。

「そうか。なるほどな」

「はい、ですから」

「残念ながら、不正解だ。シン、私が元凶なのだよ」

スツと、クルーゼは刃を抜いた。

瞬間シンは咄嗟に体をひねりながら、刃を弾き飛ばす。

「クルーゼさん!？」

気づいただろう。今のは本気で殺すつもりだったと。気づいていないだろう、今の一撃が間接的な攻撃だと。

「まさか、本当に、貴方が?」

「そうだと言ったはずだが? どうしたね、シン・アスカ? 苦しそうだが?」

「何を・・・っ?!」

疑問を口に出しかけて、シンが膝をついた。

「浸透系攻撃は初めてだったかな、『凍焰の鬼神』?」

「嘘だろ、こんなに簡単に」

「君はまだまだ戦い方が甘いようだ。武器を合わせるだけで、相手の行動を奪う技術もある。マテリアルの能力も万能ではない」

保持者を一定に保つ能力は、同時に保持者の成長を止めてしまう。だからこそマテリアル持ちは、その能力を常時発動させていない。

攻撃を受けた時、負傷した時限定で作動するように設定はしてあるが。

マテリアル同士の戦いでは、それが作動しない状況がある。

「お互いのマテリアルが戦闘中では、保持者に能力を使うことができない。特に格上相手ではな」

『フォリアナ』が何かを蹴とばした。きっとあれがシンの『ティス』だろう。

自分の戦闘に精一杯で他に回す余力はない。少しでも油断すれば、自分が倒される。彼女が倒れたら、残りは二対一の不利な状況でしかない。

彼女はそれがどんな意味を持つか、よく解っているのだろう。立ち回り方も生まれたばかりにしては見事だ。

後三年、いや二年でも経験を積みめば、かなり優秀なマテリアルになっっていたかもしれないが、今はこちらの『フォリアナ』のほうが上手だ。

「なんで本当に？ 本当に裏切ったんですか？」

「最初からそう言っているのだが？」

「どうして?! そんなに師匠に迷惑かけられたんですか？」

「いや、そこから離れたまえ」

どうしてもテラが悪いと持っていきたいのか、いやこれは彼の自業自得か。

仕方がないか、とクルーゼは笑う。

それは、シンから見ても凶悪な笑顔だった。

「単純に私が強くなりたいたいからだ。強く、誰よりも高く。最強ではなく絶対になりたい。そして、愚かな人類に対して鉄槌を下す」

「どうしてそんなことを?!」

「私にその権利があるからだ」

「誰にもそんな権利なんてない！ 人が人を裁くなんてことは、絶対にないはずだ！」

「あるのだよ。ただ一人だけ、私にだけは。さて、シン」

思い出したようなタイミングで、クルーゼは合図を送る。『フォリアナ』が大きく頷いて、『テイス』を叩き潰す。

『痴れ者が、その程度でよく『マテリアル』を名乗れますね』

「再び会う時までには、牙を研いでおくことだ」

小さく言葉を落とし、背を向けて歩きだす。

「クソ」

彼の呟きが聞こえてきた。

そうだ。怒りを燃やせ、敵を倒すために力を磨き、意識を研ぎ澄ませ。

おまえが超えるべき壁は、ここにあるのだから。

強くなったつもりはあった。驕っていたかは、解らない。でも負けないまでも食らいつくことはできると考えていた。

「シン?! 気がついた?」

「シンさん!!」

「何があつたんだ?!」

開いた視界に映るのは、何時ものメンツ。どうやらここはIS学園の自分の部屋らしい。

「俺は?」

視界を巡らせる中、見知った中に一人だけとても見慣れた顔がいた。

「よう、シン」

「ハイネ、俺は・・・」

「倉庫街に倒れていた。誰にやられたかは、傷を見れば解るから、寝て

おけ」

「はい」

再び天井へと視界を戻し、シンはゆっくりと瞳を閉じた。

次第に気配が遠のいていく。現実から意識の中へ、無意識のような夢のような場所に降り立ったシンは、周囲を見回して拳を握った。

「ごめん、『ティス』」

『シンが悪いわけじゃない。私をもっと強かったら』

蹲って泣いている少女は同じように拳を握っていた。

悔しい苦しい、負けたことよりも、パートナーに負担をかけたことが、とても辛い。

「強くなりたいな」

『うん、強くなりたい』

誰にも負けないなんて、夢物語。どんなに強い存在でも敗北はある。必然で当たり前なことに、納得できるなんて思えない。

絶対に負けない存在になる。馬鹿なことを誰かに忠告されても、それに同意して足を止めたりしない。

「そうだよな」

『ティス』とは別。自分の背中に気配がある。あの時の自分が、家族が死にかけてた時の幼い自分が、人が殺せるほどの殺意を持って見つめてくる。

おまえはまた負けた。おまえは弱い、また失うつもりか。また助けられないつもりか。

無言で攻め続ける彼に対して、シンは振り返ることなく下げていた顔を上げた。

「もう負けない」

強く、血が出るほどに強く拳を握りながら。

織斑・千冬は相手を見ながら、『死の気配』とはこういうったものかと不意に思っていた。

「初めまして、シンの同僚のハイネ・ヴェステンフルスです。シンがお世話になっているようで。ご挨拶が遅れて申し訳ありません」

「いや、こちらこそシンには世話になっている。特に弟が、面倒を見てもらっている」

「織斑・一夏ですか。なかなか、筋のいい剣士のようですね。姉の貴方だけではなく、弟も素晴らしい才能を持っているとは羨ましい」

褒め言葉と社交辞令から入った彼は、本当に怖い存在のはずなのに、とても親しみ易い雰囲気を持っていた。

「お世辞はいい。貴方がここに来たならば、話があつてのことだろう？」

「ええ。こちらの不手際で貴方達に迷惑をかけるようなので」「不手際？」

問いかけに、ハイネは少しだけ困った顔を浮かべて、口を開いた。

「はい、身内同士のケンカのようなものです。ただし、シン・アスカを沈められる人物が相手ですが」

世間話のように言われた内容に、織斑・千冬は目眩を覚えたという。

願いのために・4

一夜明けての早朝、シン・アスカは窓から外を見ていた。負けたことがとても悔しい、手加減されて見逃されたことに苛立ちさえ感じているのに。

何故か感情が動かずに、ただ茫然と過ごしてしまう。隣にいるティスも同じように外を見つめて動かない。

鍛え直さないと。またクルーゼに会ったら、今度こそ間違いなく倒される。二度目の幸運を期待するのは、よほど世間知らずか底抜けのアホくらいだ。

動かないと。意志を固めようとしても体は相変わらず動いてくれない。

「はあ」

小さくため息をつくシンは、そのまま視線をまた窓の外に向けた。

燃え尽き症候群というのがある。

目標に向かって真っ直ぐに、何処までも情熱を燃やして走っていたところに、何かに躓いて転んでしまった。

普通なら立ち上がればいいのだが、立ち上がりかけて嫌な考えが頭に残ってそのまま情熱が消えてしまう。

誰にでもあるものだが、情熱が多い人ほどこの落差が激しくて立ち上がれなくて、やがてそのまま。

「陛下の予想通りか」

小さく呟いたハイネは、嘆息をこぼす。

シン・アスカは敗北を知っている。強敵に立ち向かう怖さも、困難

を打ち破る理由も、立ち上がるこの意味も知ってはいる。

けれど挫折を知らない。躓いて立ち止まって、立ち上がれないことを知らない。メンタル面において、そこだけは鍛えられなかったと言っていたが。

状況がなかった、シンにとって周りは常に格上ばかり。敗北など日常的なことで、『勝てないのが当たり前。次に繋げればいい』と前向きに考えられていたのだが。

出来ていたことができなかったことの喪失感は、彼にとって初めてのことだから。

「だからって、俺か」

再びの溜息を後、チラリと視線を遠くに投げる。

厄介事を押しつけられたというよりは、前座を任された気分だ。シンの気持ちを持ち上げて、その後は全部を任せてしまえる。

いや、ひよつとして沈んだまま消されるんじゃないか。

嫌な予感がしつつも、ハイネは預けていた壁から体を離れた。

「おい、シン」

「ハイネ？」

ようやく気付いたといった様子で彼が振り返る。表情は変わらないうのだが、内心は深く沈んだままで動いていない。

まるで素人のガキ。騎士としての凄味は何処へ行ったのか。あの氷と炎の相反する圧力は、何処かへと消えてしまった。

もしかしたら、最初からなかったのかもしれない、そういった錯覚を覚えるほどに今のシンは何もない。

「負けて悔しいか？」

特にシンは反応しない。隣の気配がピクリと動いた程度だ。どうやら『テイス』のほうが敗北に敏感らしい。

「勝てないことが悔しいか？」

まだ反応しない。彼はきよとんとしたまま、こちらを見ている。

「立ち止まってしまったことが、許せないか」

「ッ！」

ギョツと瞳に力が込められる。敗北とか勝てないじゃなく、やはり

そこか。負けず嫌いじゃなく、勝てなかったことでもなく。

ただ立ち止まってしまったことが許せなくて、感情が止まっているだけだ。

本当にあの師匠はよく見ている。シン・アスカの内心を言い当て、適切な処方を送り込むなんて。

「で、そこで何時までそんな無様を晒しているつもりだ？」

「俺は……」

「考えてゴチャゴチャと理屈を並べて、どうにかなるなんて、そんな高
等な生き物じゃないだろうが。俺達、騎士つて連中は」

彼の隣に腰かけて、同じように外を眺める。

シンも再び外へと視線を投げた。何処までも広がる蒼穹、果てなど
ない世界は確かに果てはあった。

かつて、世界を冒険した英雄たちは、今の世界を見てどう思うだろ
うとハイネは不意に思った。

「俺達は理屈で戦っているのか？」

「それは」

「俺達は頭で戦っているわけじゃないだろうが。おまえのこころは」

シンを見ずにハイネは自分の胸を親指で示す。

「何を叫んでいる？」

「……」

「俺にはな、『強くなりたい』って叫んでいるガキの声に聞こえるぜ」
深く、相手の過去を抉りこむ。彼の原動力、彼の原点、そして彼の
最大ともいえるトラウマ。

ギョツとシンの拳が握られ、瞳が鋭く空を睨みつける。

かつて、過去の英雄たちは世界の広さを知らなかったかもしれない。
けれど、彼らは人の可能性は知っていた。

体一つで世界に向かい合って、多くの逸話を残した。

ならば、その先にいる自分達は。世界の広さを知った自分達は、
もっと広大なものを見つめるべきだ。

「立ち止まっている時間があるなら、歩きだせよ、シン。俺達の背中に
ある過去は、もうどうすることもできない。けどな、目の前の未来は

どんな形にでもできる。ほら、立てよ」

促すようにハイネは立ち上がり、ニヤリと不敵に笑って見せた。かつての英雄たちのように。困難に立ち向かう勇気を持って。

「俺達は先に行っちゃみうぜ。おまえはそこで止まったままでもいいのか？」

「そんなこと、絶対にありませんよ。俺が先に行きますから」

ゆっくりと立ち上がる彼は、気配が違っていた。

初めて会った時のように、宇宙の深淵のような何処までも冷たくすべてを凍結させる気配と、太陽ではなく宇宙の誕生のようなすべてを燃やし尽くす炎の瞳。

『凍焰の鬼神』が、そこに立っていた。

「いい気概だ。そんな復活したおまえに朗報と悲報が一つずつだ」

「はい」

もう何が来ても驚かない、そんな顔をするシンに対して、ハイネは悪戯っ子のような顔で告げた。

「皇帝陛下が一夏達と遊んでいる」

瞬間、シン・アスカは顔面蒼白になった。

同時に、アリーナから豪雷が響き渡ったのでした。

最初はちよつとした好奇心。

姉―織斑・千冬と一緒に歩いてきた男性に興味があつて、話しかけただけ。彼の隣にいる女性も、IS学園で見たことない人で。

年上かなと誰もが思っている時に、不意に彼は告げた。

「あ、俺の孫弟子？」

「え？」

彼が何を言ったのか解らず、視線を彷徨わせていると、女性のほう

が口を開いた。

「正式な弟子というわけではないようですよ。訓練しているだけみたいですよ」

「そっか〜」

楽しそうに、気楽そうに笑う男性は、ゆつくりと右手を差し出してきた。

自然と一夏はその手を掴みかけて、無意識に飛び退いた。

白式を展開、雪片を片手に持って零落白夜さえ発動させて。

「一夏？」

箒に名を呼ばれ振り返れば、全員がISを纏っていて、誰も近寄ろうとしない。

心臓がうるさい、目の前がよく見えなくなってきた。相対する存在が、本当に人間なのかと疑問を感じる。

「織斑・千冬さん、このアリーナは貸し切りですか？」

「ああ、ハイネから頼まれて貸し切っている。だが」

姉の声が何処か震えていた。何かを止めようと動きかけて、女性に止められる。

「ご心配なく。ちよつとした悪戯ですよ。ね、テラさん？」

「ん、そうだね。ちよつとした悪戯だよ。さて、と。ちよつと訓練してあげようかな」

トンと小さな音がした。何かと思う前に、一夏の体はアリーナの壁にぶつかっていた。

「一夏！」

「一夏さん！」

動き出したのは半々。シャルロットとセシリアは前を向いたまま、それぞれの武器を構えて男を見ている。

箒とリンが一夏へと近づこうと体を動かし、簪とラウラが二人の背後を護るように流れる。

「ん、いいフオーメーションだ。いい訓練しているみたいだけど、まだまだかなあ」

テラと呼ばれた彼は、すでにそこにいなかった。

横だ。反射的に雪片を振りかけて、その腕が抑えられる。

「いい反応だけど、甘いなあ。初見殺しに届かないよ、それは」

衝撃と転がる視界。投げられたと気づいた時には地面に体がぶつかっていた。

「何時の間に?!」

シャルロットがアサルト・ライフルを二丁、構えて引き金を引く。

銃弾は正確にテラを捉えていたはずなのに、彼は視線を向けただけ。それだけで銃弾が消えた。

「嘘、何それ?!」

「ならばこれはどうですか?!」

セシリアのレーザーが舞う。直進するレーザーが途中で曲がる、フレキシブルとか呼んでいた攻撃の中、テラは微動だにせず目線を細めた。

「ん、反応はいいね。でも、攻撃する時に声を出すのは、相手に教えるだけだからさ。ああ、気合い入るしカッコイイか」

否定しかけて一人で納得する彼に対して、左右からリンと箒の一撃が迫る。

間違いなく捕らえた。今までシンでさえ受け止めるだけだった一撃を、彼はまったく動くことなく二人を弾き飛ばした。

「惜しい。威力は申し分ないけど、速さが足りないね」

何が起きたか二人には解らなかつただろうが、一夏には見えた。

生身で音速を超えて、光速に届くなんてできるものか。自分の目が捕らえた光景が信じられずに、理性が否定を叫んでくる。

次の手。ラウラと簪によるレールガンとミサイルの雨。照準をそろえた二人の攻撃に対して、彼は初めて動きらしい動きを見せた。

「よつと」

右手を鳴らす。たったそれだけで、迫っていたすべてが破裂して消えていく。

意味が解らない、どういうことか解らない中で、一夏は飛び出す。

最大威力、最高の動き、そして自分の中の最強の一撃。

亜音速を超えて光速に届きかけた一撃は、自分で振り返っても過去

最高のものだったのに。

「はい、残念。いい動きだったんだけどね」

スルリと刃を交わされて、反対に一撃を貰う。

「これ、おまけね。いけ、『獅子の黄金』レゾルム・アウルス」

豪雷が、すべてを白く染め上げた。

「・・・しまった、やり過ぎたかな」

テラ・エーテルは周りを見回した後、織斑・千冬に顔を向ける。

「いい教訓になった、というわけにはいきませんね。やり過ぎですよ、テラさん」

答えたのは自分の巫女、一人で行ってくるに対して、『絶対にダメ』と言われてお目付け役としてついでにきたホシノ・ルリ。

「いやいや、どうして。シンは教育者としても優秀だね。一夏の動き、かなりいいよ」

「そうですね。知り合いの剣士の中でも、半ばに食い込めるでしょうね」

世間話のように話しながら、テラはのんびりと歩いてくる。

誰もが手を出せない。実力の差を知って、迂闊に手を出したら負けると悟ってしまったのか。

「セシリアとシャルロットだっけ？ 諦めない根性がいいよ」

二人に釘をさすと、上がっていた銃口が下される。

それにテラは、小さく『へえ』と口にした。下げてはいるが、目線はまだ諦めていない。

中々、根性のある子がシンの近くににいるものだ。テラは少し嬉しくなって笑顔を浮かべて、両手を広げた。

「よう、シン」

「何してんですかあああああ!!」

握って振りかぶった拳を握り返し、相手の足をけり上げる。空中で一回転する彼は、僅かに体の中心をずらしながら横回転を加えて自分の手を離させた。

逃げる、次の攻撃を加えようとした彼に、テラはそつと手を添えた。「ちよつと付き合えよ、馬鹿弟子」

「はっ。」

景色が一変する。IS学園から遙か遠く、何処かと言われたら被害が出ない場所とテラは答える。

バツとシンが距離を開ける。油断なく見つめる姿に、相手の精神が持ち直したことをテラは知る。

「ハイネからの言葉、効いたか？」

「はい。おかげで目が覚めました。俺、クルーゼさんを殺します」

あつさりと告げた言葉に、テラは目を細めてシンを見つめた。

「間違いじゃないのか？ もしくは俺が何かしたとか？」

「疑ってます。でも、クルーゼさんは、『戦いを望んでいる』。なら騎士として本気で挑むのが礼儀です。捕まえようとか、説得するなんて考えません」

自然体から右足を前に、左足を少し下げる。けれど、前に突き出すのは左手、右手は後ろに引き絞るように。

「俺は俺の意思であの人を殺します。そして、あの人を超えて強くなってやる」

「へえ、そうかそうか」

迷いのない瞳を向けられ、テラは大きく頷いて片手を上げた。

「じゃあ、鍛え直してやるよ」

テラの背後に銀色の円環が次々に浮かび、その中に七色の光芒が瞬く。

「はい、お願いします」

体中に力を巡らせ、シンは両手に『ウロボロス』を引き抜く。

『テイス』は、遠い場所だ。彼女は彼女で相對しているのだろう。

『マテリアル』の最古参、始まりの機体の自意識。女神と崇拜される、『マリア』に。

二人纏めて鍛えてくれるわけか、とシンは感謝した。これでもっと強くなれる、もっと上を目指して、そしてクルーゼを倒せる。

「行くぞ」

テラの手が振り下ろされた。

降り注ぐは伝説の武器、あるいは宝具。かの有名な英雄王の宝具を真似て、テラ達の一族が生み出したスキル。

彼の一族が、強さのためだけに世界中はもちろん、異世界の武器でさえ集めた末の『宝物庫』。そこに保存されている武器を振らせる、ただそれだけの能力は、初見で相手を粉碎する。

二度目でも三度目でも、回避するのは不可能に近い。

次々に降り注ぐ武器を碎き、あるいは避けながら、シンは前を向いたままで突き進む。

後ろに下がるな。逃げるなんて考えるな。ただ前に、シンの目線はただテラだけを見つめていた。

テラとシンの姿が消えたアリーナで、ハイネはルリへと近づいていく。

「テレポートですか？」

「はい。場所は、そうですね。『エデン』の何時もの場所でしょう。あそこなら『エア』を使っても世界に影響はありませんから」

「使いますか？」

対界宝具を使用すること前提なのか。ハイネは呆れた顔でルリに告げると、彼女はフツと笑った。

「使います。前回と違い、今回はシンを徹底的に鍛えるつもりなので。十七歳ですから」

体が出来上がっていない時に鍛えても、体を壊すだけで身に着くこととはないらしいが。

「あんだだけ容赦なくやっついて、手加減していたと？」

「ええ。まだまだ『金色の魔王』や、『天照』レベルの攻撃はしてませんから。今回はきつと、『神話』ではなく、『神々の戦い』クラスになりますよ」

フツと笑う彼女はおかしそうではなく、何処か呆れたような音色で語った。

理解できません、と言っているようだが。

「男の子ですから。俺もシンも、へ、いやテラさんも」

「まあ、そうでしょうね。さてと、次は……」

ルリが目線を向ける先、一夏が立ち上がっていた。

「訓練してもらってもいいですか？」

「一夏ー！」

予想外の言葉に、千冬の声が上がるのだが、彼は姉の姿を見た後に、ハイネへと視線を戻した。

「強くなりたいんです。千冬姉に顔向けできないような、そんな弱さなんていらぬ。姉と白式に恥じないような、そういう男になりたいんです」

譲らない、絶対に曲げない。体中は疲れているのに、彼の瞳は力を失っていないかった。

「そうですか、解り……」

「ここは俺の出番じゃないですかね？」

ルリが頷きかけた先、ハイネが体を前に出した。

「……そうですね。貴方の方がいいでしょう」

「ありがとうございます。じゃ、よろしくな、一夏」

「そうそう、皆さんに言っておきますけど。シンがハイネに勝てたことは一度もないので」

驚愕の事実が、ゆっくりとアリーナに浸透していった。

「よろしくな」

「ちなみに、オールラウンダーの特化タイプ。助言はこのくらいいいでしょう」

「いやいや、俺は器用貧乏なだけですよ。さてと、行くぜ」

不敵に笑うハイネに、誰もが身構えた。

願いは一つ。

想いは色々。

彼が願ったのは強くあること。弱い自分など不要、弱い騎士など存在が許せない。

心を強く持ち、ただ上を目指す。立ち止まって、『ここが限界だ』と感じてしまった騎士は。

「消えるしかない。そうだろう、テラ？」

小さく闇に呟くようにして、彼は自分の金髪を撫でた。

願いのために・5

ある人が言っていた。

師を求めるのではなく、師の求めるところを、求めよ、と。最初の頃は何を言っているのか解らなかったが、今なら少しは解る。

師が弟子を育てるのは、師が望む何かがある弟子にありとみたからだつて。

なら俺は、師匠のテラさんが何を望んで弟子にしたのか。

「考え事が、シン？」

グツと押し込まれるような感触と同時に、豪雷が体を貫いたのが解った。咄嗟に右足を地面に突きつけて、体の中を流れる電流を外へと流す。

「その程度の対処法を、誰が教えた？」

再度の衝撃、今度は超震動。体を粉碎するような振動に対して、シンは左の拳を体に打ち込む。

振動には振動。同じものを反対側から打ち込めば相殺できる。

陰陽の理らしいが。

「アホらしい」

投げられた、そう思った瞬間には左足が相手の後頭部に突き刺さる。

「まったく馬鹿らしい」

軽い衝撃音と共に、シンの体は空中に投げ出された。

左足に手を添えての寸打。気功とでも言えばいいのか、純粋な体術のみでこの効果とは。

空中を蹴とばす、虚空瞬動で体の自由を取り戻し、相手を見下ろした。

チャンスは今か。右手に引き抜いたエクスカリバーを振り上げる途中で、師匠の姿が消えた。

「大振りの攻撃が通るなんて、考えてないよな？ シン」

マグマを纏ったミノタウロスが、眼前にあった。不味い、眷獣の攻撃が来る。あれは純粹な自然現象だ、対魔力などで防御できない。

テイスと視線を動かしかけた先で、草原を転がっている相棒が映る。

あつちも手いっぱい、装甲を出すことができない。ならば、斬る。「思ってますよー!」

気合一閃、エクスカリバーの一撃は眷獣を真っ二つにして、能力の効果も打ち消す。

「やるようになったな、シン」

そつと師匠が引き抜いたのは、『円筒形の剣』。

ゾクつと全身に寒気が走る。あれは知っている、あれがどんな意味を持つ剣で、どういった『宝具』なのかも。

「天の理、地の理、見てみるか?」

全身が叫ぶ、あれは『受けてはだめだ』と。もし僅かでも触れたら、自分の体は消滅してしまう。

「ああああ!!」

無意識に、エクスカリバーを手放して虚空を握る。テイスが動けない、こちらに能力を向けられない。ならば『神剣』は抜くことはできない。

理屈は頭が理解している。不可能だと本能が告げる中、シン・アスカの魂が叫ぶ。

『いいからそれをよこせ』と。

「来いよ! 来いって言ってるんだ! 『天壤無窮』!!!」

ビシつと何かに亀裂が入った。同時に全身に激痛が走る中、シンの右手は確かに剣を握っていた。

「へえ、おまえもようやくか」

ニヤリと笑う師匠に向けて、シンは走り出す。

右手に持った『神剣』が輝く。全身の激痛が嘘のように消えて、周りを巻き込む威力が幻のように消えていく。

『天壤無窮』、天と地とともに永遠に続く意味を持つ剣の効果は、永

遠不滅。

保持者を一定に保つマテリアルの能力を似ているが、大きく異なるものがある。

保持者だけに作用を持つ能力を、『シン・アスカが認識した範囲内に作用させる』効果。

彼が『神剣』を握っているかぎり、どのような攻撃も天地の間で効果を発揮することはない。

相手が英雄王の最も信頼する宝具だろうが、『神帝』テラ・エーテルの眷獣だろうが、例外なんてない。

はずだ。

「そうだよな。まったく、おまえの『神剣』は厄介だ」

嬉しそうに語るテラは、ゆつくりと右手を握り締めた。

『神剣』の効果は絶大。けれど、その作用は絶対ではない。顕現した年月、使い続けた時間、それらが『神剣』の格を示す。

スノーホワイト・エンパイアは、始祖の機体。すべてのマテリアルの原点であり、頂点。

最古の機体でありながら、テラが扱っているのは、それなりの理由がある。

本来、マテリアルは一人に付き一機。保持者が死ねば、マテリアルは自壊して消えていくのだが。

スノーホワイトは、現存し続ける。最初の保持者と同じ魂を持つ者を受け入れ、その者を護り続けるために。

故にその稼働年数はどの機体よりも高く、『その神剣はどの機体のものよりも強力』だった。

テラの右手に剣が見えた。滅多に彼が使わない、常時九つの封印が施されたテラ一族に最秘奥にして到達点。

『光滅』

そつとシンが呟いた言葉に、テラはとてもいい笑顔を見せた。

「ようやくだ、馬鹿弟子。おまえはようやく、『俺を殺せるだけの次元に足を踏み入れた』」

何処か、とても嬉しそうに笑うテラの一撃が、シンを薙ぎ払った。

無情か。無念か。

織斑・一夏は、何処までも澄み渡る空を見上げながら、何故かそんなことを思っていた。

「なるほどな。太刀筋はいい、戦い方はシンに似ているな。あいつが教えたにしてはいい線いつている。初めての弟子なのに、きちんと育てているのが解るんだが」

彼は何処か困ったように考えながら、大きくため息をついた。

「あいつ、自分が馬鹿体力だって解ってなかったんだな」

何の話なのだろうか。シンの話ならば、彼と自分との決定的な差は実力以外にもあったということか。

「一夏、おまえさんはいい剣士にはなる。それは保証してやる」

「剣士にしかねないって、意味ですか？」

悔しくて苦しくて、思わず吐き出した。

強くなりたいたいのには、自分は何時までも無様に地面に転がっている。

シンを追いかけて背中を見つめていたはずが、今は何処にもあの背中が見えない。足跡さえ見えないなんて、自分はここまで弱かったのか。

「戦士にだってなれるさ。色々と学んで経験を積みめば・・・」

「騎士になりたいんですー!」

相手の言葉を遮って、自分でも思ってもみなかった言葉を叫んだ。ずつと懂れていたのかも知れない。

シン・アスカのようになりたい。彼のようにすべてを護れるような、苦しい時に苦しい顔をせず、困っている人をすべて助けられるような。

だから、と無意識に紡いだ言葉に、重苦しい圧力が答えた。

「止めておけ。おまえはなるな。おまえは甘すぎる」

先ほどまでの明るい声ではない。同じ人物が出しているなんて思えないほど、殺気に満ちた言葉がハイネの口から流れる。

「騎士つてのは、業だ。人間の歴史の中での、最大の罪でも有る。軍人や武術家とは違う。もし、おまえが過去の歴史の『騎士』つて意味で使っているなら、話は別だが」

過去の騎士と今の騎士は違うのだろうか。

ハイネはゆつくりと語る。かつて、騎士王アーサー・ペンドラゴンが語る騎士道の話。

弱き民のために戦い、巨悪に屈することなく、王に仕え王を正し、国家を守り続ける騎士のことを。

正義を重んじ、義理を果たし、義務ではなく慈愛を持った人たちの話だが、一夏には違和感があった。

違う、そうじゃない。心のどこかからする声に、彼は迷わずに従った。

「だからな、おまえが言っている騎士つていうのはそういう連中のことじゃないのか？」

「俺はシンみたいなの……」

「止めろ」

言葉は強制的に消された。ハイネから流れる圧力に、一夏は声が出せずに地面にただ押しつけられた。

何か不思議な力があるわけじゃない、ただ彼の気配に圧倒されて動けずに地面に倒れたままになってしまふ。

「止めろ、おまえがいう騎士が『俺達のこと』を言っているなら、止めておけ。俺達は業であり、罪だ。人の世界にあつて、決して許されない罪を『罪とすることなく、罰されずに生きている従僕だ』。おまえには無理だ」

だから、止めておけ。と彼は口外に語る。

無理なことを考えるな、こんな罪深い存在になりたいなんて、馬鹿げた考えは止めろ。

圧力と共に流れてくる彼の優しさに、一夏は必至に抗おうとした。

どうにか答えたい。反論したいのに、口が動いてくれない。喉が音をだしてくれない。肺が空気を吸い込んでくれない。

全身が自分じゃないみたいに逆らう。彼に言われたように、素直に従ったほうが身のためだ。

命を捨てることはない。立派な剣士になれば、姉に顔向けできる。白式に相応しいパイロットになれる。

ならばいいのではないか。

半ば挫けそうな意志に、一夏はぼんやりと浸っていた。

『それでいいのか?』。

不意に聞こえた声に、違うと無意識に反応した。

「俺はー」

ハイネの驚いた顔が見える。何を驚いているのか、ただの圧力ならば跳ね返せる。物理的な攻撃でないならば、身体能力の差なんてありはしない。

人間の精神は、可能性の神を住まわせるほどに強い。

だから、実力差なんて覆せる。

「俺は、騎士になりたいんです」

全身が痛い中、一夏は立ち上がる。ボロボロになった白式は、崩れ落ちるように装甲を落としながらも、内部構造は一夏を支え続ける。

「俺は、シンみたいな、皆を護れる騎士になりたい」

決意を込めるように雪片を構え、真っ直ぐに突き出した。

そして、視界は暗転した。

マジか、とハイネは心の中で呟いた。

ただの素人、最近になってISに触れたただの高校生だ。シンが特訓したとはいえ、ただの学生ではないのか。

それが跳ねのけた。自分の殺意を込めた圧迫を。

かなり本気だった。その証拠に、周りにいる誰もが動けずにいる。篠ノ之・箒、更識・簪は地面にうずくまって震えている。

凰・鈴音は地面に座り込んで、こちらを見ようとしないうら。ラウラ・ボーディビツヒは辛うじて立ってはいるが、震えて顔面蒼白だ。

シャルロットとセシリア・オルコットは気丈にもこちらを見ているが、両手を下げられたまま。

織斑・千冬でさえ身構えてはいるが、顔色が悪く動けずにいる中。彼は立ち上がって刃を向けてきた。

全身がボロボロでISも大破状態なのに。

彼は立ち上がり、白式はその状態でも織斑・一夏を支え続けた。

「まったく、どいつもこいつも」

まるでマテリアルと保持者ではないか。

譲れないものがあって、それを叶えるために足りない部分を、マテリアルが支えることで、絶対に譲れないものを誰にも奪わせない。

ハインは少しだけ嬉しく思ってしまった。

愚直に自分の願いをかなえるものはいる。周りを犠牲にしてでも、願望を達成する痴れ者はいらる。

けれど、彼のように自分を犠牲にしても、譲れない一線を越えさせない者は少ない。

とても少ないが、それが集まってできたのがジョーカー銀河帝国だ。

誰かの笑顔のために、誰かの平穏のために、自分を犠牲にできる優しい人たちがいる国、その護り手になれたことはハインにとって誇りであり、自分の生き方が間違っていなかった証拠でもあった。

だから、一夏が立ち上がり、白式がそれを支えた姿は、悔しいが負けといえるくらいに素晴らしかった。

「どう思います、ルリさん？」

「さて。彼が騎士になりたいというなら、試してみる価値はありますね」

「そうでしょうか？」

しかし、だ。ハインとしては騎士にしているものかどうか、とても

悩むところだ。

資格とか資質なんて関係ない、才能なんてものも必要ではない。騎士になるためには、とても簡単で、とても難しい一つのことをやり遂げればいいだけだ。

「選択の自由は常に相手にあります。私たちが押し付けていい道理はない。違いますか？」

横にならんだルリが、チラリと見つめてくる。

冷たい瞳に、電子の輝き。その気になれば一万隻の艦艇をたった一人で操作可能なマシン・コンクエスターは、静かに『貴方が決めていい話ではない』と語る。

確かにそうなのだが。

「はあ……どう思います、テラさん？」

「ん、何が？」

「いやいや何があったんですか？」

珍しく笑顔全開で高笑いしそうなテラと、彼の肩に担がれたポロポロのシン・アスカ。

まさか、本当に神々の戦いレベルの訓練をしたのか、と。

「弟子のレベルアップに喜んでいただけだよ。悪いか？」

「いや、悪くはないですけど。あの、それで？」

「俺とルリちゃんは戻るから、ハイネは見届けてくれな」

「は?」

疑問を口にした時にはすでに、ルリとテラの姿は消えていた。

「ちよ……はあ、まったくあの人は」

皇帝とその巫女が自由奔放なのは知っていたのに。役割が終えれば風のように消えてしまうのも知っていたはずなのに。

とても理不尽に感じる自分は、間違っではないだろう。

ハイネはその後、全員に対して精一杯の笑顔を振りまきながら、ポロポロのシンと一夏を医務室へと運ぶのでした。

無様だと言われてもおかしくはないのだろう。

一夏は再び剣道場にて木刀を振るっていた。

白式は大破、修理には一か月かかるらしい。

結果、タツグマツチは棄権するしかなかった。

セシリアはシャルロットと組んでいたし、リンは箒と組んでいた。誰もが一夏は別の人と組むからと考えていたらしく、誰からも誘いはなかったのが少しだけ寂しい。

ラウラと簪が意気投合してタツグ申請したのは、とても驚いたものだが。

「はあ」

白式のおかげで一夏は半日で目が覚めた。

シンは未だに眠っているらしい。よほど疲れたのか、あるいはあのシンを持つてしてもテラ・エーテルには届かないのか。

『ま、師匠だからな。俺でも勝てないさ』とはハイネが語っていたことだが、本当なのだろうか。

確かに強かったことは強かったが、どうにもシンやハイネのほうが圧迫感があつて怖かった印象がある。

テラ・エーテルは幻のようだった。そこにいるのに、何処か遠くにいるように背中が見えなかった。

シンの背中はというと、まるで走り去つて行くように置いて行かれないように必死になるしかない。

ハイネはというと、まるで山のように目の前を塞いでくる。追いつくことはできても決して乗り越えることはできない、そんな錯覚をしてしまう。

では、あの人は。

「今日も一人かね？」

「あ、はい」

聞き覚えのある声に、一夏は自然と振り返った。

あの時と同じ金髪の青年が、道場に一礼して入ってくる。

「体中が痛そうだが、何かあったのかな？」

「ちよつととても強い人に稽古をつけてもらいましたから」

「そうか、それは貴重な体験をしたものだ。強者との一戦は、百万の訓練に勝るともいう。どうかな？」

そつと彼は木刀を取り出した。先ほどまで左手に何か持っていたのは、木刀だったのか。

「お願いします」

自然と一礼して一夏は、木刀の先端を合わせた。

カンつと音がして木刀が弾かれる。流れる力に逆らうことなく、円を描くように鋭く相手の足元を狙う。

それに対して、相手の刃は縦の円を描きながら一夏の木刀を弾いた。そのまま青年の体が前に刃を彼の後ろへ。

無防備なままこちらに体を向けてくる青年に、一夏はチャンスだと弾かれた木刀をはね上げる。

「落第点だな」

はね上げた木刀は、相手の足で固定されていた。

しまったと考える前に、相手の木刀が鋭く動いて頭の上で止まる。最初から最後まで見事な円運動だった。全身を使うことによつて、

刀本来の『引いて斬る』が全方位に向けて行えるように見えた。

「どうかな？ 見えただろうか？」

「はい。ああいう動きをすれば後ろにも対応できるんですね」

「さて、それはどうかな。相手に向けて体を預けるのは、『倒してくれ』と言っているようなものだ」

「けれど、相手の武器を封じ込めることができれば、隙に打ち込んだ相手の隙をつけるんですよね？」

挑発するような青年の言葉に対して、自分なりの答えを口にする
と、彼は小さく微笑んだ。

「及第点をやろう、見事な回答だ」

「ありがとうございます」

「しかし、だ。それも相手の動き見切れる眼を持たなければ意味がな

い。より相手の動きを観察し、予想し、乗せて見せるか、だが」
青年は言葉を止めて一夏の全身を見つめる。

観察されているようで居心地が悪いが、じっと我慢して待つ。

「君は生真面目過ぎるようだ。それでは少し意地悪な相手だと苦勞する」

「意地悪ですか？」

「駆け引きというのは、ひねくれた者が勝つ。常識だな」

「貴方は？」

思わずといった感じで問いかけた一夏に、彼は高らかに笑った。

「私はとても意地悪だ。仲間からは『底意地が悪い』とはよく言われたが」

「とてもそうは見えませんか」

好青年で優しいと見えるのに、誰がそんな悪口を言ったのか。

疑問を浮かべる一夏に対して、彼は嘆息交じりに告げる。

「本当に君は生真面目だな。二度しか会ったことがない私のことを、そんなに信用してどうするつもりだ？」

「二度でも、剣を合わせれば解りますよ。それに意地悪な人は、こんなに優しく教えてはくれません」

自分なりの答えを口にしてみれば、相手は少しだけ口を開けて驚いた様子を示した後、さらに大声で笑った。

「確かにそうだが。君はもう少し人を疑った方がいい。それでは苦勞するぞ」

「人を騙して樂をするくらいなら、人に騙されてでも苦勞した方がいいですよ」

誰かを傷つけるくらいなら、自分が傷つく。一夏は本心からそう思っただけだが、相手は何処か『懐かしくて呆れた様子』を見せた。

「なるほど。君は『馬鹿』だな」

「それは違うと思いますよ」

「違わないな。私の知っている大馬鹿とその弟子によく似ている。さて、続けようか？」

「はい、お願いします」

真つ直ぐに向けられた木刀に、一夏は再び自分の木刀を合わせる。彼の稽古は、とても心地がいい。熱心に語りかけ、問題点を解説してくれる。

シンのように鮮烈にされることはなく、ハイネのように容赦なくされることはない。

例えるならば、彼の背中とは。

一歩か二歩ほど前であつて、自分が前に進むとその度に一歩ずつ離れていくような。知らず知らずのうちに、追いかけていくうちに、自然と自分が強くなっていく。

そんな背中だった。

「さて、そろそろおしまいにしよう。私にも予定があるのでね」

「はい、すみません」

もうそんな時間か。一夏は時計を振り返るが、確かにかなりの時間がたっていた。それにしても自分は立っていられるが。

「体力もついたようだ。この様子だと、いずれ私に届くかもしれないな」

「まさか、貴方はまだ手加減していませんから」

「ほう、私の実力が解るかね？ それならば君は大したものだ」

「はい。俺は騎士になりますから」

真つ直ぐに相手を見つめ決意を告げる。

彼はハイネのように否定するか、それとも。

「そうか。君も騎士になりたいか」

安堵したような、けれどとても悲しそうに彼は告げた。

「茨の道ではない、地獄に行くようなものだが、それでも行くかね？」

「はい。俺は俺の意思でそこを目指します。例え、誰かを殺すことになっても」

「恨まれることは確実だ。世界中を敵に回すかもしれない」

彼は心配して言ってくれている。とても優しい人なのだろう。

だからこそ、一夏は僅かでも決意が揺らがないことを示す。

「恨みも罪も罰も、すべて背負って俺は騎士の道を歩きます。あのシ

ンのように」

「そうか……ならば私から言えることはない。行きたまえ、君が望み願うままに」

「はいー!」

いい返事だ、そう答えて青年は歩き出す。

道場の入口へ。

そこに人影が見えた。誰かと目を凝らせば、シンが立っていた。

「あ、そうだ。貴方の名前は？」

「私か？ 私は、ラウ・ル・クルーゼだ」

青年は晴れやかに笑い、歩いていく。

彼はシン・アスカを見つめた。

「私がいるのが不思議かね？」

「いいえ。一夏から話を聞いた時、貴方だって思いました」

「そうか」

「ありがとうございます。俺じゃ、一夏の『刀』をあんなに磨けなかった」

少し悔しそうに告げる彼に、『苦笑』を返す。

「今の私は反逆者だ。礼を言うとは、錆びついたか、シン・アスカ？」

挑発に対して、彼は静かにこちらを見つめてきた。

「錆びついていました。貴方に前に会った時の俺は、騎士じゃなかった」

だから、と言葉を止めて見つめた彼の瞳は『炎と氷』が宿っていた。

「だから次の時には、俺が貴方を殺します、ラウ・ル・クルーゼ」

「そうか」

彼が戻ったようだ。前に会った時のような、圧倒的な鬼神が。

あのテラ・エーテルが、『自分を殺せる騎士を育てた』と楽しそうに

語っていたシン・アスカが、ここにいる。

最高の気分だ。遙かな高みに、騎士の頂点に。

天を落とせる者へとなるために。

「楽しみにしている、『凍焰の鬼神』」

「ええ、いずれ死合しましょう、『絢爛なる守護者』」

言葉をぶつけ、二人はすれ違った。

願いのために・6

学内トーナメント開催。個人戦からタッグマッチになったとはいえ、学生にとつては自分の将来に直接かかわってくるもの。

企業やあるいは国家に示す、自分達の実力がどれほど魅力的であるかを。

例年通りならば大歓声で迎えられる場所には、僅かな落胆が流れていた。

今年の大目玉、男性唯一の適合者『織斑・一夏』の不在。

盛り上がってはいる。スカウトマンたちは真剣な目で生徒達を見ている、生徒達も取り上げられようと躍起になっている。

しかし、だ。誰もが目的としていた人物の欠落は、盛り上がりを一レベルに抑えつけてしまっている。

とはいえ、だ。

「気にしていると思っていたが」

織斑・千冬は弟の評価を改めていた。

自分の不甲斐無さを嘆いているのか、あるいは無力さを呪っているのか、そんなことを考えていた彼女の視界に、一夏は別の姿として映っていた。

真剣に、瞬きさえ忘れたように試合を見ている。

一瞬も見逃さない、一動作さえ記憶してやる。知識をひたすら増やして、自分の技量を上げようと必死になっている彼からは、後ろめたい感情は欠片さえ見られなかった。

最初の頃の何処か他人ごとのような、巻き込まれただけといった姿勢だった彼は、自分から進んで技術を身につけようとしていた。

いい傾向だ。知らずに微笑みながら、千冬は弟から視線を外し、試合へと戻した。

大歓声が沸き上がる中、一夏と同じくシン・アスカに教えを受けた生徒達が踊っていた。

人々の声が聞こえる。

誰もが喜び、心の底から声を出して生を謳歌する毎日。苦しみも悲しみもない平穏な日々は、昔から誰もが願っていたこと。

願っていたながら、叶ったことは一度もない理想。

「人が語るには分不相応な夢物語とは、よく言ったものだ」

アリーナの天井の淵に立ち、眼下に見下ろすのは年若い夢追い人たちの円舞。

未来を夢見て、世界の広さを信じながら、何処までも高く何処までも遠くへ、何でもできると心の底から信じている彼女たちの姿は、とても眩しいものに見えてくる。

かつての自分を見ているようで、少しだけ気恥ずかしい気がするが。

「さて」

ラウ・ル・クルーゼは、ゆっくりと振り返る。

「いい頃合いだろうか、シン？」

「はい」

彼は、気負うこともなく自然体でそこに立っていた。

感情は揺らぐことなく、全身に廻る力も偏りが無い。凄味などないはずなのに、だ。今の彼は最初に会った時よりも、遥かに強大に感じられる。

「私を倒す覚悟はできたようだが、倒される覚悟はできたのかね？」

挑発を一つ置いてみる。これで彼がどのような覚悟を持っているか、おおよその推察が出来るはずだが。

「クルーゼさん、言葉は俺達『騎士』に必要ですか？」

「ほう」

挑発に対して彼は感情を揺らがすことなく、向かってくる。一歩一

歩と、鋼のような精神を持って。

「そうだな、シン・アスカ」

右手を握りこむ。背後にフオリアナの気配が浮かぶが、相手の背後にも同じような気配が浮かんでいる。

いい師匠に巡り合えたか、いやこの短期間で『ティス』があれほど成長したということは。

「会ったのか、『マリア』に」

始まりの女性。すべてのマテリアルの原点、『スノーホワイト・エンパイア』の自意識。

彼女が手を貸したというならば、計画は予定通りに進んだというわけだ。

心からの感謝を。ラウ・ル・クルーゼは心のうちで、そう呟く。

間違いなく、彼女達は『機神』だった。誰もが解らない『機会』を伝えるための神経。彼女達の存在があったからこそ、自分はここまで来れた。

ようやく叶うということか。

クルーゼは内心で安堵しながらも、魂の内から震えが来るのを感じた。怖さではない、慄くのではない。

ただ純粹に、騎士としての喜び。強い相手と戦えることに対して、単純に嬉しいと思っている自分に、彼は小さく苦笑した。

まさか、この期に及んでこんなにも単純な感情を持っていたとは。

「行くぞシン・アスカ！」

「ああ！ ラウ・ル・クルーゼ！」

自己分析などもうどうでもいい。計画は最終段階、残すは自分が相手より強いかわるかのみだ。

剣を引き抜く。

七色の輝きを灯す刃を持つ、双剣。柄頭で二つの剣が繋がった『それ』をクルーゼは迷うことなく引き抜く。

対してシン・アスカもそれを自然と手に持っていた。

『天壤無窮』。シン・アスカの神剣。その効果は、永遠不滅。不変なるものとして彼の認識したものを固定化させる。

「まるで合わせ鏡だ」

彼が望んだものが永遠に変わらないものならば、自分はただ自然であることを望んだ。自然のままに変化し、生きていくことを。

『天衣無縫』。

それがラウ・ル・クルーゼの神剣の名前。効果は絶大なものではなく、ただ緩慢なもの。

種から芽が出て、茎が育ち、華が咲くように。自然をありのまま感じるように、『異常なものを取り除く』。

「チ!!」

シンが距離を開ける。

「君は知らなかったようだな。私の『神剣』の能力を」

「ええ。『奇抜なものじゃない』って話は聞いてましたけど、絶大なものじゃないですか」

「そうでもないさ。ただ、自然のままに」

後付けされたものを取り除く、たったそれだけの能力はマテリアルの一定に保つ能力も、シンの神剣の能力も『自然ではないもの』として取り除く。

「君の『神剣』では私の『神剣』の能力値を上回れない。どうするね?」
「決まっているでしょう?!」

後退、ではなく前進。一気に距離を詰めたシンの刃が、クルーゼに迫る。

一歩だけ下がり刃を回避したが、そこへ再びシンの剣が跳ね上がり追撃。

自分の神剣を間に入れ、力を受け流すように利用する。剣を回転させて、双剣の利点を利用して剣をシンへ向けた。

これも彼は回避。踏み込んだ勢いそのまま過ぎ去ることで回転した刃よりも速く走り抜けた。

「見事だ!」

迫る刃に竦むことなく、前に前にと突き進む彼の判断力と決断力は、以前よりも磨かれているようだ。

「貴方に褒められて光栄ですよ!」

右手に『天壤無窮』を持ったまま、シンは左手に『ウロボロス』を引き抜いた。後付けの能力を除去する領域の中では、『ウロボロス』はただの剣になり下がるのだが。

けれど、だ。その強度はかなりの強さを誇る。伊達に『ジョーカー』銀河帝国でも十三本しか製造されていない』わけではない。

それ以上、製造できなかつただけだ。

二度、三度と剣がぶつかる。お互いの命を削り合いながら、ただ相手を食らうための剣が踊る。

学生たちの円舞ではない、自分達がやっていることはただの殺し合い。称賛も栄光もない、ただの下劣な化かし合い。

カッコイイものじゃない、自分達―騎士の戦いとは忌避されるべきものであるべきだ。

人が人を殺すことを美化してはいけない、命とは尊いものであるべきだ。

矛盾した考えを抱きながらも、騎士はここにある。軍人とは違う、自分の意思と覚悟を持って、禁忌を犯す者達。

「楽しそうだな、シン・アスカ!!」

「ええ!! 俺はここまで強くなれた! もっと前に! もっと先に行きたいと願っていますから!」

「そうだ! 我々は前に行く、何処までも前に!」

剣同士が弾かれた。特別な力を纏わない、ただの金属の塊。けれど、その内部には膨大な力がせめぎ合っている。

意思を吸って形となった神剣二つ、それに食らいつくような無限の欲望を体現とした剣が一つ。

三つの存在が、騎士の意思を声高に叫ぶ。

相手を倒し、自分の主をさらなる高みへ。何処までも強く、何処までも高く、誰も追いつけない領域まで連れて行くために。

試合の合間、一夏は水分を取るためにアリーナの脇にある自動販売機の前にいた。

「……俺に用事か？」

声をかけると、角のところから一人の女性が出てきた。

「ずつとつけていたけど、何の用だ？」

顔を向けながら、一夏は妙な違和感を覚えた。何処か懐かしいような、けれど始めてのようだな。

「おまえは強いようだな」

「何の話だ？」

相手の話が見えない。サングラスをした、中学生より上という少女。知らないはずなのに、自分の『感』が知っていると告げている。

「私とどちらが強いか、比べてみるか？」

「何を……」

瞬間、一夏は目を見張った。

少女がサングラスを外して見せた顔、それは『昔からよく見ていた顔』だったから。

「どうした？」

「ち……ふゆ姉？」

「さてな」

瞬間、彼女の体はISを纏っていた。

反射的に一夏も白式を呼び出そうとして、体が固まる。今の自分は、白式を持っていない。修理に出したままで、予備機さえ持っていないことに、今頃になって気づいた。

「どうした?!」

半ば反射的だった。一夏は咄嗟に持っていたジュースを投げつける。

ISに対して意味のない行動、相手は無造作に手に持った槍のような武装で斬りつけるが、中身が飛び散り視界を塞ぐ。

チャンスは一回。教えられたが一度も成功したことがない、白打の一撃。踏みしめた足から伝わる衝撃を腰の回転で増幅して、右手の一

撃に上乘せして相手に叩きこむ。

ある世界では、それは『通背拳』と呼ばれていた秘儀は、見事に決まった。

初成功、普通ならば喜ぶことなのだろうが。

「なんだこれは？」

未熟過ぎた。一夏の一撃はISの防御の前に消え去り、衝撃が相手を貫くことはない。

シンならば、今の一撃で確実に相手の『絶対防御』さえ貫通して気絶させられるのに。

技量の差、訓練時間の差が明確に技の完成度として現れる。剣を主に一夏は使っていたから、『こういった技術がある』程度に教えていたものは、いきなり実戦で使用できるレベルではなかった。

「甘いな」

「解ってるさー！」

自分の未熟さは解っている。他の誰かに言われるでもなく、一夏自身がよく解っているから。

相手の攻撃が来る。主兵装は槍か、他のパーツから何かしらの攻撃ユニットは考えるべきだ。ISだから呼び出しているの武装追加もあり得る。

一方、自分はどうと。一夏は手持ちで武器になりそうなものを考え、IS相手では力不足だと切り捨てる。

ならば撃ちあい不可。相手の攻撃の先を読み、威力の範囲を推察して、ひたすらに回避するべきだ。

爆発などが起きれば誰かが連絡して、応援が来てくれるはずだから。

「味方の到着を待つのか、おまえは弱いな」

「俺自身が弱いことはおまえに言われなくてもよく知っている。好きに言えばいい」

「そうか、なら一つだけ教えてやろう。『私だけだと思おうか？』」

「・・・チ！」

足裏に伝わる振動に、一夏は小さく舌打ちした。きつと襲撃者は他

にいる。自分だけじゃなく、このIS学園すべてに。

シャルロット達が負けることは、ないだろう。相手が国家代表クラスでもない限り、シン・アスカに鍛えられた彼女たちが負けることはない。

しかし、だ。救助は絶望的になった。応援が来るまで持ちこたえるつもりでいたが、こうなってくると何時になるか解らない。

せめて武器があれば。

心の底から切に願う。手持ちの何かがあれば、時間稼ぎだけではなく相手に対しての有効打になるはずなのに。

IS用の武装を使ってみるか、アリーナの近くの整備室にあるはずだが、自分に使えるだろうか。

姉は使っていた、という話を聞いたことがある。生身でIS用の武装が使えるなんてと、聞いた当初は感じていたのだが。

姉に出来て、弟に出来ない道理はない。

「やってみるか」

「何か悪あがきでもするのか？ いいだろう、やってみろ！」

相手のISからパーツが外れた、視界にそれが映った瞬間に、一夏は大きく横に跳んでいた。

「それはセシリアの?!」

「使い勝手がいいぞ！ こいつは二号機だからな！」

「嘘だろ！」

イギリスが何かしたのか、それとも奪われたのか。

思考がぐるぐると廻る中、一夏は体の動きを止めずに走りまわる。ビットの攻撃はレーザーが主体。ミサイルのように曲線は描かないから、射線に注意すれば回避できるが。

「甘いな！」

フレキシブル。僅かなレーザーの動きに、一夏は合わせる。曲線となって迫るレーザーをギリギリで回避し、誘い込むようなミサイルの中へと飛び込んでいった。

安全距離があるうちは爆発しない、もししたとしても爆風を利用して距離が稼げる。

冷静に考える一夏の背中ではミサイルが爆発。背中に痛みと熱気が走るのだが、無理やりに抑え込んで走り抜けた。

「しづといネズミが!!」

「知らないのか?! ネズミっていうのは元々がしづといんだよー!」
負け惜しみに叫んで置きながら、一夏は廊下を走り抜けていく。

三者三様に戦闘があり、とか。

「おいおい」

ハイネは小さく嘆息しながら、周りを埋め尽くす勢いで増殖する物体を見つめた。

『ブルーマ』だったか。確か、天使の名前を持つMAが支配下に置く無人機体。人間相手に殺戮するためのみに開発されたもので、地球連邦政府が『バグ』などと一緒に使用してははずだが。

無人機なのをいいことに、勝手に増産させていた結果、制御できずに廃棄処分したはずなのだが。

「あいつら、爆破じゃなく『強制転移』で破棄したな」

甘い管理体制の果てに破棄方法まで杜撰とは。あの馬鹿組織はやはり、話し合いでの対抗ではなく、武力によっての殲滅戦を行うべきではないだろうか。

「自分達が制御できない兵器は、必ず破壊して周辺への被害を考慮するべき。確かに帝国軍は、その点においては容赦ないからなあ」

グラビティ・カノンの目標、新型空間爆裂弾の目標、ベクターキャノンに目標。等等と、新型兵器の目標には、却下された兵器や兵装が当てられることが多いのだが。

「本当、うちの『馬鹿げた形式』も良心的なところもあるんだな。いや、異世界でこういったことを学べるなんて、俺はかなりラッキーじゃな

いか？」

一人、ハイネは無理やりに自分を納得させるために話をしていた。周囲には誰もいない、すでにアリーナにいた学生たちの避難は完了。『プルーマ』はアリーナだけに出ているらしいので、母機もここにいるのだろう。

「お、いたな。おいおい、なんでよりによって『ハシユマル』タイプなんだ？」

無尽蔵に増える『プルーマ』の中心地、鳥型の機械を見つけたハイネは、一気にやる気がそがれた。

強力な機体なのは認める。メガ粒子砲標準装備とか、連射可能とか、拠点攻撃には有効な兵器だ。

防御も素晴らしい、通常のビーム兵器はほぼ通さない。ナノラミネート・アーマーの対光学兵器の性能は、実証済みで体験済みだ。しかし、だ。それも三年前の話。

キチガイの変態馬鹿の集まりの技術局曰く、『一年前の最新技術は、現在においては過去の遺物と同じ』。

明言だとハイネはつくづく思う。かつては無敗や不敗、堅牢を誇っていた防御であって、現在戦においては少し硬い程度でしかない。

「ハイネさん!!」

背後からの呼びかけに彼は振り返って軽やかに手を振った。

「そっちは大丈夫そうだな」

「はい！ 敵が来て……」

「そうだな」

瞬間、シャルロットは彼についての説明を思い出すことになる。

シン・アスカはハイネ・ヴェステンフルスに勝てたことがない。

一閃、ハイネの右手から何かが伸びたと知覚した瞬間に、無数にいた『プルーマ』とハシユマルは砕け散っていた。

「後である変態どもに礼を言っておくべきか。いや、なんでよりによってヒート・ウィップに『ナノラミネート加工』したのかを問い詰めるべきか」

周りの誰もが怖さを感じている中、ハイネは深く悩んでいた。

結論として、ハイネはやはり殴っておこうと決めたらしい。

各地での衝撃に、シンは気づいていた。

「あちらも何やら始めたようだが、いいのかね？」

叩きつけられる剣に対して、シンはウロボロスを添わせるように突き出して威力を受け流し、反対に『天壤無窮』を突き出す。

刃が届く、寸前でクルーゼの『天衣無縫』が弾いてきた。

上下に剣があるなんて、扱いづらいと思っていたのだが。攻めてよし、守って良しの攻防一体の剣。

加えて相手の技量は自分よりはるかに高い。戦い方の組み立て方、立ち位置の取り方、相手との距離の詰め方。色々と勉強になるばかりだ。

さらに心理戦まで仕掛けてくるとか、相手の実力の底が知れなくて少しだけ怖くなる。

「あつちはハイネがいますから」

剣を構えなおすために距離を開ける。両手に剣を持って戦うスタイルは、元々はテラが―師匠が得意としていたもので、シンも自然と扱えるようになったのだが。

まだまだ『扱っている』だけで、熟練しているわけじゃない。両手を同時に動かしてしまい、そこをクルーゼにつけ入れられている。

「ハイネか。なるほど。ではアリーナは安心できるが、一人だけ別行動がいるようだが？」

一夏のことか。咄嗟に思いついた可能性に、シンは小さく笑ってしまった。

「何かおかしかったかな？」

「ええ。貴方も知っているでしょう？ あいつは単独で動いたくらい

でやられるような、そんな弱い奴じゃない」

「ふむ、確かに。だが、彼は今はISを持つていないが」

通常ならば、と前置きがつく話だ。ISを、白式を持つている織班・一夏ならばどのような相手でも勝てることはないが、負けることもない。勝てない相手と相対していたら、増援が来るまで持ちこたえるか、それか一撃入れての退避を選べるはずだ。

「確かに、今のあいつはISを持つていない。でも、クルーゼさん」
シンは不安を欠片も感じていない。

確かにISは機械だ。まだまだ未熟な武器かもしれない。

「ISって『マテリアル』に似ていませんか？」

「ほう、そうかね？ 『マテリアル』ほどの異常性は感じないが」

「俺は感じますよ。あいつらは『マテリアル』みたいに、所持者に対して独占欲がありますから」

誰にも触れさせないように、誰にも傷つけさせないように。『マテリアル』に似たような、『絶対に渡さない』という意味がISにはある。開発者の束も気づかなかった、毒のように触れたら体の隅々まで侵食するような、深い愛情。

「なるほど。しかし、すべてではないだろうか？」

「はい、すべてではないです。でも、一夏の白式にはある。知っていますか？ あいつのISコア、前は違う機体に搭載されていたそうです」

束から話を聞いた時、思わず笑ってしまった。

奇妙な縁だ。よりによって、その名前の機体に搭載されていたのか、と。

「ふむ、何と言う機体かね？」

「『白騎士』だそうですよ」

出された名前に、マスク越しでもクルーゼの目が細められたのが解った。

『ジョーカー銀河帝国』において、『白』の名前を冠する機体は多くはない。その中でも騎士の名を共に呼ばれる機体は一つだけ。

『白騎士』、あるいは『白銀の女神』と称えられる機体。

「なるほど、奇妙な縁だということか」
「ええ」

戦闘の最中だというのに、二人して笑ってしまった。

『白騎士』と呼ばれる機体は、ジョーカー銀河帝国軍における旗艦。

『白夜の支配者』の異名を持つ、最古の『マテリアル』にして『皇帝専用機』。

即ち、『スノーホワイト・エンパイア』。

増援は望めない。他での戦闘音は嫌でも耳に来る。武器もとることができずに、一夏は床を転がっていく。

助けたいのに、動けない。

必死に伸ばす幼子の手は、『現実世界』に届くことなく壁に阻まれる。

嫌だと泣き叫んでも、どうしてもと嘆いても体は動かない。

『白式があれば、負けない』。一夏の、主の声が空間に木霊する。先ほどから聞こえてくる声に、小さな女の子は泣き続けていた。

彼女の背後にいる騎士も、無力さをかみしめながら剣に手をかけたまま動けずにいる。

『助けたいのに、助けたいから』

必死に両手を伸ばしても、一夏の手に触れられない。あんなに傍にいて、あんなに一緒に頑張っていたのに、重要な場面で自分は主の傍にいられない。

『誰か、助けてよ』

小さくこぼした言葉に、反応なんてないはずなのに。

『助けるのは、貴方の役目でしょう？』

声が下りてきた。少女が顔を上げた先に、一人の女性がいた。

腰より長い藤色の髪に、金色の瞳の二十歳くらいの女性。白ワンピースを纏った彼女は、穏やかに微笑んでいた。

『主の危機を感じたなら、貴方が行きなさい。主を助けたいなら、貴方が行くべきです』

『でも！ 私には動けないの！ 私の体は動かせないの！』

無理だ、自分は機械なのだから、一人で動くことはないから。

『いいえ。貴方はできます。ほら立って、そして主の呼び声に答えなさい』

優しく穏やかに語る女性に促され、彼女は全力で手を伸ばした。誰でもいいわけじゃない、空間も法則もこの手を邪魔させない。誰にも触れさせないんてしない。唯一、この手に触れることができるのは、一人だけ。

だからこそ、だ。

一夏は何度目か、地面を転がって壁に激突して止まった。

体中が痛い、目が霞む。けれど、彼は諦めずに敵を見据える。

『よくできました。それでこそ、シン・アスカに教えを受けた者です』
誰かの声がした、聞き覚えのない声、けれど何故か知っている気配の。

『呼びなさい、若き騎士。貴方の『剣』が貴方の呼びかけを待っていますよ』

何を、と思うことはなかった。

呼べと呼ばれるなら何度でも。無謀でも無茶でも、何回だって呼んでやる。

「来い」

小さな呟きは、何故か大きく周囲に響いた。

「狂ったか。おまえのISはここには……」

「来い……来いよ!! 『白式』!!」

一瞬、相手の馬鹿にしたような顔が見えた。そして、その顔が驚愕に染まるのも。

「何をした？ おまえは何をした?！」

叫ぶ相手に対して、『痛みがすべて消えた体』で一夏は答える。

「俺の『剣』を引き抜いただけだ」

真っ直ぐに雪片の切っ先を向けながら、織斑・一夏は地面を蹴った。

願いのために・7

『デステイニー出陣』

誰もが逃れられないもの。誰もがそれに従ってしまうこと。見えないからこそ、人は言い訳に『それ』を使う。

仕方がないから、どうしようもないから。奇跡でも起きなければ覆せないから。

人は生まれたときから決められた人生を歩くしかない。チャンスを得たとしても、それを生かせるかは最初から決まっていると。

人はレールの上を走る電車のように。外れることなく、目的地は決まっているから、無理だと諦めて。

でも、諦めきれないからこそ前に進む。絶対に譲れないからこそ、人は昔から奇跡を起こしてきた。

だからこそ、自分も負けない。

『運命』って奴に負けることはない。

決して抗えないものだとしても、自分から膝を折って屈することはしない。

デステイニーを与えられた自分が、運命ってやつに屈してしまったら。

誰もが決められた道を歩いていくしかないのだから。

一閃が壁を切り裂く。先ほどまで追いつめていた者が、今度は逃げるしかないのは皮肉だろうか。

「貴様ああ!!」

「遅い」

レーザーはすでに何度も斬られた。まるで気負うことなく、右手の『雪片』で光学兵器を斬る様に、彼女―Mと呼ばれた少女は寒気を感じていた。

素人だったはずだ。何も知らない一般人、自分と違って姉の元で穏やかに過ごしていただけの、苦労していない愚か者。

武器など扱ったことはない。剣道をやっていたが、やめてしまった家事をしていただけの、ごく普通の学生だったはずの相手が。

今はとても怖い何かに見える。

「何をした?!」

「何度も言わせるな」

言葉の途中で彼が消える。瞬時加速とも違う、意識の間をつくように体を素早く動かし、瞬時に間合いを詰める。

確か一流の剣豪は、こういつた動きが得意だったか。一呼吸で刀の間合いに詰める歩法、縮地と呼ばれる歩き方だったはずだが。

「なんでISで使える?!」

「教えるわけないだろうが」

気づいた時には右手の槍が根元から斬られていた。

ゆっくりと空中に舞い上がる槍に、知らずのうちに視線を向けてしまつて、自分の失敗に気づく。

「沈め」

短い言葉に圧倒的な圧迫感。殺気ではなく、ただ純粹に『倒す』という意思のみの一撃が、右肩を斬った。

絶対防衛発動、エネルギーがごっそりと持って行かれる。

零落白夜だ。当たる瞬間のみの瞬間的な発動は、織斑・一夏の白式のエネルギーを最低限に、反比例するようにこちらのエネルギーを消費させる。

まるで動きが違う。前の試合までの動きは見ていたはずなのに、まるで別人のように鋭く細く正確に一撃を与えてくる。

白式も変わったわけじゃない。見た目は最初の時と少しも変わっていない、だというのに動きはまるで別機体だ。

何が違う、どう違う。相手は欠陥機体。篠ノ之・束が関わっていた

としても、開発途中で破棄されたのではなかったのか。

対してこちらはイギリスの最新鋭機、それを改造した国家代表のISさえも凌駕するISだ。自分の技量も彼に劣るものではないと確信していた。

はずなのに。

「おまえはどうしてそこまで強くなれた?!」

「俺が強い? 何を勘違いしているんだ?」

一夏が止まる。足を止めて、ゆっくりと刀を振りかぶる。

上段の構え、あの動きから繰り出されるのは真っ直ぐな一撃のみだ。回避は容易いと思えるのに、何故か自分の全身が叫んでいる。

『無理だ』と。

「俺はまだ弱い。セシリアやシャルロットに届かない。ハイネさんに、あのテラって人にさえ」

ゆっくりと一夏が息を吸う。吸い込んだものを全身に巡らせるように止めて、彼は動きだした。

「シンに届かない俺が、強いわけないだろう?」

振り下ろされた一撃は、真っ直ぐにMの全身を斬った。絶対防御が再び発動、エネルギーはほとんど持っていかれた。

今、彼は何をしようか。距離は開いていたはずなのに、零落白夜が届いたのは何故か。

「何処を見ているんだ?」

声は自分の背後から、振り下ろした刃を持ち上げながら、一夏が振り返る。

何時からそこに、さつきまで自分の前にいたのに。

「本当に、遅いな、おまえ」

横薙ぎの一閃は朝焼けのように彼女の視界に差し込んだ。

崩れ落ちる彼女のISが解除されたことを確認して、一夏はホッと息を吐いた。

感覚が妙に鋭く、全身の痛みはなく絶好調より調子がいい。今ならばどんなことでも出来る高揚感が、気分を上げていく。

「シンは？」

顔を上げる先、アリーナの屋根の上に閃光が閃く。

誰かと戦っている。今なら加勢出来るのでは。

一夏は左手を握ったり開いたりした後、舞いあがった。手助けはしてやれるはずだ。今の自分は決してシンの足手まといになるような存在ではない。

届かなくとも、背中くらいは見える。

「シンー！」

アリーナの天井まで舞いあがった一夏は、反射的に声をかけた。

相手の姿を探し、言葉を発した後に気づく。

剣のぶつかる音、アリーナの天井が砕ける様子、二人の姿は見えない。それでも激しい戦闘の様子がそこにあつた。

「なんだよ、これ！」

速い、それだけじゃなく重い。一撃一撃を軽くした速さじゃない、一撃一撃を必殺にしながらも、速度を落とさない光速戦闘。

生身でこれほどまでの動きが出来るのか、あのシンがそこまでしなければならぬ相手か。

「一夏?! 何で来た?!」

フツとシンの姿が見える。右手に見たことない剣と、左手には『ウロボロス』といわれる剣を持った二刀流。

「ほう、あの少女を倒したか。実力は彼女のほうが上のはずだが？」

「えっ？」

シンの前方に出現した相手に、一夏は言葉を失った。

何故、貴方がそこにいる。どうして、シンと戦っている。疑問がいくらでもあるのに、言葉にできずに霧散してしまう。

「あ、あの」

「ふむ、戦場で気を散らせるのは命取りだ。織斑・一夏、最後の教えは何とも締まらないものになってしまったか」

「やあ、元気だったかな。そんな気軽な口調で告げられた言葉を、一夏は理解できずにいた。」

「避けるー!」

シンの叫びに、反射的に動けたのは偶然だった。半ば条件反射で、シンの言ったことに従う体になっていたからか、それとも白式が意地でも見せたか。

とにかくだ、一夏自身が反応したわけじゃなく、彼の一撃を避けられた。

「見事だ。しかし、機体に頼り切った動きでしかない」

「なんで?!」

「逃げろ一夏! おまえの勝てる相手じゃない!」

鋭く振り返る背中に、シンの叫び声突き刺さる。

解っている、自分じゃ相手にならないことくらい。逃げなくちゃいけないことは解るのに、心は『立ち向かえ』と言ってくる。

「貴方は?! 最初から俺を騙していたのか?!」

「騙したとは人聞きが悪い。最初から私は敵だったただけだ」

「じゃ、俺に教えてくれたのは?!」

質問に答えはなかった。彼の目線が自分以外に向けられ、その先にいるのはシンだった。

相手にしてもらえない、眼中にない。言葉以上に明確に叩きつけられた意味に、一夏は全身が沸騰するような錯覚を感じた。

「無視するなあああああ!!」

「よせー。チ!!」

視界の隅でシンが動きを止めた。その彼の前のアリーナの天井が砕け散り、漆黒の何かよく見たことがある物体が現れた。

一夏にはそう見えていたが、感覚が無視する。今はこいつを、自分を騙したようなこいつが先だ。

「一夏!」

シンの叫びが遠のく。実際に彼の反応がアリーナの下に落ちていったが、気にしていない。

「答えろよ！ 俺を騙してシンを誘い出したのか?！」

「騙してはいないが。君を餌にしたわけでもない」

「じゃあ何で?!」

「何故か・・・年甲斐もなく感動してしまっただけだ。直向きに打ち込む君の姿に」

「え?」

穏やかに優しく、口元に笑みを浮かべた仮面の男は語っていた。

「真っ直ぐに強くなろうと努力している少年がいる。利益や欲望などなく、ただ高みを目指して。先達として、そんな青年がいるならば教えるしかなからう?」

悪意に染まったものではなく、暖かい笑みを浮かべた男がいる。きっと、父親がいたならば、自分にこういう風に語りかけてくれたのではないか。

一夏は不意にそんなことを思ってしまった。

「君がシンの関係者だというのはすぐに解った。確かに私はシン・アスカの敵ではある。だがな、努力している人物に教えない理由にはならない。君はいい生徒だった。教えたことを素直に吸収してくれる。言ったことを律義に護る。とても教えがいのある『弟子』だったよ」

「あ、え、あの」

戸惑いが激情を押しつける。今まで抱いていた憎悪が嘘のように消えて、何処かくすぐつたい感情が浮かび上がった。

「やはり君はもう少し用心深くなるべきだ。私が嘘を言っていると思わないのかね?」

「嘘をいう人は、そんなに穏やかに笑いませんよ」

「そうかね? では最後の教えだ。織斑・一夏、敵を前にして躊躇するな」

クルーゼが剣を構えた。両手で構え、体を前に出す。双剣での構えとしては、少しばかり不恰好に見える。

不利にならないだろうかと考えていた一夏は、彼の目線を感じて身

を引き締めた。

最後の教え、最後の一撃。これができるならば、君は騎士になれるだろう。刀を使うものならば、覚えておいて損はない。

言葉では伝わらない想いが、確かに届けられた気がした。

「はい」

気の迷いかもしれない、でも気の所為にはしたくない。だからこそ、一夏は真つ直ぐに雪片を構える。

全身を引き締め、意識を鋭く細くし、最高の一撃を叩きつけるために。

「いい返事だ。行くぞ」

短い合図と同時に、ラウル・クルーゼの姿は一夏の眼前にあった。引き絞る弓が矢を弾きだすように、全身の筋肉を使った円運動。横薙ぎの一閃は左足を軸足に、片手に持った剣を豪快に振り回す。

それに対して、一夏は迷うことなく上段からの一撃を叩きつけた。攻撃は相手のほうが速かった。衝撃が腹から広がり、全身を弾き飛ばす。

「……狼牙一閃」

小さな眩きと同時に、一夏は崩れ落ちた。

シンははつきり言えば焦っていた。一夏が来たことも予想外ならば、あそこまで取り乱したことも予想外だった。

教えを受けていたことは知っていたが、あの最後の自分との会話を聞いていたならば敵だと理解していると思っていた。

きちんと伝えなかった自分のミスか。

「いのー」

黒い影が迫る。右手に一夏が持つ雪片と同じものを構えた、ISら

しい影が攻撃を繰り返して来る。

一撃一撃が重い、だというのに相手の意思が感じられない。

まるで影を相手にしているような、そんな錯覚を覚える。

「テイスー」

『うん！ 過去のデータを一時的に再現しているみたい。えっと、このデータは『織斑・千冬』だって！』

あの人か。道理で攻撃が重いわけだ。恐らく現役時代のデータを使っているのだろう、攻撃が鋭くて重い。相手の意思が介在していないのに、この攻撃力はちよつと驚いてしまう。

下段からはね上げた刃が、すぐに上段から返ってくる。鋭く重く、回避も防御もすべて斬り捨てる。

まるでサムライ。何処か一夏の最大テンション時の攻撃に似ているが、さすがは姉弟か。血筋は争えないとは、こういったものを使うのか。

場違いな考えをしながらも、シンの体は止まらない。

相手は一本、こちらは二本。単純計算でも、その攻撃数は違ってくる。相手の技量が高くとも、意思が載らない攻撃に敗れることなどない。

「このおー」

『天衣無縫』の効果範囲内から出た。『ウロボロス』と『天壤無窮』が僅かに発光してくる。

効果の再動を感じながら、シンはまず左手のウロボロスを叩きつける。相手は雪片で防御したが、それが失敗だ。『ウロボロス』が触れたところから、エネルギーが吸われる。

ギシリと何かが軋む音が聞こえた。出所は相手の雪片だろう、いくら強固な武装でも元はISの武装だ。エネルギーを失ってまで稼働できるわけがない。

「これでー」

最後の一撃は『天壤無窮』。効果はこの場合は意味がないが、相手の装甲を突き破るには『ウロボロス』では『大きすぎる』。

もし『ウロボロス』を突き刺したら、ISのエネルギーだけではな

く相手の生命活動さえも停止させてしまう。

「テイス！」

『よしきた！ 接触回線で相手のISコアの停止完了！ 続いてちよつといじつて彼女を地上に下ろすよ』

バキンと音がして、黒い何かが弾け飛んで、眠っている少女が倒れるように落ちていく。

「大丈夫だよな」

『もちろん、きちんとISのほうにプログラム入れてあるから大丈夫。地上に触れる前にフワリだよ』

「なら、次は」

時間がかかった。いくら相手が織斑・千冬のデータとはいえ、かけた時間はかなり多い。

一夏は大丈夫だろうか。相手はラウル・クルーゼだ。いくら一夏が強くなったとはいえ、かなり分が悪い。

もしかしたら。

最悪の想像をしながら、シンは一気にアリーナの天井まで跳ね上がる。

落ちてきた穴から出た彼が見たのは、ISを解除されながら倒れる一夏と、彼を斬った男の姿だった。

「あ………」

「遅かったな、シン・アスカ。織斑・一夏は、敗れたぞ」

ニヤリと、とても意地の悪い笑顔を浮かべる相手に、シンの中で何が切れる音がした。

「あんたって人はあああつああ!!」

「そうだ来い！ 私は！ おまえの敵はここにいるぞ!!」

「あああああ!!」

意味もなく叫びながら、シンは真っ直ぐにクルーゼに突撃していった。

「甘いなあー！」

彼の背後に気配が浮かぶ。フォリアナがそこにいる、自分の背後はテイスがいる。

遠くにいるわけじゃない、相手のパートナーは一定範囲にいる。

激情に流されるシンの意識の中の一部が、冷静に状況を把握していた。だからこそ、切れるカードがある。

「テイスううう!!!」

『御意！ 我が主シン・アスカ！ 『コード入力！ 『天帝牢獄』!!』』

「そうきたか!!」

瞬間、世界が砕かれた。

テラ・エーテルの一族は、彼らを知る者達から『帝の一族』と呼ばれていた。

強さを示し、最強をなし、絶対を目指すようになった者に、『その者を示す一文字と帝の一文字からなる二文字の字』を送る為。

初代の無念を晴らすために、誰にも奪わせないために世界を相手に戦って勝てる者を『創り出す』ために。

かつて、『天帝』と呼ばれた男がいた。彼は生涯をかけて一つの技術を生み出した。それは魔法でもスキルでもない、まったく別の能力。

名を『天帝牢獄』。世界を『法的的に切り離す』力。その力で区切られた世界は、例え対界宝具を連発しようと、事象を崩壊させようと、周辺の世界に影響を及ぼすことはない。

「なるほど。君も使えたというわけか」

驚いた様子のクルーゼを前にして、シンは燃えるような瞳を向けたまま答えずに左手の『ウロボロス』を放り投げる。

「ふむ、察するに一時的にテラに『能力をストックしてもらった』か。万が一の場合に使え、と?」

「答えは必要ないでしょうが。一夏を倒したあんたに、答えなんてやらない」

「そこまでか。なるほど、それで、どうするつもりかね？」

まだまだ余裕を崩さないクルーゼに、シンは小さく息を吐いた。

瞳を閉じて、ゆっくりと『天壤無窮』を地面に突き刺す。

「答えてなんてやらないって言った。俺は覚悟を決めた。あんたは俺が倒すんだ、今日ここで」

瞳を開く。燃えるような炎の瞳、それに反比例するように周辺の気温が下がっていく。

『凍焰の鬼神』の由来。魔法でもスキルでもなく、本気のシン・アスカに従うように周辺環境が変化していく。

「そうか、そうか、ようやくだな。ならば、止めてみせるがいい。止められるものならばな!!」

クルーゼも『天衣無縫』を地面に着きつける。

そして、二人は同時に叫ぶ。

「運命を決めるぞ! 『デステイニー・イレイザー』!!」

「さあ戦いの時だ! 『プロヴィデンス・オーバーワールド』!」

瞬間、二人の姿は消えて、彼らがいた場所に二十メートルの巨人が立っていた。

願いのために・8

七色の輝きを背に、巨人が舞う。

『やはり当たらないか!』

小型の機動兵装『ドラグーン』が攻撃を放つのだが、かすりもしない。翼も含めれば横幅は六十メートルは超える。巨大な七色の翼を躍らせながら、デステイニーは止まることなく突き進む。

行く筋ものビームが檻のように行く手を阻もうとも、巨大な荷電粒子が空間を埋め尽くそうとも、『運命』は止まらない。

次々に攻撃を繰り返しても、彼を捕らえきれない。技量ではクルーゼのほうが勝っている。経験値でも、実戦の数でも、クルーゼとフォリアナをシンとティスは超えることはない。

けれど、だ。

連携、あるいは共有という点において、クルーゼ達をシン達は超える。

クルーゼもフォリアナも自己主張が強いタイプだ。普段は穏やかに接しているとはいえ、一度でも戦いとなれば容赦しない。やるべきことを徹底的にやる、自分の意思の元でドンドンと行く。

一方で、シンもその手の考え方で突き進む。自分のやるべきことを第六感で把握し、実力行使を厭わない。

しかし、ティスは違う。まず最初にシン・アスカを立てる。その彼がやりたいことを見定めて、彼が動きやすいように背後から突き従う。

古き日本によくいた良妻。夫の三歩後ろを付き従うのが、ティスという存在だった。

だから、明確に差が出る。実力という点ではクルーゼ達が勝っている、『総合力』という点ではシン達が勝る。

『フェザービッド!!』

デステイニーの両肩に装着された羽がはがれ、空間を埋め尽くす。増殖と増加、一枚が十枚へと別れたフェザー・ビッドが、クルーゼと

フオリアナが操るドラグーンの攻撃を反らす。

周辺警戒はティスが。彼女が見落とすことはなく、攻撃が自分を貫くことはない。全幅の信頼をシンはティスに置いている。彼女ならば上手くやる、だから自分は機体を操り、敵を砕く。

『墮ちろよー!』

『ふー! そう簡単に行かせると思っかね?!』

デステイニーの右手に装備された『ウロボロス』が、『プロヴィデンス』の右腕に装備された剣に叩きつけられた。

勝った、とシンは思わない。相手の剣を見て、小さく舌打ちした後、デステイニーは急速に後退。七色の翼の残滓が僅かに空間を埋めるが、すぐに消えてしまう。

『気づいたようだな、シン・アスカ』

『プロヴィデンス』の剣が二つに分かれ、続いて柄頭で繋がった『双剣』になった。

『天衣無縫』

小さくシンは相手の剣の名を呼ぶ。

『正解だ。『マテリアル』本体に乗ったとき、神剣を出せるかどうかは、個人の技量だけではなく、その者の覚悟といった『意志の力』が重要となってくる』

君はどうだ、とクルーゼは口外に告げた。

すでにティスがいなくとも神剣は抜ける。自分の意思一つで手の中に神剣を顕現できるのだが、機体に乗った状態で装備できるかは、まだやったことがない。

そもそも、師匠のテラ・エーテルはそんなことを教えてくれなかった。

『ああ、言い忘れていたが。テラはやらない、できるだろうが、そんなことしたことはないだろう』

『何でだよ?』

つい、反射的に聞いてしまう。あの師匠が、そういったことをしたことがないなんて。思いつく限りの戦闘方法は試して、試していないことを一つ一つチェックして潰していくと思っていたのに。

『簡単な話だ。スノーホワイト・エンパイアは、そんな危機的状況に陥ることがない。『白夜の支配者』の異名は伊達ではないということだ』
スノーホワイトがよく言われている異名が、何故そうなったのかシンは知らない。

師匠に聞いたこともなく、聞いても答えてくれないだろうと勝手に思い込んでいた。

『これも知らないか。夜というのは、人が死ぬ時間と考えられているらしい』

クルーゼは語る。まるで、師が弟子に教えを授けるように。

シンは聞きいってしまった。一夏のことはまだ怒りを感じているのに、昔に出会ったときと同じ声に、反射的に耳を傾けてしまう。

『その夜が白く解らない状況、それが『白夜』だ。その機体の前では、常に白き夜が訪れる。つまりだ、その機体を前にしたものは平等に死を迎える、例外なく、な』

ポタリとシンの頬を汗が伝った。

強いと感じていた、無敵じゃないかと思えていた機体は、絶対の力を持っていたわけか。

『時間も空間も、概念も事象も関係ない。法則さえ、あの機体は滅ぼすだろう。それが我々が皇帝の専用機『スノーホワイト・エンパイア』の性能だ』

『なんだよ、それ。どうしてそんな機体があるんだよ。いくらマテリアルの原点だからって』

『だからだよ、シン。原点であるからこそ、強さを誇っている。すべてのマテリアルはスノーホワイトの零れた残滓でしかない』

こうありたいと願った未来、こうであってほしいと描いた性能。それらがスノーホワイトを構築する仮定で切り捨てられ、あるいは次の段階に進んだ結果、破棄されたもの達。

現在のマテリアルは、それらを形にした残り香でしかない。

『解るかね？ 我らが皇帝陛下は、自分だけが強者であり続ける。誰も信頼せず、誰も頼ろうとしない』

クルーゼの言葉は続く。あの人のことを語る言葉は、何処までも辛

辣で何処までも冷たくて。でも、何処か泣いているような悲壮感があつた。

シンは、不意に悲しく思えてきた。孤高と呼べば格好がつくのだろうか。それも不敗とか無敵とか呼べばいいのか。

『でも、それは悲しすぎませんか？』

無意識にシンが紡いだ言葉に、クルーゼは深く笑みをこぼした。

彼の一族の究極の完成品。誰も手を出せず、誰にも奪わせない。慈悲などなく情けもない。

昔のテラは、そういつた存在だった。自分の前を塞ぐものは、何億だろうと殺していく。殺して消して、滅ぼして。感情が僅かも揺らがない戦闘マシーン。

彼を、今の彼らしくしたものは幼馴染の二人と、一人の英霊。

どうしようもない馬鹿で、誰かが泣いていると隣に立って助けてくれて、困っている人は救ってしまふ、ヒーローのような存在でありながら、誰よりも自分が極悪人だと信じている、そういった大馬鹿もの。クルーゼは少しだけ昔を思い出し、シンの問いかけに答えた。

『悲しいとは、意外なことを言うな。君も彼に頼ったはずだろう？』

彼の弟子ならば、頼って願いをかけて、『叶えてもらった』はずでは？』
『それは、確かにそうです』

昔に家族が死ぬかけた時に、テラが現れて命を救ってもらった。二度とこんな悲劇を繰り返したくないから、彼に頼みこんで鍛えてもらった。

だから。

『だから、彼は孤高であり、誰も寄せ付けない』

シンは、冷水を浴びたように全身が冷たくなった気がした。

『万人の願いを叶え、世界の悲劇を防ぎ、多くの人の安息する国家を生み出した。人といえるのかね？　こんなことをするテラ・エーテルとは、英雄と呼べるのだろうか？』

『それは、そんなこと』

否定する言葉が、シンの口から出てこない。

前々から何処か非常識ではあった、人間じゃないと思っていたこともあった。

けれど、こうやって眼前に突きつけられると、なんて酷いことをと感じてしまう。

彼一人に背負わせて、すべてを丸投げにして。

『英雄とは人身御供だ』

クルーゼの独白が続く。心を抉られるように、何か忘れようとしていたものを突きつけられるように。

『世界の安定を手に入れるために、人らしい生き方も考え方も失ってしまう』

違うとシンは否定したかった。けれど、言葉が出ない。

『人々の安定と平和のために、一人の人生と命を犠牲にしていく。戦争がなかったから、戦争にならなかったから、僅か一人の犠牲で救われたと笑顔で語る』

否定を、認めてしまったらシンの中の何かが崩れそうだったから。

『多くの命を救うために少数を斬り捨てる。それを否と言いながら、たった一人ならばいいと切り捨てる。誰も知らず、誰も傷つけないと安堵する』

『……う』

『隣人が無事で、自分も平和で、世界に争いがなくなった。たった一人、永劫の中で苦しんでいるというのに』

『ち・・がう』

『顔も見えない誰かが激痛の中にいようとも、傷が見えなければ平穏だとそう感じて日々を過ごす』

『違う、黙れ』

『退屈な日々には飽きて、何か楽しいことがないかと、ドキドキやわわくがないかと探す』

『黙れ、黙れよ』

『犠牲の上に成り立った平和だというのに、傲慢にすべてを壊して『俺が活躍したい』と笑う』

『違う！ 黙れ！ そんなことはない！』

『主人公でいようと願い、過去のことなど考えない。たった一人の犠牲で終わったと良かったと楽しそうに笑う！』

『そんなことなんてない!!』

『いやそうさ！ 誰もが犠牲などなかった、自分達で勝ち取ったものだと錯覚して！ 平穏と平和の尊さも知りもせずに『楽しいことがしたい』と身勝手に!!』

『そんなことあるか！ みんなはそんなこと！』

『いやそうさ！ その通りだ！ それだけの業！ 重ねてきたの誰だ?!』

裂帛の気合いと共に放たれたクルーゼの一言に、シンは思わず言葉に詰まってしまった。

『我々だ！ 知らず知らずのうちにテラ一人に丸投げして平穏だ、帝国の繁栄だと！ 滑稽にもほどがある！ だからだ！ だからこそ私は!!』

『プロヴィデンス』が動く。『ドラグーン』を周辺に配置し、ゆっくりと進んでくる。

『私はもつと強くありたい！ あいつ一人が背負ってきたものを分かち合えるように！ 幼い頃から見てきた、一度も弱音など言わないあいつが、『一緒に戦おう』といえるくらいに強くなりたい!』

くる、とシンはレバーを握り直す。飲まれているのは解る、相手の気迫に負けそうになりながらも、必死に意識を立て直す。

『だからだ、シン・アスカ。おまえを倒して私は遥かな高みに立つ!』
『俺だって!』

『プロヴィデンス』が動いた。幾筋もの光明の中を突き進む、乱雑に放たれたビームの中を、まるで何事もないように進んでくる相手の技

量に、シン・アスカは意識を鋭くした。

相手は『絢爛なる守護者』。帝国の創立より帝国を支えてきた存在。『天衣無縫』が迫った。ビームに干渉しないのは、ビームの性質を変えてきたからか。単純な光学兵器、次元エネルギーや中間子などを混ぜない、純粋な荷電粒子。

でも、とシンはデステイニーを動かす。ウロボロスを腰のジョイントに差し込み、両手のみで突撃した。

光学兵器はデステイニーに通用しない。両手を覆う『クリスタル・デストラクション』はあらゆる光学兵器を無効化し、そのエネルギーを取り込む。

知っているはずだ。クルーゼならば、機体データを見て知っているはずなのに。

『そうだな、そう来るだろうと思っていたよ！』

機体はすでに正面、もう接触する寸前の中、『天衣無縫』が突きつけられた。

しまった、とシンは焦る。ビームをくぐることに頭がいつぱいだ。ティスの援護は、機体の距離が近過ぎる。

『させないから!!』

寸前でティスのフェザーが入りこんだ。デステイニーの装甲を削るように入り込んだフェザーによって、『天衣無縫』の切っ先が反らされる。

『甘いなー!』

二つ目。シンは目を見開いた。柄頭で繋がっていたはずの『天衣無縫』が、二つに分離し、二本目の刃が迫る。

ティスは動けない。自分の体を傷つけてまで守ってくれた、そのダメージが彼女を止めている。

『ウロボロス』は腰のジョイントに差したまま、引き抜くには時間が足りない。防御手段は皆無。どうにかしないと、シンの思考が回っている間も刃の切っ先は真っ直ぐにコクピットに迫っていた。

やられる。至近距離まで迫った刃は。

『なんだと?!』

クルーゼの驚愕と共に反らされた。何があった、どうして反らした。そんなことシンの頭から綺麗に消えていた。

反射的にデステイニーを操作した。『ウロボロス』の柄をデステイニーの腕が叩く。腰のジョイントが無理に回転し、刃は下から円を描くように周り、『プロヴィデンス』の下腹部へ突き刺さった。

浅い、直前で回避された。けれど、チャンスは今だけだ。

デステイニーの右腕が動く。時間がゆっくりと流れるような錯覚を、シンは感じていた。

『ウロボロス』の二本目。デステイニーの右腕が掴んだそれを、手首だけ回転させて、切っ先を『プロヴィデンス』に向ける。

後は、真っ直ぐに。

『ラウ・ル・クルーゼ！』

『……ああ、そうか。シン』

『ウロボロス』の剣は、『プロヴィデンス』のコクピットを貫いた。

直前、彼が何か言っていたようだが、シンの耳にはすべてが届かなかった。

小さな爆発と衝撃で、シンはハツとした。目の前には崩れ落ちる『プロヴィデンス』。見事にコクピットを貫いた『ウロボロス』は、突き刺さったままだ。

「今、何を……クルーゼさん！」

コクピットハッチをはね上げ、外へと飛び出す。

爆発が起きていようが関係ない。素早く跳んで、相手の機体の上に。すでに『プロヴィデンス』は地上に座りこむように崩れ落ち、コクピットハッチは碎けて消えていた。

「どうした、勝者にしては泣きそうではないか？」

「なんでどうして、あの時、貴方が」

言葉が上手く出てこない。確かに勝てた、けれどそれは彼が最後の瞬間に躊躇ったから。

「私が手を抜いた、とでも？　フフフ、そんなことはない。私は真剣だった、しかし私の手を止めさせた者があつた」

薄い笑みを浮かべてクルーゼは、無傷な片手であるものを持ち上げた。

「仮面？」

「ああ、最後の一撃の時、私がしていた仮面が砕けた。恐らく、だが」
どうしてだろうか。そんなに柔なものではなかったはずだ。彼が常にしているものだから、強度もかなりあるはずなのに。

シンは気づかない。その瞬間を見ていなかったから。

「織斑・一夏だ。彼の最後の一撃、私の仮面に届いていたようだ」
「あいつ」

「素晴らしい才能を持った青年だ。彼は鍛えれば私に並ぶだろう。いい友を持ったようだな、シン」

穏やかに語る彼は、すでに半身を消していた。今も会話できているのは、フォリアナの最後の意地だろう。

彼女の気配も薄れている。恐らくだが、『プロヴィデンス』の主動力炉『領域機関』を破壊したのか。

『マテリアル』はここを破壊されたら、終わる。例えクローニング・コンピュータが無傷でも、崩れ落ちて消えてしまう。

「どうして、こんなことを」

最後に聞いておきたいことを、シンは問いかけて見た。

「語った通りだ。私はテラ一人にさせたくなかった、強くなりたかつた」

「貴方は十分に強い、俺なんて足元にも及ばないほどに」

「嬉しいことを言ってくれる。『凍焔の鬼神』にそう言われると、悪い気がしないな」

驚いた顔の後、クルーゼは残った手を上へと伸ばした。

「私はクローンだ」

「え？」

「テロメアが短いから寿命が短いわけではない。私の体は、『マテリアル』をもつてしても戦いに耐えられなくなってきた」

彼は遠い眼差しで、『本音』を語り始めた。

最初の違和感の時の話。軍務中に射撃制度が落ちたこと、ドラグーンの操作が繊細さを欠いてきたこと。

生身での戦闘もスタミナ切れを起こしてきたこと。色々な欠落を味わい、何度も覆そうとして無理だったこと。

「そして、私は思ってしまった。『ここが限界だ』と。自分で自分の限界を決めてしまったのさ、シン」

「そんなこと。誰だって、ありますよ」

「ああ、普通ならば『誰だってある』。しかし、我々『騎士』には許されない。同族を殺し、大罪を犯してまで存在する騎士は、『限界』と思ってはいけないのだよ、シン」

「なんで、そんな苦しいことなんて」

「命を護る騎士が自分の限界を決めてしまったら、『救える命も救うことができない』だろう？」

悲しそうに、クルーゼは目を閉じた。誰かを助けられなかったのか、誰かを救えなかったのだろうか。

彼の言葉に、その欠片はなかった。けれど、何かの慟哭は聞こえてきた。

「だから、私は最後の命を使うことにした。騎士である私の残りの命を持って、『騎士を育てよう』と」

「……まさか、師匠と相談したことって」

「ああ、私の最後を『看取る騎士』を決めることだ。シン、すまないな、私の命、おまえが背負ってくれ」

さすがのように、何処か泣いているような仕草で、クルーゼは手を伸ばしてきた。

「俺なんかでいいんですか？」

「君だからこそ、頼みたい。すまない、他にも色々と背負わせてしまおうが」

「俺は、騎士ですから」

泣くわけにいかない。偉大な騎士が、自分を認めてくれたならば。だからこそ、シン・アスカは真つ直ぐに見つめ、微笑む。

「ありがとう。最後に君が知らない事実を話しておこう」

「はい」

「……ジョーカー銀河帝国内において、騎士の一部が持つ権限だ。私も持っている。私を討った君が引き継ぐことになる」

始め聞いた話だ。ヴィルティラスに入った時も、騎士になった時も話してもらったことはない。

「重荷を背負わせることになるが、すまない」

「大丈夫です」

「我らが持つ権限とは。『ジョーカー銀河帝国皇帝が、人々の平穏に対しての害悪と判断した場合の抹消権利』だ」

心臓をわしづかみにされた気分だった。なんて言われたか、シンは言葉の意味が解らなかつた。聞きたくなかつたと心が拒否して、呆然としてしまう。

「テラは、自分が『極悪人』だと知っている。強烈な自己否定を持っている、破滅願望はないが、自分が永遠に『このまま』とは考えていない」

歴史の必然なのだろうか。賢君であつた者が、いずれは欲望に身を落として暴君となる。聖人がいずれ落ちて悪鬼になることもある。

人の世にありふれたこと、それはテラには、師匠には当てはまらないと何処かで楽観していた。

とんでもないことだった。誰よりも、周りの人たちよりも、彼自身が彼自身を信じていなかった。

「だからこそ、強くなれ。シン・アスカ。あいつが、自分がいなくてもいいんだと、自分が頑張らなくても大丈夫だと思えるように」

ギョツと、強く手を握られた。死にかけとは思えないほど強い意志が、その手に宿っていた。

「あの馬鹿ものが、永遠にバカものであり続けられるように。頼む」
「……はい、俺は絶対に負けません。だから、御休みなさい、

『ラウ・ル・クルーゼ 絢爛なる守護者』

名を告げると、彼は安堵したように微笑みんだ後、空を見上げた。
「ああ、懐かしいな。本当に懐かしい、あの時、テラが『帝国創る』と言いだしたときと同じ空だ」

釣られるようにシンは、空を見上げた。空などどこにもない、ここはまだ『天帝牢獄』の作用範囲だから。

「底抜けに明るい青空か。テラ、おまえの馬鹿さをよく表している。本当に懐かしい、帝都の……」

彼は暖かく微笑んだまま、ゆつくりと手を下ろした。

アリーナに戻ったシンは、何時もと変わらない顔をしていた。けれど、何処か雰囲気悲しそうで。

「クルーゼさんは？」

一夏は一歩前に出て、その名を告げる。

「俺が殺した」

「……そっか」

恨みも文句も出なかった。彼がそう言ったならば、きっとあの人が望んでいたことなのだろうから。

「一夏、最後の一撃、クルーゼさんに届いていた。だから、俺が勝てた」

「あ……」

「サンキュ」

短く告げてシンは一夏の隣を過ぎていく。

届いていたのか、あの一撃は避けられたと思っていたのに。

「後、そうだな」

振り返らず、シンは空を見上げながら、一夏に伝える。

『素晴らしい才能を持った青年だ。彼は鍛えれば私に並ぶだろう』と」

グツと、一夏は拳を握って胸元に当てる。言葉に詰まるとはこういったことか、嬉しくて悲しくて、でも伝える相手がいなくて何も言えない。

「確かに伝えたからな」

返事を待たずに、シンはそのまま歩いて行ってしまう。

一夏は、言葉を出せないまま大きく口を開いて。

後のジョーカー銀河帝国の歴史において、『ラウル・クルーゼ』は裏切り者として記録されている。

帝国を裏切った、皇帝を裏切ったのではなく、自分の限界を裏切り、平穏を求める自分の声を裏切った、そういった騎士として。

いつか、辿り着く場所で

季節は巡るものである。時は過ぎ去っていくものでもある。

彼は追いかけた背中の一つを追い抜き、さらに遠くにある背中を追い始めた。

立ち止まっていたわけではない。

諦めたわけではない。

けれど、自分が前に進む意思を失っていたことを思い出した。

強くなりたい。もっと高い場所に飛びたい。そう思っていただけで、心はずっと同じ場所にいた。

だから、今こそ前を向こう。

今度こそ、あの頃の自分にさよならを告げて。

原点は相変わらずそこにある。

幼い頃の自分は、そこにいる。

見つめてくる瞳を真っ直ぐに見詰めて、穏やかに笑ってこう告げよう。

『大丈夫、俺はもう前に進んでいるから』。

そして、こう別れを告げよう。

『また会おう。俺が俺の強さを示した時に』。

さあ、歩きだそう。

願ったあの場所を目指して。

出合いは別れの始まりだと、昔に師匠に教えられたことがある。

「シン、忘れものはないな?」

「はい。大丈夫です」

声に振り返って、笑顔を向ける。

住みなれた部屋には荷物はなく、すっきりと片付いた場所があるだ

け。

「哀愁か？」

「どうでしょう。寂しいとは感じますけど、また戻りたいとは思えません。俺はもうここでやるべきことをやりましたから」

「そっか」

ハイネはそう告げて、ゆっくりと歩きだした。

「行くぞ」

「はい」

IS学園での生活は、これで終わり。色々とやり残したことはあつたのかもしれないが、自分ができることは精一杯にやったつもりだ。懐かしいと思える廊下を通り過ぎ、授業中の教室をそつと通り過ぎる。

「もう行くのか、シン？」

「織斑先生、お世話になりました」

「ん」

教室からわざわざ顔を出してくれた彼女は、小さくため息をついていた。

「おまえほど、騒がしい存在はいない。弟が世話になったな」

「あいつなら一人でも辿りつけたでしょう。自慢の弟さんですよ」

褒め言葉を返すと、彼女は先生の顔ではなく、姉の顔で告げた。

「当然だ」

何処か照れたような顔で。

彼女と別れ、アリーナを横目に歩きながら、思い出深い場所に背を向ける。

「シー君、サヨナラだね」

束がひよつこりと顔を見せる、泣きはらした目をしながら精一杯に笑顔を浮かべて。

「うん、いいのか？」

「うん、いいの。いつか私は私の『IS』でシー君の世界に辿り着くから。だから」

彼女は、晴れやかに笑って駆けだした。

「絶対に、『無限の宇宙の彼方』で待っていてね！」
バイバイと手を振って彼女は走り去っていった。

「いい女だな、あの子」

「ええ、俺にはもったいないくらいですよ」

ハイネの茶化しを正面から受け止め、シンは軽く苦笑した。

校舎を通り抜けて、正門を目指す。その途中の角で、シンは簪と出会った。

「行くの？」

「ああ、もう戻らないといけないからな」

「そっか。シン、ありがと、私は私なりに頑張ってみるね」

晴れた笑顔で笑う彼女に、そうかとだけ告げる。

「姉は姉、私は私だから」

「解った。じゃ、またな」

右手で握手を求めると、彼女は微笑みながら手を握り返してくれた。

職員用の玄関へ向かい、靴に履き替えて外に出ると、ラウラが待っていてくれた。

「とても貴重な体験をありがとうございます」

「いいって。ラウラ、忘れるなよ」

「はい。私は軍人としての矜持を持ち続け、いずれ貴方のような立派な軍人になります」

「俺よりも、だろ？」

ちよつと意地悪いに告げると、彼女は照れたように笑いながら、『もちろんです』と伝えてきた。

ラウラと別れ、正門に向かう途中で、楯無に待ち伏せされた。

「あらあら、忙しいのね」

「悪かったな、楯無。俺はもう戻るよ」

「そう、簪ちゃんのこと、ありがと」

小さく呟き頭を下げる彼女に、シンは小さく忠告しておく。

「言葉にしないと伝わらない思いもある。きちんと伝えてやれよ」

「そうね。変な意地はつてないで、話してみるわ。ありがと」

「どういたしまして」

笑顔を向ける彼女に、シンは手を振って別れを告げた。

彼女に見送られながら正門へ向かうと、横から影が近づいてきた。

「シン、準備できたよ」

声をかけて駆け寄ってきたシャルロットに、シンはちよつとだけ顔を歪めた。

「いいのか？ いくら同じ世界とはいえ、まったくの別の宇宙なんだからぞ？」

「うん、いいよ。それにシンが言ったんじゃない。『考える時間をくれる』って。私はまだまだ決められないから、もつと・・・じゃダメ？」

小さく首を傾げるシャルロットに、『仕方ないな』とシンは呟く。

この世界から、もうすでに『シャルロット・デュノア』という存在は消えている。デュノア社に名前はなく、戸籍にも登録されていない。

けれど、シャルロット・リースという名前はあるのだが、これからは行方不明として扱われるのだろう。

織斑・千冬はそう答えてくれた。今は、それを信じよう。

彼女は良くも悪くも先生だった。先に生まれ、先に道を示し、そして見送ってくれる人だった。

「シンさん、私はもう少しここに残りますわ。家のこともありますので」

セシリアはそう告げて、優雅に一礼した。

「すべてが片付いたら、御迎えをお願いしても？」

「あ、うん、それーダイガーターを預けておくから、連絡をくれれば。でも、セシリアもいいのか？」

「はい、私はシンさんの世界を見てみたいです。幾万の星達が瞬く、漆黒の彼方を」

真っ直ぐに見つめ微笑む彼女に、『これも曲げられないよな』とシンは小さく呟く。

解った、待っている。言葉ではなく見つめることで意味を告げると、彼女は嬉しそうに一礼した。

「モテモテだな」

「からかわないでくださいよ、ハイネ。戻ったら、シエリルとティーラになんて言おう」

「俺についてこい、出いいんじゃないか？」

からかっているのかと顔を向ければ、彼は穏やかに微笑んでいる。本心でそれを言えと。

ちよつと気持ちの落ち込んだシンは、深々と溜息をついて足を再び進める。

進む先には、一人の影が立ちふさがった。

「シン、行くのか？」

織斑・一夏は、真顔で真っ直ぐに見詰めてくる。

「ああ、悪かったな。色々と迷惑をかけた」

「いや、俺も色々と学ばせてもらったから。クルーゼさんに教えられたこと、俺は一生かけても身につけてみせる」

「それがいい。あの人はそれを望んでいる」

グツと拳を握って突き出す一夏に、シンは拳を合わせることなくすれ違う。

「まだ俺はシンと同じ場所に立てない。だから、いつか追いつく」

背中に突き刺さるような決意と言葉に、シンは答えることなく歩き続けた。

「必ず追いつく」

一夏が振り返る。あの時アーリーナでシンを見つけた時と同じように、迷いながらも、けれど決定的に違う強い意志を秘めて。

「それまで、強くいろよ、『凍焰の鬼神』」

「解った、それまで俺は強さを磨いて剣を構えて待っている。待っているからな、『騎士を目標した少年』」

そして、シン・アスカはあの時と同じように親指を突き出した。

二人はそれっきり別れた。

セシリア・オルコットは二年後、オルコット家の財産を福祉事業にすべて寄付し、そのまま姿をくらました。

篠ノ之・束はISの技術を公開。誰でも使える宇宙服としてのIS

を世界に向けて発表した。

そして、第五回、第六回、第七回の『モンド・グロツソ』を制覇した織斑・一夏は、『夢をかなえてきます』と書き置きを残して姿を消した。

ある日、ある場所、そして約束の時。

困難に立ち向かう勇気を持って。

夢を諦めることなく、真っ直ぐに進め。

俺がいるかぎり理不尽なんて消してやる。

だから、おまえはおまえの魂が叫ぶままに生きろ。

ジョーカー銀河帝国皇帝が、とある場所で叫んだ言葉が刻まれた場所、シン・アスカは空を見上げていた。

「追いついたか？」

「どうだろうな？」

問いかけに答える声は一つ。背後にいる気配は、二つ。

「言葉を重ねるのは俺達らしくない、騎士ならばさ」

「その魂で示せ、だろ？ 行くぞ、シン・アスカ」

「来いよ、織斑・一夏」

二つの閃光が、真っ直ぐにぶつかりあった。

あとがきのようなもの、になればいいな

読んでいただき、ありがとうございます。

これにて本編完結となりました。

シン・アスカの、『凍焰の鬼神』の物語は続いてくのかもしれませんが、話の区切りとして完結とさせていただきます。

感想と評価、ありがとうございます。

話の書き方として、前書き・後書きはシンのモノログといった書き方を試したかったので、感謝といった言葉を入れずに申し訳ありません。

誤字とかの報告も嬉しかったですし、貴重な意見も大変、勉強になりました。

サルスベリの作品で完結は二作目です。

よく完結させたなあというのが個人の感想ではあります。元々が飽きっぽい性格なので、話を考えては文章にする前に忘れるといったことがあります。

読書感想文とか、一行で怒られたこともありました。

シン・アスカについて。

ほぼオリジナル主人公になった彼です。設定にも書いたとおり、オリキャラの『テラ・エーテル』を殺せる騎士となるために、色々な苦難や逆境に陥ること多数な、波乱万丈な人生を生きることになった少年です。

正直、原作よりも酷い目に合わせてごめんと、土下座するくらいに。種デスは結構、何度も見ていた作品なので、『キラ出てきた』と当時は喜んでいたのですが、数年が経過した後のリマスターか何かで見た時は、『いや、キラ、ちよっとおまえどけ』と冷静に突っ込み入れたことがあります。

シンの考え方についても、色々と『若気のいたりじゃ済まないレベ

ル』と思っただけでもありますが。

結果的に、私の作品の中では『年の離れた悪友』として書かせていただいた次第です。大人の事情でああなったって話を聞いたことがあるので、どちらも憎めないのです。

ラウ・ル・クルーゼについて。

裏表なく真っ直ぐに生きる先達。クローンであったことも、テラとその父親に出会ったことで、『あ、俺って普通なんだ』と達観できるようになった、という経緯があります。

この作品はあくまでシン・アスカが主人公であるので、クルーゼの話は触り程度であまり深くは入れませんでした。

テラ・エーテルについて

オリジナルにして、『ボクがかんがえたさいきょうのキャラクター』。世界も神様も生み出せるバグとチートの塊。

自分のことを嫌っているわけではないが、『一番の害悪』と思いつくくらいには破綻している。

ちなみに、名前の由来はエヴァだったりします。『A・Tフィールド』のTを見て、『じゃ、テラーじゃなくてテラで行こう』で作られたキャラクターです。

最後に、ですが。

あくまでこの作品の主人公はシン・アスカであり、彼が強くなっていく過程を描いたものです。

他の場面に飛ぶことはあっても、最初の出だしは彼で始まり、最後は彼で終わるのがいいかな、ということと最終話はあのような形となりました。

一夏については、『追いかけるだろ、あんなだけのことがあったら』と

考えてのことです。

壁に向かっていたシン・アスカが、今度は誰かの壁となって成長を促す。主人公にはあり得るなあって個人的には考えています。

私は私が面白いと思ったことを書いてるので、人によつては不快に思われる方もいるでしょうが、どうかご容赦を。

最後に、このような作品に評価をつけてくださった方々、お氣に入りにして下さった方々、読んでいただいた方々に心よりの感謝を述べて終わらせていただきます。

ありがとうございました。

というわけで、シン。次は何処に飛ばされたい？

「は？ え？」

あ、その前に番外編あるから、喜劇の中で踊ろうぜ、シン？

「あ、あんたって人はああ！」

第二章 蛇足・幕間・こぼれ話・喜劇で踊ろうぜ！ 銀河帝国の中のシャルロット

シャルロットにとって、そこは未知の国だった。

単一惑星の中でさえ、いくつかの国を廻っただけの彼女にとって、五つの太陽系を支配している巨大な帝国なんて、想像を超えていた。

「そういえば、シンって、どんな国に住んでいるの？」

「ジョーカー銀河帝国。出来てから、十年は行きましたか？」

迷ったように告げるシンに、向かいの席に座っているハイネは、新聞から眼を離して二人に視線を向けた。

「もうすぐ十周年記念イベントがあるな。なんだ、シンはそんなことも覚えてないのか？」

苦笑するようなハイネに、シンは小さく頭を下げた。

「すみません。俺って、途中参加ですから」

「あのな、途中参加でも『ヴィルティラス』だろうが。そんなんじや、宰相殿に怒られるぞ」

「はい」

珍しくシンが下手に出ていることに、シャルロットはちよつと意外そうな顔を向けた。

『『ヴィルティラス』じゃ一番の新人なんだ、俺』

「へえ〜……ところで、それって何？」

質問され、シンはしばらくきよとんとした顔をした後、『ああ』と盛大に声を上げた。

「説明してないか？」

「してもらったことはないかな」

「おい、シン」

あまりの事実に、ハイネが半眼で睨んでくる。

まさか連れていく国のことを、説明してないなんて。無責任にもほごがある、と彼は無言で語っていた。

「いや、説明しようとなりましたよ。ほら、今だって」

「今だってなんだ？ まったくおまえは、戦場にいれば頼りになるのに、こういった『報告・連絡・相談』関係は駄目なんだからな」

「いや、俺も事務処理はかなり上手くなりましたよ」

「おまえの事務処理向上のために、宰相が三日間も付きつきりになったの、俺は忘れないぜ」

「あの時は俺もまだまだ未熟だったじゃないですか」

「自分の未熟を棚に上げて、『やれません』って言った時の宰相の顔と皇帝代理の顔、俺は一生、忘れないからな」

呆れて溜息をついたハイネに、シンは『それはそうでしょうけど』と小さく呟いて顔をそむけた。

その仕草があまりに子供っぽくて、シャルロットは笑ってしまう。

あの世界で一夏達の前にいたシンはとても頼りになって、どんな危機も覆してしまうヒーローに見えたのに。

「なんだよ、シャルロット」

「ううん、シンって、やっぱり同い年なんだなあって」

「はあ？ 最初からそう言っているだろうが」

「今になって実感が湧いたなあって思ったの」

『なんだよ、それ』とシンは目線で問いかけるのだが、彼女は小さく笑ったまま答えなかった。

そんな二人を、ハイネはとても暖かい目で見ていたが。

「ともかくだ」

ハイネが指を鳴らす。すると、外の景色を映していなかった窓に光が差し込んできた。

「ようこそ、シャルロット嬢。我らが『ジョーカー銀河帝国』へ」

まるで舞台の役者のような仕草で、ハイネは外へと手を向けた。

自然とシャルロットの目線が外へ向き、星々の輝きに負けない豪華絢爛なビル群が視界に入ってきた。

「ここが『帝都』ですか？」

『『ジョーカー銀河帝国』の中心地『帝都』だ。この街並み、宰相が『三十年計画よ！』とか言って立案した配置なんだよな』

「へえ〜」

気の長い話だ。それとも、都市開発とはそんなに時間がかかるものか。

「で、師匠が『一年で終了させた』んですよね」

「そうだな」

「……え？」

眩しくて感動しながら見ていたシャルロットが顔を戻すと、何故か濃い影を纏った二人がいた。

何が、と声をかけようとした彼女の前で、二人は同時に眩く。

「あの極悪無敵の大馬鹿が」

何やら、シン・アスカの師匠はまわりに迷惑をかける人物らしい、シャルロットは密かにそう思った。

移民したなら、まずは移民申請。

「あ、シン・アスカの関係者ですか。なら、どうぞ」

「え？」

入国ゲードで素通しされた。

「なるほど、シンさんの関係者ですか。じゃ、どうぞ」

帝都に入る時の警備システムの担当者に、そう言われて通された。

「あ、シンさん。そっち関係者ですか。なら問題ないですね」

「え？」

帝都の中心、まさに帝国の中枢の政庁に入る時、警備していた人たちがお帰りの通してくれた。

「お帰りなさい、ハイネ、シン。そちらは？ シンの関係者？ じゃセキュリティコードは仮発行しておくわね」

「え？ え？ え？」

政庁の上層階に行くと告げられ、途中のセキュリティゲート前で呼

び止められ、当然のようにIDを発行された。

「お帰りなさい、二人とも。アイリスなら執務室ですよ」

「はい、ありがとうございます」

金髪の女性が向かいから歩いて来て、軽い挨拶のあとにシャルロットの視線を向けてきた。

「あ、そちらの方が。初めまして、アセイラム・クリシュタリア・エーテルです。以後、お見知り置きを」

「は、はい。初めまして、シャルロット・リースです」

あまりに綺麗な人に慌てて頭を下げると、彼女は微笑みながら『では、失礼しますね』と小さく頭を下げて通り過ぎていく。

「綺麗な人だったね」

「そうだよな。師匠の奥さんの一人だよ、あの人」

「え？ 奥さんの一人？」

「で、うちー『ジョーカー銀河帝国』の皇帝代理だな」

「……ええええええ!」

まさかのトップとのすれ違いに、シャルロット絶叫。

「ちよ！ シン！ なんで普通にすれ違うの?!」

「なんでって、ここが帝国の中枢で、帝国を実際に回している人達の仕事スペースだからだよ」

言われて、シャルロットは一瞬だけ呆けた後、シンの襟首を掴んでいた。

「なんでそんなところに連れてくるの?!」

「いや、戸籍とか作らないと」

「前は簡単に作ってくれたじゃない!」

「あの時と状況が違うだろうが！ 帝国で偽造作れって！ 俺を殺す気か?!」

「シンが殺されるなんてあるわけないじゃない!」

思わず叫んだシャルロットに対して、シンは何故か遠い眼を天井に向けた。

「は、ははは」

瞳に小さく光が輝いている気がしたが、気のせいかもしれない。

「そうだな、殺されることはないって、普通は思うだろうな」
何故か、ハイネは壁に手をつけて項垂れている。

背中がすすけているように見えるのは、気のせいとしたい。

「行くぞ、シン。気を取り直せ」

「はい、大丈夫です、ハイネ」

二秒後、二人はキリツとした表情を作り、ドアをノックする。

「どうぞ」

軽やかに涼やかに、まるでそんな雰囲気の声がした。

『失礼します』と二人が声と同時に扉を開けると、部屋の主がこちらに視線を向けてきた。

長く腰を超えてのばされた、光沢のある髪。シャルロットは見たことない髪色に見入り、続いて彼女の瞳に吸い込まれるように動きを止めてしまう。

プラチナクロームの髪に、深い海のような青色の瞳。仕草一つ一つに気品が宿る、まるで王家の淑女とは彼女のことか。

不意にシャルロットはそんなことを思ってしまった。

「お帰りなさい、二人とも。任務御苦労さまでした。ラウのことは報告を受けています。最後は、あの人らしかったですか？」

僅かに憂いを秘めた瞳が見つめてくる。悲しみか、それとも哀愁かはシャルロットには解らないが。

「……最後の言葉は、『ああ、懐かしいな。本当に懐かしい、あの時、テラが『帝国創る』と言いだしたときと同じ空だ。底抜けに明るい青空か。テラ、おまえの馬鹿さをよく表している。本当に懐かしい、帝都の』でした」

「そう……お帰りなさい、ラウ・ル・クルーゼ」

胸に手を当てて、アイリスは小さく黙とうをささげた。ハイネと、シンも黙とうをささげる中、シャルロットも慌てて行こう。

「そして、ありがとう、ラウ・ル・クルーゼ。貴方が護りたかったものは今も健やかに。この帝都の空は、何時までも青いままよ。貴方の願いの通りに」

少しだけ悲しい雰囲気の流れたが、それはすぐにアイリスの両手に

よって消される。

二度、三度と手を打った後、彼女はイスへと腰を下ろした。

「さあ、話を聞かせてもらったから、次の話をしましょう。シン、貴方が『お嫁さん』を連れてきたって話だったわね？」

「え？」

「は？」

「はい、見事に嫁を連れて来たんですよ、こいつは」

当事人たち、方ヤーシンは硬直。方ヤーシャルロットは赤面し停止。そして本人以外のハイネは面白そうに語る。

「そうなの、いいわね。それで、式は何処にするの？ ああ、帝都で一番の式場ならば私が抑えてあげるわ」

言い終わる前に、アイリスの手が執務机に触れ、ウインドウが表示された。

空中に展開したモニターに手を触れ、式場の番号に走らせる。

「ちよつと待ってください！ 俺はまだそんなつもりは！」

「そうなの？ ならば同棲がしたいのね。いいわよ、帝都でも見晴らしのいい物件を探して上げましょう。貴方の給料ならば安い買い物でしょう？」

「いやそうじゃなくて!!」

喜々として外堀を埋めにかかる宰相に、シンは必至に言い訳をしていったのでした。

十分後、アイリスは半眼でシンを見ていた。

「それじゃなに？ 貴方は偶然に助けたシャルロットに、『考える時間を作る』って約束しておいて、半ば放置したって言うの？」

「あ、いえ、そんなつもりは」

見事に反論し、見事に勝ち取った勝利が、シンの首を絞めつけていた。

「……はああああ」

深々とアイリスはため息をつき、シャルロットへ顔を向けた。

「ごめんなさいね。うちの騎士が迷惑をかけたようね。シャルロット、貴方の帝国での生活を許可し、私たちが保証します。それで許し

てくれないかしら?」

「い、言え。そんな、十分です」

予想外の高待遇に、シャルロットは慌てて頭をげる。

「よろしくお願ひします」

「はい、解りました。なら、私のほうで貴方の保証人になってあげるから、これなら帝都の何処にいても問題ないわね。ただ、軍とか重要施設は流石に入れてあげられないから、入らないでね?」

小さくウインクしたアイリスに、シャルロットは同性でも魅力的だなと感じていた。

「……で、シン。『デイガーダー』の言い訳を聞かせてもらおうかしら?」

フツツと笑うアイリスは、とても魅力的で魅惑的だったのだが、何故かシャルロットは寒気を感じたという。

一時間後、真っ白に燃え尽きたシンがいた。

「……アイリスさんを怒らせたらダメって解ったよ」

密かに決意をするシャルロットに、近場にいたハイネはそつと呟く。

「マジギレした時の怖さは、皇帝代理のほうが怖い」

「……」

嘘でしょう、とシャルロットが絶望した顔で見えてくるのだが、ハイネは小さく首を振った。

「それと、だな。彼女が宰相だからな」

「え?」

「実際に帝国を回している人って言った方がいいか?」

悪戯っ子のように告げるハイネに、シャルロットは固まった後、悲

鳴を上げたのでした。

まさか、ついたその日のうちに、帝国のトップ3のうちの二人に会うなんて思ってもみなかった、と。

『トリュアリテ』。

帝都の中心街に聳え立つ巨大なビルは、政庁の近場にあること、交通の要所の真上に建っていることもあり、多くの人が喉から手が出るほど欲しい物件ではあるのだが。

地上八十階の高層マンション、といえはいいのだろうか。段階的に狭くなった場所の最上階。テラスどころではなく、庭がついたような最上級マンションの一室で、シャルロットは呆けた顔で夜景を見ていた。

『いいわね、ここがいいじゃない』とか、何故か嬉しそうにカギを持っていたアイリスと、『国賓が滞在するならばここに決まっています』と可愛く力を込めるアセイラムの二人に、半ば強引に鍵を貰ったのだが。

「母さん、私はなんというか、とても昔が懐かしいです」

フワリと沈みこむようなベッドに横になり、シャルロットは亡き母に呟いたのでした。

現実逃避をしないとなんだか怖い彼女は、小さく彼の名を呟く。

「政庁直属即応鎮圧抹消部隊『ヴィルティラス』所属、シン・アスカ准将」

偉いのではと考えていたが、まさかエリート中のエリート。その上で、彼の師匠はかなり特別らしい。

はあと溜息をついてシャルロットは気分転換のために、庭に出て見ることにした。

ビルの上とは思えないほど、見事な緑で描かれた庭園は、何処とな

く『日本式』に見える。

「和式って言うのかな?」

「ま、元々が帝国は日本ベースだからなあ」

独り言に返答を返され、シャルロットはえっと顔を空へ向けた。

「やつほ、異邦人さん。どうもどうも」

「え、どうもどうも」

長い黒髪と、光に透かしたような紫水晶の瞳。年のころは、二十歳を超えているだろうか。

知っている。彼はあの圧倒的な強さを見せつけた、シンの師匠。

テラ・エーテル。

彼は空中を当然のように舞いながら、ゆつくりとシャルロットの隣に降り立った。

「ようこそ、帝国へ……って締まらないな。ようこそ！ 野望と欲望の渦巻く地へ！」

大きさに両手を広げ、何故か出現したマントを翻す彼は、『フハハハハハ』とか笑っている。

明らかに不審者、だというのにあまりの馬鹿さ加減に毒気を抜かれてしまう。

思わずシャルロットは笑ってしまう。

「お、いいね。いい笑顔だ。初めての地で緊張してないか?」

「大丈夫です。でも、今日は皇帝代理と宰相に会って、少しだけ驚きました」

彼はその言葉に、につこりと笑う。とても人懐っこい笑顔だなあとシャルロットは感じた。

「そっか、アイリスとセラムに会ったか」

「え、宰相さんの名前、あと皇帝代理はアセイラムさんじゃないんですか?」

「愛称だよ。昔、俺が言い難くて『セラムでいいじゃん』って言ったからな。そっから使っている」

彼は懐かしそうに告げて、ニヤリと別の笑みを浮かべた。

コロコロと表情の変わる人らしい、とシャルロットは思いながら

も、相手の目的を聞いていないことに気づく。

「あの、どうしてここに来たんですか？」

「ん、そっかごめん、俺は……」

「師匠!!」

瞬間、彼の姿が消えて、シンがそこに立っていた。

「え?! ええええ?! シン、どうしたの?!」

「シャルロット! 何かされなかったか?!」

「何も。お話をしていただけだよ。え、どうしたの?」

「師匠が『シャルロットに会ってくる』とか言い出したから、心配になっ

焦っていたようなシンと『そんなに悪い人じゃなかったよ』と思っているシャルロット。

そして、二人の背後の空中から盛大な高笑いが響き渡る。

「フハハハハハ! 遅い! 温い! ちょこざいな! まだまだ甘いな! シン!」

「師匠!!」

怒鳴り声をあげるシンの前で、テラは両手を盛大に広げる。

「ようこそシャルロット!! 『俺の帝国』へ!!」

夜空に、一つ二つと花火が咲く。次々に上がる花火に、近隣の人たちが外に出て、あるいは窓から身を乗り出すように見えてくる。

「そしてよくぞ戻った『凍焰の鬼神』! さあ! 皆の者よ! 可愛らしい異邦人の来訪を祝し! 強くなった騎士が戻ったことを喜び!

盛大に祝うがいい!! 今日俺のおごりだ! 帝都中の酒を開けろ! 帝都中の食材を集めろ! 宴の始まりだあ!」

「おおおお!!」

轟音のような叫び声が帝都を揺らす。

「あ……年代物や希少品のワインやウイスキーをラツパ飲みしたら殺す」

「陛下の大馬鹿!」

「やるわけねえだろうがこの馬鹿!」

「常識くらいあるわ! この馬鹿!」

真顔で告げるテラに向けてのヤジの雨あられ。

「……………え？」

シャルロット、その中の一文で気づく。

「シン、あれってテラさんだよね？ シンの師匠の」

「ああ。で、信じられないかもしれないが、『ジョーカー銀河帝国』の皇帝でも有る」

「へえ〜〜〜」

その日、シャルロットは『ジョーカー銀河帝国』について一目でトップ3全員に会った事実を知り。

「宴じゃ宴じゃ！ 夜も忘れて飲んで食べて！ 語りあかそうぜ！」

「おうさ!!!」

とてもノリのいい人が多いことを知る。

「悪いな、シャルロット、こんな馬鹿な皇帝がいる国で」

「ううん、楽しいよ、シン」

「なら良かった。改めて、ようこそシャルロット、俺達の『ジョーカー銀河帝国』へ」

微笑みながら手を差し伸べるシンに、シャルロットは同じように笑顔で握り返したのでした。

後日、国家予算並の資金が一夜にして消えたことを彼女は知り。

二日で皇帝一人で補充したことを知り。

『あ、うん、だいたい解った』とシンに語ったのでした。

テロと馬鹿と、気苦労する人たち

その日、シン・アスカの姿は『ヴィルティラス』本部にあった。

「これが長期出張申請書。これが機体の移動許可申請書、これが機体の戦闘許可申請書。で、こつちが『ディガーター』の使用許可申請書に、使用報告書と使用計画書に、後は使用後の所在地の報告書と、所持者の身辺警護理由と、本人の意思確認における」

ぶつぶつと呟きながら書類を山積みにしていくシンの姿に、誰もが生暖かい眼を向けていた。

行方不明になっていた彼が帰ってきた時、誰もが喜んだ。もう、書類が宙を舞って、本部内が声で揺れるくらいに。

よく戻ってきた、何してきたんだ、何処に言っていた。けがはないか、どんな教訓を得てきた。

なんてことは聞かれない。シンに向けられた言葉は一つだけ。

「よくやった、クルーゼさんの願いをよくぞ叶えた。で、後は皇帝陛下を何とかしろ」

全員が一言一句違えることなく、同じ言葉で出迎えたことに、シンは『怒りや呆れ』より先に、頭痛がしてきた。

また何をやったんだ、師匠は。ちよつと怖くなりつつ、シンは自分の机にある『馬鹿の報告書』と書かれた箱を開ける。

ダンスパーティーのために中央議会の議事堂を制覇。

よし、まだ常識的な行動だ。議員全員にリンボーダンスをさせた、なんてまだまだ謝罪と土下座で終わる。

小学校の遠足のために『サイレント騎士団』総出撃。

シン、思わず報告書を握りつぶしそうになったが、何とかこらえた。いや子供たちのために護衛を出したのか、普通なら危ないところに行く時は軍がつくのだが。警察機構が動いてもいいはずなのに。

いやまった、その前に護衛が必要な場所に見学に行ったのか。何処に行ったのだろうとシンが目的地の書かれた場所に目線を向けると。

『テラ・エーテルによる宇宙誕生の実演』。

何してんだ、あの人は。迷いなく報告書をシンは机に投げつけた。出来るかどうかは『可能』なのは知っているが、まさか子供たちに宇宙の誕生を見学させるためだけに、異世界を作ってビックバンを起こしたのか。

おかげで学校側から『大変に勉強になりました』と感謝状が届き、生徒達から『馬鹿って凄い』といった感想文が届いている。

他は、と次の報告書を手に持った彼は全身の血が抜けるような、そんな脱力感を味わった。

『ふぁんとむたすく一行様の帝国への招待』。

テロ組織じゃないか、あそこ。確か一夏達の世界にいる、テロ組織でISを強奪したり、科学者を拉致したりしていなかったか。

どうしてそんな危ない連中を帝国に入れるのか。シンは心の底から疑問と呆れを感じたのだが。忘れよう、彼はそう心に決めて最優先でしなければいけない書類に手を出したのです。

というわけで、彼は絶賛、申請書類を書きまくっていると。

『ううう、これがティスの稼働許可申請書。これが電子装備使用許可申請書、電子装備の使用報告書、技術協力許可申請書に、技術協力における内容の報告書。戦闘許可申請書と、グステイニーの稼働報告書』

彼の隣で、蜜柑箱を持ち出したティスが必死に似たような書類を書いている。

シン関係の書類はシンが、グステイニー関係の書類はティスがやる、といった役割分担を決めたのは、そうしないと終わらないため。

とはいえ、機体の移動関係はティスの署名で通る書類ではないので、シンがやるしかないのだが。

「はかどってるか？」

「ハイネ、もう書類は見たくありません」

コピーを差し出すハイネは、呆れたような顔で一枚の書類を指差す。

「申請書じゃなくて、事後報告書で書けばいいだろうが。突発的戦闘なら、それで宰相も許してくれるだろ？」

「あ、いやでも部隊長は駄目じゃないですか？」

「部隊長もそこまで鬼じゃないだろうが。全部、『始末書』で纏めて書いてしまえばいいんじゃないか？」

「始末書、書いたことです」

「優等生だったからな、お前は。ほら、これが書式だ」

そつとハイネが差し出すデータ・ディスクを、シンは賞状をもらうように頭を下げながら両手で受け取る。

「ありがとうございます、ハイネ」

「いいって。どうせおまえのことだから、全部申請書類で書いてるだろうって思ってたな」

机に座って微笑するハイネに、『こういうところが多くの人から慕われるところかな』とシンは思った。

「じゃ、早速……つと、そうだ。また師匠がやらかしたみたいですけど、大丈夫ですか？」

とりかかる前に、報告が来ているのかシンが確認ための口に出すと、ハイネはコーヒーを飲みかけた姿勢のままピタリと止まった。

「どれだ？」

コーヒーカップを口から離して、鋭い視線を向ける。

「そんなにあるんですか？」

「報告書に挙げられてない案件なら、すでに十二件ある。現在、作成中だ」

多くないか、それ。シンは喉元まで出かかった言葉を、何とか飲み込んだ。何をやっているのか、あの師匠は。好き勝手にしている、だけならばいいのだが、大抵が誰かを助けるためにやっていることなので、怒るに怒れない。

個人の好き勝手にやっていることなど、今までで『帝国を創った』以外にないのがテラ・エーテルという馬鹿だったりするが。

「いえ、この『フアントムタスク』って連中なんですが」

「……ああ、あの道化師の」

「は、道化師？」

「違うのか？」

真顔で語るハイネに、嘘や冗談といったものは見られない。テロ組織だったはずの『ファントムタスク』が、どういった理由で道化師となったのか、シンは推察できずにいた。

上手い話には裏がある。

彼女はその言葉を今ほど実感できたことはなかった。

話が来たとき、思わず食い付いたのが運のつきかもしれない。

あの仮面の男にすべての太陽炉を破壊され、ISのエネルギー源を失ったこと、新しい技術のために色々と出資していたのに、根幹となるエンジンが失われたことで、すべてが浪費になったこと。

『ファントムタスク』事態も、重大な被害を受けてしまったこと。様々な理由により苦しい立場に追い込まれたとき、彼は目の前に立っていた。

『技術の出所に案内してやろうか』。彼は真顔でそう告げた。普通ならば誘い出すための罠か、あるいは虚言でしかないと判断しただろう。

もしくは技術を持って来させて、相手を利用するだけ利用して捨てるような、そういった対応もできたはずなのに。

何故に乗ってしまったのか。それも自分とオータムとMの三人のみで。色々と思いついてもおかしい話しかない。

彼に案内されて路地裏を進んで、気がついたらここにいた。見たこともない摩天楼、夜空の星に負けないほどの豪華絢爛な都市。

何処だ、と問いかけた言葉に対して彼は答えた。

『ジョーカー銀河帝国』の帝都だ、と。ふざけるなどオータムが怒鳴りつけた時には、彼の姿はなかった。

罠だ。全員が気づいた時には、すでに終わっていた。

見知らぬ地、人脈も資金もない場所に放り出され、身を隠す場所さえ解らないまま、三人は路地裏を歩くしかない。

戻る手段はない、戻る方法もない。

「どうするんだ？」

スコールがあたりを探りながら聞いてくる。

「どうしようもないわね。私のミスよ」

項垂れて路地裏に座りこみそうになりながら、スコールは何とか気力で立っていた。

何故と疑問ばかりが脳裏によぎる、どうして話に乗ってしまったのか、あるいは何時から相手の策略だったのか。

「奪えばいい。何時も通りの話じゃないのか？」

Mが気楽なことを言うが、それが果して通るのか。確実に地球じゃない、都市の形を見ても、夜空に輝く星を見ても。地球のわけがない。人工の光が溢れているのに、夜空にはつきりと星が見えるなんて、今の地球のどこを探してもないのだから。

「スコールが動かないなら、私は勝手にさせてもらう。まずは、そのあたりの通行人を……」

「どうするんですか？」

声は、とても近くからした。

ハツとして三人が顔を向ける先、二十歳くらいの女性が立っていた。

長い銀色の髪と金色の瞳。全身をマントで覆った彼女は、冷たいほどの笑みを浮かべてそこにいた。

「通行人を、どうするんですか？」

「聞かれたならば。ならば話は早い、おまえから……」

「ふむ、どうするといふのかな？」

声は別の方向から、何がと向いた先に男が立っていた。

白いといよりは『鋼のような髪』。黒い肌の、鋭い眼光の男は執事服を纏っていた。

「この帝都でいたずらは駄目」

「オイタもダメです」

また別の声が。違う方向から、二人の少女が歩いてくる。薄い青色の髪と白い髪の少女だ。

「我が君のお膝元で、何をやろうとしているのかな？」

また別の、と三人が顔を向けた先にいたものは、とても許容できなかった。

悲鳴を上げなかったことを褒めてやりたいと、スコールは自分たちの度胸を称えた。

ガイコツだ。ゲームの中にいるようなスケルトン。だが、あの気配はなんだ。ザコキャラじゃない、まるで『死そのもの』といった存在だ。

「改めて、ですが。我が主の帝都で、何をするつもりなんですか？　そもそも、貴方達がここにいること事態、あり得ないことです」

女性が語る、睨むでもなく見つめるでもなく、ただ淡々と。

「主星の結界を破る技能があるとは思えんが？」

男は鋭く見てくる。まるで巨大な剣の前に立ったような圧迫感がある。

「結界は素通りした。つまり、『そう言うこと』」

「酔狂ですね。我が君にも困ったものです」

少女たち二人は無表情だ。まるで感情が揺らがない、こちらのことなどどうでもいいと思っているように。

「さて、な。意味があるのかもしれないが」

ガイコツが笑う。まるで命を吸い取るように。

「……ああ、貴方達がクルーゼさんをだまして技術を持っているた『ファントムタスク』ですか？」

瞬間、圧迫感が増した。周りを囲んだ存在すべてが、だしているなかつた殺気を放つ。

「なるほど、つまり外の世界にいるくらいならば、ここで『踊っている』というわけですね。解りました。貴方達は見逃します」

圧力が消える。同時に女性以外の全員の姿が消えていき、最後に残った女性の姿も幻のように揺れている。

「ですが、『許した』わけじゃありません。クルーゼさんを裏切ったこ

と、我が主が許しても私達は許さない。ずっと見ています。貴方達がどう行動し、どう考え、どういった結果を出すのか」

ユラリと揺れて消えた女性は、声だけがその場に流れる。

『忘れないことです。貴方達は『クルーゼさんの温情で生きていること』を。誰かの役に立ち、誰かの笑顔の代価を得られないならば、貴方達に生きている資格はない』

ユラリユラリと声が揺れる。姿がないのに、声だけは確実に聞こえてくる。まるで耳元で囁かれているように。

『命尽きるその瞬間まで、帝国の『楽しみ』のために踊りなさい、道化』
声が途切れ、次の瞬間にスコール達は悲鳴を上げた。

「だから、道化師だって。今、何だか芸人みたいに人を笑わせているぜ」

「ええ？ いや、そんなはず。人違いかな？」

「なんなら後で見に行くか？ チケットとってやるからシャルロットと見に行つてこいよ」

さりげなくデートしてこいって意味に聞こえるのだが、シンは『違いますよね』とハイネに目線を向けたが、彼は小さく視線を反らした。

「あの」

「シン」

ゾクつと背筋が凍った。

まるで油の切れた機械のように、シンはゆっくりと首を回す。

ハイネはそつと気配を消して離れていく、強く生きろよと心の中で祈りながら。

「や、やあ」

振り返ったシンが見たのは、何故か『神剣』を持っているティーラだった。

「お帰りなさい、シン。戻ったのね？」

「あ、うん、ただいま」

「そう・・・死ね」

「だああああ?!」

鋭く突っ込まれた切っ先を回避して、シンは大きく飛び退く。

「嫁を連れてきたとはどういうこと!？」

「待った！ 何か誤解があるから！」

「全員が知っているわよ！」

「誰だ?! そんなデマ流したのは?!」

反射的に室内を見回す。今日は珍しく『ヴェルティラス』全員が本部にいるため、誰か答えを知っているのではと思っていたシンの視界に、全員が顔をすらす光景が映った。

嘘だ、シンは項垂れる。あの真面目な刹那やスザク、頼もしい存在のハイネはもちろん、ガイやゼンガーの親分さえも。

「お、俺は・・・帝国のノリとギャグとジョークのためなら命がけ」つて気質は大っ嫌いだああああ!!」

「待ちなさい！ シン!!」

追いかけるティーラから何とか逃げながら、シンは心の底から叫んでいた。

師匠のようになりたくなかったが、どうやら自分は知らず知らずのうちに師匠に似てきたらしい、そんなのは嫌だ、と。

後の世に『フロントムタスク』と呼ばれる事務所が、伝説として語り継がれることになる。

世界中のすべてを笑わせ、ギャグで世界を回し、ジョークを潤滑油にして、コントで戦争を止めた、とされる伝説の芸人を排出した大手事務所。

笑いに生きたいならば、そこを目指せと呼ばれるその始まりを、
誰もが知らなかった。

初代メンバーの三人は、始まりのことを誰にも語ることなくこの世
を去ったという。

『我ら、見事にやり遂げた』と言い残して。

継承権

「貴方、休んでないでしょう？」

「え？」

「うちはブラック企業じゃないから休みなさい」

「え？」

それはある日の午後、やつとできた報告書を持っていった時に、シン・アスカは何故かそんなことを言われた。

珍しく部隊長の部屋にいた宰相に告げられ、シンは最後に休んだ日のことを思い出す。訓練していた、違うこれは業務。皇帝を追いかけていた、これも業務。仲間うちからの襲撃を受けた、これも業務。

熟睡していたら、妹の襲撃を受けた（物理的に殺されるくらいの）。

これが休み。何故だろう、シンは何故か目から汗が出てしまう。

「泣くくらいなら定期的に休みをとりなさい。潜入任務中でなければ、ある程度は融通がきくでしょう？」

優しく穏やかに語りかけてくれる宰相に、シンは『ありがとうございます』と告げながら理由を説明した。

「家にいると、妹が殺しに来るので」

「……あの子の向上心は後でどうにかしてあげます。自宅がダメなら宿泊施設か、あるいはシャルロットのところに泊めてもらいなさい。あの子の家、部屋数は余っているでしょう？」

好意で提案してくる宰相だったが、シンは小さく首を振った。

「シャルロットのところに泊まると、ティーラとシエリルが俺を殺そうとするので」

あまりの内容に、宰相は眩暈を感じて倒れそうになったという。

「ヤンデレは死ぬわよ、シン」

「お、俺が悪いんですか？」

「もういつそのこと、『全員、俺が嫁にしてやる』って言ってみればいいじゃない」

「いや、それもどうかと。って、なんで俺が結婚する前提なんですか

？」

納得しかけて慌てて否定してみれば、宰相は意外そうな顔をしているから不思議だ。

「結婚するしかないじゃないの。違うかしら？」

否定しなかった。拒絶したかった。けれど、現状を考えると他に手段がないように思えるから、かなり追いつめられているのかもしれない。

「俺はまだ……」

「そうそう、シン。貴方、リタに何かした？」

グサリと見えない何かの胸を貫いた。

「ど・う・い・う・こ・と・か・し・らう？」

目が笑っていない宰相がいて、呆れている部隊長がいて。その間にいるシンは自分の不幸を呪ったのでした。

「は、はは、シンってたらしだったんだ」
「あんな」

苦笑しつつもちよつと怒っているシャルロットに反論しながら、シンはゲートを潜り抜ける。

あの後、たつぷりと三時間ほどこの詳細を説明させられ、ならば『嫁にするしかない』と結論を出され、それに対しての説明を三時間ほどさせられたシンは、ぐったりして実家へ戻り。

予定通りに妹に襲撃されて、疲れた顔でシャルロットと合流を果たした。

日用雑貨を買い物に行きたいから付き合つてといわれ、『解った』と答えていたのだが、今日は何処か安全な場所で休みたい気分になってきた。

「妹さんって過激なんだ」

「今日はまだマシだったかな。対人地雷だけだったし」
「え?」

物騒な代物の名前を聞き固まっているシャルロットの正面で、受付をしている男性が『え、それだけですか』という顔で固まっている。

「え? え?」

「ええ、あの『戦華』が対人地雷のみですか?」

「嘘でしょう、シンさん。対戦車地雷とか対人型兵器地雷じゃないんですか?」

「まさかあ、あの『戦華』がそんな優しいことするわけないじゃないですか」

「夢でも見たんじゃないの」

「いや、マジで」

シンが本当だと告げると、周り中が騒がしくなってくる。

「明日、世界が終わるかな?」

「俺もそう思う」

「待って待って! そのレベルでの話なの?!」

慌てたシャルロットの叫びに、誰もが頷いているから、普段のマユの攻撃がいかに酷いか解る。しかも、自宅で熟睡しているシンに対しての攻撃だ。

「兄妹仲って悪いの?」

「普通だと思うけど」

「あ、そう。そっかあ」

普通ってなんだろう。そうか、帝国では兄妹の間で武器を使うのが普通なのかとシャルロットはちよつとだけ項垂れていたという。

「ところで、このゲートって何用なの?」

「帝都の中でも政庁は特別地区だからな。出入りの時は認証が必要なんだよ」

「へえ〜シンは?」

「俺は『ヴィルティラス』だから顔パス」

エリートだから特別扱いか。シャルロットはそう思っていたが、真

実は違う。彼らが出入りの度に止められていては、緊急時に致命的な遅れになってしまうことがあるため、こういったゲートでの認証は行われていない。

ただ、対外的に実行していませんでは防犯上の観点から、とても不味い話になるので『顔パス』になっているとされているだけだ。

シャルロットの認証が終わると、二人は電車に乗った。

「で、何が買いたいんだ？」

「色々だよ、女の子は色々と必要だから」

「じゃ、大型モールでいいか。あそこなら大抵のものは手に入るから」
「そんなところがあるの？」

「ああ」

あれができた時は大変だったと、シンは昔を懐かしむ。

帝都なんて国家運営のための設備があれば十分。他なんて必要ないとか最初はテラが言い出して、アセイラムとアイリスも否定はしなかった。

しかし、だ。人は増えて、国家の規模が大きくなれば運営に携わる人も増えてくる。次第に帝都が大きくなり、色々な公共設備が増えてくれば、当然ように家族も増えてくる。

そんな中でも、帝都の政庁周辺は誰も住まわせないと言っていたが、これだけ規模の大きくなった帝国だ。帝都に住みたいと思う国民も多くなってきて、やがて一般人たちからも『帝都周辺に企業の本社とか置きたい』、『帝国の中心ならば色々と便利そう』という意見が出てきて、最終的に宰相であるアイリスが折れる形で住民を受け入れ。

人が増えれば当然、商業施設も設置しなければいけなくなり、大型モールを整備するしかなくなり。

結果、帝国中の企業から応募が殺到。

信じられないかもしれないが、テラの皇帝としての支持率はとても高い。危機に対して隣にいます状態のテラは、素で帝国中を回って問題解決しているように誰もが思えるほど、色々な場所に出現する。

その気質は帝国政府関係者にも伝染して、問題や危機に対しての迅速な対応に繋がっていく。

同時に政庁で帝国を回している皇妃達の人気も高い。福祉事業や議会などにいる皇妃達の人柄や、その仕事っぷりを見ている人たちからの噂が民間にも流れている。

そんな中で、今まで帝都になかった商業施設の建設の話。誰もが食いつくのは目に見ていたのだが、意外にも宰相のアイリスと皇帝代理のアセイラムは欠片も考えていなかった。

二三件くらい集まればいいか、と考えていたところ帝国中の企業が参加を表明して、大抽選会に発展。個人経営から大企業までの、とても醜くて滑稽な争奪戦となった。

「本当、大変だったな」

「え、え？ 何が？」

困惑しているシャルロットに、シンは改めて警告を送る。

「いいか、帝国は『ノリで行こうぜ』とか、『ギャグのためなら命がけ』なんてことがあるから、気をつけろよ」

「え、あ、うん、たぶん、解った」

初日のことで気づいてくれたか、とシンが安堵してシャルロットが見ている窓の外に視線を投げる。

「……………」

「……………うん、いいところだね。シン」

「……………」

「シン！ しっかりして!!」

胃のあたりを抑えて蹲るシンを、シャルロットは必至に慰めたのでした。

窓の外から見えた景色、そこには馬鹿が立体映像で『へいらっしやい！ 今日野菜がお買い得だよ！』とかやっていたりする。

平日の午後、人ばかりいる大型モールなんて、来るものじゃない。

「あれってシン・アスカよね？」

「え?! 『凍焰の鬼神』が来ているの?!」

「誰かペンを持ってない?!」

「きやああああ!! シン・アスカ様よ!!」

その日、大型モールに近場の警察機構が動員されたのでした。

『馬鹿もの』

「はい、すみません」

状況鎮圧の後に警察機構の偉い人から、ありがたいお説教を貰ったシンは、その後にもたまた部隊長から通信越しにお説教を貰うことになった。

『まったく、これでは次期皇帝など任せられんな』

「え? 部隊長、今なんていいました?」

初めて聞く話に、エイルンに疑問をぶつけると、彼はしばらく黙った後で呆れた顔をした。

『聞いていないのか?』

「はい、いや待ってください」

『本当に知らないのか?』

「ちよつと待ってください!」

『……次期皇位継承権の第一位はお前だぞ』

驚愕の事実が、シン・アスカを襲ったのでした。

隣で聞いていたシャルロットも驚いてシンを見ているが、彼本人としてはそれどころではない。

「何時の話ですか?!」

『かなり前だな。おまえが『ヴィルティラス』に入って一年が過ぎたころに、皇帝陛下から発表があつたが。知らないのか?』

「知りません」

本当にかなり前の話だ。何故、自分だけが知らないのか。そもそも皇位とはテラの血筋が受け継ぐものではないのか。世襲制が当たり前の話が、何故に弟子である自分のところに回ってきたのか。

シンの頭の中で疑問が色々と渦巻いているが、答えを知っている人物は生憎と近くにいない。

『宰相、シンは知らなかったようですよ』

気の効く男、エイルンの計らいで宰相のアイリスに通信が繋がる。

『本当に知らないの、シン？ テラがかなり前から言っていることよ？』

「知りませんでした」

『はあ。まったく、あの馬鹿は。そもそも、テラに子供が出来なかったらという前提条件だから、安心していいわよ』

「あ、それなら」

『飽きたから押しつけるって言う可能性もあるけど』

彼女の言葉に、シンは否定しかけて否定できずに言葉を飲み込んだ。あり得るだろうか。あのテラに限って、飽きたといって自分に押しつけることが。

人の不幸を喜ぶことはなく、責任感は一人はあると考えるはいるが、責任感があるならばこうやって毎日のように帝国を飛び回るのは、責任感がある人間のすることか。

いや、そもそも、だ。テラが皇帝として執務をしている姿を見たことがない。執務室もない、そんな彼が皇帝という権力に固執するだろうか。

間違いなくしない。『なにそれ、おいしいの』程度の認識しかしてない可能性の方が高い。国を作った理由は知らないが、投げだしてもおかしくない。

『テラとしては、どうしても帝国が必要だったわけじゃないでしょうけど』

『当時の状況で言えば国が欲しかった。けれど、今はどちらでもでしょうね』

話の途中にアセイラムも加わったことで、現実味が出てきた。

面倒くさくなったらシンに丸投げ。いや、師匠は、テラ・エーテルという人物はそんなに短絡的な存在ではないはずだ。

『いいや、あいつは短絡的どころがある』。脳裏で死んだはずのクルーゼが項垂れていたが、無視しよう。シン・アスカの精神的な安定のためにも。

「お、俺には無理ですから」

震える声で否定すると、アイリスとアセイラムから頷かれてしま
う。

『議会の方から『継承権に名前がないのはおかしい』と言われたから、
適当に名前を上げただけだから、安心しなさい』

『無理やりに押しつけませんよ』

『そもそも、私たちが実際に帝国を動かしている状態で、貴方に丸投げ
すると思うの?』

なるほど、それはない。と、シンは少しだけ安堵した。

『子供ができたなら丸投げでしょうけど』

『アイリス、私が先です』

一瞬だった。何故か目の前で宰相と皇帝代理の間で火花が散って
いた。

『とにかく名前だけ借りているだけよ』

最後に念を押して、宰相は通信を閉じた。

「……本当ですか?」

『俺に聞くな。帝国はこう、規格外や常識知らずが多すぎる』

頭痛を抑えるように顔を手を置いた部隊長の姿に、シンは『そうで
すね』と苦笑したという。

実際に買い物に行くのは駄目なので、ネット注文を試すことにした
のだが。

『ふえ、バツタに頼めば?』

「あ」

ティスからの提案を受けて、非常に残念ながら、誠に遺憾であるが、
とても頼りたくはないが、師匠に連絡を入れることにした。

『いいよ〜』

「ありがとうございます。ところで、師匠、俺の皇位継承権について話が」

『ん、任せるつもりはないけど、名前は貸せ』

「何処の高利貸しですか？」

『どちらかといえば、悪徳業者かな？』

「いやいや、師匠。そこは否定していただけますよ」

慌てたように告げると、彼はちよつと考えこむような仕草の後に、ニヤリと笑う。

瞬間、シンは嫌な予感がしてきた。

『世の中は無情なものさ、シン』

「なに、悟ったような顔で言ってるんですか」

『さて問題です、今俺は何処にいるでしょう？』

「はあ？」

唐突だなあと思いつつ、ヒントを探そうと師匠の画面を見てみると、ふとおかしい点に気づいた。

何故、ビルが『逆さま』に映っているのか。ビルに張り付いているのか、それとも、何処かでループでもしているのか。

シンはそこで気づく。師匠が逆さになる状況は、一つしかない、と。

「政庁ですか？」

『あたり。今、罰則の最中』

「はい、お疲れ様です」

『おうよ、じゃバツタを送っておくね』

につこり笑顔を浮かべるテラのモニターからは、『この馬鹿夫！何をしているか解っているの!?!』とか宰相の叫び声が聞こえてくるのだが、無視することにした。

「シン、どうだった？」

「その道のエキスパートを送ってくれるってさ」

「でもいいのかな？」

「いいんじゃないな」

通信を閉じ、師匠の冥福を祈りながら、シンは思う。

当分、自分が皇帝をやるようなことはないな、と。

いやもしかして、誰の名前を書くと言われた時に最初に自分の名前が浮かんだのだろうか。

ちよつとだけ、シンは嬉しく思えたのでした。

後日、その時の話をテラは語った。

『え？ 何でシンの名前かって？ 俺の弟子はあいつだからな、俺の後を継ぐのもシンしかないだろ？』。

彼はその話を聞いて、不覚にも泣くほど嬉しかったという。

ジョーカー銀河帝国における最重要施設

五つの太陽系を支配下におく、劣悪なる絶対帝国主義の国家。
一人の皇帝が自由気ままに国家運営を行い、その妻達たる皇妃が好き勝手に人民を惑わす。

悪鬼羅刹が優しく見える、極悪魔王の支配下におかれた人民達を救うため、多くの民主主義の国家が戦いを挑むべく努力を重ねている。

打倒、ジョーカー銀河帝国。

抹殺するべきは、暴君テラ・エーテル。

「つて言われてるといいなあ」

「殺されたいのね」

うっとりとはいた彼に対して、休暇を楽しんでいる宰相はそつとハンマーを取り出したのでした。

帝都のある場所に、それはひっそりと店を構えている。

路地裏ではないが、大通りより少し入った場所。隠れ家のようにあるビルの地下一階。薄い電灯が照らす階段を下りた先にあるのは、重厚な木製のドア。

錆ついてはいないが、開ける時に小さく『キィ』となるドアを、ゆつくりと開けると最初に目に入ってくるのは木製のカウンターテーブル。

古い時を過ごし、長い時間をそこで過ごしたようなクラシカルなテーブルには、お似合いの昔を懐かしむような椅子がいくつか並ぶ。

照明は抑えめで僅かな灯火のように天井から光が下りて、店内は薄暗く感じるが、足元が見えないような暗さではない。

まるで夕暮れの後。子供のころ、遊びに夢中で気がつけば夕暮れだった頃のような、何処か懐かしく感じる店内には、他にテーブル席が六つほど。五人くらいでかければ一杯になるようなテーブル席は、やはり革製のイスと木製のテーブルがあり、何処か懐かしい香りがある。

重いドアが入る者を拒むように立ち塞がるが、一度でも開けば店内の雰囲気招かれるように自然と足を進めてしまう。

「いらっしゃい」

小さくはなく、けれど決して大きくない穏やかな声。店内の雰囲気を壊さないしつかりとした言葉に顔を向ければ、カウンターの奥で一人の店主がこちらを見ている。

薄暗い店内なのに、何故か彼の顔はしつかりと見える。温和な笑顔で『どうぞ』と無言で告げている彼に誘われるように、足に続いて体も店内へと入れば、後はもう外面や建前なんて言葉は、チープなものではない。

促されるようにカウンターに座ると、彼の背後には無数の物語が『今日はどうしますか』と声をかけてくる。

人の声ではない、無機質なガラスと小さな無数の言葉に彩られたそれらは、一つ一つが多くの人が紡いできた結果の物語。

大地の恵みを受け入れ、先人の知恵を頼りに、無限の時の先のため今日の仕込みを行う。

古来から続く命の螺旋の果て、世界中から、あるいは次元世界の果てからも送られてきた物語は、それだけで多くの言葉を語りかけてくる。

今日は誰と語ろうか、あるいは誰の物語を楽しもうか。悩むところだが、ここでは悩む必要はないだろう。

目の前の彼は、穏やかに微笑みながら無言で語る。どうぞ、自由にどうぞお好きなものを、と。

自分で選ぶのもいいだろう、自分の好みをあるいは今日の気分を。

でも今日は彼に任せて見せよう。彼ならばこのすべての物語を知りつくし、また幾多の物語を兼ね合わせ、まったく新しい話を作り上

げるのだから。

ここは、『イーデンホール』。昔、妖精たちがこっそり酒を飲んでいった場所、そこに残した幸運と奇跡の名前を持つ場所。

グラスの中で氷が音を奏でる。見つめる琥珀色の液体の中、真っ白の氷は小さく声を紡ぎながら、ゆっくりとグラスの中で踊る。

「師匠、本当にいいんですか？」

グラスを見つめていたシンは、隣を見ることなく言葉を紡いだ。

「なんだよ？」

彼の隣にいるテラは、手に持ったグラスをゆっくりと傾ける。口から入り、喉を通った液体が、ゆっくりと体にしみ込み、その先の魂に届きそうな錯覚を感じた。

「俺でいいんですか？」

疑問の主語を入れてみるも、シンの方をテラは見ることはなく、皿の上に載せられたシヨコラの一つを、口へと入れている。

「おまえの帰還を祝ってやっているだけだ、不服か？」

普段の雰囲気とまったく違う、落ち着いた大人というテラは、再びグラスを傾ける。ゆっくり少しずつ流し込むように。

「そりゃ、嬉しいですけど」

シンは言葉を濁す。前の世界では未成年扱いだったから、バーに行ってもアルコール類は飲めなかったが、ここージョーカー銀河帝国ならば成人扱いなので飲酒しても法律違反にはならない。

それに、とチラリとシンは目の前にいる男性に視線を向けた。

オールバックの髪型とタキシードの制服。グラスを磨く男は、瞳を閉じているようでこちらを『見ている』。

「では、私からも何かお祝いをしましょうか、シン？」

「いえ、そんな『ササクラ』さんから貰えませんか」

「そうですね？」

にっこりと笑みを浮かべながら目線を向けてくる男、リュウ・ササクラにシンは『当たり前じゃないですか』と答えた。

「俺はササクラさんのカクテルが飲めるだけで、『戻ってこれた』って思えるんですから」

本当にそう思う。初めてここに連れてこられた時、出された一杯を飲んだ時の感動をシンは忘れたことはない。

師匠のテラが、『魂を救う一杯がある』と妙に真面目な顔で語っていたから、余計に興味があったのだが。

まさに、その通りだった。

「ありがとうございます。私もまたシンに会えてうれしいですよ」

穏やかに優しく語る彼は、やはり誠実で立派な大人に見える。

年齢ではない、積み重ねた経験と知識、何よりも仕事に対しての誇りが彼の背筋を伸ばして、けれど周りに圧迫を与えずに穏やかな気持ちにさせてくれる。

「ありがとうございます」

「本当ですよ。テラ、次は何にしますか？」

話の矛先は、シンの隣に向けられる。

彼は空になったグラスをそっと差し出し、棚のほうへと視線を向けた。

「同じもの」

見つめる先には一つのボトル。今日は珍しくカクテルではなく、テラはずっと同じものを飲んでいた。

「今日はウイスキー尽くしですね」

ササクラがボトルを持ち上げる。銘柄はシンも見たことがある。最初にテラに連れてこられた時に、彼が飲んでいたウイスキーだ。

「命の洗濯がしたいので、『命の水』ばかりが欲しくなりますよ」

「そうですね。貴方の前に、そう言った人がいましたよ」

ササクラの言葉に、テラは『そっか』と答えて小さく頭を下げた。

「すみません、バーの約束事を破らせました」

「本来ならバーテンダーとしては許されないことでしょうが、今回だけは特別としておきましょう」

グラスに再び注がれる琥珀の色。そつと出されたグラスは、二つ。一つを手に持ったテラは、ゆつくりともう一つのグラスに触れさせる。ガラス特有の澄んだ音が穏やかに流れ、テラは小さく微笑した。「お疲れ様、ラウ。ようやく休めたな」

シンは隣で聞きながら、自分のグラスも同じように触れる。

「ありがとうございます、クルーゼさん。俺はおかげで、もつと上に、強くなれました」

謝罪をシンは口にしない。命をかけた相手の願いを無碍にしないために、彼の想いを消させないために。

サクラは何も言わない。無言で微笑みながら、穏やかにグラスを見つめている。けれど、彼の瞳は語る。「貴方がもう来ないと寂しくなりますね」と。

しばらく無言で酒を飲む。どちらも語りた言葉は多くても、声に出すことなく酒に溶け込ませ、大きく広くグラスの音で語る。

懐かしい想いと、二度と戻ってこない寂しさと、未来への希望を。

故人への想いを果たせるものがあるならば、生きてる者へ想いをかけることもある。

「そうか、逝ったのか」

赤い髪の男が、小さく呟く。グラスの上から手で持つ独特の持ち方をする男は、溜息を酒に溶け込ませ煽る。

「ああ」

隣にいる男は言葉短く語る。彼の最後を、彼の生き様を。

「思い返せば、俺たちも長い付き合いだったな」

赤い髪の男は昔を懐かしむ。最初に会った時、仮面を被ったあいつに不審感しかなかった。

言葉は綺麗事で、理想を語っているようで、裏側があるような曖昧な印象を与えてくれる。そこにいるのに、何故か一歩だけ前にいるような気持にさせられた。

実力は、問題なかった。性格もいと周りが褒めていたことが、小さく苛立っていた。

「あいつは道化を演じてても、周りを鼓舞する男だった。いや、騎士だった」

一方の男は、珍しく饒舌に語っていた。普段は寡黙で多くを語らないのに。

「勝手に逝っちゃまったのか。俺に手紙一つよこさないで」

憤りを持ちながらも、男の手はグラスを握りつぶすことはない。怒りを感じたとしても、それを周囲に放つことはない。

ここは、そう言った場所ではないから。

「俺たちに気苦労をかけたくなかったのだろう」

男はそう語る。

他人に甘く、優しく、時に厳しいくらいに導いて教えを授けながらも、絶対に自分を甘やかすことをしない男だった。

ラウ・ル・クルーゼという騎士は。

「俺はもう退いた人間だ」

赤い髪の男、アリアル・サーシエスは奥歯をかみしめるように告げる。自分が選んだ道に後悔はないが、決めたことを悔やむ気持ちもない。

「俺は気づいてやれなかった」

もう一人の男、ゼンガー・ゾンボルトは鉄の仮面のように表情を変えない。内心で様々な感情が渦巻いていても、外に出すことはない。

「もう少し色々と言りたいかったな」

サーシエスはグラスをもう一度と煽る。最初は嫌悪だった、その後

にぶつかりあった、最後には戦友といえるくらいにはなっていた。

「ああ」

ゼンガーはグラスを飲み干す。饒舌な男だった、真実を語るも嘘くさい印象を受けていた。彼は自らが語る言葉の数万倍も、その行動で示した男だった。

「会えるなら会って殴りたいぜ。どうして、俺に何も言わなかったってな」

「俺もだ」

二人して言葉をこぼす。空になったグラスには、氷よりも二人の無念さが残っているように思えた。

悲哀ばかりの空間は息が詰まる。時には必要なことでも、悲哀だけではないのが人生だと、誰かが言っていた気がした。

「だから、僕は言ったんだ。『お酒が飲みたい』って」

男の一言に、隣でグラスを傾けていたメガネをかけた青年が、『え、本気で言ったの』と驚愕に顔を染めた。

「お説教の最中だったんだよね？」

本気なのか、冗談でしょうと思いつつもメガネの青年は問いかける。

「お説教が怖くて、酒は飲めない」

もうすでに赤い顔の青年は、真つ直ぐに断言した。

「はあ。本気でやったんだ。あのね、キラ」

名を呼ばれ、顔を真つ赤に染めたキラ・ヤマトは、半眼で丸メガネをかけた野比・のび太を見つめる。

「奥さんを心配させておいて、『お酒が飲みたい』はないと思うよ」

呆れた顔で告げるのび太だが、この幼馴染がこういった状況で退いたことがないことをよく知っている。

他のことは優柔不断で、時にまったく逆方向へ話が進むのに。何故

か酒に関してはキラ・ヤマトは、まったくの『ダメ人間で役立たず』になる。

「お酒は僕にとつての命だ。それを奪うなら、フレイだつて許さない」
キラッと決め顔で告げるキラは、とてもかっこよく見えるのだが、言っていることは最低以下だ。

「ササクラさん、どうしましょうか？」

困ったのび太が、他のテーブルにカクテルを持って行つて戻つてきた彼に問いかける。

「お店としては売上が伸びて大変、嬉しく思うのですが。人間としては少し考えたほうがいいといえますね」

困った顔、ではなくやはり穏やかな微笑みを浮かべながら彼は、キラに優しく語りかける。

「で、でも。僕はお酒が飲みたいんです」

ササクラに言われると弱いキラは、ちよつとだけ怯んだのだがすぐに持ち直した。

彼の何処にそれだけの根性があるのだろう。軍事訓練に放り込んだら、一分後には姿を消しているのに。

「君がお酒好きなのは知っているけど、さすがにそれはないよ。フレイだつてそろそろ本気で怒るんじゃないの？」

のび太はちよつとだけ苦言を伝える。

離婚とか言い出さない彼女が不思議でしようがない。結婚してからキラがお酒で馬鹿やった回数は数知れず。一時期などは政庁に始末書が舞い込むくらいに大事になったのに。

「フレイなら、解つてくれるさ。僕がお酒好きでお酒に命をかけているって」

キラはやはり言い切り、グラスに入ったカクテルを飲んだ。

「離婚とかされないの？」

最悪の結末を告げるのび太は、心配しつつカクテルを飲む。ショー
トカクテルをあまりに放つておくのは、良くない。

なんだかんだといいつつ、のび太もかなりカクテル好きだ。幼馴染の悪影響があるのは間違いないが。

「それは僕も不思議なんだ」

心の底から不思議そうに告げるキラがいた。

「でもね、お酒に命を賭ける僕だけど、フレイのためなら地獄の底にだって行けるから」

急にノロケるキラは、そのままテーブルに顔をつける。

「大好きなんだ」

ニヤニヤと笑いながらそのまま突っ伏したキラを横目に、のび太は小さくため息をついた。

「すみません、ササクラさん」

「大丈夫ですよ。もう名物みたいなものですから」

何処までも優しい彼の言葉に、のび太は深々と頭を下げた。

人と語りながらの酒も美味いが、気の知れた仲間と飲むのも、また格別な味わいがある。

「すみません、もう遅い時間でしようか？」

男は扉を少しだけ開けて、店内に視線を走らせながら告げる。

「いえ、まだ大丈夫ですよ。どうぞ、いらっしやいませ」

ササクラは笑顔でカウンター席を示す。

「珍しい時間にいらっしやいますね、ルルーシユ」

名を呼ばれた彼は『ええ』と答えながらカウンター席に座る。

「急にテラから、『イーデンホールに集合な』と連絡が来たもので。まだ来てないですか？」

店内には誰もいないことは確認できたが、ルルーシユは油断せずにいる。彼のことだ、唐突に現れてもおかしくはない。

いや、この店に限ってそれはないか、と彼は思い直してササクラへ言葉を向ける。

「テラは今日は来ていませんね。二日ほど前にシンと一緒に来店され

ましたよ」

おしぼりを渡しながら、ササクラは答える。

「そうですか」

何がしたかったんだ、とルルーシュが疑問を感じていると、ドアがゆっくりと開けられた。

「待ち人、来るといったところですか。いらっしやい」

ササクラがドアを見つめ告げると、ルルーシュも自然と視線を向ける。

「お待たせ、ルルーシュ」

「すみません、ササクラさん」

「また来ました」

テラが片手を軽く上げて入ってきて、その後ろからのび太が申し訳なさそうに入り、最後にキラがウキウキ笑顔で入ってくる。

「なんだ、同窓会でもするのか？」

面子を見たルルーシュが呆れたように告げると、テラは彼の隣に腰を下ろす。

「久しぶりに飲みたいなあってさ」

彼は小さく苦笑して、すぐに顔を引き締める。

「僕もさつき、政庁で捕まってね」

ルルーシュの隣、一つ開けてのび太が座る。

「僕は最初から『行こう』って言っていたから」

のび太とルルーシュの間にキラが座り、嬉しそうに棚へと顔を向けた。

「このメンバーで飲むのか。久しぶりだな」

ルルーシュはちよつとだけ呆れながらも、何処か嬉しそうに語る。

「久しぶりだからな」

「本当だね」

テラが微笑みながら告げ、のび太が前は何時だったかと思いだそうとする。

「いいじゃん。何時の事だって、僕たちは幼馴染で仲のいい親友で。

ここは『イーデンホール』でお酒が飲めるんだから」

「短絡的な言い方をするキラに、他の三人が半眼を向けるのだが、彼は気づくことなく柵を見つめていた。

「さあ、何にいたしましたしょう?」

サクラが微笑みながら告げる言葉に、四人も笑顔を浮かべてそれぞれの注文を口にしたのでした。

帝都のある場所に、それはひっそりと店を構えている。

路地裏ではないが、大通りより少し入った場所。隠れ家のようにあるビルの地下一階。

何処か懐かしい雰囲気と、ノスタルジーを感じるような店内の中、何時も穏やかに微笑みを浮かべる男が店主を務める場所。

かつて、妖精たちがおいていった幸運が飾られたバー。

ここは『イーデンホール』。百万の酒という物語を楽しみ、またその物語を束ねて新たな話を聞かせてくれる店。

魂を救う一杯。

その場所では表に出すことない騎士達の喜怒哀楽が、ゆつくりと昇華されていく。

昔を懐かしみ、故人を弔い、あるいは自分達の不満を発散させ、時に気の知れた者達と大いに語る場所。

そして、『ジョーカー銀河帝国』において、政庁以上の最重要指定をされている、多くの人の魂を癒す揺り籠。

シン・アスカのとても長い長い一日・1

強さとは何か。多くのものが疑問を浮かべ、答えを探す問題であり、一口ではとても表せない深い問いかけでも有る。

近年、遠距離武器の発達により相手との距離が開けば開くほど、武器も多様化していくので、一口に強さといっても武器の種類によって様々な戦い方が行われるので、誰もが解るような強さは『あり得ない』とされている。

戦艦、航空機、機動兵器、あるいは重力兵器や空間兵器。大量破壊、あるいは広域破壊兵器の前に個人の力など無力なものだ。

ならば、強さとは兵器の優秀さということになるのだが。そんなことはない。

ジョーカー銀河帝国においていえば『強さ』とは、いかに自分の得意分野に相手を引き込み、自分の土俵で戦えるか、となる。

身体的特徴、外見的特徴。基本能力、武器の種類、スキル、魔法、あるいは付加されている能力等等。多種多様な手段を用いて、相手はこちら側に引き込むのは、戦闘を行う上では必須なスキル。

結界に引き込んだの戦闘は、特に自分の土俵に相手を引き込みやすいとされており、中でも『固有結界』は最強不敗とまで言われている。「何の冗談だね？」

とある場所で執事服の男が、呆れたように告げたが、今は関係ない。

『固有結界』っぽい魔法やスキルを使う存在は、ジョーカー銀河帝国に八人いるが、今回の話には関係ない。

つまり何が言いたいかというと、『色仕掛け』も立派な戦術になるらしい。

早朝五時といえば、大抵の人が夢の中。夜勤でもやっていなければ、起きていることなど稀だろうか。早朝から仕事に入る人もいるが、一般的な人たちは普通は寝ていることだろう。

シン・アスカも夢の中にいた。先日の宰相の『休みなさい』発言と、大型モールを混乱に落とした罰則のため、『謹慎三日』を言い渡されたので、今日は珍しく家で熟睡中。

いつも襲撃してくる妹は、軍務のために一週間はしないと連絡を受けたので、今日は穏やかにすやすやと夢の中。

「シンの馬鹿あああ!!」

夢の中で何故か殴られるっていうオチがなければ、絶対に起きないだろう休日の朝だったりする。

「……今の誰だ?」

なんだか複数の女性から殴られた気がした。金髪でフワフワカールの少女とちよつと赤い髪のサイドテールの女性だった気がする。

「りりかるってなんだっけ?」

何故か頭に浮かんだ単語を余所に、二人の存在の向こう側にいたメンツの一人には見覚えがあった。

確か、士郎さん家の次女だった。名前は確か、高町・なのはだったような。接点はあるが、二度か三度ほど挨拶した程度なので顔見知りくらいでしかないのに、夢にまで出てくるとは。

「はあ……おい、マユ」

「あれ、お兄ちゃん、なんで起きてるの?」

何故か、ドアのところ立っている妹からの疑問に、シンは盛大に溜息をついた。

もう夢のことなど何処かに行ってしまったって、視界の中に彼女を入れつつ体をベッドから動かす。

「おまえこそ、軍務じゃないのか?」

「ラクスさんが参加したから」

一言で解る、演習が強制終了になった原因にして、妹が戻ってきた最大の理由。きつとまたあの砲撃馬鹿歌姫が開幕から最大火力を

使ったのだろう。

「絶好調でノリノリで最初から歌っていたから」

「被害は？」

「中央四軍はしばらく軍事行動不能」

何をやらかしたんだ、あの暴走歌姫は。ちよつと気になったシンだったが、余計なことを聞いて頭痛を味わいたくないので忘れることにした。

「バスターランチャーと相転移砲と波動砲をマシンガンみたいに撃ちまくったから」

「知りたくなかったよ」

無情だ。なんであんなブレーキのきかないレーシングカーみたいな奴に、惑星クラスの大規模ジェネレーター搭載型の試作機動兵器を回すのだろうか。

「で、また俺を襲うつもりだったのか？」

「え？ うん、違う・・・かな。襲うつもりだったけど」

妙に歯切れが悪い妹に訝しむシンの前で、妹はにっこりと笑顔を向けた後に予想外な言葉を言ってきた。

「お兄ちゃん、私って女として魅力ないかな？」

「は？」

意味不明だ。何の話を振られたのか解らない、どういった理由でそんなことを話したのか。グルグルと言葉が頭の中で回るシンの前で、マユはちよつと顔を赤くして顔を背ける。

「あ、あのね、私ね、お兄ちゃんのこと、好きだよ。異性として、ね」「はい？」

「うん、だからね」

意を決したような妹に疑問を投げかけたシンは、慌てて回れ右をした。

妹が上着のボタンを外し始めたので。

「ちよつと待て?! 何してんだよ?!」

「だから、女として魅力ないのかなあつて」

「待て待て待て！ 俺達は兄妹なんだぞ！」

「うん、知っているよ」

止めるために全力で叫んでもマユは止まらない、自分の声と相手の声の合間に布のすれる音がして、床に落ちる音がして、とシンは自分の聴力の良さを呪った。戦場で助けられたことは多いが、こんな時まで発揮しなくてもいいだろうが。

聞くなど自分に言い聞かせるシンの耳に、次に床を踏みしめる足音が入ってきた。

「マユ?! 落ち着け! 話せばわかる!」

「解らないよ。お兄ちゃんは、私のことどう思っているの? 私だって女なんだよ」

「いやいや知っているから! 十分に魅力的だから! な! だから落ち着けて!!」

「落ち着けないよ」

一歩一歩と踏みしめる足音と、すでにしない布の音。シンの冷静な思考がもしかして裸と結論を出すと同時に、なんでここから逃げないと警告を発しているのだが、体が動かない。

極度の緊張状態は自分の体を拘束する、覚えておくように。昔、ラウ・ル・クルーゼがそんなことを言っていたな、なんて余計なことを考えて精神を安定させようとするくらいに、シンは切羽詰まっていた。

「ねえ、お兄ちゃん」

距離的にもうすぐ近く、密着まで数ミリかというところからの声に、シンはハツとして。

「だからね、死んで」

「おまえ!!」

咄嗟に回避、頭上を光が通り過ぎていく。

屈んだままで一気に跳ね上がり、天井を蹴とばしてドアの方へ飛ぶ。

「惜しい! もうちょっとだったのに!」

「おまえな?! って、ちょっと待て!!」

説教くれてやろうとしたシンだったが、視界に入った妹の姿に絶句

してしまう。

「なんで裸?!」

何も身につけていない生まれたままの姿の妹に対して、兄は言葉に詰まった後に視界を閉じた。

「だって脱いだから!」

「どういことだよ?!」

「色仕掛けならやれるかなあって思ったの!」

次々に攻撃を繰り返して来る妹に、『羞恥心は何処にいった』と叫びたいシンだった。

その後、あまりにドタバタうるさいために母親がシンの部屋に怒鳴りこみに来たのだが。

「二人とも……」

見下ろすのは自分の子供たちなのだが、どうにも常識を疑ってしまうような光景だった。

兄は妹を抑えつけて床に転がしている。妹は全裸で涙目である。

まさかの事案と考える母の視界には、斬撃の跡だらけのシンの部屋が映っていて。

「……シン、マユに襲われたのね?」

兄は無言で首を縦に何度も振っている。

「マユ、シンを襲ったのね?」

「悔しい! もうちょっとだったのに!」

全力で悔しがる妹を見つめた後、母は小さくため息をついて、部屋を後にした。

「近親相姦は帝国では禁止されていなかったわね」

「妹に欲情するようなお兄ちゃんじゃないから大丈夫!」

「なんでおまえが言うんだよ!」

「え? するの?」

「するかああああ!!」

シンの朝は、何時もと変わらない妹からの襲撃で始まったのでした。

グツと疲れた。もう何処かで寝ていたい。しかし、何処で寝たとしても厄介事に巻き込まれるかもしれない。

というわけで、安全だろう場所を選んでみたのだが。

「おいおい、シン。おまえは休みじゃなかったのか？」

呆れた顔で見つめるハイネに対して、シンは突っ伏していた顔を上げてのだが。

「解った。ゆっくり休め」

一瞬で察してくれるハイネのありがたみに感謝し、シンは再び自分の机に顔をつける。

「仮眠室、許可もらってきてやろうか？」

「ここで大丈夫です」

「そっか、なら部隊長には俺から言っておいてやるよ。後、宰相にもな」

ありがたいことだ。一言と顔色だけでここまで気が回る男は、帝国広しといえどハイネくらいなものだ。

後は師匠とか、野比相談役とか。いや、師匠だと気を回してもそれが普通の回し方じゃないから厄介事にしかならない。

あるいはルルーシュあたりであるならば、『仕方がない奴だな』とホテルの一室くらいは借りてくれるかもしれないが。

少ししてシンは肩を叩かれる感触で目を開けた。

「ほら、カギだ。休んでこいよ」

「ありがとうございます、ハイネ」

「いいからさっさと行け。ゾンビみたいだぞ」

そんなに酷いかと思いつながら歩いていくと、丁度ガイが戻ってきたようでこちらを見た後に顔をしかめていた。

「妹さんか？」

「はい。もう朝からなんだか、訳が解らなくて」

「大変だな。ゆっくり休んでこい」

優しく肩を叩かれて、本当にいい人達がいるなど、仲間達のありがたみを改めてかみしめた。

仮眠室のカギを開けて、中に入る。普通、和式と洋式の二つなのだが、ハイネが借りてくれたのはベッドタイプの部屋だった。

布団を敷く手間が省けてラッキーと考えながら、シンはベッドへダイブした。

掛け布団をかける間もなく夢の中へ。もう誰にも邪魔させないと安心して眠った彼を待っていたのは、またも妙な夢だった。

『さあ、救世の旗の基でまいりましょう、シン』とかよく解らないことを金髪の聖女様に言われて、何故かバスターソードを持って竜に突撃することになった。赤い髪の少女と大きな楯を持った少女と共に、中世っぽい街の中を駆け巡った後、何故だか知らないが英雄王と一騎打ちをしていたが。

『我を楽しませるとは！ やるな道化！ いや『凍焰の鬼神』よ！』と高笑いする英雄王に、『どういうことだよ』と叫びたくなかったが。

『フ、貴様の師であるテラに伝えよ。次は我と戦えとな』とか伝言まで預かったのだが。

師匠、何をしたのでだろうか。あの英雄王と知り合いとか、あり得ないことではないだろうか。いや、あの師匠のことだからやりかねない。何処ぞで聖杯戦争に参加していました、と言われても納得してしまおう。

戦闘が終わり、何故か聖女様に膝枕してもらっていたシンだった。

「え？」

感触が妙にリアルじゃないだろうか。疑問を感じて意識が覚醒した瞬間、視界一杯に見慣れた顔が映った。

「え？ あれ？」

「起きましたか？」

優しく髪を撫でる手の感触と、穏やかな微笑み。普段から見慣れて

いる顔が違うものに見えるから不思議だ。

「ティーラ？ え、俺って何で？」

「男ならば女性の膝枕は大好物だと知ったので」「は？」

心地よいかもしれない。確かに枕では味わえない感触だろうが、だからといってこれを味わっていいものか悩む。

「お疲れ様です、シン。大変だったようですが」

ちよつと普段と口調が違う気がする。まだ夢の中ではないだろうか、こんなに優しく語るティーラは見たことがない。きつとまだ夢だ。

「おやすみなさい、シン」

「あ、ああ」

夢ならばまだ寝ていても大丈夫だ。そう思い込んだシンは、自分の思考がまともじゃないことに気づくことなく、再び深い眠りについた。

夢は見なかったが、心地よい感触と綺麗な子守唄を聞いた気がした。

「・・・なんだったんだ？」

目覚めて見ても自分一人。誰もいない仮眠室を見回した後、シンは首を傾げつつ部屋を退出した。

使用終了の合図を出すとバツタ達が清掃に入っていくのだが、その中の一匹が戻ってきて頭部ユニットを僅かに斜めにしてきた。

『ピ？ シン様、何もなかったんですか？』

「え？」

『ピ ティーラ様が入って行ったので、『事が起きた』かと』

言われたことで、一瞬で眠気が吹っ飛んだ。

慌てて執務部屋に飛び込むと、目的の人物は自分の机で書類を確認していた。

「ティーラ」

「シン、ありがとう」

「へ？」

何故かお礼を言われて困惑していると、眼前に携帯電話の待ち受け画面が付きつけられる。

「いい待ち受けでしょう?」

ぐっすり眠っている見慣れた顔の横に、目の前にいる少女がくっついてる画像だった。

まさか、ここもか。シンはがっくりとうなだれて、ティーラは上機嫌で微笑んでいたのです。

安全と安心していた場所でのまさかの落とし穴を受けて、シンは深いため息をつきながら、政庁の入口へと足を進めていた。

「あ、ごめんね、シン。御休みだったんだよね?」

入口にいたシャルロットに大丈夫と伝えながら、彼女の前に立つ。

「で、どうしたんだよ?」

「うん、遊んでいるだけじゃダメだから、ちよつと働こうかなつて」

「別に大丈夫じゃないか」

彼女はゲストとして生活は保障されているのだから、無理に働く必要はない。生活費も一定額が口座に振り込まれるし、それ以外に欲しいものがあるならば申請すれば送られる手はずだ。

「でも、せつかくここにいるんだから、色々と体験したいんだけど、ダメかな?」

「ダメじゃないけど。なら、いつそのこと学校とかどうだ?」

「学校かあ」

提案にシャルロットが、そういうえば自分達は学生を途中で辞めてきたことを思い出す。

「帝都にも学校はあるからな。シャルロットなら高校くらいは受かる

だろ?」

「ええ? 自信ないよ。知識からまったく違いそうだし」

「大丈夫だって」

不安を感じるシャルロットに安心するように告げるシン。

確かに、地球と銀河帝国では教えている知識に隔たりはあるかもしれないが、同じ宇宙にいるのだから物理法則には、あまりに違いはないはずだ。

その上で、ジョーカー銀河帝国は日本がベースになっているため、IS学園で学んだことを生かして、その上で足りない部分を補えばいいだけ。

「善は急げって言うし。そうだな、まずは制服を見てみるか?」

「うん、そうだね。ところで、どこで制服を見るの?」

「カタログがあるからさ」

何処にとシャルロットが聞いてくるので、シンは自分の右腕にしているブレスレット型の携帯端末を指差す。

一口に帝都の高校といっても、公立高校と国立高校の二種類が存在する。運営母体がジョーカー銀河帝国であるか、それとも各居住区エリア行政であるかの違いだけで、中身はほとんど変わりがない。

教えている知識、実施している教科などに差異はあまり見られず、行っている授業が微妙に違っていている程度だ。

かといって、まったく同じではないのは高校が何を目的としているか、教育方針の違いが差異として出ているためだ。

中でも特に特色として違うものといえば、『制服』だろうか。

『思春期の青春は学生服で決まる』とか、議会で誰かが大演説を行って、それに議員一同拍手喝采したのは、帝国の議事録の中でも特筆するべき会議となっている。

「・・・シン、この装甲服みたいな学生服って何?」

「安全第一をモットーにした高校だな。公立だから、学則がちよっと緩やかだ」

「この七色を取り込んだ学生服は?」

「美術系の公立高校だな。美的センスを磨くために、三年に一度は学

生からデザインを出させて、許可が出れば制服が変わるらしい」

次々に出てくる学生服にシャルロットは驚きと共に、ここにも『帝国の気風』が出ているなど感心していた。あの皇帝が治める国では、当たり前前かと思ってしまうのは、仕方がないことかもしれない。

「う〜〜〜この近くって何処なの？」

「近く？ 国立の高校は・・・あった」

立体画像のいくつかを操作したシンは、ある制服を示して表示させる。

古典的な学生服とセーラー服。遊び心がない昔ながらの制服に、シャルロットは疑問を感じてしまう。

「あの皇帝陛下のお膝元で？」

「これ、皇妃様の黒歴史だな」

「へ？」

シャルロット、意外な話に間抜けな声を出してしまう。

「二人ほど、セーラー服を着ても違和感ない人がいてな。その人たちの趣味、というかシャレのつもりがそのまま決定した結果かな」

「へ、へ〜〜〜」

予想外の一言を貰い、シャルロットは引きつった笑みを浮かべて、画像に視線を戻した。

モデルは黒髪と金髪の少女二人。何処か引きつった顔をした二人が、画像の中で様々なポーズをとっている。

とても愛らしくまさに学生っていう二人なのだが。

「ちなみに、この二人がそうだ」

「・・・はい?！」

驚愕の声を上げるシャルロットは、嘘でしようとシンを見つめるのだが。

彼は力なく首を振った。

その後、彼女は実際に試着することにして、シンに付き合ってもらい。

「似合うじゃん」

「ありがと」

素直に褒められて赤面することになった。

シン・アスカのとても長い長い一日・2

相手と戦う時に必要なのは、勇気でも気合でもなければ覚悟。相手を倒すことになることも、相手を殺すことになることも、すべて自分で背負う覚悟がなければ、騎士として戦うことは許さない。

昔、師匠は真顔でそんなことを言っていたのだが。

師匠、聞きたいことがあります。シンは心の中でそう呟く。

女難の相って師と弟子の間でも継承されるのですか、と。

心の中で質問したシンの脳裏に、『え、女の子に愛されるならば男として本望でしょう。むしろ、全部受け止めるくらいの度量を持って』と笑顔で親指を立てる師匠が浮かんだのでした。

シャルロットに学校を進め、制服の試着につき合った後、お昼ごはんを前にして彼女は所要があるらしく別れた。

帝国で友達でもできたのだろうか。ちよつと安心したシンは、政庁の中に戻ろうとして足を止める。

待った、またヴィルティラスに戻ったらティーラが何かしないか。一度で終わると安心するのは、早計ではないだろうか。

疑問がわきあがり、シンは足を止めて別方向へ歩き出す。他の場所、誰もいないような場所はないものか。

色々と考えて適当に歩いていった先、何故か腕組みした男と対面してしまった。

「あ、ジンネマンさん」

「シン・アスカ」

鋭い眼光がシンを見つめている。二メートルを超える巨漢、腕っ節

も戦い方も豪快で、対人戦でも好成绩を修める彼だが、ヴィルテイラス所属者に比べたら強いとは言えない。

シンでも勝てることは勝てるのだろうが、どうしても『勝つ』と思えないのだから不思議だ。

彼の貫録か人格故か。絶対に勝てない壁のように感じて、握った拳もほどけてしまう威圧感を放っている。

さすが『親父』と呼ばれて慕われる人だ。

「聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「はい」

有無を言わさない言葉に、思わずシンは返答してしまう。一瞬、背筋がチリと焦げるような感覚があったのだが、気のせいか。

「おまえ、うちのリタとどういう関係だ？」

瞬間、シン・アスカは自分の失態を悟った。そうか、彼はリタが所属する中央四軍のうちの一つ、四軍の総司令官。四軍全員から『親父』と慕われており、それが広まって誰もが『親父』と慕いだしたのをすっかり忘れていた。

ついでに、宰相に言い訳したことで、リタとの一件は落ち着いたと安堵してしたのも、失態だった。

「え、あの、その」

フェネクスの一件は話せない。あれは守秘義務がかかっている、らしい。シンはそう思い込んでいるが、実はアイリスはかけていない。フェネクスの一件を理由にリタを社交界に連れ回し、彼女のドレス姿を写真に撮ったことで、アイリスは満足してしまい、つい守秘義務の指定を行っていなかった。

彼女にしては珍しい失態なのだが、普段の宰相であるアイリスを知っているシンとしては、『やってあって当然』と思い込んでしまう。

「なあ、おい」

グツと右肩を掴まれた。痛いほどの握力なのだろうが、鍛えたシンの肉体にダメージが入ることはない。ダメージはないが、精神的な苦痛というか圧力を感じて冷や汗が止まらない。

これが、総司令官の資質。シンは場違いなことを考えていたが、思

考が完全な逃避に入っていることに気づいていない。

「それは、その」

「……まあ、いい。話があるそうだ」

フツと圧力が消えたので、シンがほっと安堵していると、ジンネマの背後から問題の人物が顔を見せた。

「え、リタ？」

「……シン、『久しぶり』」

ちよつとはにかんだような笑顔を浮かべる少女の言葉に、シンは『そうだな』と何とか返せた。

立ち話では、ということとで政庁の中のカフェテラスに来てみたのだが。

普段、人がまばらなカフェテラスが、大勢で埋まっている。

リタとシン以外、全員が四軍の軍人たちなのは、きつと勘違いだろう。『あの野郎、うちの姫様を』とか目線に言葉と殺気が乗っているのだが、きつと気のせいだろう。

だから、リタが影で『第四軍の御姫様』って呼ばれるのだが、彼らは気づいていないのか。そもそも、こんな話のために第四軍が動いて、大事にならないと思っているのか。

そこまで考えたシンは、気づいた。第四軍がここまで動いても、軍事のトップの元帥は許さないだろうが、その更に上の宰相は『軍事行動よ、許可します』と言いだしそうだ。

「シン、私を止めてくれて、ありがとう」

「あ、あ、いや、あれは俺のためでもあったから」

いきなり話を出されて、シンはちよつとだけ言葉に詰まってしまった。元々があの一件はシンのために射撃技能を磨かせるためだったのだから、リタがお礼をいうものではない。

例えばそれが建前だったとしても、裏話は表に出てこないから裏話なのだから、彼女が気にすることははないのに。

「ううん、嬉しかったよ。あの言葉も、優しさもきちんと『伝わった』から」

胸に手を当てて真っ直ぐに見詰めて語るリタに、ちよつとだけ感動

してしまう。前まで人の目を見ようとしなかったに、ここまで変わるなんて。言葉に出して行動して、彼女に自分の意思を伝えたのは間違っていないかったか。

「当たり前前のことを言ったまでき。第四軍の人たちだって、そう思っているからさ、リタは一人じゃない」

「うん、やっと私ね、人を見ることができるようになったよ」

「そりゃ、良かった」

「シンのおかげだから、だからね。私は言いたいことがあるの」

頬を染めて真っ直ぐに見詰めて、手を胸の前で握った彼女は、小さく息を吸い込んだように見えた。

気持ちを固めるために決意を鈍らせないように、彼女は深呼吸した後、口を開く。

「私は……」

「おっと手が滑ったああああ!!」

「はあああ?!」

唐突に、シンの眼前にチェーンマイルが投げ込まれた。爆発はシンだけに降り注ぎ、リタの周囲には青い光―防護フィールドが展開されている。

「俺もやっちゃまったあああ!!」

続いては対戦車バズーカの雨だった。やっちゃまったというわりには、三十発以上の砲弾が降り注いだ、誰も気にしていない。

「シン?!」

驚いたリタが立ち上がるが、素早く近場にいた女性の軍人が彼女を確保。困惑している間に、カフェテラスから安全な場所まで退避させる。

「俺もだあああ!」

「どうした?! 誤作動だ?!」

「ありゃ、手順を間違えちゃった」

「模擬弾じゃなくて実弾だった、悪いな」

「暴発だ、暴発だ」

『あ、レーザーセンサーが狂ってるぜ』

『すまん、魚雷だった』

「お、おまえらなああああ!!」

銃弾、爆弾、バズーカ、戦車砲、ランチャー、戦艦の主砲や速射砲、魚雷各種等など。まるで艦隊戦のような攻撃を受けながらも、シンは怒声を振り上げる。

「テイス呼ぶぞおまえら!」

「上等だコラアア! 四軍すべてでおまえを殺してやる!」

「認めたなああ!!」

「認めたからなんだ!」

怒声と怒声の応酬。両者の意識が高まって一触即発の空気の中、盛大に音が鳴った。

ハツとして全員がそちらへ顔を向けると、リタがテーブルを蹴り上げていたりする。

「.....」

怒り心頭。あそこまで激怒したリタは初めて見た、隣にいるジンネマンも腕組みしたまま冷や汗をかくほどに、今の彼女は怒っていた。

「全員、撤収」

「御意!!」

速やかに撤収していく男たち、それを睨みつけていたリタは、最後にシンに深々と頭を下げた。

「また、今度、話すから」

小さく言葉を置いて、彼女は早足で第四軍の兵士たちの後を追っていく。

「な、なんなんだよ、いったい」

一人、残されたシンはそう呟くのでした。その後、部隊長から『謹慎を伸ばしてほしいのか』とありがたのお説教を貰うことになるが、今の彼は困惑を浮かべたまま固まっていたのでした。

午前中で溜まった疲れを癒していたら、午後一でもっと疲れる状況に陥ってしまった。休暇とは何か、シンは真剣に考えたくなかったが、虚しいだけかと諦めて忘れることにする。

さて、何処で休もうかと歩きだしかけた時だった。

『ハ―イ、シン、元気？』

「シェリル」

直接通信で笑顔で投げキッスなんて、かなり前にはやったことではなかっただろうか。もう誰もやらないことを平然と出来るのは、彼女の芯の強さを示しているのかもしれないが。

「なんだよ、俺は……」

『休暇中なんですよ？ いいから、ここまで来なさい』

「は？ ちよつと……」

言葉の途中で通信が切れた。なんなんだと内心で文句を言いつつ、添付されたデータを読み込み。

データは位置情報。丁寧に現在位置からのナビゲート付きとは。

「ティス」

『ふえ？ なに、シン？』

「ここに何があるか知ってるか？」

位置情報を彼女に見せる。ティスは覗きこむように見つめた後、

『フンフン』と頷いてパチンと指を鳴らした。

『ティスにお任せ！ 帝都で最大規模のアリーナだね』

「……」

滅茶苦茶、嫌な予感がした。逃げ出したほうがいいのではないかと考えるくらいに、絶対にろくなことにならない予想がつく。

しかし、だ。あのシェリルがわざわざ通信をよこした後、位置情報を送ってくるくらいだ。何か理由があるのではないか。

「ないな」

自分で考えて、そんなことはないかと否定できる。あのシエリルの突発的な行動は、師匠くらいに脈絡がない。師匠のほうが、予想外の場所から予想の三百六十度の方向へ向かうから、まだシエリルのほうが理解できるが。

「行くしかないか」

『そうだね。あれ、でもこのアリーナって』

「なんだよ、ティス？」

『ん〜あ、やっぱり、これって政庁で日程を抑えているアリーナだよ』

どういうことだ。疑問がシンの中でわき上がるが、次のティスの言葉で最悪な結果しか浮かんでこなくなった。

『うん、やっぱり、宰相と皇帝代理と皇帝の三人名義で抑えているね』
絶対に何かある。シンは今すぐに逃げ出したくなった。

しかし、ここで逃げだしたらきつとシエリルだけじゃなく、あの三人も全力で追ってくる。

行くしかない、覚悟をきめてシンはそのアリーナを目指した。

政庁から車で二十分。最大規模のアリーナは天井開閉式の、最も新しいアリーナらしい。

百万人が入っても大丈夫とか、開閉式ドームには要塞並の合金が使われているので防御能力もずば抜けているとか、あるいは特殊な映像技術のためにどれほどステージから離れていても、すぐ近くで歌っているような画像が見れるとか、色々と評価が高い場所なのだが。

シンにとっては、どうでもいい話でしかない。

ついた先で係員に案内されて入ってみれば、アリーナには席が一つだけ。

「おい、マジか」

思わず絶句しつつ、案内されるままに席に着いた途端に、盛大に火花が上がった。

『私の歌を聴け!!』

よく知った声の後、流れてくる音楽は聞いたことがあるもの。確か、シエリルのデビュー曲ではなかっただろうか。

誰もいないステージに流れる歌、なんだこれはとシンが思い始めたころ、近づいてくる気配が一つ。

ふと視線を向ければ、ステージ衣装で歩いてくるシエリルの姿。「おい」

声かけに彼女はマイクを持ち上げて、『私の歌を聴きなさい』と目線で訴えてくる。

『え、生歌?』とシンが疑問を浮かべているが、シエリルはウインクして歌を続けていく。

彼女のデビュー曲から始まった歌は、彼女が出した順番に続いていき、つい先日発売した曲を歌い上げたところで、音楽は止まった。

「はあ、どう?」

汗だくでにつこり笑顔のシエリルは、近場まで来てポーズを決める。

「何がしたいんだよ?」

「私の歌はどうだった?」

質問に質問を返され、シンは困惑しつつ答えた。

「いつ聞いても同じだろうが」

「へえ」

ちよつとシエリルの目が怪しく輝くが、シンは気にせず言葉が続ける。

「最高にクールで熱い、それがシエリル・ノームの歌だろ?」

笑顔で真っ直ぐ見詰めて言っていると、彼女は不意打ちをくらったように黙って固まる。

「あ、そう、うん・・・やるじゃない、シンのクセに」

「なんだよ、それ。で、どうしてここに呼んだ?」

彼女はそれに答えず、再びマイクを持ち上げた。

もう一曲あったか、とシンが考えていると歌が流れてきた。それは、聞いたことのないバラードで。

情熱的に、とても熱くて暑くて、締め付けられるほどの恋心を歌ったラブ・ソング。

「私の作曲と作詞の歌だから」

「へえ、タイトルは？」

『私の騎士様』

まさかの直球。シンは呆れながら彼女を見つめる。

シエリルは、顔を真赤にしていたが、それが運動しただけじゃないことくらい、シンにだって解る。

盛大な告白のために歌を作って、アリーナまで貸し切って。相変わらずやるのが大きすぎる、本当にゴージャスな女だ、シエリル・ノームってやつは。

内心で呆れながら、席を立ち一礼した。

「ありがとう、『銀河の歌姫』。その気持ち、『凍焰の鬼神』が確かに受けたよ。でも、俺はまだそんな『器』じゃないからさ」

「ええ、解っているわ、シン。これは宣戦布告みたいなものよ」

誰に対しての、とシンは疑問を投げかけようとして止めた。

自信に充ち溢れたシエリルの笑顔があつて、満足したように歩き出す彼女の背中に、無粋だなど言葉を止めた。

「ああ、そうそう、シン。一緒にシャワー浴びない？」

「一人で行けよ！」

「冗談よ」

最後に挑発的で、悪戯っ子のような笑顔をシエリルは残していったが。

カランとグラスの中で氷が鳴る。

「へえ、シン。そんなことがあったの？」

家に帰る道筋で、シンは偶然にキラと出会い、捕まって『イーデンホール』に連れ込まれた。

「疲れましたよ」

「確かに帝国じゃ『兄妹』での結婚を禁止してないからね」

「いや、そつちじゃなくて」

どうして最初の話に戻ったのか、シンは違うと隣に目線を向けるのだが、彼はこちらなど見ておらずに、棚に視線を向けていた。

「シン、結婚って、人生の墓場だつて言うよ」

「愛妻家が何いってんですか？」

自他共に認めるほどのアツアツ夫婦で、どうして子供ができないのか、周りが疑問を感じているのに、何故にそんなことを言うのか。シンが呆れながらそう告げると、珍しくキラは俯いて苦笑している。

「今日、泊めてくれない？」

「は？ 別にいいですけど、どうしたんですか？」

奥様は夜勤ですか、それとも研修ですか。そう告げようとしたシンの視界に、妙に晴れやかな顔のキラが映った。

「追い出されちゃった」

「……え？」

清々しいほどの笑顔で告げる彼に対して、シンは凍ったように固まったのでした。

数秒後、会計を済ませたシンはキラの首根っこを掴んで最高速でヤマト宅に突撃して行った。

「すみません、すみません、二度とさせませんから」

「なんでシンが謝りに来るわけ？ しかも土下座って」

「すみません、申し訳ありません、だから追い出さないでやってください」

「だから、なんでシンが謝っているのかって。ちよつと、キラ、何を言ったの？」

呆れた顔のフレイの言葉に、キラは赤い顔でニヤニヤしながら親指を立てる。

「追い出されたって言った」

「確かにそうだけど。それって、しばらく研究詰めになるから、家から出ていてって言っただけじゃないの」

「そうともいう」

ピシッとシンの中で何かに亀裂が入り、ゆらりと立ち上がる。

「……キラ・ヤマト。あんたって人はああああああ!!!」

「はっはっはっは、僕はテラの幼馴染だよ。忘れたの?」

「関係あるかああ!!」

その日、シン・アスカの怒声が住宅街に響き渡ったのでした。

翌日、懲りもせずに飲みの誘いに来たキラに対して、シンは『まったくもう』と言いつつ付き合おうのでした。

『神帝』を鍛えた者

突然だが、テラ・エーテルには幼馴染と呼べる人がいる。生まれた時から知っている幼馴染もいれば、物心ついた頃から、あるいは彼が『彼らしくなった』ときからの付き合いもいる。

テラ・エーテルの場合、十二歳以下からの付き合いは『幼馴染』と呼んでいるのだが。

生まれた時からの知り合いは、ルルーシュとのび太、アセイラム。一歳児くらいからがアイリス。少し離れて三歳児からキラ、高町・恭也。

今のところ、このメンツがテラが『狂乱と恐怖の化け物』だった頃を知っている人たち。

四歳児が笑いながら自分の心臓をえぐり出して潰すのを、見てしまった悲劇の人たちともいえる。

懐かしい写真というものは、時に人を追い詰めることがある。

シン・アスカは、その日、珍しいものを見ている皇帝代理を発見した。

「アセイラムさん、どうしたんですか？」

「え、シン？ いえ、ちよつとだけ昔を思い出して」

懐かしそうに、といった表情ならばその言葉に納得しただろうが、今の彼女は少しだけ顔色が悪い。

まるで怖がっていたものを再確認したような、そんな顔をしている。

「アルバムですか？」

そつと手元を覗きこむ。

場所が場所だけにあつてもおかしくないのだが、こんなところにあるアルバムとは、よつほど大切にされていないのだろうか。

政庁の最上階にはあるが、滅多に人が通らない。執務室とも反対方向の予備倉庫、だったはずだ。普段は使わないが、もしかしたら使うかもしれない資料を置いてある場所。

「探し物をしていたら、偶然、見つけたものです」

アセイラムはアルバムを閉じて、ギョツと胸元に抱えた。

泣きそう顔だというのは解る。今にも涙があふれそうなほど悲しい顔をしながらも、彼女は決して涙を流すことなくアルバムを抱きしめたまま、ゆつくりと瞳を閉じた。

「誰のですか？」

「……ごめんなさい、シン。これは答えられません」

瞳を開いて顔を向けてきたアセイラムは、すでに何時も通りの穏やかな笑みを浮かべていた。

普段通り、何も変わらないはずなのに、シンの視界には『無理やりに感情を押し込めた』ように見えた。

ひどく気になる。自分の感が妙に騒いでいる、こんなことは師匠にかかわることだけだったのに。

だとすると、あのアルバムは師匠のものか。と、そこまで考えたシンは不意に思い出した。

そういえば、師匠のアルバムは十二歳からしか見たことがない。隠されていたわけではない、十二歳からのアルバムは見せてもらったことがある。

隠されているのか、あの師匠が誰にも見せないように。だとするならば、だ。こんな倉庫に置いておくことはない。あの師匠が隠して誰にも見せないようにするのなら、彼の城に置いておく。

完全に独立させた異世界『エデン』に浮かぶ、テラ・エーテルの一族のあらゆるものが収められた浮遊大陸『ヴァルハラ』。その中心に立つ『神帝城』の最奥ならば、誰も近づけない。

『六柱神』、『護元神』だけではなく、六つの魔王と、四つの原初の神が護る最秘奥。

師匠の『サイレント騎士団』でさえ突破できない絶対なる管理者が護る領域に収めたものは、決して世の中には出回らないはずなのに。「ごめんなさい、政務に戻りますね」

一礼してアセイラムはシンの隣を通り抜けた。不意に、漂うように流れた雫に慌てて振り返ると、廊下の先に彼女の背中が見えて。

「まったく、あいつは」

その途中で軽いため息をついている男がいた。

「バトラー」

漆黒の肌に白い髪。執事服を纏った男は、滅多に『ヴァルハラ』から出てくることはないのだが、どういうわけか今日は政庁にいる。

「シン、すまないが時間はあるか？」

「え、はい」

鷹のような瞳で見つめられ、シンは僅かに体を構えさせた。

フツとバトラーが笑う。緊張を解すように微笑する彼は、何処か

『皮肉屋』のように見える。

「そう身構えるな。何も、戦おうとするわけじゃない」

「ぜひとも言えますけど」

彼と戦えるならば、是非と言いたい。シン・アスカが知る中で、対人戦闘において彼に並ぶ者はいない。

「私程度の実力者ならば、五万といるだろうか？」

「嘘つかないでくださいよ、『正義王』」

彼の正体を師匠から聞いたことがある。彼の生き様、彼のあり方、そして彼がテラの一族に『縛り付けられている』理由も。

「止めてくれないか。私はそれを名乗れるほど、崇高な存在ではない。ただの英霊の残骸だ」

「でも、俺は知っていますよ。ジョーカー銀河帝国皇帝テラ・エーテルが唯一絶対に『勝てない』と明言した存在、『正義王エミヤ』の強さを」改めて彼の名を告げると、バトラーと名乗っている男は小さく苦笑した。

英霊『エミヤ』。

かつて、冬木で行われた聖杯戦争に呼ばれた英霊、として彼の物語は始まる。

彼の過去を細かく記した書物はない。人類が宇宙に飛び出し、広大な銀河を旅するようになって、いくつかの太陽系を発見し移り住んだ結果、最初の地球の記憶は酷く曖昧になってしまった。

同じ宇宙に同じ生命体は存在しない、これが間違いなのだと知ってからは特に。太陽系に人類は育つ、複数の太陽系があるならば、複数の異なる進化を遂げた人類が育っているのは、ある意味で必然だったのかもしれない。

異星人はいた。友好的な種族もいれば、非友好的な種族もいる。BETAとか特に人類に対して有害な存在でしかない。

話がそれだが、『エミヤ』と呼ばれる英霊は当初はそれほど有名ではなかった。精々、物語の一コマに名前が出てくる程度。

英雄王、騎士王、征服王といった王たちの名前に比べたら、誰も見向きもしない存在でしかなかった。

しかし、ジョーカー銀河帝国が出来て、その皇帝のテラ・エーテルがある雑誌でこう答えてから評価が一変した。

『皇帝陛下が過去の英霊たちと戦ったら、誰に負けますかね?』と。雑誌の記者は『え、負けないよ。当たり前じゃん』と気楽に答えてくれると思ってしたのだろうが、彼はいつになく真剣な顔で答えた。

『俺は『エミヤ』にだけは勝てないさ。あの人の生き様や信念を折れるわけがない。正義の味方であろうとして、自分に厳しく生きた人だ。俺は絶対にあの人に勝てない。きつと、俺がもつと強くなっても

それは変わらない。俺は英霊『エミヤ』に勝てないな。」

その瞬間、帝国が別の意味で揺れたのを、シンは知っている。

こうして目出度く、彼にとつては不幸にも英霊『エミヤ』は多くの人が名前を知ることになり、最終的に彼が正義の味方であろうとしたことから、『正義王』と呼ばれるまでになった。

「とても不快なことを考えていないか？」

「ええ、とても忠実で正しい歴史を思い出しています」

鋭く見てくる男に真っ直ぐに答えると、彼は小さく頭を振った後に、手慣れた動作でシンの前に紅茶を置いた。

「まさか、バトラーのを飲めるなんて思ってませんでした」

「長い話になるからな。シン、おまえはテラの過去をどのくらい知っている？」

「師匠の？」

問われて思い出すのは、最初の出会い。その後の地獄の訓練と鬼灯様と閻魔様に助けられた日々。

後は、『昔は馬鹿だった』と笑っていることくらい。

「そうか、ほとんど話していかないか。ラウから聞いているかと思っていたが、彼も話していないとは」

「え、それだけじゃないんですか？」

「ああ」

珍しく彼は言葉に詰まる。何時も、といってもほとんど会話した記憶はないが、彼は明確な発言をしていたはずなのに。

「五代前から私はテラの一族と付き合いがある。『正しくありたい』と願った結果、私はこうして『バトラー』として存在しているが」

彼の話は、とても大昔のこと。テラの世代のかなり前の頃に、一族が混乱した時代があった。

これでいいのか、このまま強さだけでいいのか。一族全体が割れて競って、争って血で血を洗う内部闘争にまで発展した時、一人の男が聖杯を使って彼を召還したらしい。

悲劇を止めるために強くなったが、それが誰かの悲劇にならないとも限らない。だからこそ、『正義の味方』の判断が欲しい、と。

「む、無茶苦茶なことを言いますね」

「私に審判者であれと願ったのが、その時の馬鹿ものだ。まったく、掃除屋であった頃が懐かしいと思えるようになるとはな」

何処か疲れた顔のバトラーは、紅茶を見つめた後、首を軽く振った。「今はテラの話だったな？　私はこうして彼らの一族と共にあったのだが、初めてだったな」

「初めて、ですか？　あ、師匠がですか？」

「ああ、初めてだ。私が『殺そうと思った』のは」

予想外の一言が出てきて、シンは次の言葉を飲み込んだ。

「生まれながらにして、テラは破綻している。私から見てもそうといえるほどに、あいつの中はとても危うい。悲劇をなくしたい、誰も悲しませたくない、なんてことはあいつは考えていない」

「え、いや、そんな。だって師匠は」

彼は何時だつて誰かを助けていた。多くの人を護り、多くの悲劇を止めてきたのに。そんなことはない。

「あいつの行動原理は、『自分にとつて親しい人であるか、そうでないか』だ。赤の他人だったら、見捨てる」

「そんなはず、ないでしょう？　だって、今までだって」

「シン、落ち着いて思い出せ。テラが、『帝国以外の国を助けている』ことがあったか？」

言われてシンは、記憶を探った。何度も思い出せる光景は、常に『帝国領内』であった。

「あ……」

「そうだ、シン。テラは、救世主じゃない。ヒーローじゃない。あいつ自身が言っているように、『破壊神』でしかない。強くあり、絶対であり、そして大切な人以外を斬り捨てる殺戮者。それが、テラ・エーテルの本質だ」

嘘だ、と叫びかけたシンは、グツと言葉を飲み込んだ。

目の前のバトラーが、何処か悲しそうに見えたから。それに、ラウ・クルーゼの言葉が脳裏をよぎったから。

あいつが馬鹿ものであり続けられるように。

「テラは昔、四歳児の時に笑いながら自分の心臓をえぐり出して、握りつぶした。どうしてだか、解るか？」

かなり衝撃的な話を聞かされた気がした。けれど、シンは心の何処かで『師匠ならやる』と思えた。

「強くなりたくないから」

「そうだ。あいつの母親は『天魔の一族の最後の純潔の姫』。吸血鬼も元を辿れば天魔の一族に辿り着く。だからこそ、死んで蘇れば強さが増す。あいつはそれを知っていたから、死んだ。自分の体を再構築して、強度を増すために」

強くあれ、強者であれ、絶対であれ。テラ・エーテルの過去を聞いて、シンは『何でそんなことを』と嘆くよりも、『師匠らしい』と納得できてしまった。

テラ・エーテルは強さを求め続ける。馬鹿やつて周囲を笑わしているながら、何処までも貪欲に、何処までも渴望するように。

「このまま強くなった場合、こいつは世界を壊す。だから、私は殺そうと思った。ここでこの狂気を断てば、と」

固有結界まで使って叩き潰した、バトラーとしてではなく、『エミヤ』としての全能力を使って潰した彼は、再び立ち上がって笑った。「そして、あいつは『あ、俺って馬鹿だったんだ』と呟いて、倒れて。その後にアセイラムとアイリスにボコボコに殴られて、現在のあいつとなった」

「……ええええ」

シン、一気に脱力。なんだか、シリアスを突っ走っていたのに、気がついたらギャグになっていた気持ちで一杯だ。

「あのアルバムは、その当時にもものだろう。テラのことだ、『いらぬいな』と放置していたのを、誰かが予備倉庫に放り込んだ、と言ったところか」

「え、ちよつと待ってください、バトラー。その時の師匠は何歳だったんですか？」

「十歳だが、どうした？」

「十歳で、英霊に立ち向かうって、どんだけなんですか」

呆れてしまう。英霊とは過去の英雄たち、人が戦って勝てるわけがないのに。常識的に考えれば、逃げの一手ではないだろうか。

呆れたシンを前に、バトラーは思う。『十二歳の頃、過去に戻って第五次聖杯戦争に突撃した後、第四次に突撃して、その後に人理焼却にまで首を突っ込んだことは黙っていよう』と。

シン・アスカの精神安定のためにも。

「あのアルバムのことは触れないでやってくれ。あいつの幼馴染達は、全員が心臓を握りつぶす瞬間を見ている。トラウマになっているかもしれないからな」

「はい、解りました。あのところで、最近の師匠は、その」

言いよどむシンに対して、バトラーは皮肉を精一杯に込めた笑みを浮かべた。

『破壊神』ではあるが、絶望を周囲にまき散らすことはない。確かに親しい人しか助けないが、それは『帝国に入ったら話は別』だろう」

「そっか、そうですね」

ちよつと安心しているシンに対して、バトラーは内心で言葉を付け足す。

『だが、敵となれば国家や星ごと潰しかねないのが傍にいるが』と。

丁度そのころ、『サイレント騎士団』の団長が小さくくしゃみをしていたとか、していなかったとか。

「引き止めてすまなかったな、シン」

「いえ、おかげで色々と聞きましたから。俺も強くなります。クルーゼさんが言っていたとおり、師匠が『馬鹿のまま』でいられるように」

誇らしげに笑う少年を見送り、バトラーは小さくため息をついた。「やれやれ、私らしくないな。おせっかいか、こういったのは君の役目ではなかったかな? 『ジャンヌ』」

「そうですね? 中々、素敵な訓示でしたよ」

空間が揺らぎ、扉が開くような文様が走った後、金髪の女性がバトラーの背後に立っていた。

「・・・皮肉ならば受け付けていないが?」

「本心です。貴方も『親心』が解るようになってきましたね」

「解りたくはなかったが」

まったく、出来の悪い子ほどかわいいとは、奇妙なものだ。バトラーは再び溜息をついて、立ち上がる。

「君が出てくるとは何かあったかね？」

「腹ペコ王様が御帰還しました」

「ほう、それはそれは。しかし、それにしてもだ。聖杯のシステムを解読して組み込むなど、テラとルリは何をやったのやら」

「それはアインズの仕業ではなかったですか？」

バトラーはその言葉に固まり、深々と溜息をついた。

「オリジナルの『アインズ・ウール・ゴウン』ならばできる、といって魔法をため込んで強さを増したあいつは、今度は儀式魔法にまで手を出したか」

「誰もが強さを求めるものです。ですが、それを感情のままに振るわないだけ良識があるのでしよう」

「常識といわないのは、君なりに理解しているからかね？」

意地の悪い質問を投げると、元『聖女』様は可愛く首を傾げた。

「テラの一族に連なる者に、常識があると思えますか？」

「聞いた私が馬鹿だった」

あまりに当たり前な一言に、バトラーは思わず顔を手で覆ったという。

色々な話を聞いて、色々なことを考えて。これから先、師匠にはもっと優しくしてやろうかなと考えていたシンだったが。

「師匠?! シャルロットに何をしたんですか?!」

数分前の自分を投げ捨てることをシンは決めた。過去に何があったとか、彼の性格がどうだとかもう関係ない。

師匠は馬鹿で世間知らずで常識がない、とてもはた迷惑な馬鹿だ。

「え、俺？ いや、俺じゃないって」

真顔で返す彼に、シンはふと振り上げた拳を止めた。

あ、これは嘘じゃない。ということは、誰が彼女の部屋にウエディング・ドレスなんて送ったのか。

「何かするのはシンだろ？ 結婚した後とか、色々」

「やっぱりあんたかあああ!!」

全力で殴りつけた拳は、彼に当たることなく虚空を薙ぐ。

「師匠！ どうしてそんな迷惑なことするんですか?!」

「迷惑ってなんだよ。おまえが何時までもフラフラしているからだろ？ いいから誰か決めて結婚しろ」

「俺はまだ十七ですよ！」

「え？ 俺がアイリスとセラムと結婚したの十六」

時が止まった。思わず、拳をゆくりと下ろした後、通信端末を起動。素早く政庁へ連絡し、二人に確認。

「・・・法律は、だってその頃は連邦制だったから十八からじゃないですか？」

「連邦？ あれ、シンに言っただけ？」

「何をですか？」

嫌な予感がして、シンは思わず身構える。いたずらっ子のような顔をした師匠が言うことなど、大抵がろくでもないことだから。

「二人を嫁によこせて言った帝国があつて、そいつらが説得しても応じなかったから、俺が全力で滅ぼした。で、俺の帝国を作ったから二人に『じゃ、結婚して』って言った」

「・・・え？」

「おう！ だから、セラムとアイリスと俺の三人の結婚記念日がジョーカー銀河帝国の建国記念日」

親指をグツと押し出して誇るテラに対して、シンは初めて知った事実打ちのめされていたのでした。

『ああ、あのバトラーが言っていたことは本当だったのか』と。内心で師匠に対しての色々なものが崩れていくのだが。

「よ！ 銀河一の幸せ者！」

「うちの陛下は本当の馬鹿だよな！」

「その幸せを俺たちに分けてくれよ！」

帝都の一角にあるカフェテラスの中で、テラは周りからの言葉に両手を上げて答えていた。

「おうよ！ 俺は幸せ者だ！ だからおまえらも幸せにしてやる！」

俺の帝国は喜劇で回してやるんだからな！ この国にいる限りは絶望と後悔を刻んでやる！」

言ってることが逆じゃないか。シンは呆れながらテラを見つめてみると、彼はニヤリと笑ってさらに声を張り上げた。

「こんなところに来て、『幸せで太ってしまおう』って後悔と、『明日も幸福か、毎日これか』って絶望をな！」

『フハハハ』とか笑っている師匠と、周りからの野次の雨あられ。

『この馬鹿皇帝』、『いい加減にしろ馬鹿もの』、『常識を知れ、陛下』とか色々といわれても笑っている彼と、それに釣られて笑っている人たちを見つめながら、シンはふと思う。

彼がどういった存在で、強さに貪欲で敵に容赦がないとしても、味方には頼もしい存在である以上は、このままでいいのだろう、と。

「というわけで、シン、いいかげんに結婚しろ」

「何処からどうつながってその結論になるんですか、師匠!？」

あんまりな結論に盛大に突っ込みを入れると、テラは『え、違うの』という顔をしているから、シンはもう一度と拳を握るのでした。

午後にはカフェテラスでお茶でもいかが？

長いような短いような時間が流れた、らしい今日この頃。皆さまはいかがお過ごしでしょうかとシン・アスカは空に問いかけていた。

「……俺って、もうすぐ二十歳なんだよな」

『なっがい青春時代だったね』

「ああ、そうだな」

隣にいるティスが、十三歳くらいに成長していたりするのだが、シンは特に深く突っ込みは入れない。

腰まで伸びた藤色の髪が風になびいて、本人が必死に三つ編みにしようとして失敗して、さらに御団子に挑戦して挫けたらしい髪型は、見た目が『爆発』しているように見えるが、突っ込まない。

『……切る』

「ちよつと待てティス！　なんで斬艦刀を出した?!」

『斬る』

「言いなおすなよ！　ただでさえ最近俺の周りは常識がないんだから!!」

必死に相棒を宥めるシンの前で、その当人は可愛らしく首をかしげた。

『え？　元々ないよ』

あまりに酷い言葉に、シン・アスカは小さく崩れ落ちた。

セシリアが来ました、チエルシーって女の人も一緒に来ました。

「な、なんですのこの世界?!」

来て早々にそう叫んだ彼女は悪くない。

「シャルロットさん！ 説明を求めますわ!!」

「あ、うん、そうだよね」

二年も経ってかなりジョーカー銀河帝国に染まったシャルロットは、遠い眼をしながら抱きついてきたセシリアの頭を撫でてあげた。

「本当に説明してください！ どうして!」

半分くらい泣いている彼女は、真っ直ぐに手を伸ばして指を向けた。

「どうしてあんなところで逆さ釣りにされている人が皇帝陛下なんですか?!」

「あ、うん、そうだね」

信じられないという顔をしているセシリアに、シャルロットは思う。

自分も最初はそうだった、と。なんであんなに、ほぼ毎日のように政庁の屋上から吊るされているのか、毎日やっているのに反省はしないのか、どうして彼は笑顔で逆さ釣りにされているのか。

それなのに、毎日のように帝国各地で『皇帝陛下発見』なんて話が流れているのか。色々と疑問を感じるのだが。

「あれは前に来たテラさんですわよね?! シンさんの師匠の?!」

「あ、そうだね」

最大の疑問は、一つだろうか。

「あ、今日は正午か」

「おい、誰か配当表を持ってこい」

「お昼の時間だな。昼休みにしようか」

「あ、馬鹿が帰ってるよ」

「本当ね」

などと、帝国国民が吊るされている陛下を見て、『ほのぼの』としているのは、毎日のことなのでシャルロットは疑問には感じない。

最大の疑問は、吊るされているはずの彼が数秒後には隣に立っていることか。

「ようこそ、セシリア！ チェルシー！ 我が帝国へ!!」

「へ?」

間拔けな顔して止まるセシリアとチエルシーに対して、テラは高笑いを上げてマントを大きく広げた。

「存分に楽しむがいい！ この深淵の宇宙に広がる我が領土を！」

「あ、はい」

素直に頷く彼女に満足したのか、テラは大きく頷いた後に、再び元の位置へ戻った。

「……シャルロットさん」

「セシリア、いいことを教えておくよ。ジョーカー銀河帝国皇帝は、『馬鹿』だから。それだけ覚えておけばいいよ」

「解りましたわ」

楽しそうに揺られているテラを見上げた二人は、同じタイミングで溜息をついたのでした。

「師匠!! また何やったんですか?!」

そしてシンが突撃するのも何時も通り。

「なんだよ?」

「なんだよ……じゃないでしょうが! ヴイルテイラスに査察命令が入ってるんですけど! しかも星間同盟の支配地域だった星系に!」

「あ、そこ制圧してきた」

「は?」

「うむ、あいつらこっちの宙域にちよつかいかけておいて、『自分達の領域だ、さっさと立ち去れ』とかいうから、ブチっと」

親指と人差し指をつけるテラは、何処までも楽しそうに笑っているのだが、シンには解った。

『あ、本気で怒っている』と。

理由は深く聞くのは止めよう、シンがそう判断している最中、原因となった人物が暴露してしまう。

「俺の国民に手を出しておいて、『おまえらが悪い』なんて言われたら、『悪魔でいいよ、悪魔らしい手段使うから』ってなるじゃん」

「……なるわけないだろうが馬鹿師匠があああ!!」

人の気遣いをなんだと思っっているんだとシンは叫んだという。

同じ頃、空を見上げていたシャルロットとセシリアは。

「これも普通のこと、ですか？」

セシリアの問いかけに対して、シャルロットは笑顔を浮かべて小さく首を振るしかなかった。

その日、ジョーカー銀河帝国は領土が増えた。丁度、一年の締めくくりの瞬間に増えた領土に、政府関係者全員は死ぬ思いをしたという。

査察任務は専門家に任せる、というエイルンの言葉に何人かがホッと安堵を浮かべたのは、当然のことかもしれない。

どちらかといえば、ヴィルティラスの大半が事務処理や査察が苦手なで、できれば武力制圧とか、戦場への乱入、あるいは突撃、突入任務を好む。

査察なんてめんどくさいことを任せられるくらいならば、敵陣中央に強制転移させられたほうがマシ。誰もと言わない本音を、部隊長は正確に見抜いていた。

いたのだが、専門家というのがヴィルティラス内部のことなのは、彼は言わないでいた。

「というわけだ、ハイネ」

「俺ですか？」

「査察できる、弁護士資格持ち、外交官の知識もある、いざという時は裁判官の資格も持っているハイネが適任だろう」

結局、頼りになる兄貴分が貧乏くじを引くことになったわけだが、彼は小さく肩を竦めて『了解』と答えた。

「後でシンにも取らせる」

「お願いします、あいつはなんだかんだでやれるやつですから」

そんな会話が目の前で行われていることに、シンは疑問を感じてい

るのだが口を挟むことはしない。

それよりも、ハイネの資格のほうに気がなったともいえるが。

「ハイネってそんなに資格をもっていたんですか？」

「ま、器用貧乏なくらいにはな」

ニヒルな笑みを浮かべた彼ははぐらかして答えず、エイルンも何も言わないでいる。

後日、ハイネの資格について宰相に聞いたところ、『ジョーカー銀河帝国内の資格で彼が取得してないものはないはずよ』と答えを貰い、改めて彼のスーパーチートぶりを知ったのでした。

ともかく、だ。

任務が通達されなかったシンは、めんどくさいことから逃れたのだが。

「どうしてこうなった？」

政庁の近場のカフェテラスにおいて、シンはコーヒーカップを持ちながら、目の前の光景から必死に意識を反らしていた。

「へえ、そうなんだ」

にこやかに笑うシャルロットは、目が笑っていないで周り中を見回している。

「本当、おかしい話じゃない？」

妙な色気を振りまきながら、シエリルは優雅に微笑んでいる。

「おかしい話ではないはずでは？」

真顔で無表情、というわけではなく今日は微笑を浮かべるティーラは、目の前のカップを握りつぶしかけている。

「あ、あの、皆、仲良く、ね」

そんな雰囲気の中で唯一の癒しになりそうなリタは、周りの圧力に屈しそうになっていた。

「なるほど、シンさん、どういうことでしょうか？」

淑女の頬笑みを浮かべながら、目の殺気を浮かべたセシリアが問いかける。

「どうしてこうなった？」

再度、シンは目の前にいる女性たちを視界に入れないように、小さ

く呟いていた。

セシリアが来たから街を案内したいとシャルロットがいい、付き合いことはできないがマップデータくらいはとシンが提案して、二人とカフェテラスで待ち合わせしていた。

そこへ丁度、任務が終わって戻ったティーラが遭遇。当り前のようにシンと同じテーブルにつき、さらに政庁に用事があつて終わった後のシェリルが合流してきて。

現在の状況が完成した。

『だから、さつさと結婚しろって言ったんだよ』と脳裏で師匠が馬鹿笑っているが、今のシンは突っ込む気力はない。

にこやかに穏やかにカフェテラスでお茶でも、という雰囲気であったのに、殺伐とした圧力と、喉元に刃を突きつけられたような冷たさが漂う。

『これが修羅場！ シン、成長したね』

テーブルの下、足元のところでティスがハンカチで目元の涙を拭いているのだが、そんなことをしている余裕があるのなら助けてほしい。

相棒の心の声を察知したティスは、ハンカチをしまつて親指を立てる。

『名案がある、シン』

さすがだ、相棒、頼りになる。内心で感謝を述べたシンに対して、ティスはそのまま親指で首をかつ切る仕草をした。

『全員、嫁にすれば解決。ようこそ、地獄の一丁目』

こいつは誰の相棒だったのだろう。二年前は本当に頼りになる相手だったのに、今はポンコツでしかないらしい。

「つまり、全員がシンを狙っている、と？」

シェリルが牽制した。目線で見つめつつ、指先がテーブルを叩く。

「ええ、当たり前でしょう？」

牽制を払いのけるティーラ。恥じらいなく真つ直ぐに好意を向ける彼女に、残り三人が『恐ろしい子』と思ったとか、思わなかったと

か。

「わ、私もシンが好きだから譲らない」

ここで予想外の伏兵、リタが突撃。まさかの攻撃に他の四人にクリティカルダメージ。

「……シンはどう思っているの?」

シャルロットの危機回避実行。問題の彼に丸投げのトラップカード発動。シン・アスカに大ダメージ発生。

「お、俺?」

「はい、シンさんのお気持ちはどうなのですか?」

さらにセシリアの追撃発生。シンに追加ダメージ。

「お、俺は」

「あら、私は告白して『受け取ってくれた』わよね?」

シエリルの伏せカード発動、『過去の約束』によりシンの胃に大ダメージ。こんなダメージは師匠以来だ。

瞬間、フィールド魔法発動。『どういうこと』の四枚同時発動により、ダメージが倍加。シンのライフが削られる。

「答えてくれるかしら、『凍焰の鬼神』様?」

さらに追撃発生。しかし、そのカードはカウンターによって阻まれる。

「皆の気持ちは嬉しい」

カウンターカード、『字を持つ騎士の矜持』発動。これよりシンの精神が豆腐から鉄鋼へと変化。感情抑制も發揮して、冷静さが戻った。

「けど、俺にはまだ皆の気持ちに応えるだけの強さがない。だから、待っていてくれ」

真顔で語る彼は、とても『ヘタレ』なことを言っているのだが、惚れた弱みかそれとも精神的な魅了かは解らないが、彼女達はただ一言『はい』とだけ答えたという。

後日、シンは妹にこう言われた。『最低のスケコマシ』と。

嵐のような一日の後、シンは今日もヴィルティラスの執務をしていた。最近、どうしてこう心労ばかりがたまるのか。休日でも任務中でも心労がたまるなんて、普通ならば倒れていてもおかしくないのに。自分がヘタレだからだろうか。そもそも、どうして自分なんかに好意を向けてくれるのか、カツコイイなんて言えないのに強くもないのに、好かれるなんて理解できない。

「なんて顔して仕事している、シン？」

「あ、ガイさん。俺ってなんで人に好かれるんでしょうか？」

「はあ？」

声をかけてきた彼に、思わず素で質問してしまった。

「なんでって、そりゃ。何でだろうな」

ガイも返答に困る。彼も人の好意には疎いタイプだ。敵意や殺気には鋭く反応できるが、自分に向けられた好意にはとても鈍い。

「ガイさんは既婚者じゃないですか、ならそういったことは解るかなって」

「俺はあいつ一筋だからな。あいつのことならいくらでも解る。それ以外って言われてもピンっとこないんだよ」

「そんなもんですか」

「そんなもんだ。人が人を好きになるのに理由が必要ってやつもいれば、理由なんていらなくてやつもいる。大切なのは、その人に対して自分が『どういう想いを抱いているか』じゃないのか？」

迷いながらじゃない、真っ直ぐに自信にあふれて答える彼に、やはり彼は『勇者王』だなとシンは思った。

迷っている人の背中を押してくれる、勇気を与えてくれる。彼に『大丈夫』といわれると、何とかかなりそうな気がするの、彼が自分自身に迷いを抱えずに真っ直ぐ生きているから、だろうか。

「それにな、そういったことは俺じゃなくて師匠を頼るべきじゃないか？」

「師匠、ですか？」

「ああ。あの人も伊達に十三人も奥様を抱えてるわけじゃないだろう？」

「そりや、そうかもしれせんけど」

少しだけシンは、だからといってあの人が答えをくれるなんて思えなかった。毎日、何処かへ飛びまわっては政庁から吊るされて怒られて。あれでよく奥さんたちが愛想を尽かさないな、と疑問に感じるのに。

「十年以上、誰も離婚してないのがいい証拠じゃないか？」

「それは、まあ」

確かにそうかもしれない、とシンは思った。ならば相談してみるのもいいかもしれない。

ガイのアドバイスに頷き、シンは仕事を片付けた後に師匠であるテラに連絡を入れた。

相手は、『じゃ、カフェテラスで』と答えてすぐに来てくれた。

「師匠、俺ってどうして好かれてるんですか？」

「俺に聞くなよ。そんなの彼女たちに聞けよ」

「いや、そりやそうなんですけど」

ニヤニヤと笑っているテラに、軽く怒りを感じてしまうのだが、今回は自分が呼び出したからとシンはグツと我慢した。

「なら、師匠と奥さん達って、どういう経緯で結婚したんですか？」

「ん？ もらえるものは貰う主義だ」

あつさりと最低なことを答える彼に、溜息が出てしまう。まったくもうと内心で悪態をつくシンに対して、テラは穏やかに微笑む。

『例え、地獄の底であっても貴方と一緒になら納得できる』

「え？」

「何にもないさ。理由とか資格とか、そんなの俺は知らない。でもな、俺はそういうもんだと思う。幸せにしてみせるなんてさ、本当にできるどうかはわからないし、幸せの定義は人それぞれ違うものだ。だから俺は彼女たちに、『納得』はできるようにしているつもりだ」

いきなり深い話を持ってきた師匠は、まるでバーにいる時のように

大人の顔をしていた。

おちやらけてふざけていて、馬鹿のような行動をする人。子供のよ
うに、悪戯っ子のように動き回る彼は、それでも真面目に向かってき
た人に不真面目に答えることはない。

「頭で考えずに、お前のそこはさ」

テラは真つ直ぐにシンの胸を指差す。

「彼女達のことをなんて言っている？」

「俺は……」

「ま、悩んだら悩めるだけ悩め。悩んだことは決しておまえを裏切ら
ないし、未来とかでおまえを助けてくれる」

「はい」

大きく頷くシンに、テラは立ち上がる。

「悩んで迷って答えが出ないなら、彼女達一人一人と向き合ってみろ。
案外、それで答えが出るかもしれないぞ」

「え、でも、どうやって」

問いかけるシンに対して、彼は立ち上がり背を向けながら、顔だけ
振り返りこう告げた。

「簡単だろ、『午後にはカフェテラスでお茶でもいかが？』って言えば
いい」

彼はそう告げて、姿を消した。

残されたシンは『そう言う簡単な話なんだろうか』と疑問を落とした
が、師匠が真面目に答えたことだからと考え直す。

後日、その言葉に『皇妃達』全員が過剰反応したとかしなかったと
か。

そして、シン・アスカはそれを実行しようとして『初めての羞恥心』
を味わうことになる。

「これってデートの誘いじゃ」

『え？ シン、今になって？ 今になって気づいたの？』

「テイス、知っていたならもっと速く言ってくれ」

呆れた顔をする相棒に対して、シンは両手で顔を覆って机に突っ伏
すのでした。

実は甘味が大好物です。

男には決して譲れないものがある。

どんなに優しい人でも、気前のいい人であったとしても、決して『これだけは』というものがある。

過去に存在した英雄たちでもそうだ。すべてを犠牲にした政治家や、軍人たちにもあったもの。

人が人として生きるならば、どれほど欲望を捨てようとも、自己を犠牲にしたとしても、決して『譲れないもの』はある。

人が生きているなら当然の話だから、『テラ・エーテル』にも譲れないものはある。

知っていたはずだった。彼が無欲だなんて思っていなかった、彼が傲慢だとは思えなかった。

シン・アスカにとつて、テラ・エーテルは『いいよ』と許してくれるような、寛大な師匠だとは思っていなかったが、話せば解ってくれるはずだと、心の何処かで甘えていたのかもしれない。

両手に持っていた『ウロボロス』が弾かれた。

衝撃に顔をしかめる暇もなく、目前に迫った見慣れた顔に驚愕を浮かべるでもなく、反射的に自分の体を無理やりに捻る。

衝撃が頬を斬った。紫色のはずの師匠の瞳が銀色に染まっているのが、僅かに見えた。

『斬王の瞳』。視界内に捕らえた存在を斬る能力、と昔に聞いていたから咄嗟に反応できた。

本当に規格外、化け物とかチートとかバグとか、色々な言われ方をしている師匠。他の国では『サイレント騎士団』こそが『神帝』テラ・エーテルの凄味であるとか、強味であるとか言われているが。

まったく違う。『サイレント騎士団』は、師匠にとつては『手加減』でしかない。十億とか二十億とかいう戦力も、彼からしてみればちよつと頼りになるかな程度でしかない。本当に彼の本質を知る者ならば、『サイレント騎士団』を相手にしがぼうがマシといえる。

嘘だと思いたかった事実を眼前につきつけられる。今までの訓練は遊びだったのかもしれない、今までの地獄は実は師匠にとっては兎戯だったのかもしれない。

そう思える。

「は、ははは、師匠」

彼は答えない。答えずに無数ともいえる銀色の円環を浮かばせて、十二の巨大な獣たちを従えた、両手に二メートルの巨剣を持つ彼は無言で『怒り』を叩きつけてくる。

「まさか、そこまでですか？」

不意に呟いたシンは、数時間前の出来事を思い返す。

事件の始まりは、何時だって突然。昔からそうだったように、日常の何気ないことが、事件の始まりを知らせてくれるのだが、その時のシンは『それ』を見落としていた。

シン・アスカは執務室まで、という連絡を受けた彼は政庁を上へと昇っていた。呼び出しなんて珍しい、お叱りかと思ったのだが最近は特に問題を起こしていない。異世界とかリタのこととか、そういったものはすべてお説教済みなので大丈夫だろう。

では、どうしたのか。他の問題か、あるいは直接の任務とか。最近にあった出来事は師匠であるテラの『近隣プチツと蹂躪事件』くらいのはずだ。まさか他に何かやらかして、その後始末にということか。いや、待った。そうならば書類が自分の机に来るはずだ。事件の発生直後とか最中なんてことは、あの師匠が『露見』させることはない。何時だってこっちに話がるのは『事後』でしかない。

もしかして、その切っ先を掴んだのか。さすが、帝国情報局。日々

のたゆまぬ努力が実を結んで、ついに師匠の行動の先を掴んだということか。

違うか、とシンは思い直す。情報局は優秀なのは認める、他国の議員の朝飯の内容を五分後にすべて調べ上げるとか、各人の好みの香水まで探り当てるとか、色々無駄な方向に力を注いでることもあるが、やる時はやる人たちがばかりなので、師匠の行方を探り当てたと信じたいが、出来ないだろうと確信してしまう。

あの師匠の巫女、ホシノ・ルリが情報局の『調査』を師匠に届かせるわけがない。『サイレント騎士団』は、史上最強絶対無比。伊達や酔狂で、そう言われているわけではないのだから。

とすると、今回の呼び出しはどういった理由でなのか。ちよつと嫌な予感がしつつシンは執務室の扉を開いた。

彼の心配は杞憂だったのだが。

「久しぶりだな、シン」

「恭也さん」

執務室にいたのは、師匠の幼馴染にして単純な近接戦闘においては師匠を圧倒する人物。単純な身体能力においては、『え、マジですか』とシンでさえ信じられないような動きをする人。

実は、高町・土郎のほうがもつと信じれない動きをしているのだが、シンは戦っているところを見たことがないので知らない。

「テラがまた馬鹿やったと聞いて顔を見に来たんだが」

「あ、そうですか」

「逃げられた」

憤りを滲ませている恭也に、シンは『本気で逃げたんだらうな』と察してしまう。野比・のび太と高町・恭也の二人が揃ったら、いくらテラでも逃げることができな。単純な戦闘になればテラの勝ちだろうが、それでも周囲五十キロは荒野になりかねない大乱闘になるだろうから、そんなことは誰も望んでいないしやろうとも思わないだろう。

だから逃げたか。

「で、今、その話をしていたのよ。恭也、子育てが忙しいところ、悪い

わね」

「忍から『たまには息抜きが必要よ』といわれていたからな。息抜きがてらテラをたたきのめしてやろうと考えていたんだが」

いや、待つてとシンは思う。息抜きで師匠と戦うなんて、そんな無謀なことを考えるのは恭也達くらいだ。さすが戦闘民族『高町家』。あのブリタニアと双壁をなす帝国の『脳筋集団』だ。

「シン、何か失礼なことを考えていないか？」

「いえ、そんなことはありません」

表情に出していないはずなのに、恭也は鋭くこちらの内面を見透かしてくる。さすが、師匠の世代はハイスペックが多いな。廃スペックもいるが。

呆れて考えているシンだったが、シンの世代のそれを超えたハイスペックがいるのだが、彼は考えないようにしていた。

拳で戦車を粉碎する少女とか、刀一本で戦艦を両断する青年とか、色々なぶつ壊れがいることをシンは覚えないようにしていた。

「まあ、テラは後で捕まえるとしてだ。お土産もある」

恭也が持ち上げたものに、アイリスが珍しく瞳に星を浮かばせていた。

「ありがとう、恭也。貴方のおかげで私は後五十年は戦えるわ」

ウキウキ気分な宰相殿がいて、壁際には音符を乱舞させながら紅茶を入れている皇帝代理がいた。

そうなる気持ちも、解らなくはない。恭也が持ってきたものは、ジョーカー銀河帝国では滅多に手に入らない、嗜好品。至高品と誰もが言っているとてもなく美味しい、シュークリーム。

高町・桃子氏によるととても美味しい、スイーツであった。

ジョーカー銀河帝国において、最も甘味に強い欲望を持つ者は誰か。

誰だって甘いものは好き。大人の男性ならば、甘いものなどという人もいるかもしれないが、好きなものは好きといえる世の中であってほしいと願っている人たちによってつくられた世界で、男らしくないとか女らしくなんてことは個人の意見でしかなく、周りに強要するものでもない。

個人の趣味趣向は個人の自由であるべき、なんて皇帝が帝国全土への放送で言うものだから、『あ、自由なんだ』と国民が思ったとか思わなかったとか。

趣味趣向だから人殺し大好き、周りを虐めるの大好きとか言って実行するとしたら、とてもいい笑顔の皇帝以下政府関係者や軍人たちが迫るので、そつと心の中にとどめている人たちはいるが。

話を戻して甘味が大好きな人は、実はジョーカー銀河帝国には多い。特に政府関係者、あるいは特務部隊とか。実力者になればなるほど、甘味が好きという人が多くなるのがこの国。

ヴィルティラス部隊長のエイルンはもちろん、大好物だ。普段は堅物な印象がある甘いものを食べている時は、少年のように無邪気になる。

といったように、甘味大好きな人達は、甘味が関わると人が変わってしまうくらいに、常識がなくなるらしい。

そして、ジョーカー銀河帝国において、こと甘味が関わってくると人が変わったように凶暴な戦闘生物になるものがある。

「ああ、おいしかった」

「はい、とても美味でした」

アイリスとアセイラムが深々と息を吐く。一年も前に食べたきり、その後は食べられる余裕はなかった。

いくら翠屋が国内にあっても、あちらは第一太陽系、こちらは第二太陽系。ちよつと行って戻ってくるくらい可能だろうが、仕事を立て込んでしまふととてもじゃないが政庁を抜け出せない。

届けさせるって手段もあることはあるのだが、『別の太陽系まで出

前を』なんてとてもじゃないが言えない。やれないことはない、かもしれないが。自分のために出前をしてもらうとか、誰かに代理で行ってもらうなんて我儘が言えるわけがない。

宰相と皇帝代理が言い出したら、誰もが『やろう』と言いだして翠屋の製造能力を軽く超えてしまうだろう。

それでは相手に迷惑がかかるかと我慢していたのだが。我慢が時に最高の調味料になることを、二人はこの時に改めて痛感したのであった。

満足、満腹。室内にいた誰もが幸福感を味わっている時だった、シンはふと空になった箱を見つめた。

保温がきく持ち運び可能、いざとなれば時間停止もかけますって専用の箱なのだが、どうも気になることが一つ。

「あの恭也さん、ちよつといいですか？」

「なんだ？」

「あれ、全部だったりします？」

シンが指さしたのはシュークリームが入っていた箱。

「そうだが？」

あつさりと答えた恭也だったが、すぐに顔色を変えた。

しまった、と顔にありありと書いてある。そしてそれは、すぐに全員に伝播していく。

「ちよつと待って、本当に全部？」

「ああ、すまない、失念していた」

「ほ、本当に全部ここに？」

「ああ」

アイリスとアセイラムの問いかけに、恭也が顔を抑えつけるように答える。しまった、失敗したと誰もが思っている中、事態は最悪な状況に陥っていく。

「ただいま」

「師匠?!」

珍しく扉を開けて入ってきたテラに対して、シンは咄嗟に反応した。

状況は最悪、場所は不味い。ここでもし彼が知ってしまったら、と考えるシンの脳裏に核爆発で周囲を薙ぎ払う光景と、次元震動弾が炸裂する空間の歪みが同時に映る。

史上最悪最凶、そんな事態が帝都で、しかも政庁の中で起きたとしたら帝国国民の不安は最高潮になる、そうなったら帝国警察機構が動くことになって、最悪の場合は帝国軍まで動くことになる。

帝国軍が動けば国境の警備が不安定になって、侵入してくる敵国は必ずあるだろう。それくらい、帝国は恨みを買っているのだから。

どうする、どうする。シンが必死に考えている中、他の三人も状況を打破するために色々と思いを巡らせる。

一方、テラはきよとんとしたまま視線を動かす。

ゆっくりと動いた先で、止まった。

瞬間、シンが最初に動いた。

「テイス!!」

『はい!! コード入力! 『天帝牢獄』!!』

もうやるしかない、シンは決意を込めて叫んだ。

範囲対象は自分と師匠の二人。普段だったら、『止めろよなあ』と言って笑いながら作用を打ち消すのだが、彼が呆けていたから完全に取り込めた。

「……シン、今さ」

「は、はい」

実行してみたのだが、もうすでに後悔しかない。せめて、アイリスと恭也を入れていれば、どうにか説得ができたかもしれない。咄嗟の判断で展開したのだが、自分の判断ミスを呪いたくなる。

「翠屋の箱が見えたんだけどさ」

「は、はい」

もう正坐して土下座した方がいいんじゃないか。問いかけるテラの気配が、明かに普通の状態ではない。殺気や怒気なんて言葉が小さく見えるくらいの圧力が、全身を絞めつけてくる。

一般人が魔王に会ったら、こんな気分ではないだろうか。シンは場違いな考えをしながら、必死に心の平静を保とうとしていた。

「……空じゃなかった？」

「……」

シン、答えられず無言。どうしたらいいか、いつそのこと今から翠屋に行きませんかと誘ってみるか。これならば問題解決、とわからないのがテラの立場。

帝國中を飛び待っているが、彼は皇帝陛下。ちよつと店に入ると、皇帝陛下御用達なんて報道されてしまう。報道されたらその店は賑わうのだが、店が目的で押し掛ける人たちだけではないのが、悲しいところ。

皇帝陛下にあつて色々相談したいと考える人まで押し掛けるから、彼は特定の店に出入りすることは控えていた。

当然、大好物がある翠屋でさえも。

「シン？」

「は、はい」

「答えるよ、おい」

「……すみません！」

土下座実行、速やかにシンは頭を下げて謝罪することにした。

「食べてしまいました！」

対してテラは無言。何の音もたてず、気配もまったくしなくなった。

あ、これは助かったとシンは思ったかった。思い込もうとしてみたのだが、自分の中の第六感が最大警告を告げている。

覚悟完了したか、こちらは決死覚悟が完了した。そんな言葉を向けてくる自分の内心に、シンは諦めてフウつと溜息をつき、顔を上げた。
「いい度胸だ、お前」

そこで見たテラの顔を、シン・アスカは一生、忘れることはなかった。

笑っていない、笑顔じゃない、瞳が笑っていない。そういったものではなく、瞳に光を灯しながらも、無表情な彼がそこにいたから。

あ、死んだ。

シンがそう思った一方で、体は速やかに両手に『ウロボロス』を引き抜く。ついでにテイスに最大戦闘を通達、全身が『戦闘モード』になったのを感じた瞬間に、両手に衝撃が走って。

話は最初に戻る。

宝具の雨が降り注ぐ。ランクとか等級を制限するとか、そんなものは無関係に降り注ぐ武器達。

英霊が使っていたものもあれば、神々が使っていたものもある。かつて英雄王の戦い方を見ていたテラの先祖の誰かが組み上げた、『王の財宝』に似せたスキルは、実はオリジナルとは全く違う理論を持っていた。

黄金の波紋ではなく、銀色の円環。その内部に瞬く七色の光芒は、その最もたる違いらしい。

『天壤無窮』を引っ張り出し、シンは宝具の雨を潜り抜ける。

元となった技術は『ボソン・ジャンプ』。科学的な技術により作成された技術は、瞬間移動と伝えられている。

だが、違う。本当はそういったものではないことを、シンは昔に師匠に言われて知っている。『実は時間移動』だと。禁じ手があるから、瞬間移動となっているだけなんだと。

剣、槍、刀、次々に降り注ぐ武器の数々には古今東西以上に、未来のものまで混じっている。

古ければ古いほど神秘は増す。その理屈で言えば未来の武器など脅威ではないのだろうが、テラ達の一族はそれを『神秘に通じる』ように仕立て上げた。

過去から未来へ流れ、世界が滅んだ後にその武器を新しい世界に持つてくる。あるいは時間操作で一万年以上の時間をかける、それに耐える武器を生み出して工作すれば、それらは神秘に通じる武器となる。

こうしてテラ達の一族が長い年月をかけて生み出した武器達は、過去の英霊が使っている宝具に劣らない威力を持つていた。

レーザーやビームが、太陽の聖剣と同じ威力を発揮するなど、誰が信じれるかと当時は叫んだものだが、今は信じられる。

身を持つて味わっているから。

それに、とシンは地面を蹴とばして大きく距離を開けた。そこに巨大な雷を纏った獅子が飛び込んできた。

宝具だけでも厄介なのに、ここに十二の眷獣まで加わる。真祖が従える、戦争そのものの威力を持つ獣たち。一代限りのものではなく、何代の何千年も磨き続けた眷獣達の力は、あまりに圧倒的な能力を発揮して周囲を圧倒する。

きつと話に聞く真祖とは、こういった力を平然と使うものだろう。眷獣を叩き伏せ、宝具を叩き落とし、続いてはと視界を向けた先にテラがいた。瞳が他の色に染まる、その瞬間にシンは無理やりに視界から外れる。

チートとかバグって言われているが、あれが一番だろう。瞳だけで九人の異能の王の力を宿すなんて、ふざけるなど叫びたい。視界に入れただけで能力を『発揮可能』とか意味が解らない。

これだけで十分だろうといえるのだが、テラの身体能力はとても高い。肉体強度もとても硬い。その上にまだ使っていない能力もあるらしい。

叩きつけられる剣、『光滅』を『天壤無窮』で弾く。何度ぶつけたか、何度弾いたか解らない数を受けた後、眷獣と宝具の雨が再び振る。

彼の能力は、彼に被害を与えない。敵味方識別があるのではなく、

宝具も眷獣もテラ・エーテルの肉体強度を超えられない。

本当にどうしようもないな、とシンは内心で呆れながらも剣を握る手に力を込める。

「し、師匠、そろそろ止めませんか？」

彼は答えない。

冷たい目でシンを見つめ、右手の剣を持ち上げる。

『彼が馬鹿であるように』。『彼を殺す権利』、不意にシンはそんなことを思い出してしまった。彼が害悪である、彼が世界を滅ぼす前に。彼を討つしかない、それが世界のためである。

違う、とシンは心の底から叫ぶ。そんなことはさせない、そんなバカな話にはさせせない。世界は何時だってこんなはずじゃなかったことばかり、そういう風に言う人もいる。実際、いいことより悪いことが多いかもしれない。

でも、それを認めて諦めるなんてしない。

目の前で不幸なことがあって、『仕方がない』と諦めるなんて絶対に認めたくない。そのために自分は騎士になったのだから。

「師匠……ここで止まれ、俺が止める。絶対に止めてやる！」

決意を込めて、シンは剣を向ける。

悲劇を悲劇のままにさせない。誰もが絶望に嘆くことのない世界であつてほしい、そう願った人たちの集まりで出来た国の中で、『そうであれ』と祈った人たちのためにも。

シン・アスカは、悲劇と絶望をそのままになんてさせたくないから。

周囲の温度が下がる、吐く息が白く染まる、一面の氷の世界。風も空も空間でさえも凍結させたような世界、その中で熱を帯びるのは彼の身だけ。

「絶対に止めてやるからな！」

「やれるものならやってみろ」

「ああ!!」

「来いよ!!」

そして二人はそのままぶつかりかけて。

「馬鹿夫!!」

「ふぎや?!」

背後から迫った剣と槍の攻撃により、テラは沈んだのでした。

何時もと変わらぬ政庁から、何時も以上に頑丈に簀巻きにされた皇帝陛下が吊るされる。

「シン、お疲れ様」

ねぎらいを受ける彼は、『あ、どうも』と何故か燃え尽きたようになってしまったまま、返事をしていたという。

色々、考えさせられる戦いだっただけ。いい経験値を貰った。決意を新たに出来た。

ただ、甘味が原因でなければなあと、シンは切実に思うのだった。

常勝不敗とか、最強無敗とかって

最近、シン・アスカは気になることができた。

実は師匠って、弱いのでは、と。

「ということなんです、ルルーシュさん」

「おまえはいきなり何を言っているんだ？」

唐突にそんなことを打ち明けると、目の前で資料を読んでいた男は、かなりきつい視線を向けてくる。

ルルーシュ・ブリタニア。かの有名な銀河最硬『ブリタニア』家の男にして、体育会系及び肉体言語こそすべてのブリタニア家の、頭脳労働担当その二。

弱い、非力、軟弱、女以下なんて言われている彼なのだが、それはブリタニア家が比較対象だっただけで、一般人と比べたら高い運動能力を誇る。誇るのだが、彼の周囲の幼馴染も人外オブ人外だらけなので、一般人と比べて高くても『弱い』イメージがあるのが彼。

生まれる世界とか生まれる家を間違えた彼、世が世なら皇帝になれたとか最強の騎士であつてもおかしくないらしい。

「いえ、師匠って弱いんじゃないかと思つて」

「……熱でもあるのか、シン？ 今ならフレイとブラック・ジャック先生も医療室にいるから、行つてこい」

厳しい視線は何処かへ行つたのか、明かに慈愛に満ちた心配そうな顔をする彼に、シンは首を振つて否定した。

「体調は大丈夫です。そうじゃなくて、前にあつた『皇帝甘味ご乱心事件』のことです」

すでに帝国中で知れ渡つた、とても馬鹿げた理由で始まつた皇帝の全力戦闘と、それを防ぐべく立ち向かつた『凍焰の鬼神』の一大戦闘を、後日になって政庁はそう名付けた。

かなり不本意な宰相と、もう机に突つ伏す勢いで嘆いた皇帝代理の姿は、しばらく主星で話題になつたのだが。

一方、事件名を聞いたルルーシュは、海よりも深いような長い溜息

をついた後、軽く首を振っていた。

「あいつの馬鹿な行動にも慣れたと思っていたが、まさかそんなことで戦闘をするとはな。嘆かわしい」

「やっぱり、ルルーシユさんもそう思いますか？ 甘味程度って」

「いや」

呆れた顔をしていたルルーシユは、すぐに真顔になってシンに向かい合う。

「甘味は人類の宝に匹敵する。一流のパーティシエが手がけたものは、宝石に勝る価値があるだろう。その上に、カロリーを完璧に抑えた上に甘みは損なわない絶妙なさじ加減は、まさに一流の策士に勝る」

真顔で甘味の素晴らしさを語る彼は、見た目は完全に女性を虜にするような『イケメン』なのだが、語っている内容がとても微妙なものでしかなく、壮大な知識と、膨大な情報を持って語る内容が甘味なんてと呆れたくなるのだが。

「その中でも、翠屋の甘味は素晴らしいの一言では収めきれないほど、至高の価値があるものだ。シン、テラが怒ったのも無理はない」

「あ、はい」

妙な説得力、整った美貌のスマイル、その上で人を熱くさせる何かを持った彼の一言は、絶大な信頼を聞く者に与える。

もし彼が違う世界に生まれたならば、世界の一つや二つはその話術で壊せるんじゃないか、なんて言われているだけはある。

そう考えれば、師匠の幼馴染の中でまともな人はいないのだろう。

あの酒癖が悪くて、時にどうしようもない失敗をするキラがとてもいい好青年に思えるくらいに、テラ・エーテルの周りの人達は『規格外』過ぎる。

「だが、皇帝だぞ、あいつは」

しかし、その表情はすぐに呆れに染まる。いくら彼が甘味に対して信仰に似たような感情を持っていても、同じくらいテラに対して呆れを含んだ『馬鹿もの』的な気持ちを持っているらしい。

「あいつ自身が迂闊に店に入るわけにいかないことは理解しているが、だからといってお土産がないくらいで戦闘するなど」

「ええ、戦闘……あれ？」

溜息交じりのルルーシュの言葉の中で、シンは気になることができた。先ほどから彼は、『戦闘』と言っているが、『全力』とか『全開』とはつけていない。あの激怒状態の師匠が、あの表情が死んだ真顔のテラが、戦闘を開始して手加減したなんてこと、あり得るのだろうか。

「ルルーシュさん、あの時の師匠の戦闘って見たんですか？」

「ああ、見たが。それがどうした？」

「全力でしたよね？」

恐る恐る、シンは問いかける。まさか、そんなことはない。あの時の師匠の殺気は本物だった。迫ってくる圧力も、向かってくる武器の威力も、滅多に出さない眷獣も、すべて本気だったはずだ。

「シン……」

嘘だと言ってほしい、シンはそう願っていたが、現実はとても非情だった。

妙に優しくルルーシュは穏やかに笑いながら、軽くシンの右肩に手を置く。何処か哀愁さえも漂っているような、儂げな青年はゆっくりと口を開いた。

「……あれはあいつにとって十パーセントにも満たない戦闘だった」

「?!」

瞬間、シン・アスカは声にならない叫び声をあげて、膝をついたのでした。

「それで、どうしてそう思った？」

少ししてどうにか復活したシンに対して、ルルーシュは資料を読み

ながら問いかける。

「その、あの時の戦闘って宰相が師匠を沈めたので」

「ああ、そのことか」

資料の最後のページを読み終えた彼は、真っ直ぐにシンを見つめた後、右手を上に向ける。

「あいつは基本的に、『奥様の攻撃を回避しない』」

「え?」

「妻の攻撃を受けて耐えてこそ夫、と思っている節があるからな」

「え、ええ?」

「あるいは妻の攻撃は夫への愛情だろうか。とにかく、あいつが妻からの攻撃を回避したところを、俺は見たことがない。話でも聞いたことがないからな」

なんだ、そのノロケ話は。ようするに師匠は徹底的に奥様達に甘いということではないか。

「あ、そうですか」

「ああ。だから、あいつの勝敗に奥様達との戦闘は含まれていない。理解したか?」

「はい、ありがとうございます」

礼を言っただけだとすると、『そんなことはいい』と彼は告げた後、手もとの資料を差し出した。

「今回、俺がここにいる理由、知っているな?」

質問の形をとっているが、それは答えを知っていることを理解したうえで発言だった。

確か、今回ルルーシュが呼ばれた理由は銀河帝国法の見直し。十年を超えた銀河帝国は現在まで設立当初の法律を使っており、その内部は『あ、単一惑星ならこれで十分』的なものが多い。

現在、ジョーカー銀河帝国が保有している領域は五つの太陽系プラズマいくつかの惑星国家といったところ。日々、近隣の惑星国家がケンカをしかけてきて皇帝陛下が突撃して終わったとか、あるいは経済的打撃とか、宇宙規模の自然現象により滅亡の危機に陥ったとかで、帝国に保護を求めてそのまま隷属したといったことで、勢力圏は拡大し

ている。

太陽系だけを支配下においているのに、銀河帝国とか名乗っているのはどうか、なんて言葉は昔はよく聞いたのだが、最近は聞かなくなつた。

我らが馬鹿皇帝が、『じゃがんばる』とか言い出して色々やらかしてそうなので、誰もが怖くて言えなくなつた、という建前の話だが。「ああ、そろそろ法律の見直しも必要だろうというので呼ばれたのだが、兄上のほうが良かったのではないか」

「シュナイゼルさんって、今は何をしているんですか?」

ルルーシュ以上に頭の回る、ブリタニア家の頭脳労働担当その一は、少し人とズレた感覚とセンスを持っているらしい。

「小学校の先生だ」

「.....」

シン、どういつて対応すればいいか解らずに、言葉に詰まってしまふ。

銀河帝国でも上から数えた方がいい頭脳が、小学校の先生をしているとか、本当にそこでもいいのか、才能を無駄遣いしていないかと色々と考えてしまふ。

「将来、アインシュタインを超える天才を育てると言っていた」

壮大過ぎる計画が、実は裏側でこつそりと進行中だったらしい。

「昼間は小学校で、夜は個人塾の講師をしている。『いつか、ルルーシュや私を簡単に論破できる軍師を育て見せる』と、とてもいい笑顔で語っていたが」

「シュナイゼルさんって、最近は休んでいるんですか?」

知っている限り、その前は外交官とかやっていた気がするのだが。

「ああ、一日三時間は眠れるようになったと、嬉しそうに話していた」
「止めてあげてください」

あんまりな内容に、シンは思わずルルーシュにしがみついていた。
「俺の言葉を兄上がきくと? もしダメならナナリーが『殴って眠らせる』ことになっている」

「あ、そうですか」

幼くて可憐な少女で、バルコニーで本を読みながら紅茶を飲んでいそうな深窓の令嬢、といった雰囲気の彼女が拳一本で戦車を破壊可能なんて、誰が信じれるだろうか。

「シン、最近のナナリーは戦艦に穴を穿つ」

「強く生きてください、ルルーシユさん」

「ああ、ありがとう。シンところで、おまえがここにいる理由を思い出せるか?」

「はい。法律関係の勉強ですよね?」

「そうだ。では、この法律に対して、改定案を考えろ」

唐突に言われたことに、シンは一瞬だけ呆けそうになったが、何とか気持ちを持ち直して真顔を向ける。

「無理です」

「やれ」

即答で返すルルーシユに、さすが師匠の幼馴染かとシンは諦めた。

右手に現行の法律データ、左手にそれに対しての改定案のデータ。
『うむ、シン、さすが』

「うるさい、ティス、邪魔するな」

『応援しているのだ』

妙な言葉に顔を上げて見ると、目の前に女学生のような服装のティスがいて、その後ろにいるルルーシユは十二の画面を一斉に操作している。

「質問か、シン? それともティスの服装でも気になったか?」

こちらに顔を向けることなく答えるルルーシユに、『何でも有りません』と答えながら、シンは再び顔をデータへと戻した。

「これって、俺やルルーシユさんがやることなんですか?」

不意に思いついたことを口にする、彼は操作を続けながらも答えを返す。

「俺以外が関わると色々厄介だな。皇妃様達が関わると、必ずテラが出てくる」

「あ、察しました」

師匠が関われば、問答無用で改変できるだろうが、それでは万人のためにならない気がする。一人ですべてが終わるならば、その人にすべてを任せて他の人の経験にならない。

けれど、今の状況も同じではないだろうか。

「現在、俺以外にも十三人ほど法律の見直しを行っている。現在の法律を拡大できるかどうか、あるいは根本から見直したほうがいいのか、そういった両極端な方面では三十人以上が動いている」

「多人数で別々にやるんですか?」

時間がかかって、返って収集がつかないのではないか。シンは疑問を感じて言葉を投げると、相手は小さく苦笑したようだった。

「急ぎではないから、多角的な意見を求めたのだろう。アイリスのことで、その点は考えているさ。今回は時間より深く広くを求めた結果だ。急いで改編した結果、数年後に不備が見つかってさらに改編とするよりは、深く考え様々な意見を取り入れて堅実な法律改編を行いたいのだろうか」

「そうですね。で、俺もですか?」

「次期皇帝陛下もかかわるべき、と考えたのだろう。あるいは、ヴィルティラスでの三人目の『万能職』を生み出したいのか」

ちよつとだけ期待の込められた瞳を向けられ、シンは自分はそんなに万能な存在じゃないと反論しなかった。

「え、あれ? 三人目って?」

口から出たのは別の言葉。ハイネの万能さは知っていたが、他の人って誰がいただけるのか。

「なんだ、知らないのか？」

「え、他にいましたっけ？」

「ガイも資格はすべて持っているが？」

「ええ!？」

あの勇者王も、そんなに万能だったのか。シンが初めて知った事実
に驚愕を浮かべていると、ルルーシュは呆れたように溜息をついた。
「あいつは普段の言動が熱血だから、そう思えるだけで博士号も持つ
ている、本当の意味で万能・万全の勇者王だ。医学関係の資格まで
持っているからな」

「あ、ああ、そうですか」

意外に自分は周りで働いている人たちのことを知らないのか、シン
は自分が周りに無頓着な冷たい人間に思えてきた。周りの人達は、自
分のことを色々と気にかけていてくれるのに。

「そう気にするな。おまえは良くやっている方だ」

「慰めてもらわなくても自分のふがいなさはよく解っていますよ」

「いや、本当のことだ。あの師匠の元で育ったのに、よく事務関係の技
量を伸ばしたと俺達は尊敬している」

「あ、いや、その」

雲の上のような人から真っ直ぐに向けられた敬意に、シンは少しだ
け恥ずかしくてどう答えていいか解らずに言葉に詰まってしまふ。

「本当にな」

一方、ルルーシュは深く項垂れていた。

テラ・エーテルは絶対無敵、常勝不敗、何が相手でも恐らく危機的
状況に陥ることなく潜り抜ける。命の危険にさらされるなど、世界が
終わろうともあり得ないだろう。

しかし、だ。その強さは戦闘面でしか発揮されない。彼の私兵扱い
の『サイレント騎士団』は、彼の戦闘能力に対して凄味にはなれない
が、それ以外の面では彼を支え続けている。

その事実を伝えるべきかどうか、ルルーシュは僅かに悩んだのだ
が、真剣な顔でデータを見ているシンを見た後で、首を振った。

教えない方がいいだろう、あの向かうところ敵なしのテラ・エーテ

ルが真面目に取り組めば取り組むほど、書類に誤字脱字を多くする事務関係無能だなんて、とてもじゃないが言えない。

本当に呆れるくらいに、真顔で『あ、マジだ』と幼馴染達全員が感じるほどに真面目に取り組んでいるのに、出来た書類は誤字脱字だらけで、下手をすると文章になっていないときさえあった。

それに、テーブルマナーとかいったものも教えても身につかなかつた。ナイフやフォークを内側から使ったり、左右別々の場所からとったり。『え、手づかみダメなの、何で？』と真顔で返されたときは、もうどう答えていいか解らずに全員が顔を見合わせたものだ。

それを考えれば、シン・アスカは良くやっている。書類は教えれば教えるほど上手くなっていく。事務関係は一度でも指摘すれば、多岐に渡って活用してくる。

本当にこのまま彼が二代目皇帝になってもいいのでは、と考える政府関係者は多いのだが、誰もが彼を面と向かって褒めることはしないので、彼自身は知らないことだ。

「本当にもつたいない」

「え、何ですか？」

つい言葉に出してしまい、シンが不意に顔を上げた。

「何でもない。続けていけるか？」

「はい、もう少しで何とか」

「解った」

さすが、普通の政治家や事務官にさせたら、五時間かかる分が一時間未満で終わるとは。

ルルーシユは内心で思う、『兄上、天才を育てる心地よさ、解った気がします』と。視線をシンに向けながら、彼はフツと笑った。

すっかり仕事して政庁から戻るシンは、入口から出たところで軽く背伸びした。久しぶりに事務仕事漬けだったから、体中が痛い。戦闘訓練とはまったく違う疲労に、たまにはこんなものもいいかな、と思ってしまう。

「……ああ、また何やったんですか？」

無意識に振り返った先、政庁の屋上から皇帝陛下が吊るされていた。

今日は珍しく張り紙付きで。

『馬鹿が、皆が頑張った書類を改悪した』と。あの字はルルーシユのものだ。まさか、今日にやった分を師匠が何かしたのか。またかと思う彼だったが、改悪とはなんだろう、と疑問を感じた。

師匠が関わって悪くなったことなど、今まで一度もないのに、と。数年後、シンはテラ・エーテルが事務関係無能、生活関係全滅のダメ夫だと知ることになるのだが、今の彼はそれに気づかず、帰宅していく。

翌朝、妹に重力子爆弾で襲撃されて、この時のことを忘れたのだが。

運命を決めた日

久しぶりに、あの頃を夢に見た。

膝について、歪んだ視界で見つめながら、一步も動けないでいた自分がいて。悔しくて叫びたくても声が出ない、やるべきことをしないままただ嘆いていた情けない自分。

あの頃に戻れたら、間違いなく殴っていた。激情に身を任せて殴った後で走り出すのに、今の自分は動けないまま目の前のことを見つめるしかなくて。

嫌だ、こんなのは間違っている、夢でしかない、心で否定しても頭が現実だと伝える光景を前に、八歳のシン・アスカは泣いていた。

「お兄ちゃん?!」

「え、あ?」

珍しいくらいに焦った妹の声に瞳を開けば、そこには見慣れた天井と、見慣れたマユの顔があつて。

思わずシンはギュツと彼女を抱きしめた。

「え、えっと、昔の夢?」

問いかけに答えずに、シン・アスカは泣きながら妹を抱きしめていた。

今は現実だと解る、あのことは過去のことと今のことじゃないと理解しているのに、心は拒絶と慟哭を叫び続けていた。

もう絶対に、繰り返さないと誓いながら。

シン・アスカの両親は、当時は普通の会社員だった。特別な技能を持っていたとか、特殊な地域に派遣されるといったことはない、ごく

普通の家庭。

一般的、特筆するべきものはない、特徴といえば両親が技術士であり、時々家は留守にするくらいだろうか。

母親も同じ会社に勤めている、両親共働き。幼い頃からあまり家にいない両親の代わりに、シンはそれなりに妹の面倒を見るいいお兄ちゃんだった。

毎朝、妹と一緒に学校に登校して、帰りは妹一緒に帰る。時々、近所の友達と一緒に登下校したり、あるいは妹ともども遊びに行くなど、両親がいない間は常に妹を気にかけていたりしていたのが、当時のシン・アスカだった。

けれど、八歳のシンにとって思いつきり遊べないのは、ストレスとになっていたのかもしれない。時々妹を放り出して遊びに行きたいと考えるのは、仕方のないことだ。

「お兄ちゃん」

マユがいなければと考えたこともあるが、必死に後をついてくる妹の姿に『自分がすっかりしないと』と思い直して、彼女の手を引いて遊びに行くくらいは真面目だったらしい。

遊びに行つて夢中になって妹ともども帰りが遅くなって、帰宅してから両親に怒られることもあるのは、八歳の子供にしてみれば仕方ないといえるのかもしれない。

そんなシンでも、妹のことを忘れて夢中になることがあった。

テレビのニュースに時々映る、『人型兵器』の数々。五メートルクラスから二十メートル、五十メートルや百メートルクラスの人型兵器が動きまわる戦場の様子。

人と人が争い、血が流れる野蛮なニュースに対して、シンは夢中になって見ていた。

裏側とか大人の事情なんて関係ない。カッコイイロボットが動きまわるのに夢中になるのは、男の子としては当たり前のことだろう。

「かっこいいな。俺も将来は乗りたいな」

「お兄ちゃんも。マユも」

常にシンと一緒に遊びまわり、シンと同じ年の子たちと混ざって遊

んでいたマユも、いつしかロボットに夢中になっていった。

二人してニュースを見たり、あるいは画像を検索、動画を眺めたりしていた。時には友人たちとロボットについて語り合ったりもしていた。

どの機体が一番カッコイイか。どの組織の機体に乗りたい、あるいは未来の自分がどの機体に乗って活躍したいとか、色々な話をしながら友達と時間を忘れて楽しんだ。

「でもさ、最近でできた国の機体はカッコ良かったよ」

「国ってできたっけ？」

友達の一人が言ったことに、シンは首をかしげた。銀河に広がった人類の組織や国家は多種多様。毎日のように小さな組織は生まれては消えていく中、国家が生まれたなんて話は聞いたことはないのに。「シンはロボットだけだからな。大人なら組織とか国家を知らない」と

友人の一人は自慢げに語るのだが、彼も当時はニュースで流れた程度であまり詳しくはなかったらしい。

「どんな国なんだよ？」

「えっと確か、『ジョーカー帝国』だったさ」

「へえ」

「なんでも皇帝が私兵で連邦と帝国を攻め滅ぼしたんだって」

シンはその時、『そんな国があるんだ』程度にしか考えていなかった。自分には関係ないことで、どんな国があつてどのような人がトップにいても関心などなかった。

それよりもその国が採用しているロボットのほうが興味があつて、友達が見せてくれた画像を強請って自分の端末に貰ったくらいだ。

毎日、変わらない日々が続いていく。朝に起きてご飯を食べて、学校に行つて勉強しながら友達と夢中になった話をして、学校から帰つて宿題した後に友達と遊びまわつて。

常に妹と一緒にいながら、自分が楽しいといえることをしていた。そんなシンの日常が変わつたのは、両親が転勤することになった時だった。

場所は惑星間、国境に近い惑星の一つの環境維持システムの不具合。会社からは誰を派遣するかもめた、というのは両親が後に教えてくれたこと。安全かどうかはまだ分からず、紛争地帯のギリギリ外側というグレーゾーン。近場で国境を巡つての戦争も起きていた場所だった。

どうしてそんなところにと、誰もが拒否する中で、シンの両親の上司は二人を推薦した。技術的な問題をハード面とソフト面から解決できるのは、シンの両親だけであり、他となると確認後に戻らないと解決できない可能性があるかと判断された。

きな臭い感じがしたから、一度の来訪で解決できる能力値の高い二人を送つたらしい。グレーゾーンだったが、砲弾や銃弾が飛んでこないから安全だろうと。

両親は話を受けて随分と悩んだ。確かに内容には納得できる。技術的な問題や人員の問題も理解はできるのだが。

問題は幼い二人。シンとマユを置いていくか、連れていくかだ。話を聞いてから会社側からは『すぐに』とは言われずに時間をもらえた二人は、正直にシン達に話すことにした。

「危険なところじゃないんだろ？」

父親から言われて、シンは最初にそう答えた。話を受け止めて自分なりに考えて答えたときとは思っていたが。

「そうは言われている」

対して父親は少しだけ影のある顔で答えた。かなりの危険地帯に二人を連れていくことを考えれば、心配の種は尽きない。

「なら大丈夫だって。マユは俺が見ているから、二人は仕事をしてくれよな」

生意気にもそう告げるシンは、それなりに自信があった。普段から家にはいない二人に代わって妹を見ていること、家を護っていること。八歳の少年がそう思い込み自信を持つてしまうくらい、その場所は平和だった。

だから間違える。世間の広さも世の中の冷たさも知らない彼は、何事もない毎日を過ごしていたことで、『自分は大丈夫』といえるくらいに思い込んでしまっていた。

シンの発言に両親は『それなら』と決断をした。二人を連れていく、と。この家に残して知り合いの様子を見てもらう、あるいは親族に頼るといふ手段もあつたのだが、二人がついていくと決めたならばと幼子の判断に甘えてしまった。

こうしてシン・アスカの一家は、目的地へと旅立つ。お互いがお互いに思い込んでいること、何の根拠もない自信に縋るようにして、見たくない現実から目を背けていることに気づかず。

目的地での生活は、それなりに楽しめるものだった、とシンは回想する。

今までの生活が一変したとか、色々不自由があつたとかもなく、何時もと変わらない生活が送れていた。

両親は少しでも速く終わらせて戻るために、毎日遅くまで仕事しており、社宅にいるシンとマユは近所で遊んだり、課題の勉強を行いながら、何一つ変化のない毎日を過ごしていた。

ただ、近場に紛争地帯があるため、生活区画の一角には軍事基地が

あった。

シンはそのことを知って、目を輝かせた。普段はテレビ画面越しに見ているロボットが目の前であって、毎日のように動いている姿を見ることができた。格闘戦や射撃戦、飛行時の乱戦とかシンにとってはお宝の山を前にしたように時間があればマユを連れだつて眺めていた。

その日も、勉強を終えた後にマユと一緒に訓練を見てみると、一機だけ見たことない機体がいるのを発見した。

形は二十メートル級、目の覚めるような白銀の鎧に金色の翼を纏った機体。他のロボットに比べて装飾の多い機体は、戦うためというよりは飾っておくための芸術品に見えた。

「あんなんで大丈夫なのかよ」

思わずシンは口をひいて言葉が出てしまう。重厚な作りの機体ばかり見てきたシンの目には、この機体が細見の上に重武装を纏わせたような、チグハグで頼りない機体に見えたからだ。

「まあ、それなりに戦えるからな」

声に返答が来た。まさか聞かれているとは思わなかったシンは、ハツとして振り返る。

背後に立っていたのは、私服姿の青年だった。黒いズボンに青い上着、黒髪に紫色の瞳の青年は、にっこりと笑ってシンの隣に立った。

「あんたの機体？」

「ん、一応、俺の専用機。どうだ、いいだろう？」

ニヤリと笑う青年に、シンはもう一度と機体を見つめた。

本当にチグハグな機体だ。左右の腰アーマーは立位状態なのに足首まで届くほど細く、その外側には筒みたいなパーツがついている。型アーマーも上部は外側に、その下には小型の楯のような曲線の装甲がついていて、腕の自由度とか無視しているようだ。

胸部には竜のような獅子のような飾りと、その額から一本角が前に突き出して、あれでは腕を前に回したらぶつかるだろう。

背中の翼も大きく巨大で、あんなので飛んだら空中戦時に邪魔にならないだろうか。しかも細かい装飾まで見える。

全体的に重装甲に見えるのに、全体像としてはスマートなような曖昧な印象を受ける。

「あれって、武装とか装甲つけ過ぎじゃないか？」

「へえ、そう見えるんだ。おまえ、いい感してるよ」

文句を告げると、青年はシンの頭をグリグリと撫でつける。

「止めろって！ まったく、あんたもパイロットなら出撃前に準備があるんじゃないか？」

「ま、俺は特殊だね。傭兵みたいなもんだから、自由行動。いいだろ？」

青年は首からかけている『認識票』みたいなものをシンに見せる。

シンはチラリとそれを見た後、興味なさそうに顔を反らした。国家名とか組織名とか書かれていない、名前だけしかない認識票に対して『偽造じゃん』と口に出しそうになって押し止める。

「あんたもさ、そんなことで子供からかってないでちゃんとしたら？」

「んゝ俺は俺だからな。子供だからとか大人だからとか関係ないし」

「だったら、なんでここにいるんだよ？」

「ちよつと知り合いがいてさ。その人に頼られたから」

誰のことだとシンは問いかけそうになったが、その声は彼に向けられなかった。

「じゃあな、坊主」

「坊主じゃない」

彼は一言だけおいて、真っ直ぐに歩いていく。

フェンスがあるからぶつかると思っていたシンの目の前で、何事もなかったかのようにすり抜けていく彼に、ちよつとだけカツコイイと思ってしまった。

「テラ・エーテル」

名をシンが呟くと、彼は振り返って手を振って去って行った。

毎日、そんな日々だった。あれからテラ・エーテルとは会わないし、機体も見かけなくなつた。何処かへ行つたのだろうと、シンはそう思つて彼のことを忘れていた。

そして、あの日が来た。

朝から何故か、周囲がピリピリしていた。子供でも解るくらいに基地の中に緊張感が漂つていて、街を行く人々の姿もない。

両親も何処か怖いくらいに緊張していて、朝の見送りには定例的な挨拶のみだった。

午前中は何事もなかった。緊張感と妙な気配はあつたが、それ以外は普段通りで変化などなく、シンはマユと一緒に基地へと見学に向かった。

「あれ？」

午前中に来た時は機体があつた場所は、何故か一機もなくて。基地の中を軍人たちが慌ただしく動き回っている。何がと顔を上げたシンの視界に、黒煙が入りこんだ。

続いて衝撃音と爆発。何のと視線を動かせば、基地の一角が燃えており、その中に機体の残骸が何機も折り重なつていた。

戦争が始まつた、不意に流れた言葉は誰のものだつただろうか。基地の軍人たちが、それとも偶然に通じかかった一般人のものだったか、シン・アスカは今になつても思い出せない。

とにかく、シンはマユの手を引いて走り出した。家に戻る途中、帰宅してきた両親と会い『戦争が始まつた』ことを改めて知つた。

「二人とも、そのまま来なさい」

父親の切羽詰まつた様子に促されるように、シンとマユは走り出す。父親を先頭に二人が間で、最後尾に母親が走る。

何処に逃げるのか、どうすれいいのか。問いかけることはなく、時々響き渡る轟音に戦争を実感する。

テレビ越しに見た時は、ロボットがカツコイイと思つていた。あんな

な風に動かしたいと思っていた光景が、いざ近場に来ると怖いとしか思えなかった。

怒声と轟音、逃げる人々の流れを横目にシン達も必死に走つていく。

不意に、だった。いきなり視界が暗転したかと思つたら、体中が痛くなった。痛い口に出そうとして立ち上がり、視界を埋める何かで気付いた。

通りかかろうとしたビルがなぎ倒されている。砲弾かミサイルが突き刺さったようで、爆風に飛ばされたのだろうか。

「シン！ 立ちなさい！ 逃げるぞー！」
「シンー」

父と母の声がした。顔を向ければ、遠くない場所に二人がいる。妹はと探せば、両親から少し離れた場所において大きく手を振っていた。急がないと、と動き出しかけたシンの視界に、『それ』が入ってしまった。

「あ………」
赤い物体、だった。黒い何かがある。点々と、まるで出鱈目な点線を見ているように、何かが広がっていた。

「た……す………」
言葉が小さく聞こえてくる。半分に千切れた何か、折れた『細かい何か』を必死にこちらに向けてきた。

あれが何かをシンは思い出しかけて、口を抑えた。
人間だ。破裂した破片に飛ばされて、負傷した人間の山。自分が生きていたのが不思議なくらいに、周囲にはけが人だけがいる。

両親のところへ行かないと。
必死に足を動かそうとしても、自分は一步も進めない。動かない足と混乱する思考の中、両親が呼ぶ声がする。

這うように引きずるように必死に動く。けがは擦り傷だけで五体満足なのに、自分の体じゃないようにひどく重い。

理解していなかった。戦争がどういったものか、ここに来ることがどういったことなのか。まったく理解はしていなかったと後悔して

いた。

大丈夫なんて言えることはない、自分だけは安全と信じ込んでいたことを、シンは幼いながらも痛感していた。

両親が呼ぶ、妹も叫んでいる。もう少しだ、というところで、すべてが消えた。

「え？」

今までそこにいたのに、今はいない。どうして、何が、なんでと定まらない思考の中、シンはゆっくりと立ち上がり、見降ろした。

吹き飛んだ両親と、その先にいる妹。血だらけになった彼らを見て、シンは崩れ落ちる。

逃げられるはずだった。自分がもつとしっかりしていれば、全員で逃げられるはずだったに。

「誰か」

小さく呟く。声を出しているのか、それとも自分がそう思い込んでいるだけなのか解らないが、彼は何とか呟く。

「助けてください」

吐き捨てるように、絞り出すように。

何とか出た声に答えるのは轟音のみ。周囲を蹂躪するように降りてくる人型兵器達は、無情にも死神の鎌を振りおろし。

「任せろ」

気楽な声と同時に薙ぎ払われた。

「え？」

「助けに来たぞ、起きろ坊主」

そこにいたのはあの日の青年、テラ・エーテル。二メートルは超える剣を片手に、もう一方の手でシンの頭を撫でていた。

「よく頑張った。後は任せろ……」

笑顔で語っていた彼は、そのまま歩いていく。両親と妹を場所まで行くと、何事もなかったかのように通り抜けて。

両親と妹が立ち上がった。怪我ひとつなく、傷もない無傷なままで。

「シンー！」

三人がこちらに走ってくる。自分とは体を触れば違和感がない、えつと疑問を感じている間に、周囲から歓声が上がった。

誰も傷を負っていない、先ほどまで死にかけていた人たちすべてが、無傷でいる現実を前に、シンは夢を見ているような感覚でテラを見つめた。

「非戦闘員への攻撃は厳禁。それを破った以上は、降伏できるなんて考えるなよ。全員、残らず地獄行きだ」

彼は剣を突き付ける。真っ直ぐに向かってくる集団に突きつけ、その言葉を叫んだ。

「さあ、おまえらの運命を決めろ」

蹂躪が始まった。たった一人、たった一機が一万以上の軍隊を薙ぎ払う光景はシンの心に深く刻まれた。

あんな風になりたい。絶望を前にしても一歩も退かず、誰かの悲劇に颯爽と現れる人になりたい。

その背中を見つめ、シン・アスカはそう思っていた。

戦争は速やかに終結した。テラ・エーテルが介入した後、『血の十字架』を纏った集団が降下してきて、全く間に戦争を『消滅』させてしまった。

「あ、あの！」

戦闘後、帰ろうとしたテラと偶然に会ったシンは、彼を呼びとめて土下座したという。

「な、なんだ坊主？」

「俺はあなたみたいになりたいんです！ 貴方みたいな強い人になりたい！ だから俺を弟子にしてください！」

「はあ？ やめとけやめとけ、俺はな破壊神なんだよ。最強最悪の破壊神。俺みたいになりたいなんて思うなって」

呆れて顔の前で手を振るテラに、シンはそんなことはないと言おうとして彼の瞳に止められる。

「おまえさんはおまえさんなりに強くなれよ。俺を見本にしないな」

何処か悲しそうな、けれど気楽さを装う彼は、そのまま背を向けて歩きだす。

シンは何故か体中が縛られたように動けなかった。声をかけて頼みこみたいのに、動けずに口が開けられない。

行ってしまう、彼が行ってしまったら、自分はまた『とりこぼしてしまう』気がして、必死に体を動かそうとした。

なんとか、少しでもいいから。あんな理不尽はもう嫌だから。

心が怒りに燃える、もう二度と嫌だと頭が冷たくなっていく。

「でも！」

「おい」

声が出た、それに対してテラは振り返って驚いた顔をしていた。

「でもそれでも！俺はあなたみたいになりたい！強くなりたいんです！」

「だからな」

「だったら！」

立ち上がる。燃えるような瞳を向けて、妙に寒くなった空気を震わせるように叫ぶ。

「あんたを止めるくらいに強くなってやる！」

「へえ、言うね」

「破壊神だろうがなんだろうが！俺が止めてやる！絶望も悲劇も全部、俺が消してやる！だから俺を強くしてくれ!!」

力の限り叫ぶと、テラは大声で笑った。

「いいだろう、強くしてやる。絶望とか悲劇とか、そんなの碎けるくらいに強くしてやるよ。いいな」

「はい！」

「名前を名乗れよ、坊主」

「シン・アスカです」

真つ直ぐに見つめ答えると、テラはそうかと深く頷いた。

「シン、おまえはこれから騎士になる。騎士に育ててやるよ」

「お願いします!」

深々と頭を下げると、テラは穏やかに微笑んだ。

その時、シンは気づかなかった。彼の口元を見ていなかったから。

テラ・エーテルが呟いた言葉は聞こえなかった。

『ようやく見つけた。俺を殺せる奴を』と。

それが『凍焰の鬼神』の始まりの日。決意だけで、『神帝』の拘束を砕いた騎士の始まりだった。

そして、現在。

「ブハハハハハハハ!!」

「師匠! 笑い過ぎですって!」

「だ、だっておまえ! 過去を夢見て妹に抱きついたって! どんだけだよ!」

「しかたなでしょうが! 目覚めた直後だったんですから!」

「無様すぎだ、おまえ!」

「この馬鹿師匠!!」

ジョーカー銀河帝国政庁の屋上にてテラは、シンから話を聞いて大笑いしていた。

「……で、どうだ?」

真顔になつて語る彼に、シンは視線を周囲に投げる。政庁から見える景色は帝都のもので、何時もと変わらない風景が広がっている。

味気ない、平穏で、変化のない。でも、この景色が何時までも続けばいいと思えるくらいに、とても大切には感じている。

「俺はまだまだ弱いままですよ。でも、あの時の自分に胸を張れるく

らいにはなりました」

景色から視線をテラへと戻し、シンは拳を握って胸の前に持つてくる。

「俺は『あの悲劇と絶望を碎けるくらいに強くなった』って」

答えを受けて、『凍焔の鬼神』の師『神帝』は微笑む。

『そうか』と告げながら。

それぞれ矜持

無限に広がる大宇宙には、人間以外の生物も存在する。SF小説のような宇宙人たちに出会うことに、宇宙へと飛び出した人類は胸を高鳴らせていたのだろうが、物事はそう簡単に行かなかった。

BETAと呼ばれるその存在は、一切の交渉を無視して攻撃を開始。意思の疎通さえできないので、同じく言語体系が違うヴァジュラよりも性質が悪く、お互いに会った瞬間に殲滅開始といったあり様。

ジョーカー銀河帝国では、『BETA死すべし、慈悲はない』が軍人の教本に乗るくらい、即座殲滅蹂躪を掲げている。

発見次第即時攻撃開始許可を、帝国軍の各司令官はもちろん、小隊長にまで与えているくらいに、ジョーカー銀河帝国にとってBETAの存在は許し難しといえる。

ハイヴは残らず、BETAは小型種まで殲滅し、殲滅後には各種センサーによる徹底的な確認まで行う帝国だったが。

そのBETA戦に対して、小さな影を落とす事件が起きた。

シン・アスカはその報告書に目を通して、顔をしかめた。

BETAの発見後に国境配備の精鋭三十四軍のうち四つの軍が動いて殲滅作戦開始。BETA側の攻撃はこちらの人型兵器に届くことなく、艦隊による艦砲射撃から始まった戦闘は、人型兵器の戦闘を行うまでもなく終了した。

しかし問題はその後、BETAが何処から来たかのか。

帝国軍は速やかに情報局に協力要請。情報局もBETA発見時から調査を開始しており、出所は速やかに判明したが。

「……シン、資料に目は通したな？」

「はい、ゼンガーさん」

寡黙な男から言葉に、シンは顔を上げた。

まるで巖なような、とは言い過ぎではないだろう。腕を組んでいた男が口を開くと、こちらの姿勢が自然と伸びる。背筋がピンとなるとは、こういつたことを言うのか。シンはそんなことを感じながら、目の前のゼンガーに視線を向けた。

「ならばそう言うことだ」

「はい」

言葉少なく語る彼に、シンは再び資料に目を落とす。

すでに現場には、刹那、スザク、ガイ、ハイネと、エイルン隊長まで揃っている。これに他の任務で別方面に行っていたティーラが合流。追加でシンとゼンガーまで投入してのヴィルティラス八名によるBETA殲滅戦。一匹も細胞の一遍も残さない、徹底的な焼却を行うつもりでいる。

精銳三十四軍のうちの第二十四軍も現場に留まり、周辺宙域に広く展開してのBETA包囲網を形成、一つの取りこぼしのない万全の対策を行っているわけだが。

詳細に記された宙域図の一部、問題のBETAの発生源だけは『接触禁止』宙域に設定されている。

「頭の痛い問題だな」

「はい」

本当に頭痛がしてくる。ジョーカー銀河帝国にとって、BETAは殲滅対象、残らず一匹も落とすことなく、細胞の一欠片さえも許さずに消しさるものであるのに。

今回の戦闘において、発生源に対しての攻撃は許可されなかった。

相手を怖がった、そんなわけがない。帝国軍の兵士でBETAを脅威と見ている者は多いが、恐怖の対象として見ている兵士は一人もない。

兵力が足りない。現在、精銳三十四軍のうちの一つの軍で受け持っている状態だ、当初は四つの軍で対応していたのだから、兵力は十分だ。いざとなれば周回十二軍から軍を回せば済む話だ。同時に帝国軍の上層部、元帥の直轄部隊も残っている。

そして、何より今回の作戦にまだ『騎士団』は投入されていない。皇帝と皇妃達が持つ十四の騎士団は、規模の違いはあってもBETA相手に後れをとる戦力ではない。

では何か。ごく簡単な話だ。帝国軍が動けない宙域に発生源があった。

「まさか『他国からの流入』があるとはな」

絞り出すように告げたゼンガーの言葉に、シンも顔をさらにしかめた。

今回のBETAの発生源は、単一惑星国家だった。

帝国領土以外からの脅威の侵入。

当初、その話を受けた時の宰相は一瞬だけ呆けた後に、深々と溜息をついたという。

まったく馬鹿らしい話じゃない、本当にアホらしい話。どうしてこんな事態になるまで放っておいたのか。考えてみれば簡単に排除できる問題ではないのか、そもそも単一惑星国家とはいえ軍隊があるのだから、外敵の排除くらい動いてもいいのでは。

アイリスはそんなことを口走っていたが、聞いていたのはアセイラムだけだったので外に漏れなかった。だが、問題は今も健在。まったく事態は好転していない。

いくら他国とはいえ、ジョーカー銀河帝国に比べたら国力差は一万分の一以下、もしかしたら一億分の一かもしれない勢力しか持たない国家、彼らが対応できないならば帝国軍に強制介入によって事態を収束させればいいのでは、と考えていたのだが。

小さくとも相手は国家。無理やりに介入しては、そこに住む人々をいたずらに混乱させるだけでは。今もBETAに蹂躪されているのに、さらに混乱させるのは、非道すぎないかと意見が出てしまい、宰相も皇帝代理も迂闊に動けなくなった。

帝国の脅威は排除したい軍人たち、周辺国家への配慮に揺れる議員や官僚。国家ならば当然なるような内部意見の分裂や対立が、この時はジョーカー銀河帝国を揺さぶってしまった。

何時もならばアイリスが意見を通すか、アセイラムが上手く纏めて動かすのだが、今回ばかりは状況が悪い方に転がった。

二人は、どちらの意見も『納得』してしまったから、強い意見で押し通すことができなくなってしまった。

どうすると帝国のトップたちが悩んでいる頃、事態をさらに悪化させるような話が舞い込んできた。

即ち、問題の国家の代表が直接に会談を申し込んできた。

『ラグリアス』の政府上層部を帝国の政府に招き入れていただけのならば、我が国は貴国に従いましょう」

眼鏡をかけた優男風の人物、『ラグリアス』の大統領『グラランド・アーキランド』は、そう告げた。

一瞬アイリスは拳を握って殴りそうになった。この男は何を言っている、この瞬間にも彼が護るべき国民が死の危険にさらされているというのに、それを条件にして自分達を売り込もうというのか。

「いかがですか？」

「貴方は何を言っているか解っているのかしら？」

「ええ、もちろん。噂に名高いジョーカー銀河帝国。その政府中枢には皇帝の一族しか入れない。これは意見が固まり、人民を省みない政治になってしまふ。そうならないように、外部の意見を入れてみてはと提案しています」

「へえ、そう」

ごく真面目に告げるグラントに、アイリスの表情が凍りつく。あつげに取られたのでもなく、凶星をさされたのでもなく、相手の本質を見抜いたから。

この男は政治家だ。生粋の政治家であるがゆえに、政治を行えている。だからこそ、死ぬ人達を『数字としか認識』していない。

そこにある、悲しみも怒りも理解していない男が、政治家としての能力を持ってトップにいるというのは。

「無様ね」

「何か？」

「いいえ、何も。そう、貴方達を迎え入れたら、我が帝国に従うというのね？」

「ええ、その通りです。私たちはかなり有能ですよ」

当たり前のような自信のある発言と、優秀そうな笑顔。カリスマもあるのかもしれないが、アイリスにとっては『その程度』でしかない。

「残念ながら、貴方達が入ることはないわ」

「では、私達の国家は貴方達の介入を拒否します。速やかに我が領域から軍を引いてください」

「あら？ 我が軍は貴方達の国家の領域に入っていないのだけれど？」

「それはおかしいですね」

グラントはにやりと笑う。その手が差し出したのは一枚の写真。夜空を埋め尽くす帝国軍の艦艇と、人型兵器の数々。

「それが何か？」

「言われないと解りませんか？」

グラントがやれやれと首を振る。その仕草がアイリスの『カン』に触ったのだが、平然とした顔を崩すことはせずに写真を手にとって首を傾げる。

「解らないのだけれど？」

「はあ、貴方のような方が宰相とは。まったく、嘆かわしい」

よく言った、貴様。アイリスはにっこりと笑って受け流したが、近

場で聞いていた一部の政治家や官僚が、すっごい笑顔で笑っている。「ご覧の通りですよ、貴方達の軍が我が国家の『宙域』を侵食しています。ですから、速やかに軍を撤退させてください。これは国際問題になりますよ?」

「国際問題ね」

うん、何を言っているか解らない。アイリスは今までの憤りが一気に消える気がした。この男は恐らく、今までこういった手法で国家を運営していたのだろう。あまりに馬鹿げていてあまりに子供っぽい手法だが、『同程度の国家が広がっている』ならば、有効な手段かもしれない。

宝くじを買って当たる、よりは確実な手段だろう。

「ええ、国際問題です。貴方達の噂が本物ならば、『悪逆な皇帝』による蹂躪が我が国家を消すのでしょうか」

あ、これは駄目だ。アイリスは笑いながらそう思った。この男は決定的なものを勘違いしている。話し合いですべてを解決し、話術が優れていれば武力など退けられると考えている。

この男はおそらく知らないのだろう、本当の暴力というものを。

さてどうしてやろうか、とアイリスは内心で笑っていた。

現場についたシンは、すぐに降下作戦が始まると考えていた。しかし機体を格納庫へ収納し待機との命令に、コクピットから飛び出す。「あの、どういった」

格納庫にはすでにエイルンがいて、スザクと刹那、ガイが睨みあっていた。

「話は解るが、あそこは帝国領ではない」

「けどな！」

エイルンの言葉を、ガイが遮る。怒りを隠そうとしない彼を前に、部隊長も苦渋に満ちた顔で首を振る。

「ダメだ。我々が動けば、それはすなわち帝国の侵攻作戦と取られる」

「エイルン、お前」

「ガイ、すまない、解つてくれ」

真つ直ぐに見つめ拳を握ったまま直立不動で放つエイルンに、ガイも言葉を収めるしかない。

彼だつて動きたい。もし彼が一兵士の立場でいたならば、真つ先に動いただろう。しかし、今の彼はヴィルティラス部隊長、彼が動くということはヴィルティラスが動いたこと。

それは即ち、政庁が承認したということであり、『ジョーカー銀河帝国が宣戦布告なく他国に侵入した』という結果が残る。

悪名高き帝国が他国を一方的に蹂躪した、と他の勢力は大々的に宣伝するだろう。そうなれば、今は態度を保留している小さな勢力が、他の勢力に参加していくことになる。

それは最後には帝国の首を絞める結果になって、最終的に人民を危険にさらしてしまう。自分達が非難されるならばいくらでも耐えられるが、自分達の行動の結果で人々が苦しむのは耐えられない。

「だが、動かなければあの惑星は死ぬ」

淡々と告げる刹那に、エイルンの表情が歪む。解っている、誰もが理解してはいるが、もう一歩が踏み出せずにいる。

「代表同士の話し合いが行われているから、それを待ったほうが」

スザクが控えめに提案するが、それが単なる気休めではないのは誰もが解っている。

「エイルン、俺は行くぞ」

「待てガイ。それは反乱だ」

「しかしな！」

一触即発。膨れ上がったそれぞれの感情が、破裂してもおかしくない緊張感が格納庫に流れ始めた。

「落ち着け」

「けどなー」

ゼンガーの制止も今のガイを止められない。このままではヴィルティラス内部での分裂・ぶつかり合いに発展しかねない。

「何してんだよ？」

不意に流れた声に、誰もが顔を向けた。

呆れた顔をしたハイネが、データ・ボードを片手に歩いてくる。その後ろにはティーラがいて、彼女は何時も以上に無表情を貫いていた。

「ハイネ、おまえからも言ってくれ」

「おまえから止めてやれ」

「ガイも部隊長もちよつとは落ち着けて。そんな感情を閉じ込めた状態で戦っても、周りを巻き込むだけだろうが」

「しかしなー」

ガイがハイネに詰め寄る。その両手をするりと回避した彼は、小さくため息をついた。

「落ち着けて。今、宰相が国家代表と話し合っている。あの様子じゃ、すぐにでも結果が出るだろ」

「それまで待てばいい」

努めて冷静に言うエイルンに、ガイが反射的に振り返って叫びそうになったが、言葉を飲み込む。

彼の右手に赤い血が流れていたから。

ギリギリで抑えつけているのは彼だけじゃない、全員がギリギリで自分を抑えつけて必死にその時を待っている。

シンはそんな光景を見つめながら、ゆっくりと歩き出す。

立場も解る、想いもそれなりに理解している。簡単に動けない権利を持つていて、それでも誰かを助けたいと思いつけることの難しさも、少しは理解できている。

目の前で助けを求めている人を助けることが、悪いことだとは思えない。けれど、国家に所属しそれなりの権限を与えられているならば、それは国家を背負っているのも同じ。

自分はヴィルティラス。ジョーカー銀河帝国にとっては、『政庁』と

同じ顔に等しい。

ぼんやりと考えながら歩いて行った先は、廊下の途中。ふと顔を向けると窓から問題の惑星が見えた。

単一惑星国家、今もあそこはBETAが蹂躪し、人々が悲しみに嘆いている。

助けたい、でも自分が動いたらジョーカー銀河帝国が危なくなる。

「……………俺」

船が動き窓から見えていた光景が、自分の顔を映した。

今の自分じゃない、『あの頃の自分』。

『また助けられないのかよ』と責めるような視線に、思わず顔をそむけた。あの頃とは立場が違う、今の自分が動いた結果なんて簡単に予想がつく。ここは待つべきだ。

言い訳を口にして、また顔を向けた時、そこには今の自分がいて。

「師匠」

「よ、シン」

気楽な笑顔を浮かべたテラがいた。

変わらない笑顔で、何時もと違う服装をした彼は腕を組んだままシンを見ていた。

白一色の全身を覆うマント。背中に『四獣と交差した剣』、左胸に血の十字架、右胸に雪の結晶の紋章を刻まれたそれは、テラ・エーテルが滅多に纏わない正装。『サイレント騎士団』全軍を率いる時に纏う儀礼用。

「師匠が来たから大丈夫ですよね」

「ん、そうだな。俺が来たから……………って思ったんだけど、止めた」

なんだって、とシンが疑問を浮かべる前で、テラはマントを脱いで普段と変わらない服装に戻った。

「じゃな、シン」

「え？ ちよつと待ってください！ 救わないですか?！」

「なんで？」

「何でって」

頭の後ろで腕を組んだまま、歩きだしかけたテラは振り返る。その視界に収められた自分の姿に、シンは昔の自分をまた幻視した。

「助けてと言っている人たちがいるんですよ？」

「そうだな」

「だったら」

「だったら？」

先を促されて、シンは言葉に詰まった。彼は何を言っているのだろう、今までは率先して助けていたのに、今はまったく動こうとしない。いや、自分の騎士団を率いてきたなら、助けようとしていたのだろうが、ここに来て戻ろうするなんて。

今までの師匠とは違う行動に、シンは戸惑いを浮かべた。

「………あのな、シン」

ちよつとだけ呆れたような顔をしたテラは、ゆっくりと歩いて来てシンの胸を指差す。

「おまえ、何か勘違いしてないか？」

「え？」

「おまえの『魂は俺に任せろ』って言ってるのか？」

ハツとした。師匠が来たときに助かった、終わったと思っていなかった自分の心を、はつきりと自覚していた。

悔しかった。悲しかったし、憤りもあった。師匠が来て安心した自分に、助けてと言っている人たちを助けられない自分自身に。

強くなったのに、あの頃と変わらない自分自身に。ふざけるなど叫びたかった自分の魂を自覚できた。

「すみません、師匠」

「ん？」

「今回は、『譲れません』」

真つ直ぐにテラを見つめ、シンは言い放つ。睨みつけるように、不敵な笑みを浮かべて。

「そっか、それは残念だ」

軽く肩をすくめたテラに、シンは深々と頭を下げ、走り出す。

もう後のことは、後でどうにかすればいい。今は心の赴くままに動く、もしそれで何が不都合があったとしても。

問題ごと消してやればいい。

軽くなつたシンの心に押されるように体は最速で格納庫に飛び込む。

「シン?」

ティーラがこちらを見て、速やかに自分の機体へ走り出した。ありがたい、こちらが言いたいことを察してくれるなんて。

「待てシン! どうするつもりだ?!

エイルンが叫ぶが、その表情には憤りや戸惑いではなく、『よくやった』と言わんばかりの笑みが浮かんでいた。

「助けます!」

「他国侵攻になるんだぞ!」

「だからなんですか?! 俺達は騎士ですよ! 騎士が目前で嘆いている人々を助けなくてどうするって言うんですか?!」

「帝国を危険にさらしてもいいの?!

言葉の応酬の押し問答。それをしながら、エイルンは自分の機体へ向かう。同時にスザク、刹那、ガイ、ゼンガー、ハイネも同じく機体へと走り出していた。

「こんなことで帝国が揺れるわけじゃないでしょうが! それに、今動かなければ国民から『怒鳴られますよ』!」

機体のコクピットへ飛び込み、起動をかける。

『全部やっておいたよ』とティスの言葉に頷き、通信システムを最大で動かす。回線はすべて、使える周波数もすべてだ。

「ジョーカー銀河帝国は目の前で嘆く人々を救うための国家でしょうが! 今動かないでどうするんですか?!」

『それで何かあったらどうするつもりだ?』

「その時は」

言葉に詰まる。どうするって決まっている、けれどそれを自分が言っているのか、それを言えるだけの実力があるのか。

迷うシンの視界の隅で、テラが親指を突き出した。

「その時は俺が何とかしますよ! これでもいいですか部隊長!」

『十分だ! 全員! 今回の事件は『凍焔の鬼神』が責任をとるそうだ

! 存分に行くぞ!』

『了解!』

全員の返答を背に、シンは真つ先に飛び出す。

その日、一つの惑星がジョーカー銀河帝国に編入となった。

その後、グラランド以下政府役員たちは自分達の国家に戻った時に、全国民から『罷免』を要求され、以後は辺境の土地でひっそりと暮らすことになったとか。

そして、『凍焔の鬼神』はと言うと。

「ほれ」

「はい」

始末書の山を受け取って、必死に書類を書いたのです。

「シン、カッコ良かったぜ」

ハイネ達に褒められ、ちよつと気持ちよく書類をしていたシンは、ふと気配を感じて顔を上げた。

「あ、宰相」

「シン……」

怒られると思つて直立不動で待つシンの頭に、小さく暖かい温もり

が触れて行った。

「やるじゃない、それでこそ男の子……じゃないわね、それでこそ『神帝』が選んだ騎士よ」

言葉だけおいてアイリスは去っていく。

シンはそっと自分の頭を触り、小さくガッツポーズをしたのでした。

シンとテラのダンジョン暮らし（生活とはいっていない）

その日、シン・アスカは思った。

『あれ、なんで俺はここにいるんだろう？』と。

「ひゃっは〜〜〜!! 逃げないモンスターはよく訓練されたモンスターだ！」

どうしてだろうと考える。何があつて、どうなつてこうなつたのかを考える。まずは最初の原因を思い出そうと、シンは必至に記憶を探つていった。

「ひゃっは〜〜〜、逃げるモンスターは獲物です、と。これでいいんですか？」

思い出せ、しっかりと思いだすんだ、シン・アスカ。彼は自分自身に必死に語りかけ、半ば暗示に近いようなことをしていたが、気にははいられない。

目の前で妙にテンションの高い師匠と、その巫女が数の暴力を個人の『破壊力』で蹂躪しているのだから。

「あ〜〜ああ！」

ポンつと手を打つてシンは大きく頷いた後、おもむろに両手にウロボロスを引き抜いて目の前を埋め尽くしているモンスターの群れに突撃していった。

「任務だったああああ!!」

この言葉でヴィルティラス所属のシンは、すべてを振り払うように動けたのでした。

思い返すと数日前、付近の紛争停止任務が終わった後、報告書を書いていたシンは、ふと周りの気配が変わったことに気づいて顔を上げた。

見なれたヴィルティラスの部屋の中、ハイネやスザク、刹那が固まっている。遠くではガイが唾然とした顔でコーヒーをこぼしており、あのゼンガー親分まで驚愕に目を見開いていた。

何かと全員の視線の先を見ると、とても見慣れた人物が、見慣れない女性を小脇に抱えて立っていた。

「お、シン、いたな」

「彼がそうなのかい？ よろしく『凍焰の鬼神』。噂に名高い『神帝殺し』に会えて光栄だよ」

「は？」

ちよつと待って、どういうことだろうか。自分がいつ師匠を殺したのか、まさか知らないうちに一撃入れて、それが上手く入って殺せていたのか。そもそも、彼を殺せるのか。

死んだのに生きている理由は、シンは『いや、この人は他人を蘇生できるんだから自分くらい余裕だろう』で早々に解決した。

「え？ 何がどうなってるんですか？」

「うっし、シン、ちよつと俺につきあえ。ダンジョン突破だ」

「お願いするよ、優秀な弟子君」

「は？」

二人はそんなことを言った後、早々に退出していった。意味が解らない、誰もが視線を彷徨わせる中で、通達が入る。

『シン・アスカ、速やかに執務室へ。あの馬鹿もいるから』

宰相からの通信に誰もが『今度は何やった、あの馬鹿皇帝』と思っただけでした。

執務室へ向かったシンを出迎えたのは先ほどの女性のみ。師匠はと探すことはなく、アイリスに一礼して直立不動になる。

「シン、ちよつと厄介な任務を与えるわ。異世界に行きなさい」
「はい？」

「詳しくはごちらの女性から」

アイリスが嘆息気味に告げるのは、とても珍しい。何故か疲れた顔をしているのは師匠がまた馬鹿をやったためか、それとも任務の内容が疲れるようなものなのか。

「やあ、さつきぶりだね、弟子君。ボクはヘスティア、一応女神だから」
「はあ」

女神とはまた凄い人物が来たものだ。テラの知り合いに女神はいるのを知ってはいたが、まさか本人に会える日が来るなんて。

あ、イシユタルも女神だったか。と、シンは昔は傲慢で高飛車で、今は女子高生している女神を思い出していた。

「実は君たちに、僕たちの世界を救ってほしくてね」

「はい？」

彼女の話によると、彼女達の世界のダンジョンに転生者が続々と入ってしまったため、世界のバランスが崩れて崩壊に危機に陥っているらしい。

女神とか神様がいるなら、そんなこと簡単にどうにかできるだろうとシンは思ったのだが、どうやらそうもいかないらしい。

転生者を送り出してきた神様は、ヘスティア達の世界の上位世界の神様であり、ヘスティア達には手出しできない。一口に神と言っても世界のランクによつては手を出せなかったり、簡単に干渉したりできるとのことだ。

「それに、もう『そいつ』は転生者を送り出したり、こつちの世界に干渉できないからね」

「へえ、そうなんですか。じゃ、もつと上の存在に封印されたとかですか?」

「違うよ」

何故かにつこりとヘスティア。その一方でアイリスは深くため息をついている。あ、これはやったな、とシンは思った。

「ひよつとして師匠?」

「正解! さすが弟子君だね! そうテラ君が早々に『狩った』から」
師匠、何やらかしてんですかとシンは内心で絶叫しながらも、ヘス

ティアには笑顔の仮面を貫いた。

「でも問題はその転生者たちなんだよね。大部分はダンジョンで命を落としたんだけど、一部の転生者がダンジョンの一番深い部分に入ってしまったってね」

「あ、それで俺たちにその転生者をどうにかしてほしいってことですか?」

「いや彼らは『自分達が生み出したモンスターに殺された』から大丈夫」

なんて間抜けな奴らなんだ。シンはもう仮面をかぶっていられずに、呆れた顔を浮かべる。

「問題はそのモンスターなんだけどね、ダンジョンを乗っ取ってしまつて、色々なモンスターを無差別に生み出してね。困っているんだ」

「解りました。なら俺達が行くってことですね」

状況が読めたシンは速やかにアイリスに顔を向けて準備に入ろうとした。しかし、何故か彼女は即座に命令を出さず少し迷った顔をしている。

「あの」

「シン、ごめんなさい。今回の一件、実はおまけがつくの」

「おまけですか?」

「ええ、そうよ」

おまけとは何だろうか、シンはそう問いかけようとして声を出せなかった。凄まじく嫌な予感がする、とても言葉では言い表せないような何かを感じて、全身が悪寒に震える。

「え? まさか?」

「貴方の想像通りでしょうね。ごめんなさい」

フツとアイリスが苦笑を浮かべたと同時に、執務室の扉が開け放たれた。

「行くぞシン!」

ハツとして振り返ると、そこにいたのは珍しく『興奮しています』的な笑顔の師匠。何があつたのかと問いかける前に、首根っこを掴まれ

て景色が一変した。

「ごめんなさい、シン。今のテラのマイブームは『ダンジョン』なのよ」
「うん！ テラ君はいい笑顔するね！ あ、あっちでは僕の眷属扱いだから」

「え、えええええ?! ちょっと待ってくださいよ！」

「行つてきなさい」

疲れ切った笑顔で告げるアイリスに見送られ、こうしてシンはダンジョンに突入することになった。

そして時間は冒頭に戻る。

「次い！」

「あ、ミノタウロスですね。あ、ドラゴンがいます。ドラゴンってどの種族に入るんでしょうか？」

「次はどうだ！ オラオラオラ！」

テラとルリがものすごい勢いでモンスターを片付けていく。もう雑草を抜くか小石を蹴とばすか程度の作業に見えるのは、シンの目がおかしくなったわけじゃないはずだ。

転生者たちが好き勝手やった結果、ダンジョンにいるはずのないモンスターまで生まれてくるようになったとヘステイアが言っていたが、この目の前の犬型のモンスターもそうなのだろうか。

やたらと影に入つて倒しづらい。かと思えば、常に自分の背後の影から出てくるから予想しやすい。

「よっし！ 魔法行こうぜ魔法！」

「いいですね、何処まで使えるか試してみましよう」

「ちよ?! 二人とも待ってくださいよ！ 初日にダンジョンで超位魔法を使ってギルドに怒られたの忘れたんですか?!」

ノリと勢いでやらかそうとしている二人を止めるために、シンは思いつき叫んで近づいていく。その際に間にいたモンスターを斬り捨てるのを忘れない。

「え、そうだったっけ?」

「そんなことありましたか?」

嘘でじゃなく、真顔で問いかけてくる二人に、シンはため息を深々とついた。なんだかポンコツになっていないか、師匠達ってこんなに短絡的かつ暴走する人たちだっただろうか。

否だ、そんなことはない。師匠は馬鹿だが短慮ではない、もつと深い思考で行動し、結果をあさっての方向から持ってくる人だ。

その巫女のルリは、軍略家とか軍師とかって人たちを簡単に手玉に取る人だったはずだ。帝国軍の名立たる軍人や戦略家を、一蹴したという話もあるくらいに。

彼女に勝てるのはグータラ元帥って呼び名で親しまれる、ヤン元帥か。それとも相手にとって最悪を与えるとして『最悪の軍師』と呼ばれているルルーシユか、あるいは『空間の魔術師』と呼ばれる『骨川スネ夫』くらいだろうか。

どちらも思慮深かったはずなのに、今は『敵がいるからどんどん行こうぜ、あとはどうでもいいや』の短絡的な行動ばかり。

何がどうなってこんなことになったのか。

シンは頭痛がしてくる気がして頭を抑えた。もう投げ出したい、自分一人で突撃していききたいのだが、今は一人に出来ない人がいる。

テラヤルリじゃない、シンの後ろにいる人物。

「あ、あの、何時もこうなんですか?!」

白い髪に赤い瞳。子ウサギってイメージがもつとも合う人物。このたびへスティア・ファミリアに入団してしまった、可愛そうな新人さん。

「ああ、残念ながら、こうだ」

「ええ?!」で、でも最初の挨拶の時テラさんってもつと『ついてくれば大丈夫だから』ってイメージでしたよ!」

「そうだな」

「ルリさんも『サポートしてあげますから好きに動きなさい』って言うてくれましたし！」

「そうだなあ」

最初に会った時の印象を話す新人に、シンは深くため息を吐いた。ベル・クラネル。この哀れな生贄に似た新人に、真実を話すべきかどうか。彼らの今の姿は決して間違いでも偽りでもない、と伝えるべきか。今はテンションが上がっておかしくなっているだけで、普通はその通りの人物だと教えるべきか。

どうしたものかとシンが悩んでいる間に、狂乱が加速したような二人は先に進む。

「今、何階そうだったけ？」

振り返りテラが問いかけると、サポーターの女の子は大きなリュックを背負い直しながら、明るい声で答えた。

「はい！今は五十七階層です！」

「よっし、じゃあ新人さんもいることだし。六十階まで行ったら戻るか」

「そうですね、キリがいいところで戻りましょう」

気軽に告げるテラと、大きく頷いて納得するルリ。その間に挟まれたサポーターはにつこり笑顔だったのだが、背中で隠すようにした手でシンにサインを送ってくる。

『止めてください、もうリュックが一杯です』と。

この子もたくましくなったものだ。最初の時は泣いて喚いて、もう死んでしまおうとか、『いつそのこと殺してください』とか言っていたのに。

商売根性を叩きこまれた彼女は、今では元のファミリアの仲間達を金貨の入った袋で叩いているらしい。

昔は泣かされていた人たちを、金貨の入った袋で『ほら、泣きなさい、このルリの前に跪いて泣いてみなさい』と言っているとのことだが、遅しくなったものだ。

「はあ、しょうがないな」

シンはそう溜息をついて、二人を説得するべく動き出した。

『狂気と狂乱と恐怖と力』。

『馬鹿が冒険者の皮をかぶった一群』。

『死にたがりのアホども』。

『死神も道を譲る、泣く子も黙る暴力ファミアリア』。

それが現在のヘスティア・ファミアリアの評価。構成員の数で言えば他のファミアリアより圧倒的に少ないが、その戦歴ではオラリオの何処よりも高い数字を叩き出している。

特に団長のテラと、団長補佐のルリがダンジョンに潜ると、ダンジョンのモンスターがすべて消えるといわれるほど、『情け容赦のない戦闘をする』と噂されている。

「ベル君！」

「エイナさん！」

だからこそ、シンは目の前でギルドの受付嬢に泣きついているベルを責められず、またそのベルを見て涙を流して感動している受付嬢に苦笑を送るしかできない。

「よく生きていたわね！ もう戻らないと思っていたのに！」

「エイナさん！ 僕は生きてます！ 生きてましたよ！」

「うんうん！ ベル君よく頑張ったわね！ よく戻ったわ！」

「はい！ もう六十階より下に行くって言われた時は、生きた心地がしなかったです！」

あ、不味い。シンはそう思って止めようとしたが、エイナの瞳が怪しく輝くのが見えて、『手遅れ』を悟る。

「へえ〜六十階？ 詳しく聞かせてほしいのだけれど？」

「はい！」

「いいのよ、ベル君、貴方は疲れているだろうから休んでいて。そうね、そこにいる『シン君』に教えてもらおうかしら？」

にっこり笑顔で美人さんが呼んでいるので、男だったら喜んで行くところなのだが、今のシンは全力で断りたい気分だった。

もう彼女の背後に般若や鬼が浮かんでいるように見えたから、ではなく嫌な予感がしたわけでもなく、単純に『疲れたから帰りたい』だけなのだが。

「解りました、先に『豊穰の女主人』で待っていますね、シンさん」

「あ、ああ、先に行っていてくれ。俺もすぐに『戻る』から」

「はいー！」

元気に飛び出していくベルを笑顔で見送っていたエイナだったが、その姿が見えなくなると素早く鋭く睨んでくる。

「止めてって言ったわよね？ 私はベル君は新人だから、無茶しないでって言ったはずだけど？」

「無茶はしてないですよ。十分に安全でした」

嘘は言っていない。テラも本気、ルリも本気で、自分がいる。その上にリリには護身用の『道具』を持たせていたから、ベルに万が一にでも危険が及ぶことはない。もしベルに危険が迫ることになったのなら、その時は世界が先に崩壊している。

テラ、シン、ルリの三人が『ガチ』だったのだから、そのくらいの規模の危険でなければベルが危ないことにはならない。

「……………はあ、貴方達がいたならそりやダンジョンでも危険じゃないでしょうけど」

何とかエイナは納得してくれたようだ。まずは一安心とシンが思っている、眼前に指が突きつけられた。

「でもー、それでも私達は心配なのよ、解っているの？」

「解っています。だから、絶対に戻りますよ」

笑顔を添えて決意を口にすると、エイナは『妙に赤い顔して』視線を反らす。

「解っているなら、いいわよ。でも、本当にお願いだからね」

「はい」

自信を持って答えるシンに、エイナは『ならば良し』と告げたのでした。

ベルがお店についたとき、そこはすでになんて言っていないか解らない状態になっていた。

「とうわけで、今日は新人つれて六十階に行つて来た！」

拳を突き上げて宣言するテラの横、ルリは小さなカップを口に運んでいる。『もうちよつと行けたはず』とか口が動いていたのは、ベルは見ないようにしていた。

「ホンマ、アホやな」

その正面に座っている女神様、ロキは呆れながらも手に持ったジョッキを掲げていた。

「アホつてなんだよ、アホつて。ロキが天界でやらかしたことに比べたら、小さなことだろうが」

「昔のことは昔のことや。あのドチビが『強力な助っ人』つていうから期待したんやけど、なんで自分達が来てるん？」

「ダンジョンに憧れて」

キラキラした瞳を向けるテラに、ロキは盛大にテーブルに突っ伏したのです。

「ダンジョンに憧れて、『神帝』が動くんかい」

「いや〜最初はさ、ちよつと『サイレント騎士団』つれてこようとしたのに、アイリスに『世界を滅ぼすんじゃないやなくて救うんでしようが』つて言われてさ」

困った困ったと腕組みして頷くテラにさらに呆れた顔を向けるロキ。

「非常に残念です」

その隣でルリが深くため息をついていたりするが、ロキは盛大に無視した。

「つてわけで俺の奢りだ！ ミア母さん、よろしく！」

舞台役者のような動作でテラは店の奥から出てきた女性に声をかける。

「金はあるんだろうね、と普通の客なら聞くんだけど、あんたにかぎってそれはないね」

「おうさ！ ヘステイアの許可もらったから！ 今回の遠征の収入全部乗せ！」

「……店ごと買えるじゃないか」

嘆息するミアにテラは親指を突き出す。もうすつごいいい笑顔だが、何処からあのテンションが来るのか、ベルにはいまいち理解できないが、最初に会ったときから何故か『とても安心させられる』。

「ついでにうちの新人の紹介だぜ！ ベル・クラネル！」

「あ、はい、初めまして」

「いずれゼウスを超えてポセイドンを打倒し！ ウラヌスを足蹴にする男おおお!!」

「なんですかその過大評価は?!」

まさかの紹介文に、ベルは一気に蒼白になって叫んだ。しかし、時はすでに遅し、店内にいた誰もが『あいつが?』という視線を向けてくる。

ここには最悪なことに、宴会に呼ばれたロキ・ファミアが集まっていた。

「トチビ、苦勞してるんやな」

ちよつとロキがマジ泣きしそうな勢いだったが、他の面々は噂の『ヘステイラ・ファミア』に入った猛者を観察している。

そして、誰もが笑顔で親指を立てた。

『ガンバ』と。

中には『オツタル』と呼ばれる冒険者の頂点もいたみたいだが、誰も気にしてはいない。ダンジョンで会ったら怖いのが、宴会の席で会っ

たら気のいいおっさんでしかないから。

「ベル」

「ベートさん」

一人、立ち上がる狼。瞳に殺気に似た何かを浮かべ、怒気をまき散らしながら歩いてきた彼は、ベルの前で盛大に両手を上げた。

ベルも察して両手を上げる。

「よく生きてたなおまえええええ!!」

「ベートさん！ 僕はまだ生きてます！ 生きてますよおお!!」

がつしりと抱き合った二人は、そのまま号泣した。時々、ベートがすっごい形相でテラを睨んでいるが、すぐに隣の冷笑に追いつ返される。

ルリ怖い、ベートが小さく囁いた言葉をベルは聞かないことにした。

「相変わらず、強い」

アイズがそんなことを呟いて。

「まあ、テラは非常識だからね」

フィンが呆れながら、何処か楽しそうにグラスを掲げ。

「まあ、ええやろ。テラやからな」

ロキも苦笑交じりにジョッキを持ち上げる。

「よっしやあああ！ 飲んで食べて歌って語って！ 俺達のオラリオを楽しもうぜ！」

「おうよー」

そんな掛け声から始まった宴は、大盛り上がりとなった。

「あ、シンさん、何から食べますか？」

「じゃお勧めで」

そんな中、カウンターに座ったシンは、大騒ぎになっている店の中心を眺めながら、小さく笑ってしまった。

大人な師匠もいた、馬鹿な師匠もいた。でも、あんなに笑顔で大騒ぎする師匠は久しぶりだな、と。

「クルーゼさん、案外、師匠が師匠のまままでいられるって、簡単にできるかもしれないよ」

昔の約束を思い出し、シンは酒の入ったグラスを傾ける。

「献杯」

言葉を落とし、懐かしい想いと共に酒を一気に煽った。

同じ頃、某所。

「本当にごめんなさい」

プラチナクロームの髪の女性が小さく謝罪し。

「いいさ、楽しんでるようだから」

黒髪の女性が引きつった笑みを浮かべ。

「私もできるだけフォローしてあげる」

普段の彼女からは想像もつかないほど、優しい言葉をかける美の女神がいて。

そんな三人の女性は同時にため息をついた。

「あの暴走特急馬鹿」

同時に同じ言葉を告げたという。

キラ・ヤマトの反乱

薄暗い室内、誰の気配のない場所で、彼は一人パソコンに向かい合う。空中に展開されたモニターは最小限、しかし使っている機械は六つ以上。複数のキーボードを打つ指に淀みなく、もしかして光速を超えているのではと思えるほどに、彼の指は分裂していた。

残像を残すほどに素早く、けれど正確に。速く速くと焦る心を必死に押し込めながら、彼は次々に『セキュリティ』を突破していく。

もう少し、後少しと焦燥感に駆られる彼は、不意に指を止めた。やっと辿り着いた、これを解除すれば後は望むものが手に入る。

最後と動かしかけた指が固まる。

もし、これを解除してしまつたら、自分はもう戻れない場所に行つてしまうのではないか、僅かに彼の残された良心が指を固めてしまふ。

望むことが背中を押し、今までの思い出の人たちが腕を絡め捕る。

どっちだ、どっちがいいのか。そんなことを考えていた彼は、小さく息を吐いて力なく笑った。

もうどうでもいいことだ。最後の防壁を突破し、彼はゆつくりと歩き出す。望むものはすぐ目の前に、ゆつくりと手を伸ばした彼は急激に明るくなつた室内にハッと振り返る。

「……何でだよ」

入口のところで、彼は俯いて声を絞り出していた。

握り締めた拳が壁に亀裂を走らせていた、全身を覆う冷気が彼の感情の高ぶりを教えてくるが、それ以上に顔を上げた彼の瞳の『焰』が怒気を伝えてきた。

「何でだよ。どうしてこんなことをした?」

問いかけに答える言葉を持っていない。どうしてと言われたら、願いがあつたと答えるしかない。

「答えるよー」

彼の怒りに力なく首を振る。

「答えろよ！ キラ・ヤマト!!!」

シン・アスカの絶叫に、キラ・ヤマトは力なく見つめただけだった。

その日、シン・アスカはデートらしきものをするようになった。

「お酒が飲めると聞いて」

「魂を救う一杯に興味がありますわ」

シャルロットとセシリアに言われ、『え、誰から聞いたの』と返さなかったのは、それがごく当たり前にジョーカー銀河帝国に流れている噂だったからだ。

誰もが救いを求めて、擦り切れた魂の癒し方を探して、ようやく辿り着いた場所で与えられる最上の一杯。

大げさでもなんでもなく、あの一杯に勝るカクテルを、シンは飲んだことはない。バーテンダーそれぞれに特色があり、同じカクテルでも微妙に違って味わいを楽しめることは理解しているが、最後の最後に飲めるカクテルを選べと言われたら、彼のカクテルを間違いない選ぶ。

リユウ・ササクラの一杯は、誇張でもなんでもなく魂を救ってくれると思えるほどに美味しい。

「あ、解った。じゃ、行くか」

二人にそう告げて、シンは時計を確認した。時刻的にはもう少し後がいいか、まだ開店してないだろうと予想して、食事をした後と告げたシンの視界に珍しい人物が映った。

キラ・ヤマトだ。

こんな時間に歩いているとは珍しい。何時もなら、何処かの居酒屋

で飲んでいるか、帰宅して奥さんと食事しているはずなのに。

せつかくだから、あの人も誘うか。

「もう一人、いてもいいかな？」

「いいよ。誰を誘うの？」

「構いませんわ。どなたを誘うおつもりですか？」

二人から了承を得たシンは、遠くを歩くキラに手を振って声をかけた。

「キラさん、これから食事してイーデンホールに向かうんですけど、一緒に行きませんか？」

「え？ あ、ごめん」

彼の言葉を聞いたシンは、思わず彼が『スパイではないか』と疑ってしまった。変装している別人、身体データごと改竄できる凄腕が、とうとう本腰を入れて主星に乗り込んできたか。

まずい、キラ・ヤマトに変装したということは、目的は技術局か。あそこのデータ・バンクは経由すれば、帝国中のデータ・バンクにアクセスできる。師匠の秘匿している『知識の図書館』さえも、簡単に入り込めるラインがあるはずだ。

迷わずにシンはキラ『らしい』人物の近場まで接近して、右手を相手の首に添えた。

テイスに確認させる。接触してしまえば、いくら身体データを改ざんしたとしても、マテリアルの能力の前には無意味だ。

同時にシン自身もキラを観察して、化けの皮を剥がしてやる。

「シン？ どうしたの？」

「……あれ？」

『え、本物だよ、変装してないよ』

「はい?!」

結果、彼は間違いなくキラ・ヤマトだった。何処からどう探査しても、情報を洗い出しても、ご本人。

「キラさん、体調でも悪いんですか？」

「別にそんなことないけど。どうしたの？」

「いやだって」

シンはその先の言葉を飲み込んだ。彼は何時もと変わらない笑顔を浮かべて、そこに立っていた。

だって、貴方はお酒の誘いは断ったことがないでしょう、とシンは心の中で呟く。キラ・ヤマトにとって、お酒は第二の奥様といえるくらいに、断った姿を見たことがない。

次の日が早朝からの勤務だろうと、新型技術や機体の納期が今日だろうと、政庁からの直接命令があつたとしても、飲むといえれば飲むのがキラ・ヤマトだ。

『始末書が怖くて酒が飲めるか!!』なんて言葉を、宰相と皇帝代理に叩きつけたのは、キラ・ヤマトを語る上で外せないエピソードとして、多くの人が知っている。

そんな彼が、酒を断るなんて。

「ごめん、シン、じゃあまた後で」

「あ、はい」

そう告げて立ち去る彼を、シンは呆けた顔で見送ったのでした。

ちよつと気不味くなりながらも、シャルロットとセシリアとの食事を終えたシンは、迷わずにイーデンホールに直行した。

「これが」

「なるほど」

カウンターに座った二人はしきりに店内を見ている。昔を懐かしむ店内とは、こういったものを言うのだろうか。ノスタルジックな雰囲気にも昔を思い出して、もう二度と戻れない場所を懐かしむ。

悲しい気持ちになるが、それは決して落ち込むものではない。昔を思い出し、今の大切さを実感させ、未来に向う気力を与えてくれる。

シンはこの店をそんな風に感じていた。二人はどうだろうと、チラ

リと視線を向けると店内を見回した二人は、きちんとイスに座ってお酒の並ぶ棚を見つめていた。

「ご注文はお決まりですか？」

ササクラの声が、静かにゆっくりと響く。決して大きくない声なのに、今まで一度たりとも聞きとれなかったことはない。

彼が魔法使いとか魔導士であっても驚かない。魔法とか使つて声を届けているのではと誰もが疑うのだが、彼は正真正銘の一般人。魔法適正もないらしい、素人さんだ。

磨き上げた技術が、きちんと話す相手に自分の声を届けている。その努力と経験の多さに、シンはもちろん、テラでさえ敬意を示しこの店の中で無茶なこととはしたことがない。

二人はササクラの声をかけられ、慌てたように言葉を探していた。「無理に探さなくとも大丈夫ですよ。どうぞ、『気持ちで答えてください』。後は私とその気持ちにあったものをお出しします」

「は、はい」

「すみません」

ちよつと緊張している二人に、穏やかに微笑んだササクラは、ゆっくりとした動作で棚のお酒を一つ一つと手に取っていく。

「普段、お酒は飲み慣れてないご様子なので、ごあいさつの変わりに一杯、お作りしますね」

流石といえる所作。二人の言葉や行動から、慣れていないと察して彼から動いてくれたか。この場合、二人に助け船を出すのはシンの役目だったのに。

ちよつと失敗したと感じていると、カクテルを作っているササクラと目があつた。

『ここはバーですから。バーテンダーにお任せを。ですが、外ではエスコートはしつかりしてくださいね』

無言で語る彼の視線に、シンは小さく頭を下げた。

最初のササクラの気遣いでシャルロットとセシリアは、すっかり緊張感がほぐされたようだ。お酒の話に耳を傾けながら、ゆっくりとカクテルを飲んでいく。

人それぞれお酒に対しての向き方は違うが、初めて飲む人にはそれを教えるのは大切なこと。

会話の合間にシンが小さく忠告を入れたり、ササクラが気を利かせてアルコール度数を下げてくれたりしたので、二人は上機嫌で初めてのカクテルを飲んでいく。

「あ、そうだ。ササクラさん、キラさんって最近は来てますか？」

バーの約束事を破ることになるのだが、シンは思わず聞いてしまった。どうしても先ほどの彼の様子が気になったから。

「いいえ。最近は見えてませんね」

察してくれたのだろう、ササクラも答えてくれた。

他の店に行っているのか。それもあるかもしれないが、イーデンホールにまったく来ないなんて、あり得ないだろう。

「二週間くらいですか？」

「一か月ほどです」

「え？」

まさか、とシンは思わず場の雰囲気も忘れて、顔を覆ってしまった。

あの酒好きが、イーデンホールには毎日のように通っていた彼が、一か月も来ていない。

「マジか」

「マジですよ」

思わず呟いた言葉にササクラも答えてくれたのは、彼が『おちやめ』でシヤレの解る大人だからだろう。

小さく礼を言った後、シンは二人が楽しそうにお酒を飲む姿を見つめながら、脳裏で嘆息した。

これは間違いなく、異常事態だ、と。

翌日、シンは業務を終えた後、真っ直ぐにヤマト宅を訪ねた。すでにキラが帰宅していることは知っている。フレイも今日は戻っているらしい。

何度目かのチャイムの後、聞きなれた女性の声と同時に扉が開く。

「あれ、シン、どうしたの?」

出てきたのはフレイだ。意外だ、最初に出てくるのはキラだと思っていたのに、何時だつて彼が最初に玄関のドアを開けていた記憶があるシンが言葉に詰まっていると、彼女は何かを察したように声をかけた。

「キラならまだ戻ってないわよ。なんだか研究が大詰めだとか、技術検証が手間取ったつて」

「え?」

まさか、そんなわけがない。何度も技術局に確認をとったことだ。すでにキラ・ヤマトは帰宅しているはずだ。

「どうしたの?」

「いえ、その」

まさか、あのキラが『最愛の人』と公言しているフレイに嘘をついてまで、何処かに行くなんてことありえるのか。

絶対にない。お酒で馬鹿やってフレイを怒らせることはあっても、嘘だけはつかないのがキラだ。

異常事態だ、間違いなくキラ・ヤマトは何か巻き込まれている。あるいは『何かをやるうとしている』か。

「その、あ……昨日、キラさんを飲み誘ったら断られたので」

「へえそうなんだ。ごめん、それ私が原因」

「はい?」

片手を上げてウインクしてくるフレイに、シンは呆けてしまった。

「キラの健康データが色々和不味いから禁酒を言い渡したの」

あつさりと出てきた言葉に、『え、またですか』とシンは出かかった言葉を飲み込む。

何度目だろうか。あの酒好きキラの禁酒宣告を聞くのは。もう十回は数えたはずなのに、またやったのか。

「今回は本気で言ったから大丈夫。もうね、肝臓のデータが凄くて」「え、あ、そうなんですか」

本気とは、どのくらいだろうか。まさか、破ったら折檻とか拷問が待っているとか。もしかして最悪の事態を宣言したのか。

「大丈夫よ、離婚とかそういうしたことじゃないから」「へえ〜」

よつし、大丈夫。シンは内心でガッツポーズした。もしフレイがキラに離婚なんて切り出したら、あのぞつこん一直線のことだ、間違いなく自殺する。

しかも新型機を自爆させて。そんなことになったら、帝国中が揺れる事件に発展するだろう。

「私がか月、行方をくらますって言ったの」

可愛く肩を竦めて告げたフレイに、シンは内心で盛大に絶叫していた。

死刑宣告と同じくらい重たい発言じゃないですか。

「ま、まあキラのことだから、一か月くらい我慢したから、そろそろ解禁してあげようかなって思っているから」

こちらの表情から察してくれたのか、ちよつと苦笑しながらフレイが告げたことに、シンはホツと安堵した。

これ以上の禁酒は、あのキラが壊れてもおかしくない。酒好きで酒のために生きていけると言ってしまう彼が、一か月も我慢したのだから大したものだ。

「だからね、今日はテラに無理いって貰って来たの」

「へえ〜」

嬉しそうにフレイがとり出したウイスキーに、シンは世界中が止まった気がした。

今までヴィンテージとか、希少とかいうウイスキーは、師匠のテラのおかげでかなり味わっていた。現存するもので飲んでいないものは、ほぼないくらいに味わっているが、そんなシンでも飲んでいな

いものがある。

『スピリッツ・オブ・エデン』。テラの一族が生み出した、希少品の中でも最上級の希少品。彼の一族が秘匿している異世界『エデン』において、バツタ達が魂をかけて生み出したウイスキー。

滅多に出回らない、どころではなく市場に卸すことはもちろん、テラ自身でさえ手出しができないウイスキーが、フレイの手の中にあつた。

「キラも頑張ったから、私もね、頑張ってみたの」

「は、はい」

つまり、バカップルが平常運転だということか。馬鹿馬鹿しくなつてシンは、もうどうでもいいやと帰ろうとしたのだが。

「でも、キラ、遅いわね」

問題は解決していない。あの人が無処に行ったか、何処で何をしているかはまだ不透明なままだ。

「お酒を飲んでいるとか?」

「そんなわけないわよ。私との約束を破るような……ところまで来ているかな」

ちよつとフレイが蒼い顔になる。自分でもいい過ぎたと自覚してきたのか、それとも別の理由でもあるのか。

「昨日ね、キラね、『あ、お酒だ。今日は水がお酒だ』なんて言っていたの」

「禁断症状じゃないですか?!」

「で、でもすぐに『冗談だよ、フレイ』って笑っていたから、そんなことないって」

「いやいや、ほぼ間違いなく禁断症状でしょうが!」

「い、依存症じゃないから大丈夫よ。ね、ね!!」

「フレイさんは医者でしょうが! まったくもう! テイス!」

もう何処かで何かやらかしている気がしてきた。第六感が凄い勢いで警鐘を鳴らしている。

迷わずシンがテイスに探知を命じると、彼女はきよとんとした顔のまま、フレイのほうを指差した。

『家の中にいるよ』

「え？」

呆けた顔でシンがフレイを見ると、彼女は引きつった笑みを浮かべて、家の中を振り返った。

そして、物語は最初に戻る。

「答えろよ!! キラ・ヤマト!!」

彼は力なく笑っていた。もう何処からどう見ても病人っぽいのだが、その瞳は濁っていない。

濁っていないし、精神的に正常なのだが、やっていることはもうどういっていかかわらかないくらいに、異常だった。

床一面に散乱したパソコン、技術局で使っている特別製のパソコンを十二台使って、彼の頭脳と能力をフル回転して、何をしていたかという。

家の金庫を開けていた。

「キラ、そんな、そこまでだったの?」

シンの後ろでフレイが涙を拭っていた。とても見ていられない、こんなのはキラじゃないと思いつつ。

「こんな『ギャグ要員』じゃなかったはずなのに、と。」

「ごめん、シン。僕はもう耐えられないんだ。僕はもう飲みたいんだ」「あんだ、そんなこと言って。健康を崩さないようにって、フレイさんが配慮した結果じゃないのかよ」

「それは解っているんだ。フレイの優しさは知っている。僕を気遣ってくれているのも解っているんだ」

「ならなんでだよ？　なんで?!」

「でも僕は、僕なんだ！　解っているだろうシン！　僕じゃ僕に勝てないって!」

「いやいや、何言ってるんだよ、あんたは!」

「健康でいることが大切だって。フレイを悲しませないって。それだけが僕じゃないって!」

「お〜〜い」

「だから僕は護りたいんだ！　護りたい世界があるんだ!」

バツと振り返ったキラは、壁一面覆うほど巨大な金庫の扉が開いた先、山積みの酒を求めて手を伸ばした。

そして、その途中で電池が切れたように、倒れたのでした。

「………フレイさん、どうぞ」

呆れたシンは、ゆっくりと道を譲った。

「は〜い、キラ」

「ふ、フレイ。ほ、僕は頑張った。頑張ったんだ」

「ええ、そうね。だから、今度は私が護るわ」

「そんな僕が、僕が」

「私の本当の想いが貴方を護るから」

にっこり笑うフレイに、キラは力なく笑った。

「僕たちは間違えた。間違えてしまった」

そして彼の絶叫と彼女のお説教が響いたのでした。

後日、キラ・ヤマトはスキップ気分ですり酒屋を廻ったのでした。

「え、大丈夫なんですか?」

「うん、ギャグ要員になるくらいなら、お酒は許すって」

凄いい決め顔で言い放つキラと、その背後で溜息をついているフレイ

を交互に見た後、シンは『ああ、そうですか』と答えた。

そしてその後、あの希少品のウイスキーはキラの目の前で、フレイとアイリスとアセイラムが楽しく飲んだことを知ったのでした。

ティスの淑女（物理的攻撃能力あり） 化計画

その日、ティスは考えた。

淑女とは何ぞや、と。

女性が憧れる目標。確か、そんな感じだったはずなのだが、何か致命的に違う気がする。

淑女、女性、女。うんうんと頭を唸らせたティスは、やがて一つのデータを呼び出して納得した。

風に揺れる長い金髪、スラリとした足、豊満なボディラインは男の目を掴んで離さない。手の動き、足の運び、すべてが優雅を物語る。

まるで人形のように、それでいて大人の女性を連想させる立ち姿。

『これだ！ これぞ淑女！』

ガッツポーズをするティスの前で、そのデータの中の淑女は左手で、『敵ロボットの首を握りしめ、右手で粉碎していた』。

エイルン・バザットの愛機、エルフィーナは『スカーレット・レディ』と呼ばれている。『ゲンコツ淑女』、あるいは『相手を殴って潰す魔女』とも。

年が明けて、最初の任務は何時も決まっていた。

ヴィルティラス総員により総当たり戦。潜入任務とか教導任務とか入っている、その日だけは全員が戻ったの乱戦が行われる。

一対一、あるいは十五対十五、もしくは文字通りの大乱戦。その時の対戦方式は、宰相と皇帝代理が決めるのだが。

決め方は公平かつ正大に、『くじ引き』。

今年も乱戦。周りが敵、しかもステージが市街地。建物の中に爆弾あったり、重力子弾頭あったり、もっと酷いとバスターランチャー

のトラップあたりとか、もう『おまえら全員皆殺し』って言われるくらいの、凶悪なステージの中での乱戦は、ヴィルティラスの誰もが『え、またやるの?』と顔面蒼白になるくらいに怖いものでもある。

「・・・ガイさんの一撃は卑怯じゃないですか?」

一戦目が終わったシンは、ポツリと呟いた。

「俺が卑怯ならティーラはどうなんだ?」

床に大の字で転がったガイが呟く。

「私よりゼンガーのほうが卑怯」

ティーラの半眼のが相手に見据える。

「俺よりもっと強烈な奴がいないか?」

腕を組んだまま目を閉じたゼンガーの声に、誰もが二十メートルから三十メートルの機体を操る中で、百メートルを超える鉄壁の巨人を操る人物の姿が浮かんできた。

「俺か?」

「ハイネはなんであんな機体で、あんな俊敏な動きが出来るんですか?」

シンの疑問に、彼は自分の愛機を見上げた後、小さく笑った。

「経験だ」

「嘘だろ、おい」

思わず素で答えてしまうシンに、彼は小さく首を振る。

「マジだからな。経験を積めば、どんな大きな機体でも、素早く軽やかに操れる。相手の動きを先読みして攻撃を回避できるし、回避先を読めばこちらの攻撃は当て放題だからな」

「まったくハイネは、本当に万能なんだからな」

ガイが珍しく悔しそうに告げる。彼はどちらかといえば、近接から中距離が得意な戦闘スタイルだ。遠距離攻撃もできることはできるが、『やらないよしはまし』程度。

一方でのハイネは機体の大きさから火力もある、近接武器もある、中距離や遊撃でも立ちまわれると、まさにオールラウンダーだ。苦手な距離はなし、得意な距離はすべてと仲間内で噂されるくらい、彼はチート染みた強さを持っている。

しかし、だ。そんなハイネを撃墜した猛者がいる。

「だけどな、俺よりも部隊長のほうが、な」

見つめる先には、『お人形ですか』と言いたくなるような機体が、両腕を組んだまま立っていた。

見た目、華麗。動きは可憐。優雅な動作から繰り出される一撃は、大抵の機体の装甲を一撃で貫く。

実際、ヴァルティラス所属の機体でエルフィーナの拳を防げる機体は、存在しない。

噂では『サイレント騎士団』の近衛騎士、チート・オブ・チートを叩き潰せるレッド・ミラージュの楯を貫通させたことがある、らしい。

「解りました。全員、二戦目をやるそうだ」

「ええ?!」

通信を受けていたエイルンの言葉に、誰もが悲鳴を上げてしまったのは、仕方のないことかもしれない。

「マジですか、部隊長?」

ウソですよとハイネが口外に告げるが、彼は力なく首を振った。

「全員の技量は解ったが、機体ごとの特性が発揮されていないんじゃないか、という建前だ」

「え、建前? 本音は?」

聞き返すシンに、エイルンは凄く苦い顔をしながら、小さく口に出す。

「レッド・ミラージュがリベンジだそうだ」

「はい?! 誰にですか?!」

「すまん」

小さく頭を下げるエイルンに、誰もが悟った。

『あ、楯を壊されたこと根に持っている』と。

「では用意をしよう」

嘆息交じりの号令に、誰もが機体へと動き出す。またあの地獄のような乱戦をしなくちゃいけないのか。

「楽しみだね」

「ああ」

そんな中、何故かスザクと刹那は嬉しそうに機体に向かっている。何があつたんだと考えているシンの視界の隅で、テイスが妙なことを言っていたので、そつちが気になった。

『うむ、今宵のデステイニーは血に飢えておる』
「はっ。」

『やはり淑女はこうでない！』

淑女、誰が、どんなことが。シンの頭の中で疑問がグルグルと回っているが時間は止まってはくれない。

仕方なくその疑問は放置して、シンは機体へと乗り込んでいった。後で聞けばいいか、と考えながら。

マテリアルは、生き物である。

昔、帝国の技術局はそんな論文を出したことがあった。

データを取り込み、経験値を重ねて、自己進化を行う。パイロットが最適だと思うことを、自らの主が戦い易いように機体の構造を変化させる、あるいは根本的などころから自己改造を行うマテリアルを、彼らは『生物の自己進化』に例えた。

あんなの解析できるかと、半ば投げやりな感情で発表した論文に対して、『サイレント騎士団』団長は、『いいところをつきますね』と回答したという。

マテリアルは生き物だ。主の背後にいて、主の願いを聞きながら、主が最も望むものを構築していく。その内容に時間も空間も関係ない、法則も事象も時には無視する。

魔法だと誰かが否定する何か、神のようだと誰かが恐れる何かを、マテリアルは平然と抱え込み、ただ主のためにその身を変化させ続け

る。

その果てに何があるか、それはマテリアル自身も解らない。だが、その能力は必ず主のために使われる。

だからこそ、ティスは考える。淑女にならなければ、と。

シン・アスカは強くなっている。昔と違って力だけじゃなく、精神的にも大きくなっている。

広い視野を持ち、深い知識を持って、前に進む意思を失わずに強くなつていく主を見ながら、ティスは自分がまったく強くなつていない事実を噛みしめた。

デステイニーの武装に変化はない。自分の能力は変わりない。

これは裏切りだ。主が強くなっているのに、自分が変化しないのは彼に対しての裏切りでしかない。

人を護り、平穏を守護する騎士の傍に居るのは、淑女でこそ相応しい。何者にも負けない、何があつても揺るがない、絶対的な淑女だ。

グツと拳を握り締めたティスは、そう確信していた。

『頑張ろう!!』

拳を振り上げ、データを集める。

帝国のデータベースにアクセス、必要なデータを揃える。今のシン・アスカの能力に相応しい姿を、現状に甘えないような性能を。

もつと言えば、あの馬鹿の専用機を下せるくらいの何かを。

主の前に立つのが誰でも負けない戦力を持つ。スペック勝負になつたら負けなんて考えは捨てる。性能も技能も技術も、あらゆる可能性を考慮して戦える何かを見つけ出す。

スノーホワイト・エンパイアを打倒する。

まずは装甲からだ。スノーホワイトの装甲と同じものを用意、出来るわけがない。あの機体の装甲は特別製で、他の予備はない。損傷したら修理不可能なんてことはないが、そもそも損傷しているところを見ることがない。

記録を漁っても出てきていない。材質も非公開、欠片も採取されたことはないから不明。

どうしよう、最初から詰まった。

考えて、頭を捻って、テイスはアツと気がつく。

『マリア様、装甲ください』

スノーホワイトの自意識にお願いしてみる。

『えつと〜』

腰より長い藤色の髪と金色の瞳の二十歳くらいの女性は、苦笑いをしながら軽く手を振っていた。

『ください』

『あ、あのね、装甲の予備はないの。本当に今の装甲で終わりだから』

『ください！』

『え、ええ〜〜』

『じゃ損傷したらどうなるんですか?!』

『あ、それは大丈夫。壊れないから』

テイス、クリティカル・ダメージ。え、壊れないの、なんでと疑問を浮かべるテイスに、マリアはちよつとだけかわいそうと思いつつも、素直に答えることにした。

『私の装甲は、それ全体が一つという概念で構築されているから、損傷しないの。単一細胞じゃなくてね、それ一つが『単一元素』だから』

『・・・チートめ!!』

テイス、涙目攻撃。今度はマリアがダメージを受けて、オロオロしてしまふ。

『しかも、単一元素でありながら、複合装甲っていう矛盾を『そうであるもの』って概念で上書きしているから、余計に性質が悪い』

誰かの声が響いて、余計にテイスは半眼で涙を流す。

『こらー！ あ、あのね、テイス。その』

『ううううう』

『え、その・・・そう！ 概念の構築の仕方を教えてあげるから』

『本当!!? やった!!』

テイス、見事に装甲を勝ち取る。すぐに教えられたとおりにデステイニーの装甲を上書き。

これで防御はスノーホワイトに並べた、並んだかな、並んでいるといいなどテイスは思った。必死に願った。

さて、次は武器だ。

現在のデステイニーのメイン武装は『ウロボロス』。あるいは『天壤無窮』。どちらも最高品質でこれ以上は攻撃力と強度はあげられないだろう。

とすると、遠距離武器か。シンは遠距離攻撃能力も上がって来たから、そろそろ射撃武器が必要になってくる。

ティスが知っている最強の遠距離武器となると、『バスターランチャー』だ。あれを搭載すれば遠距離攻撃で負けることはまずない。よしとティスは考えて実体化。

目指すは場所はもちろん、政庁。

アイリスは目が点になる、という貴重な体験をしていた。

『ください』

「え？」

『バスターランチャーください』

「……ティスね？ どうしたのか、聞いてもいいかしら？」

マテリアルの自意識が、主もいないのに行動しているなんて珍しい。しかも実体化しているなんて、明日は槍が降ってもおかしくない。

『シンが強くなっているのに、ティスがそのままなのは怠慢だからです！』

意味不明だ。それでどうして、バスターランチャーが必要になるのだろうか。怠慢をバスターランチャーで吹き飛ばすのか、それは斬新なアイディアだ。もし吹き飛ばせるならば、学会に発表してもいい。

怠慢を一発解決、バスターランチャーは一家に一台は必要である。につこり笑顔を浮かべながら考えた思考に、アイリスは盛大に脳内で突っ込みを入れた。

そんなにあつたら、宇宙が吹き飛ぶ、と。

「あのね、気軽にあげられないから」

『どうしてですか?!』

「あの武器の危険性は貴方も知っているはずでしょう？ それに、デステイニーは強襲機なんだから、砲撃武器を備えても無意味じゃないの?」

『……撃った後に突撃します』

「撃つたら目標すべてが消えるでしょうが」

『大丈夫です、スノーホワイトと同じ『概念装甲』つけましたから』

アイリスの精神にグサリと何か突き刺さった。

今、彼女は何て言った。スノーホワイトと同じ装甲を、デステイニーにつけたと言ったか。あれが複製できるなんて、初めて聞いた。今まで誰も成功していない技術を、この子は手に入れたというのか。

「テイス、その技術、何処で手に入れたの?」

『マリア様に泣いて頼んだらくれました』

幼子の涙に弱いのは誰も同じか。

今にも泣きそうな顔をしているテイスに、アイリスは盛大に溜息をついて書類を取り出し、サインをした後に宰相専用の判子を押す。インクと判子に特殊な繊維と細工がされているそれは、偽造防止のために滅多に使われず、使った後は専用の読み取り機でないと識別されない特殊な構造になっている。

「はい、どうぞぞ」

『ありがとうございます〜』

嬉しそうに書類を抱えたテイスが退出していった。

「アイリス、いいんですか?」

成り行きを見守っていたアセイラムの声に、アイリスはイスに深く腰掛けながらため息をついた。

「まあ、シンなら使い方を間違えないでしょうから」

「確かに」

「それにね、なんだからシンに預けておかないと、いけない予感がするのよね」

「確かに」

これから先、もつと色々なことに巻き込まれそうだから。

アイリスとアセイラムは同じことを思った後、『凍焰の鬼神』の前途を心配したのだった。

最大の防御と最大の攻撃を手に入れた。

残りは、最大の推進機。

ティスは迷わずにキラを直撃した。

『とうわけです』

「うーうーん、デステイニーの推進機を超える推進機って言われても」
現在のデステイニーの翼は、帝国でも最高レベル。亜光速ではなく本当に光速を超える推進力を発揮でき、かつその翼を構築している特殊粒子は操作可能なため攻防一体の性能を持つ。

「あれ以上ね」

キラの指が踊る。データベースの中から何かないかと探しても、今のデステイニーを超えるものは出てこない。

『ダメですか?』

「やっぱり駄目だね。そもそもヴォワチュール・リュミエールを超えるのはミノフスキードライブとか、あるいはウーレンベック・カタパルトの応用くらいだろうし」

悩むキラの視界の隅で、ティスが涙を浮かべた顔で見上げてくる。何とかしてあげたいが、これ以上は移動ではなく『転移』にしかない。間接の稼働速度を上げるという手段ならば、あるにはあるが。

正直、今のデステイニーの運動性能を上げるとシンが扱えなくなるのではないか。現在のデステイニーの運動性能は、あのシン・アスカの反射神経の速度と同じ。

機体のフレームも、『スノーホワイトと同一フレーム』のため上げることができないから。

「……待った」

フツとキラは思い出す。推進機ではないが、『推進力を発生させる』裏ワザがあつたはずだ。

斥力エンジンは空間に対して、反発を起こして機体を動かす。少ない電力でも音速を突破可能な性能を持っている反面、機体の左右に均等に配置されなければ正常に作動しない。

そのリスクを改善するために、箱形の内部に配置することで、互いの斥力エンジンが相互作用して、推進方向を一定に保つ推進方式があつたはずだ。

通常、物体を加速させるために推進機を複数搭載したとしても、推進量は一定で横ばいになる。

しかし、だ。推進方式が違っていれば相乗効果で倍以上の推進力が発生するはずだ。

「裏ワザの中でも際物だけど、出来ないことはないか」

試算、結論は可能。しかし、今のデステイニーに搭載可能かは不明。『できるんですか?』

「できるけど、これだとシンは操れない気がするよ」

いくら彼が凄腕の騎士でも、操作できない機能をつけても無意味ではないか。キラが心配してティスを見ると、彼女は晴れやかに笑って胸を叩く。

『ティスがいますから! それにシンならできます。だってシンは『神帝』を討つ騎士ですから』

「そっか、そうだね。なら、僕も頑張ってみようかな?」

キラは小さく頷き、画面に向き合った。

内心で、『テラが馬鹿やってスノーホワイトを持ち出したら、止められる機体があった方がいいよね』と思っっていたりするが。

そうと決めたら、とキラが怪しく笑う。技術局内部の連絡網に、『今からシンの機体の魔改造するけど、参加する人』と通知。

一秒後、『やるぜ!』と全員から返答が来た。

「テイス、いいんだね?」

キラは彼女を見つめる。『変態全員が全力出すけど』と内心で付け足しながら。

『もちろんです!』

テイスは彼を見つめる。『やった、これで私は淑女』と思いながら。

二人の意思は決定的に違っていたが、結論は同じ方向を向いていた。

そして、変態どもの狂乱が始まった。

新型機関がある、それは補助に回そう。領域機関にデータを注入する方法がありますけど、やってみようか。

各関節のアップデート、裏ワザありますぜ。本当か、やろうか。やってみるか、出来たな。あ、五十パーセント上がった。

重力兵器と空間兵器の試作品あるけど、使うか。翼の効果と合わせて使用可能だからつけてみよう。

出力に余裕あるから、ライフルつけようぜ。楯もつけたくないか。あ、レッド・ミラージュの楯の残骸あるからそれ使ってみようぜ。

どっから出てきたんだよ、模擬戦の時のパクってきた。

『ふわあああ~~~~~』

「あ、あああ」

テイス驚愕に口が空いたまま。

キラ、あまりの暴走に頬が引きつる。

そして、ここにジョーカー銀河帝国でも上位に入る魔改造機が誕生した。

「え?」

「ごめん、シン。僕はまた間違えた」

差し出されたデータ・ボードを受け取ったシンは、しばらく読んだ後に膝をついた。

「な、なんなんですか、これ?」

「シン、ごめん」

「ごめんじゃなくて!」

「それは彼女に聞いて」

そつとキラが指さす先、デステイニーと同じ色合いのドレスを纏ったティスが、深々と一礼していた。

スカートの裾を持った、令嬢がよくやるような挨拶だったが、シンにはそれが『死刑宣告』に見えた。

『シン、私はやったよ。淑女になれたよ』

「.....おまえなあああ!!!」

思わず叫んで立ち上がり、拳を握り締めてしまったシンは、決して悪くない。

ただし、ティスの前でしたのは間違えだが。

『うん! やっぱりシンはよく解つてくれるね! エルフィーナみたいな『げんこつ淑女』になったよ!』

「.....」

シン、絶句。目標にしたのが、よりによってあの淑女とは。どうしてそつちを目指したとか、他に淑女っぽい機体ならいくらでもあるだ

ろう。なんでエルファイナにしたのかとか、色々と問い詰めたところだが、グツと飲み込んでキラに顔を向けた。

「申請書類は？」

機材や備品を使ったなら、必ず提出する書類があったはずだ。シンは思いついて尋ねたのだが。

「……あ」

キラは口を開けたまま停止していた。

その日、シン・アスカは政庁へ駆け込んで土下座したのでした。

後日、性能テストのためにちよつと辺境の突撃任務に駆り出されたシンは、デステイニーによる突撃を行った。

開始1分、惑星クラスはある移動要塞六つが瞬殺されたとか。

「お、恐ろしくて使えるか」

シン、燃え尽きたようにレポート提出。

『うむ！ 我が拳は今日も敵を粉碎しておるわ！』

テイス、高笑いしてご満足。

「これは限定条件下でしか使えんな」

エイルン、頭を抑えて呻く。

「ヴィルティラスに戦略兵器より上が配備されたわね」

アイリス、遠い目をしてレポートを差し出す。

「強く生きてください、シン」

アセイラム、彼の無事を祈りつつレポートを受け取る。

「なあなあ!! シン！ 俺のスノーホワイトと模擬戦しようぜ！」

「し、師匠、勘弁してください」

「大丈夫だって！ 異空間作ったからそこなら宇宙が崩壊しても大丈夫

夫だからさー！」

「師匠！ だから俺は!!」

「おまえが扱えないと機体が泣く。だから扱えるようになれ。これから先、それはおまえの力になってくれるから」

「師匠………で本音は？」

「久しぶりにスノーホワイトのリミッター外しても瞬殺されない相手ができた！」

「あんたって人はあああああ!!」

師匠と弟子のそんなバカな話と、とある異空間が崩壊したことがあったとか、なかったとか。

馬鹿らしい皇帝陛下の原点

男には決して退けない戦いがある。

「テラ?」

隣で名を呼ばれても、彼は動かない。何時もなら周囲に誰かいたら、すぐに気づいて笑顔を見せるはずなのに。

何かとアイリスは顔を向けようとして、止まってしまおう。

グルリと普段なら考えられないような、機械のように素早く動いたテラの顔と、そこに浮かんだ『甘味』、『決意』の文字に。

「アイリス!」

「は、はい?」

「俺の我儘を許してくれえ!!」

「は?」

そして彼は光を超えて飛び出した。

後に残ったのは一枚の紙。何処にでも有るようなチラシには、彼が決して逃れられない宿命が書いてあった。

「はあああああああ」

深々と溜息をつき、アイリスはシン・アスカを呼び出したのでした。

彼は降り立つ。普段なら絶対に来ない場所に、普段なら余計な混乱を起こさないために寄らない場所へ。

何時もなら、と彼は周りの迷惑を考え、自分の欲望を抑えつけ、自己を捨てて周りを助けてきたのに、今回ばかりは自分の欲望を優先する。

申し訳ないと頭を下げ、すまないと謝罪を口にしながら、彼は真っ直ぐに目的地へ向かう。

多くの人が振り返り、首を傾げて再び視線を戻す。見たことあると誰もが考えながらも、違うだろうと首を振る。

彼と似ているが容姿が違うと、誰もが疑問を感じることなく答えを出す中を真つ直ぐに。

同じ目線の人の背後に立ち、一步一步と前へと進む。今か今かと心を躍らせ、ようやく手に入ると高揚感を噛みしめながら。

一人、一人と減って行つた。誰もがいなくなり、最後の一人が消えた時、彼は最高の笑顔で両手を上げた。

「……………」

そして固まる。

「1200円です」

相手は無表情で見下ろしている。その隣にいる妹さんは、啞然とした顔で固まっている。

遠目には御両親が、『まあまあ』と微笑ましい顔で見ていた。

「ハイ」

錆ついた機械のように、御金を払い『目的のもの』を手に入れる。

「…………君に特典を上げよう。『特別』だ」

「ハイ」

「少し店の中で待っていてくれ。『大丈夫だから、きちんと待っていてくれ』ないか？」

「アイ」

とても冷たい顔で見下ろしてくる『幼馴染』に、彼は機械じかけのロボットのよう歩きだしたのでした。

そして我らが主人公、シン・アスカはというと。

「何してんですか、師匠？」

呆れた顔でそう呟いた。

彼の視界、肩を落とした十二歳の少年が通り過ぎて店に入る時、偶然に見えた看板にはこう書いてあった。

『春休み企画、十二歳以下の子供に特別なケーキ販売』と。

若返りの秘薬がある。

飲んだ者の年齢を戻す秘薬であり、とある英雄王がよく使っていたもの。当然、その宝物庫と同等のものを持っと言われている、テラ達の一族も所有しているのだが、秘薬と言われているようにとても貴重なもの。

通常、そんな薬を使う機会などないと思えるのだが。

「呆れたぞ俺は」

「すみません」

場所は変わって高町家のダイニング。

正坐をしている十二歳の少年、テラと。その幼馴染であり同年代のはずなのに、子供になっっている馬鹿を叱る恭也。

「おまえが甘味を大好きなのも、うちの甘味を特に大好物なのも知っているが」

「当然じゃないか！」

「だからといって子供になって列に並ぶなどするな」

「だって、好きなんだもん」

プイツとそっぽを向くテラに、恭也は盛大に溜息をついた。

何時もなら思慮深く周りの迷惑を考え、決して他人を見下すことなく困った人のために全力で駆けつけて。

「おまえはそう言うやつだったな」

馬鹿らしく考え馬鹿らしい行動で、誰もが呆れるような結果を持つてくる。

ジョーカー銀河帝国皇帝、『神帝』テラ・エーテルとはそういう馬鹿であったと誰もが思い出す。

なら、これも仕方のないことか。

「ならいいのよね？」

「母さん」

楽しそうに動き出した高町・桃子を振り返った恭也は、そのまま固まった。

「はあく〜く〜いテラ君、これなあ〜く〜んだ？」

「けええええきいいいい!!!」

電光石火の飛びつき。テラの化け物染みた運動神経すべてを使った動きは、一般人の桃子には見えないもの。

しかし、彼女はテラの母親と知り合い。テラが小さい頃から知っている。予想不可能、誰もが先を読めない馬鹿と呼ばれた彼の動きを、正確に予想できる数少ない人物。

それゆえに。

「はい」

「はう?!」

「はい!」

「はうわ?!」

右に動かしテラが飛びこえる。左に動かし、テラが滑り転がる。

左右に揺れるケーキに飛びつく様は、まさに犬が主人に甘えるように。

「あらあら、随分と素直になったのねえ」

微笑みながらケーキを動かす桃子と、それを見ながら苦笑している士郎。

「恭ちゃん、あれっていいの?」

妹の言葉に、兄は頭痛がしてくる頭を抑えながら、どうにか言葉を絞り出す。

「母さん、『それ』は一応」

「なあに?」

「一応でも、俺達の帝国の『トップ』だから」

認めたくない、言いたくはないが、今のテラを見ていて皇帝だと言いたくはないのだが、現実が変わることはない。

「そうね、でも私にとっては小さい頃からやんちゃ坊主のテラ君だから」

確かにそうだが、だからといって皇帝を手玉にとっているような、そんなパティシエなんていてほしくない。それが自分の母親なら、認めたくないくらいに。

しかし、だ。恭也は思い出す。昔からテラは母親には逆らえないことが多いな、と。どんなにバカやって暴走していても、母親の一言には止まっていたことが多い。

父親とは殴り合いのケンカしないと止まらないが。

「あの恭也さん」

シンは目の前の光景を震えながら指差していた。

「ああ、ちょうどいい。シン、連れ帰れ」

「ええ?!」

無情にも突き出された物体に、シンは嫌そうな顔で受け取るしかなかった。

テラ君じゆうにさい、こうていへいかとしてがんばる。

「よおおしー!」

「止めて本当に止めてそれは止めてダメだから止めて!」

「よ……し?」

「だからテラ!! ああもう! シンいいからその馬鹿をつまみだして!」

政庁に、何時もと別のアイリスの怒声が響き渡った。

十二歳のまま戻れなくなりました。帝都に戻ったテラは真っ先に年齢を戻そうとしたが、何故か秘薬が見当たらず。

『あ、補充してない』とポツリと呟いた言葉に、誰もが戦慄した。テ

ラが子供なのは問題だ、さらに十二歳という年齢も問題だ。

意識は年齢に比例しないのは若返りを行った誰もが知っていることだが、テラの場合は何故か年齢に引つ張られることが多い。

思慮深さも短慮さも、色々な考えも、誰かを助けようとしたことも。大人のテラならやらないことも、今のテラならやつてしまう。

いい方向でも悪い方向でも。

今も執務室に突撃。扉をバンッと開けて入るなど、普段のテラからは考えられない方法で入り、啞然としているアイリスとアセイラムから書類を奪って、頑張って処理しようと奮戦して。

結果、書類は粉碎されましたとき。

「むう」

「師匠が事務処理が苦手なの知っていますけど、今のほうが『マシ』になつてたんですね」

「むううう」

まさか持っただけで書類を粉碎してしまうとは。

首根っこを掴んで外に連れ出したシンは、深くため息をついた。

「シンー！」

「はい？」

扉を閉めたとたん勢いよく開いた扉から顔を出したアイリスは、見たことない決死な形相をしていた。

かなり時間をかけた書類が消えたら、怒るのも無理ないか。

「これを使いなさい」

「え？」

渡されたのは、カメラ。それも一目でわかる高級品。

「それにこれです」

続いてアセイラムからはケーキの入った箱が色々。固定化でもかけてあるのか、重ねても潰れることはない。

「写真、お願い」

「頼みました」

二人ともグツと親指を突き出し、そのまま執務室へと消えていく。何が言いたかったのか、シンとしては意味不明のだが、とにかく

渡された以上は意味があるのだろうかと思えば返ると。

「行くぞシン」

「ええええ？」

犬の尻尾と耳をつけたような、そんな雰囲気のアラが走って行ったという。

子供っぽいから理性が甘い、甘いということは欲望に素直。つまり、甘味があるなら迷わず一直線。他のことなど眼中にない、馬鹿がそこに爆誕していたのでした。

ケーキ、翠屋のケーキを両手に持って次々に口に入れるアラ。普段ならこんな食べ方しないだろうな、いやするか。

シンは無感動に写真を撮りながら、変なことを考えていた。

そもそも、師匠は何故こんなにも甘味が好きなのか。食事を放っておいても甘味だけは放っておかない。

「師匠、なんで甘味が好きなんですか？」

結論が出ないから思いつ切って聞いてみた。

「んんんん何でって言われてもなあ」

「何かきつかけあるんじゃないですか？」

「そうだなあ」

アラは手に持ったケーキの一つを見つめ、小さく頷く。

「母上って料理があまり得意じゃないんだよ」

「はあ」

「バツタ達がいだから料理する必要ないし、そもそも箱入り娘だったらしいし」

「そうなんですか」

初めて、だろうか。テラの口から両親についての話を聞くのは、これがシンにとつて初めてだ。

父親のこと、母親のこと、他の親族のこと。彼はまったく語ろうとせず、聞いたとしてもはぐらかされるだけ。

「そんな母上が最初に覚えたのが、甘味だったからさ。俺が馬鹿やる度に作ってくれてさ」

「それで甘味が好きに？」

「うんにゃ」

感動した話だな、とシンが頷いていると、テラは即座に否定した。

「母上が作った甘味ってさ、砂糖漬けばかりでさ。甘いっていうより苦いって言うのかな」

「うわあ〜」

「それでさ、見かねた桃子さんが作ってくれたケーキが、とても美味しくてさ」

だからか。テラが翠屋のケーキに拘っているのは、一番最初の甘味の記憶だからか。

「で、母上と桃子さんの料理戦争が起きてね」

さらにトンでもない話が出てきた。

あの温和な桃子が怒ったことがある、とは。

「もう凄かなったなあ」

「そう、ですか」

「うんうん、シンさ」

「はい？」

見たくないなと思っていた彼に、テラは笑顔で指をさす。

「俺、写真嫌いだから」

「えええ?!」

途端に、カメラが砂のように崩れてデータが消されていく。

「師匠」

「ふっふん。まだまだ弟子に負けん」

大笑いするテラは、ケーキを食べ続けたのでした。

後日、写真を楽しみにしていたアイリスとアセイラムの冷たい目に

さらされたシンは思う。

つまりだ、昔の可愛い頃のテラの写真がないから、今回の件で撮りたくなったのだが、それを当人に見透かされて阻止された、と。

「俺、今回は悪いわけじゃないよな」

『どんまい、シン』

始末書とまで言われて、肩を落とすシンの背中を、そつと相棒が撫でたのでした。

終わりとこれから

思い返すことがあれば、それは昔のことかもしれない。

あの時、初めてテラ・エーテルに会った時のこと。

自分の運命を決めた瞬間のこと。

今更になるかもしれないが、シン・アスカは思い出していた。

一夏が追い付いてきた。ようやくこの世界に来た、あの時はまだまだ弱かった相手は予想外に強くなっていた。

「一撃、貫ったなあ」

左手に視線を向けると、あの時の感触が思い出される。

全身全霊を一刀に込めた一撃。回避も防御も貫いて届けられた刃に、思わず息をのんだ。

一夏はここまで強くなった。

あの頃と比べたら遥かに次元が違うほど、強くなっていた。

自分も強くなったと思う。前に比べたら出来ることも、決意も、その能力も高くなっていたのに。

どうしても、『強くなった』と思えない自分に、シンは苦笑してしまふ。結果を求めること、結論が出ることではないのに、答えを知りたく足掻くのは昔から変わっていない。

だから、試したくなかった。自分がいま、何処にいるのかを確認したくて。

「どうした、シン？」

「師匠、ちよつと俺と『殺し合い』しませんか？」

気楽な何時もと変わらない顔をしたテラは、その言葉に驚いたように目を開いて、そして小さく笑った。

「そっかそっか、ようやくか、『凍焰の鬼神』？」

「ええ、今から俺はあんたを倒す、『神帝』」

剣を手に取る。決意を前に、意思を胸に、そして目指すべき理想を見据えて。

シン・アスカは真つ直ぐに歩きだした。

「師匠、俺と初めて会った時のこと、覚えてますか？」

「当たり前だろ。おまえに会ったとき、思ったんだよ」

「何をですか？」

「ようやく俺を殺せる騎士が見つかったってな」

世間話をするような雰囲気、彼は自分を『殺せ』と告げた。自殺願望かと顔を見れば、穏やかに笑っている。

ああ、そうかとシンは思った。殺せとか倒せといっていた彼は、自殺願望があつたわけでもなく、死にたいと叫んでいたわけでもない。

ただ、自分と並べる誰かを見つけたかっただけだ。孤高の存在、最強であり絶対。それは誰もが思い描くもので、理想の姿かもしれない。

けれど、とても退屈で虚しいものでしかない。

死力を尽くして競える相手がいる、歯をくいしばってでも勝ちたいと思える存在がいる。壁があつて、それを越えようとするから、人前に進める。誰も勝てない世界で一人だけ強者でいるなんて、それは生きているとは言わない。それはただ、夢を見ているような停滞でしかないから。

「クルーゼさんや、色々な人が願ったことを『今から果たします』よ」

「やれるのか、お前に？」

「もちろん、俺は貴方の一番弟子であり、『神帝殺し』の『凍焰の鬼神』ですから」

はつきりと告げ、シンは剣を振り上げた。

「なら、来いよ。俺に『初めての敗北』を味あわせろ！」

「ああ!!」

そして、周囲を轟音が蹂躪した。

時が流れる。日々が変わることなく流れ、年が明けて、新しい年がきて、やがてまた年が明ける。

誰もが穏やかに暮らし、日々の苦悩を噛みしめながらも、前に進む。多数が未来を選ぶ国家、民主主義の国が消えて、そんな長い時間が流れた。

『ジョーカー銀河帝国』、宇宙のすべてを支配するに至った巨大な国は、今やその年数は三世紀を数える。

帝国主義、皇帝至上主義、けれど誰もが自分の意見を言える国。自分らしくありたい、泣いている人を助けたい、そんなお人よしばかりが集まってつくられた国は、その理念を損なうことなく、今も宇宙に君臨している。

歴代の皇帝は、誰もが素晴らしいくらいの『馬鹿』であった。

中でも、初代の皇帝は『愛される暴君』と呼ばれている。

困った時には必ず隣にいる、何かトラブルにはそこにいて解決してくれる。何処にでもいて、何処にでもない、嘘のような話だが、初代の皇帝はそんな人だったらしい。

二代目は、『暗君』と呼ばれている。

彼は初代のように何処にでも行くことはなく、帝都にいて多くのことを語ったという。弱かったという話はない、彼は初代のような巨大な力を持ちながらも、理想を語り、夢を描き、明日を願っていた。

何度も、何万回でも目指すべき自分の理想を語る。綺麗で美しい夢物語のようなものを、何度も何千回でも。人々の記憶に残るくらいに。

だからこそ、『暗君』。彼は周りを見ていなかったわけでもない、彼は周りを見ながらも理想を語り続けた。

自分が思い描くものを、誰もが身近に感じられるように。

『我らの誇りの暗君』。いつしか彼はそう呼ばれるようになった。誰もが眼を閉じてとも思い出せる、何度も語られた理想が常に自分の心にある。それは彼が初代とは違う結果を残した証。

常に見守ってくれる初代ではない、常に心の中で支えてくれる二代目として人々の心にあり続けた。

そしてどちらも、人々が迷った時に、道しるべを示した。道に迷い嘆いた時には、常にその視線の先において、背中を見せてくれていた。ここにいるから、おまえも来い。その背中はその語っていた、だからこそ誰もが迷わずに真つ直ぐに自分の道を歩けた。

だからこそ、彼は多くの人に愛され、我らの誇りを呼ばれている。

『俺はここにいて、どんな時でもここにいて。だから迷うな、真つ直ぐに歩けばいいんだ』

二代目皇帝陛下は、そう言ってほほ笑んでいたという。

そう、かつて『凍焔の鬼神』と呼ばれたシン・アスカ皇帝陛下は、人々の心の中で今も語り続けている。

おまえの理想を忘れず、おまえの夢を描いて、そして自分の道を歩け、と。